	聯邦	中華民國	米國		英國
	約百六十萬 戰前約百三十萬外に內務人民委員部軍隊及其他約二十五萬	約二百十萬 外に支那共產軍約十數萬	約三十三萬 （戰前約二十三萬四千）		
	內務人民委員部の軍隊及其他正規兵		正規軍	護國軍	
	約二十五萬		法定數 約二十九萬八千 現在數 約十三萬七千	法定數 四十二萬五千（國時規定額最小限二十五萬） 現在數 約十九萬	十四萬五千
陸軍	民兵二十師團 騎兵	二百十一師團 三十九旅團	歩兵九師團	歩兵六師團（一部未完成）	英本國 五師團 各師團は約半數の兵力を海外に交代派遣しあり 在印度 四騎兵師團 騎兵五旅團 正規將兵を基幹
部隊數	正規二十師團 民兵五師團	騎兵十三師團 騎兵九旅團 砲兵八旅團	騎兵三師團	騎兵四師團（基幹部隊のみ現在す）	
兵力及砲數	約二十五萬				
戰車數					
航空					
高射砲					
戰車及機械化部隊					

	獨逸國	佛國	國
	約六十七萬 （戰前約八十四萬）	約六十五萬 （戰前約八十四萬）	約三十九萬 （戰前約二十八萬八千）
	正規軍		右は法定數にして實數は募兵の狀況により增減するも現在は約四五萬の欠員あるが如くである
	五十五萬	在本國軍 約四十四萬	
	約十一萬六千	在海外軍 約二十一萬	正規軍
	軍隊類似團體	空軍陸上部隊 三師團と獨立一旅團、三萬	地方軍 約十八萬五千
	歩兵三六師團 機械化師團 三師團 獨立騎兵一旅團 山地狙擊一旅團 獨立機械化部隊十數個 獨立戰車大隊 約二〇 同獨立聯隊 同獨立大隊 機中隊各若干 高射砲旅團 同獨立聯隊 砲數 五聯隊 約二〇〇門	別に避動邪隊約五師團及騎兵砲兵の總數十二萬外に植民地軍團北アメリカに正規補助兵 約一萬五千 窓兵及避動窓兵約四萬	十四師團 騎兵二旅團 防空三旅團 歩兵二〇師團 騎兵五師團 外に在印度約五萬九千 とし、印度人を加ふ 本表の外空軍約五萬豫備操縱者約一萬 加ふ陀
	獨立機械化部隊十數個 獨立戰車大隊 約二〇 同獨立聯隊 同獨立大隊 機中隊各若干 高射砲旅團 同獨立聯隊 砲數 五聯隊 約二〇〇門		約一萬六千 約二萬九千 約十六萬七千 約一萬 約一千八百 約六千 約三十四萬
	獨立戰車大隊 約二〇 獨立戰車中隊 約四 右戰車數 約一、五〇〇輛 其他豫備戰車多數 裝甲自動車中隊約二〇 車輛數 約二〇〇		
	聯隊（六大隊） 快速戰車大隊 一 右戰車數 約二〇〇輛 右裝甲自動車數未詳		

列國新兵器整備一覽（昭和十年末調）

	日本	伊國	波國
	約一千機	約三十五萬 （戰前約三十萬）	約二十七萬
		本國軍	
	飛行機十聯隊	約三十萬 內憲兵約五萬	
陸軍所屬機數		植民地軍	
部隊數	二聯隊と一隊	約五萬	歩兵三十師團 騎兵 一師團 獨立騎兵旅團 十二
兵力及砲數		歩兵三十一師團 輕快師團 二 「アルプス」四旅團	本表の外空軍約一萬四千 稅關兵團 約二萬五千 警察隊 約一萬五千 護國義勇軍 約四十萬（但し非常動務部隊約三十七萬を含む）
戰車數	戰車聯隊二		
航空			
高射砲			
戰車及機械化部隊			

	蘇聯邦	佛國	伊國
	約五千機	約四千五百機 （航空省所屬）	約千五百機 （空軍省所屬）
	飛行機約五〇〇中隊外に氣球中隊・海軍機中隊各若干	飛行機 一二六 氣球 一二 偵察 五〇 戰鬪 三七 爆擊 二七 中隊（ 尙阿弗利加及ルバン其他の植民地の分を合すれば一六〇中隊となる	飛行機 一二〇 中隊（ 空軍直轄部隊 七〇 陸軍協同部隊 二五 海軍協同部隊 一五 植民地軍協同隊 一〇 氣球 二中隊
	高射砲旅團 同獨立聯隊 同獨立大隊 高射機關銃隊等各多數あり	五聯隊 砲數 約二〇〇門	野戰高射砲聯隊 五 義勇軍に屬する陣地高射砲司令部 二五 砲數 約一四〇門
	獨立機械化部隊十數個 獨立戰車大隊 約一〇 獨立戰車中隊 約四 右戰車數 約一、五〇〇輛 其他豫備戰車多數 裝甲自動車中隊約二〇 車輛數 約二〇〇	獨立戰車大隊 約一〇 獨立戰車中隊 約四 右戰車數 約一、五〇〇輛 其他豫備戰車多數 裝甲自動車中隊約二〇 車輛數 約二〇〇	聯隊（六中隊） 快速戰車大隊 一 右戰車數 約二〇〇輛 右裝甲自動車數未詳

	米國	英國
飛行機	約一千六百五十機	約二千機以上
飛行機	一二中隊 偵察 一八 驅逐 一九 攻撃 九 爆撃 一八 其他（本部及勤務中隊を含む） 三六一 學校 一 輸送 四 氣球 二 飛行船 二 材料 二 外に護國軍に偵察飛行中隊一九	目下擴張中なるを以て現在の狀況は判明せざるも、一九三五年末既に一一八中隊に達し、又一九三九年迄に左の如く擴張の計畫である。
八聯隊砲數	約二〇〇門 外に高射機關銃 約五、〇〇〇 本數には豫備兵器を含む	正規軍高射砲隊（海外のものを含む）二三個中隊（機械化）
中戰車中隊	一輕戰車聯隊（八中隊） 獨立輕戰車中隊二 計一中隊七 右戰車數は豫備戰車を合し 約五〇〇輛 裝甲自動車中隊（騎兵師團配屬） 其他其裝甲自動車數約二〇〇輛	戰車約三五〇輛 右の外軍の機械化に伴ひ步、騎兵用輕戰車相當數を有す

國	獨國	波國
（空軍省所屬） 別に敎育機一千機以上を有す	約千九百機と以上調ふ二千五	約七百機
本土防空一二九中隊 海外艦隊空軍協同 陸軍 六三中隊以上 計一九二中隊以上 別に氣球隊あり 尙海外自治領及植民地に 七二五機	一九三五年六月迄に整備せられたりと稱せらるゝもの 爆撃 六大隊 驅逐 二大隊 偵察 十中隊 六千機保有を目標として擴張中なる如くである。	飛行 六聯隊 氣球 二大隊
一部は旅團に編成せらるる戰時は戰車を合して防空師團を編成す 地方軍高射砲隊 二十三個中隊砲數 未詳	二十個聯隊以上	未詳
裝甲自動車約一二〇〇輛（推定） 印度には外に戰車三中隊裝甲自動車五中隊を有す	末詳	未詳

現役陸軍軍人數
（事變中揭載遺漏）

師團別壯丁人員
（同）

受檢壯丁體格表
（同）

壯丁身長別人員
（同）

壯丁敎育程度
（同）

壯丁と花柳病
（同）

短期現役兵平均體重
（同）

受檢壯丁體重表
（同）

志願兵累年比較
（同）

陸軍現役將校定限年齡

六十五歲	大將	主計中將	軍醫中將	藥劑中將	獸醫中將
六十二歲	中將	主計少將	軍醫少將	藥劑少將	獸醫少將
六十歲					

陸軍武官俸給
圓

大將	六、六〇〇	中將同相當官	五、八〇〇	少將同相當官	四、一五〇
大佐同相當官	三、三一〇				

五十八歲	少將	五十六歲	主計大佐	軍醫大佐	藥劑大佐
五十五歲	大佐	五十四歲	主計中佐	軍醫中佐	獸醫中佐
五十三歲	中佐	五十二歲	主計少佐	軍醫少佐	獸醫少佐
五十歲	少佐	主計大尉	衞生大尉	獸醫務大尉	軍樂大尉
四十八歲	大尉	主計中少尉	軍醫中少尉	藥劑中少尉	獸醫中少尉
四十七歲	中少尉	衞生中少尉	軍樂中少尉		
四十五歲	中少尉	日支事變ニ鑑ミ當分ノ內各兵科大尉ハ五十年ニ又主計大尉ハ五十二年ニ延期（昭和十二年八月廿三日發表）			

特別大演習一覽

回數	年次	演習地	參加師團
明治 一	二五	宇都宮地方	近衞、第一、二
二	三一	大阪地方	第三、四、九、十
三	三四	仙臺地方	第二、八
四	三五	熊本地方	第六、十二
五	三六	姬路地方	第五、十、十一
六	四〇	結城地方	近衞、第一、三 十五
七	四一	奈良附近	第四、九、十、十六
八	四二	宇都宮附近	第二、七、八、十三、十四
九	四三	岡山附近	第五、十、十七
一〇	四四	久留米附近	第六、十二、十八
一一	大正元	川越附近	近衞、第一、十三、十四

一二　二　名古屋地方　第三、九、十五、十六
一三　三　大阪地方　第四、十、十一、十七
一四　四　弘前地方　第二、七、八、
一五　五　福岡地方　第五、六、十一、十八
一六　六　彦根附近　第三、四、九、十六
一七　七　關東地方　近衞、第一、二、八、十三、十四、十五
　　栃木附近

一八　八　攝播地方　第四、十、十一、十七
一九　九　中津地方　第六、十二、十八
二〇　一〇　武相平野　近衞、第一、三、十三、十四
二一　一一　西讃岐地方　第五、十一
二二　一二　加越地方　第九、十三、十六
二三　一三　仙臺地方　第二、七、八
二四　一四　佐賀平野　第六、十二
二五　一五　昭和二　中京地方　第一、三、四

支那事變日誌

△北支戰線

昭和十二年七月八日　午前零時頃北京郊外蘆溝橋附近で演習中の我が部隊に廿九軍の一部不法射撃を加ふ△我が部隊龍王廟占據。

十　日　協定を無視せる支那の攻撃に對し我が軍は龍王廟、東辛店を占領。

十三日　豐臺附近で日支衝突△馬村の敵を撃退。

十六日　通州街道安平で我が部隊應戰し支那兵を武裝解除す。

十八日　我が偵察機順德上空で射撃を受け交戰す。

二十日　十九日手交せる通牒に基き河邊部隊不法射撃せる宛平縣城の敵を斷乎猛撃。

二十五日　電線修理中の我が兵攻撃され五ノ井部隊は郎坊驛占據應戰。

二十六日　我が飛行機郎坊の支那軍兵營に爆彈投下△增援の鯉登部隊は郎坊の敵陣包圍占領黃村に向ひ敵を追撃△我が軍郎坊再空爆敢行△北京居留民保護の任を帶び北京入城の廣部部隊は廣安門で挾撃され苦戰の後入城。

二十七日　我が軍は通州の廿九軍獨立三十九旅の武裝を解除△通州城外で支那兵爆撃、南苑方面に潰走せしむ△南苑の三十八師に對し猛烈な砲撃及び空爆を加へた。

二十八日　坂口部隊は西苑に爆撃を加へ川岸及河邊部隊は南苑を攻撃占領、主力を以て敵を追撃△空軍部隊地上部隊と呼應し活躍△酒井部隊は清河鎭の僞治安部隊を砲撃占領、沙河鎭も占領△牟田口、萱島、福田の各部隊は馬村附近で敵の退路を斷ちこれを殲滅△一文字山に據つた河邊部隊は蘆溝橋の敵を猛撃。

二十九日　戰火天津に及び天津東站は支那軍に襲はれたが我か軍は野村部隊を中心に直ちに應戰し之を掃蕩△憲兵分遣所、警察第二分所は敵の包圍下に交戰△中日學院附近の敵軍撃退、△飛行場襲撃の支那兵に對し空陸呼應しの大損害を與へて撃退△海光寺西南方に於て堀部隊は敵を全滅せしめた△大沽に於いて我が驅逐艦射撃に應じて我が海軍も陸軍と協力大沽攻撃開始△支那敗殘兵通州砲撃、我が部隊激戰△天津に於ける支那軍の占據地點たる北寧津浦兩鐵路局、保安總隊本部、警備司令部、市政府、大福公司の六ケ所に對し我が軍空陸呼應して猛烈に攻撃南開大學に對し我が赤山部隊は砲撃しこれを粉碎△天津東站及總站の我が守備隊はこれを固守敵を撃退△我が軍は北平西北方の敵を永定河右岸に撃退、酒井部隊萬歲山、玉泉山を占領し黃村に進入、河邊部隊は宛平城を占據。

三十日　昨夜白河を强行渡河せる我が守備隊は海軍と協力攻撃し、西沽一帶を占據△通州の叛亂保安隊攻撃のため我增援隊急行△酒井部隊は空軍と呼應し西山を猛撃△北苑空爆△黃山附近の敵を鈴木、酒井部隊攻撃△我が空軍は天津に於ける重要建築物に蟠居する二十九軍保安隊に對し爆撃を敢行△天津防衞部隊は特別第二第三區の掃蕩を實施△塘沽部隊は大沽を占領△河邊部隊は長辛店及その附近の高地を占領△北京梅檀寺兵營で支那兵三千名武裝解除△通州の我守備隊を攻撃し來つた冀東保安隊に對して我空軍爆撃を加へ、包圍を解かしむ北上中の中央軍列車を空爆△天津に蟠居する支那兵概ね掃蕩し終る。

八月二日　我が軍支那兵根據地郎坊の兵營を破壞す△中富部隊は下花園に於て中央軍列車、次いで楡林堡に於て裝甲列車を爆撃した○秋田部隊は軍列車、弦道に於て裝甲列車を爆撃した○秋田部隊は堡に於て軍用列車を攻撃多大の損害を與へた△我が空軍は南下中の中央軍列車に對し二回に亘り爆撃を敢行。

三十一日　北京の各城門を占據。

天津に蟠居する支那兵根據地郎坊の兵營を破壞す△中富部隊は下花園に於て中央軍列車、次いで楡林堡に於て裝甲列車を爆撃した○秋田部隊は堡に於て軍用列車及下車中の敵部隊を攻撃多大の損害を與へた△我が空軍は南下中の中央軍列車に對し二回に亘り爆撃を敢行。

四　日　懷來、下花園に逃込んだ支那裝甲二ケ列車に對し我が軍第三回目の空爆を行ふ△南雲部隊は戒臺寺（長辛店南方三里）を攻撃。

五　日　我が軍は北京の各城門を占據した。

六　日　良鄕襲撃の敵を撃退。

十　日　南口鎭附近の中央軍八十九師の挑戰に應じ○○縣城を占據し、南口を砲撃、空陸相呼應して南口鎭占領△津浦線獨流鎭で襲來の敵軍を撃退す。

十二日　良鄕襲撃の敵大部隊に大損害を與へ之を撃退△通州に於ける○○部隊は同地東方の敗殘兵掃蕩△北京の○○部隊も北京東北方の殘敵を掃蕩。

十三日　南口鎭舊市街の殘敵を殲滅南口一帶の掃蕩完了△○○部隊は南口東北方の敵を攻撃望樓占領、麥倉部隊は東方の三角地區占領、近森部隊は敵の主要陣地小持山占領。

十四日　鯉登部隊は靜海縣城に砲撃を加ふ。

十五日　奈良、麥倉兩部隊は更に居庸關方面の峻嶮極まる北方山脈に向つて襲撃を開始△空軍は難航を續けつつ敵後方陣地長城の關門を粉碎。

十六日　天津後方攪亂を策せる小站附近の敵を激戰撃退した。

十八日　○○部隊は南口西南方の山岳に據る敵を攻撃、飛行機も空爆開始。

十九日　○○部隊も○○西北方の敵山岳部隊に對し拂曉戰敢行△長辛店北方で有力なる中央軍と交戰。

二十日　良鄕を攻撃の中央軍に大打撃を與へ退却せしむ△○○部隊は良鄕西方の敵を追撃△關東軍チヤハル作戰軍に屬する飛行機の一部は張家口を爆撃。

二十一日　我が○○部隊平綏線懷來を爆

擊敵の司令部を破壞△良鄉西方の敵陣を鈴木小林兩部隊猛擊之を占領。

二十二日　我空軍は惡天候を冒して平綏線に沿ふ懷來、新保安、延慶更に南口八達領に對し空爆敢行△我が軍張家口北方高地占領△〇〇部隊は張家口に北南方長城線を越へ萬全に進出△居庸關攻擊開始。

二十三日　良鄉西方で激戰。

二十四日　居庸關はじめ長城線の各要地を占領突破△津浦線方面では靜海占領△〇〇飛行隊は再度懷來に爆擊敢行し敵を退却せしめた。

二十五日　空軍〇機の掩護下に小林部隊は總攻擊良鄉西方の平頂山その他峻嶮の要地を占領更に追擊△關東軍の精銳は張家口を占領後南方に敵を急追△惡天候を衝いて〇〇部隊は蔚郡より廣靈を爆擊、退却中の敵を殲滅、〇〇部隊は新保安、陽原の敵を爆擊、〇〇部隊は長驅張家口、大同及びそれ以東山地の敵に爆擊敢行△獨流鎭を逆襲せる敵を後續部隊は〇〇部隊と協力一氣に擊滅。

二十六日　平頂山三四八高地一帶を占據せる〇〇部隊は大夜襲を決行南貫村に進出△長城奪取の先陣一宮部隊は敵を猛追遂に八達嶺を占領△空軍〇〇機は津浦線馬廠の兵營を爆破、敵の死傷算なし△〇〇部隊は平綏線楡林、康莊を占領〇〇部隊は懷來郡城南方の達子嶺白家庄、段子庄の敵を掃蕩△〇〇部隊主力は張家口に堂々入城。

二十七日　良鄉西方部の最大要地三八二高地は我が空陸の見事なる攻擊により遂に占領。

二十八日　粟飯原部隊は沙城に入城、關東軍部隊は宣化入城△長谷川部隊は平綏線郭磊莊占據。

二十九日　〇〇部隊は靜海南方陳家屯附近の敵を擊破同地占領△久重、羽鳥兩部隊は垞里村西方七百高地を猛擊占領△空軍〇〇部隊は桃花村西河營蔚の諸路上を退却中の敵を一齊掃射、西柳鎭爆擊、〇〇部隊は保定西方萊源に集結中の敵騎兵部隊を潰滅△赤紫部隊は呂官屯占領。

三十日　中富、園田、島田の各部隊は津浦線の要地滄州及び王口鎭を空襲、兵營停車場を爆破△我が軍平綏線紫講堡附以東を確保。

三十一日　中井部隊王口鎭を爆據△赤紫部隊及〇〇部隊は急追唐官屯馬廠の敵陣に對し進擊開始。

△上海戰線（海軍）

八月十二日　上海陸戰隊警戒配備につく

十三日　支那正規軍は我が陸戰隊に向ひ機關銃により射擊、我が軍應戰△支那便衣隊各地で挑戰、我軍對抗して掃蕩開始△陸戰隊は北四川路より閘北に向ひ進擊開始△八字橋方面及び閘北の支那部隊に應戰擊退△東部楊樹浦の敵の攻擊に對し黃浦口碇泊の我軍艦も砲門を開き水陸より猛射敵を沈默せしむ△虹口クリーク西岸の敵を攻擊す△東華紡裏で彼我接戰、激戰の後これを擊退。

十四日　支那爆擊機我が陸戰隊及軍艦に對し空爆を行はんとし我が高射砲一齊に砲擊△北四川路で敵侵入兵に對し徹底的打擊を與へた△敵の空爆に對し我が〇〇艦載機は敵機二機高射砲は一機を射落した△八字橋、三義里、北四川路の各方面で我陸戰隊敵と對峙激戰△我海上航空部隊は、銀翼數十機を連れ抗州を空襲、空中戰を演じ敵の戰闘機數十機を擊破、地上機全部を擊破、筧橋、抗州、喬司、及び廣德飛行場襲擊。

十五日　正午頃海軍〇〇空襲部隊は猛烈なる惡天候を冒し、支那海の怒濤數千哩を往復暴風雨中の南昌を空襲し重爆彈數十

箇を投下折柄地上に待機中の敵機數十機を擊破、何れも無事歸還△午後我海軍〇〇空襲部隊は往復數千哩の支那海を越えて敵の首都南京飛行場を空襲多大の損害と影響を與へた△上海の陸戰隊は艦艇と協力して來敵に抗し嚴乎として守備線を確守△支那空軍飛來したが、我高射砲の齊射に逃走中一臺は墜落△我艦載機は大場鎭爆擊敵の根據地に大損害を與へた△我〇〇海軍航空隊の精銳〇〇編隊機は喬司及紹興（抗州灣西岸）飛行場爆擊、又〇〇編隊機は筧橋飛行場を爆擊多大の損害を與へ空中戰で敵機九機を擊墜〇〇〇海軍航空隊〇〇機は航州飛行場を爆擊。

十六日　我海軍航空隊の一隊は長驅嘉興を空襲十機を擊破二機を擊墜△濃霧を衝いて我航空第〇隊は力戰し虹橋、蘇州、附近一帶を偵察、空中戰を演じ大打擊を與へた、同隊は閘北の陸戰隊正面の敵を爆擊大場鎭の敵砲兵陣地をも爆擊し、更に敵機と空中戰を交へ三機を擊墜△又第〇敵は浦東方面の敵を制壓△南方戰線で我貴志部隊は數倍せる敵と白兵戰を展開、大山大尉の弔合戰として勇戰遂に敵を擊退△虹口一帶に大激戰△黃浦口を挾んで我が艦浦東の敵と砲擊戰△海軍航空部隊の奧地飛行基地爆擊に於て敵の句容（南京鎭江間）飛行場で敵機二十機を爆擊。

十七日　虹口攻擊の敵に對し水陸より爆擊之を沈默せしむ△敵機空襲內一機を我が軍射落す△我が〇〇機は閘北八字橋及び浦東の敵を爆擊。

十七日　北停車場の敵砲兵及び敵空軍は我非戰闘員に爆擊を加へたので、我が〇〇機は北停車場の敵陣地を爆擊更に〇〇機は閘北要所に有効なる空爆を敢行△公大第一工場近近襲來の敵に對し水陸より應戰。

十八日　我が海軍航空部隊〇機は閘北一帶の敵陣地を爆擊△〇機は浦東の敵砲兵陣地爆擊、又〇機は龍革飛行場中、國航空公司及松滬警備司令部に爆彈投下、更に〇〇機は揚樹浦、引翔港の二箇旅の敵に空爆敢行、〇機は公大部隊前面の敵陣地を再度爆擊△我が北部々隊は其美路附近の敵と激戰△我が〇〇航空隊の〇〇編隊は月明を利用して虹橋飛行場を爆擊、上海上空を脅かす敵の根據地を粉碎△我が飛行隊は八字橋方面の敵に對し猛烈な地上掃射と爆擊を加へた△海軍機〇機は江灣の敵陣地爆擊△我〇〇機は更に南京郊外軍用飛行場を襲擊敵機二十一を破壞〇本日迄に我空軍の活躍による敵の被害夾の如し、地上待機中の飛行機約一〇〇機、空中戰で凡そ五〇機擊墜、格納庫凡そ二十棟を潰滅△海軍航空部隊は集結中の眞茹の敵に對し空爆を加へ鐵道線路を破壞、上海西方崑山鐵橋を完全に爆破し、大場鎭を徹底的に爆擊。

十九日　東華紡附近より租界進入を企せし敵兵を擊退△浦東の敵に對し〇〇及び〇〇艦〇隻は殲滅的打擊を加へた△北部戰線及び東部戰線に於いで數倍の敵兵の夜襲を拂曉激戰の末擊退△連日長距離空中攻擊を敢行しつゝある海軍航空部隊の〇〇機は南京を襲ひ火藥廠を爆擊、一機擊墜△倚空軍は北停車場、商務印書館附近、江灣方面の市政府附近、楊樹浦、競馬場、江灣鎭から大場鎭、南翔飛行場更に南通州まで餘すところなく敵陣地を爆擊△我が陸戰隊增援隊到着の結果攻勢に出で黃浦江に沿うて進擊招商局埠頭を占據△北停車場附近の敵は虹口の我が居留民を砲擊せしため、我が方猛烈に反擊△午後八時〇〇海軍航空部隊は南京參謀本部及軍官學校を爆擊。

二十日　我が空軍諸部隊は早朝より南市江南機器局、南市城外の兵器廠、浦東の敵陣を爆擊、江南製鐵所、北停車場附近、虹橋飛行場等に爆彈投下△〇〇海軍航空隊は廣德飛行場を急襲之を完全に爆破空中戰

で四機を撃墜し、又〇〇機は九江飛行場を爆撃△陸戦隊は楊樹浦方面より侵入の敵兵を反撃退却せしめ、殘兵と便衣隊の掃蕩を行つた。

二十一日　虹口攻撃の敵の六機と我が水上機一機は勇敢に交戦し一機を撃墜△眞恕方面の敵を我〇砲沈黙せしめ、八字橋及北四川路に敵襲あるも撃退、東部方面に現はれた敵のタンクを撃退△海軍〇〇空襲部隊は九江飛行場を空襲大損害を與ふ△〇〇機は筧橋飛行場を急襲、飛行機製造廠を撃破〇〇機は揚州及び滁州飛行場を爆撃し格納庫、兵舎、庫外飛行機十臺を撃破し一機を撃墜△我が海軍〇機は、浦東及北停車場の敵陣攻撃。

二十二日　寶山上空の空中戦に於いて我が海軍機三機は敵の五機を撃墜△楊樹浦ブロードウェイに於いて大漏部隊横川部隊は敵戦車を先頭とする數十倍の敵と激戦之を潰走せしめた△〇〇艦水上機は敵三機と遭遇一機を撃墜一機を體當りを以つて墜落せしめた△我空軍〇〇機は南京空襲を決行、光華門、軍用飛行場、兵器廠を爆撃△我海軍航空部隊は江陰の黄山南麓の工場を爆破眞茹、獅子林砲臺及び嘉定の裝甲自動車群を爆撃△又〇〇機は大場鎭、江灣鎭及敵背後の據點密集部隊を爆撃。

二十三日　我〇〇、〇〇艦隊は帝國陸軍〇〇〇〇を護衛し海空の掩護下に敵前上陸に成功せしむ〇東部戦線で敵戦車隊を撃退、各方面の敵を逆襲して敵を牽制した△我が〇〇海軍航空部隊は前後二回南京飛行場を爆撃、又〇〇機は寶山附近上空で敵二十七機と遭遇九機を撃墜△我が空軍は〇〇方面の敵を我が〇〇部隊上陸掩護のため爆撃、大場鎭空襲、江南機器局空爆、上海鐵道線路附近及び浦東方面の敵陣を爆破しづれも多大の損害を與へた。

二十四日　海軍〇〇空襲部隊は八度南京爆撃を敢行し城外飛行場の敵機多數を燒く△我が陸戦隊は全線に亘り進出。

二十五日　我が陸戦隊は守勢を脱して勇躍前進敵を撃退〇海軍航空隊は陸戦と協力敵を爆撃掃射を行ひ、江南機器局を爆破、支那軍根據地を殆んど灰燼に歸せしむ△三浦丸を狙ふ敵機一臺を射落した。

二十六日　我が空軍は〇〇正面の敵に對し盛に爆撃を續け南翔、崑山、閔北方面の敵及輸送中の敵列車數十を爆破△〇〇機は南昌飛行場を空襲甚大なる損害を與へた。

二十七日　〇〇海軍航空隊は二隊をもつて南京を空襲、憲兵團、兵工廠その他の軍事施設を爆撃△羅店鎭、瀏河鎭、大場鎭、嘉定、江灣、浦東方面の各敵陣地を爆撃。

二十八日　江灣北方陸戦隊本部前に敵夜襲し來るも我陸戦隊之を殲滅撃退す△航空部隊は羅店鎭、朱家濱、吳淞鎭、周家橋、浦東方面の敵各陣地、崑山、松江鐵橋及び上海停車場を爆撃△海軍航空隊〇機は荒天を衝いて閘北、江灣に猛烈な爆撃を加へ敵砲兵陣地に徹底的打撃を加へた△江上兵力の大部は艦砲射撃を以つて陸軍掩護。

二十九日　〇〇艦は陸軍部隊の後方を騒がす揚子江上流方面の敵大部隊を砲撃△海軍〇〇部隊は杭州廣德飛行場を襲ひ大打撃を與へた。

三十日　〇〇艦は揚子江岸及市廳舍附近の敵陣砲撃〇江灣、廟行鎭、大場鎭及び閘北の敵陣兵に空襲敢行△〇〇海軍航空部隊の〇〇機は津浦線と隴海線の交叉點徐州に於て敵の軍需品を滿載せる貨車群を粉砕△敵機一機撃墜。

三十一日　吳淞に對する陸軍の攻撃と一體となつた海軍艦艇は猛烈な掩護射撃を加へた〇海軍航空隊も之に協力吳淞鎭、江灣鎭、大場鎭、閘北の敵を痛撃△陸戦隊は閘北方面の敵の夜襲をことごとく撃退△〇〇海軍航空部隊はその精鋭を以て南支に長期

敵の心臟部を潰滅せしめた、即ち〇〇機は廣東白雲飛行場を襲ひ格納庫三棟を炎燒〇〇機は天河飛行場、敵司令部、出動準備中の敵機三臺及び空中戦で三機を撃墜、〇〇機及び〇〇機は福建省漳州飛行場を爆撃、〇〇機は廣東省韶關飛行機製造廠を爆撃、〇〇機は福州方面を偵察し福建省建甌火藥庫を爆破。

上海戦線（陸軍）

八月二十三日　帝國陸軍は海軍の緊密なる協力の下に〇〇方面の敵前上陸に成功し所在の敵を掃蕩しつつ〇〇方面に向ひ進出

二十四日　〇〇部隊は敵の頑強なる反撃を退け〇〇を占據。

二十五日　左翼右翼中央の各部隊とも空軍の掩護下に果敢に進撃所期の〇〇〇〇〇に到達。

二十六日　上海東方及び北方に戦局は移り我が軍激戦前進す。

二十七日　鷹森部隊は軍工路水電公司附近の敵陣に總攻撃開始、金田部隊麾下の〇〇隊は三度決死隊を以て遂に敵陣を燒拂つた〇〇〇〇鎭の部隊左翼〇〇陣地は〇〇方面の敵要地の砲撃開始。

二十八日　敵の重要據點羅店鎭及段行鎭を占領。

三十日　後續部隊續々と上陸敢行。

三十一日　吳淞砲臺方面に於いて海空と相呼應して殘敵の占據せる〇〇鎭を猛攻撃占領、正家屯占據　〇〇鎭を陷落、遂に黄浦江下流の要害吳淞砲臺を占據す△我が後續部隊は〇〇方面に敢然前敵上陸〇〇〇〇占領。

九月一日以後の戦局

一日　上海戦線では倉永、鷹森兩部隊は海軍航空隊及艦隊と協力吳淞に逆襲せる敵部隊と交戦大損害を與ふ△陸軍〇〇部隊は事變以來始めて上海租界内に上陸勇躍戦線に參加△獅子林砲臺、目浦鎭占領。

二日　海陸協同閘北、江灣、大場鎭、一帶に大砲撃を加ふ△鷹森部隊は大金家鎭占領△海軍機は眞茹無電臺に第二回の爆撃を敢行す。

三日　浦東對岸の敵兵に猛撃を加ふ

四日　北支戦線及上海戦線では赤柴部隊は唐家屯の堅陣馬廠に肉迫△長谷川部隊山西省に突入△上海戦線では閘北の北停車場と商務印書院附近の敵砲兵陣に猛烈な空爆を浴せると共に陸軍各部隊寶山縣城に迫る△我が軍は廣東省虎門港に進入白石砲臺、飛行場、湖里山、大磐角砲臺を痛撃。

五日　上海上陸の陸軍部隊は進出を續け一擧に金家屯、曹家濱を陷れ、遂に寶山縣に日章旗飜り、淺間、天谷兩部隊の陸上連絡なる△海軍航空隊は汕尾、嫣宮の兩要塞、要港海州等の空爆ニ眞茹の地上捨射を敢行。

六日　上海に到着した石井部隊の飯田部隊は滬江大學前面の敵大軍を猛然攻撃〇〇部隊の中村部隊及坂井部隊は江上より虬江碼頭に突入敵前上陸を敢行し、虬江碼頭を占領、〇〇以下第〇艦隊の掩護砲撃、飛行機の爆撃、砲兵隊の釣瓶打ちの偉功を奏し陸戦隊安田部隊も協力楊家屯の線に進出せるため敵は繊滅的打撃を受け退却を開始△北支戦線では赤柴部隊は朝來砲兵の掩護射撃の下に馬廠前線の敵を猛然攻撃△廣東赤灣警備中の〇〇艦は寶安縣より砲撃に應戦保安隊に大打撃を與へた△我空軍は悪天候を衝き奥漠鐵道爆破、赤灣砲臺、寶安縣城を爆撃、更に大鵬灣附近の軍事的要害を航爆△海軍〇機は汕頭要塞に大空爆を敢行△陸軍機山西軍各陣地を猛烈に空爆△〇〇部隊は猛進山西省天鎭城、東天鎭の要地占領。

逐艦〇隻は廣東省虎門港に進入白石砲臺、

昭和十三年度簡閲點呼參會該當年次表

本郷聯隊區司令部

區分	徴集及任官年 15	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	摘要
補充兵 未教			○			○			○			○	一、徴集年の翌年を第一年とし二年置に執行す
既教育兵 補充			×	○		×○		○	×	○		×	一、徴集年の翌年を第一年として一年置に執行す
既教育兵 豫備		△		△		○		○		○			一、補充兵欄に×印を附しあるは在隊三ケ月未滿にして第一補充兵に編入せられたるものを示す（召集規則第百四十五條第一項の三に該當するもの）
既教育兵 後備		○		○									
下士官 志願に依る者		○		○		○		○		○			一、任官年の翌年を第一年として一年置に執行す
下士官 幹部候補生出身者志願に依らざる者		○		○		○		○		○			一、徴集年の翌年を第一年として一年置に執行す

備考

○印を附したるは該當年次を示す

△印を附したるは轉役を異にせる該當年次を示す

昭和十二年度事故不參者は本表に依らず參會せしむ

昭和十三年度勤務演習召集標準年次及日數表

本郷聯隊區司令部

區分	役種	召集年次	召集標準年次者	召集日數
各兵科將校（幹部候補生出身者ヲ除ク）	豫備役	第四年	昭和八年ニ豫備役編入者	
	後備役	第二年	昭和十年ニ後備役編入者	
幹部候補生出身ノ將校	豫備役	第三年	昭和九年ニ豫備役編入者	三十五日
		第六年	昭和六年ニ豫備役編入者	二十八日
各部將校（幹部候補生出身者ヲ除ク）	豫備役	第四年	昭和八年ニ豫備役編入者	二十一日
	後備役	第二年	昭和十年ニ後備役編入者	
各兵科准尉	豫備役	第四年	昭和八年ニ豫備役編入者	
	後備役	第二年	昭和十年ニ後備役編入者	
各兵科下士官（幹部候補生出身者ヲ除ク）	豫備役	第三年	昭和九年ニ豫備役編入者	
	後備役	第二年	昭和十年ニ後備役編入者	
幹部候補生出身ノ下士官	豫備役	第二年	昭和十年ニ豫備役編入者	三十五日
		第五年	昭和七年ニ豫備役編入者	二十八日
各部准士官、下士官（幹部候補生出身者ヲ除ク）	豫備役	第四年	昭和八年ニ豫備役編入者	
	後備役	第二年	昭和十年ニ後備役編入者	十四日
各兵科兵（輜重兵特務兵ヲ除ク）	豫備役	第四年	昭和八年徴集	二十一日
	後備役	第十年	昭和二年徴集	
衛生部 看護兵及磨工兵	豫備役	第四年	昭和八年徴集	
	後備役	第十年	昭和二年徴集	十四日
衛生部 補助看護兵	豫備役	第六年	昭和六年徴集	二十一日
各兵第一補充兵	補充兵役	第四年	昭和八年徴集	

（將校・准尉・下士官）役ニ入リタル年ノ翌年ヨリ起算ス

（兵・補充兵）徴集年ノ翌年ヨリ起算ス

備考

一、標準年次ハ下士官以上ニ在リテハ其ノ役ニ入リタル年ノ翌年ヨリ、兵及補充兵ニ在リテハ徴集年ノ翌年ヨリ起算スルモノトス（徴集年トハ最後ノ徴兵檢査ヲ受ケ現役兵又ハ補充兵トシテ決定セラレタル年トス）
豫備役後備役ノ者ニシテ下士官ヨリ准士官ニ、准士官ヨリ將校ニ任官又ハ進級シタル者ノ演習召集ハ任官又ハ進級年ヲ第一年トシテ起算スルモノトス

二、士官勤務適任證書又ハ下士官適任證書ヲ有スル者ノ召集ハ現官等級相當ノ召集年次及日數ニ依ル

三、朝鮮、臺灣、關東州及滿洲國在留者ニシテ服役上ノ手續ヲ履行シタル者ハ在留地ニ召集セラルルモノトス

四、飛行機操從術ヲ修得シタル豫備役又ハ後備役將校准士官下士官ハ役ニ入リタル年ノ翌年ニ召集シ爾後每年之ヲ召集ス其ノ回數ハ五回各回二十八日トス但シ年齡四十年ニ達スルモノニアリテハ其年及爾後之ヲ召集セス

五、寄留地ノ軍隊ニ於テ勤務演習召集ニ應セントスル者ハ昭和十二年十一月三十日迄ニ到着スル如ク寄留地ノ市町村及警察署長ヲ經テ寄留地ノ聯隊區司令官宛願出ツヘシ
右ノ願出期日後本籍地外ノ聯隊區ニ寄留シ當該寄留地ニ於テ演習召集ニ應セントスル者ハ情ヲ具シ市町村長ヨリ寄留ニ關スル證明ヲ受ケ寄留ノ日ヨリ十四日以內ニ到達スル如ク前項ニ準シ願出ツヘシ但シ令狀受領後ナルトキハ願出ツルコトヲ得ス

六、豫備役後備役兵ニシテ演習中下士官ニ任セラレタル者ノ召集回數ハ兵トシテ召集セラレタル回數ヲ通算スルモノトス

七、本表ノ外必要ナル演習等ノ爲召集シ又本表日數ノ範圍內ニ於テ各年次ノ召集日數ヲ彼此融通スルコトアルヘシ

八、步兵科兵（下士官）ニシテ擔架術ヲ修得シタル者ニアリテハ本表ニ依ラス第三年（豫備役第二年）又ハ第十年（後備第一年）ヲ標準年次トスルコトヲ得

九、召集期間ハ時ヲ以テ計算ス

十、幹部候補生出身ノ將校及下士官ニシテ一月ヨリ四月迄ノ間ニ於テ豫備役ニ入リタル者ニ在リテハ其ノ年ヲ第一年トシテ起算スルモノトス

海軍

海軍區

第一海軍區（横須賀）— 青森、岩手、宮城、福島、茨城、千葉、東京、神奈川、靜岡、愛知、三重、北海道、樺太の海岸海面

第二海軍區（呉）— 和歌山、大阪、兵庫、岡山、廣島、山口、島根、鳥取、京都、福井、石川、富山、新潟、山形、秋田、德島、高知、愛媛、香川、大分、宮崎の海岸海面並に福岡縣遠賀宗像郡界より以東の海岸海面

第三海軍區（佐世保）— 第二海軍區に屬するものを除きたる福岡縣の海岸海面並に佐賀、長崎、熊本、鹿兒島、沖繩、臺灣、朝鮮の海岸海面

關東州（關東州の海岸海面）

南洋（横須賀）（南洋群島委任統治地區域の海岸海面）

要港部

馬公　第四驅逐隊

鎭海　第二十六驅逐隊

旅順　第十四驅逐隊

舞鶴　第二十一水雷隊多摩

大湊　第一驅逐隊

帝國艦隊編制（昭和十二年）

聯合艦隊
- 第一艦隊
  - 第一戰隊（陸奥、長門、日向）
  - 第三戰隊（榛名、霧島）
  - 第八戰隊（由良、名取、鬼怒）
  - 第一水雷戰隊（川內、第九驅逐隊）
  - 第二十一驅逐隊
  - 第一潛水戰隊（五十鈴、第七潛水隊、第八潛水隊）
  - 第一航空隊（鳳翔、龍驤、第三十驅逐隊）
- 第二艦隊
  - 第四戰隊（高雄、摩耶、足柄）
  - 第五戰隊（羽黑、那智）
  - 第二水雷戰隊（神通、第七驅逐隊、第八驅逐隊、第十九驅逐隊）
  - 第二潛水戰隊（迅鯨、第十二潛水隊、第二十九潛水隊、第三十潛水隊）
  - 第二潛水戰隊（加賀、第二十二驅逐隊）
  - 第十二戰隊（沖島、神威、第二十八驅逐隊）
- 附屬（間宮）

第三艦隊
- 第十戰隊（出雲、天龍、龍田）
- 第十一艦隊
  - 安宅、宇治、鳥羽、勢多、堅田、比良、保津、熱海、二見、栂、蓮
- 第五水雷戰隊（夕張、第十三驅逐隊、第十六驅逐隊）
- 練習艦隊（八雲、磐手）

海軍生徒採用狀況

昭和十二年度

	志願者	採用
水兵		
水兵（電）		
航空兵		
機關兵		
軍樂兵		
看護兵		
主計兵		

備考　以上二表數字記入遠慮

海軍徵集員（昭和十年度）

	横須賀	呉	佐世保
水兵			
水兵（電）			
航空兵			
機關兵			
軍樂兵			
看護兵			
主計兵			

海軍武官俸給

大將	六、六〇〇	各科中將	五、八〇〇	同	二級 一、一五〇
各科少將	五、〇〇〇	各科大佐	四、一五〇	同	四級 九三〇
各科少佐	二、三三〇	各科大尉一級	一、九〇〇	同	三級 一、〇四二
各科特務中尉一級	一、七四〇	同	三級 一、四七〇	同	二級 一、〇三〇
同	二級 一、〇三〇	各科少尉	二、〇七〇	同	一級 一、九一〇
各科特務少尉一級	一、七四〇	同	二級 一、四七〇	同	三級 一、〇四二
各科特務少尉一級	一、四七〇	同	二級 一、三六八	同	四級 九三〇
候補生	六三〇	準士官一級	一、三三〇		

海軍現役將校定限年齡

六十五歲	大將	主計中將	造船中將
六十二歲	軍醫中將 造兵中將	主計中將	造機中將
六十歲	軍醫少將 造兵少將	主計少將	造機少將
五十八歲	少將		
五十六歲	軍醫大佐 造船大佐 水路大佐	薬劑大佐 造兵大佐	主計大佐 造機大佐
五十四歲	機關大佐		

五十二歲	軍醫中佐 造船中佐 水路中佐	薬劑中佐 造兵中佐 各科特務大尉 機關中佐	主計中佐 造機中佐 各科特務大尉
五十歲	中尉		
四十九歲	軍醫少佐 造船少佐 水路少佐	薬劑少佐 造兵少佐	主計少佐 造機少佐
四十八歲	准士官		
四十七歲	少佐	機關少佐	
四十五歲	薬劑大尉 造兵大尉 大尉	軍醫大尉 造船大尉 水路大尉 機關大尉	主計大尉 造機大尉
四十二歲	軍醫中少尉 中少尉 造機中少尉 機關中少尉	薬劑中少尉 造船中少尉 水路中少尉	主計中少尉 造兵中少尉
四十歲	中少尉		

觀艦式一覽表

年	月日	場所	名稱	隻數	噸數	航空機
明治元	三・二六	天保山沖	觀艦式	六	二、四五二	
二三	四・一八	神戸沖	海軍艦兵式	一九	三一、三三八	
二三	四・三〇	神戸沖	大演習觀艦式	四六	一二九、六〇一	
二六	四・一〇	神戸沖	大演習觀艦式	六一	二一七、一七六	
二六	一〇・二三	横濱沖	凱旋觀艦式	一六六	三二四、一五九	
四一	一一・一八	神戸沖	大演習觀艦式	一三三	四〇四、四六〇	
四三	一一・一三	横濱沖	大演習觀艦式	一一五	四六〇、八二五	飛行機 二
大正元	一一・一〇	横須	沖恒例觀艦式	五七	三五三、九六五	飛行機 四
二	一一・一〇	横濱	沖特別觀艦式	一三四	五九八、八四八	飛行機 九
五	一〇・二五	横濱	沖恒例觀艦式	八四	四七二、二五四	飛行機 四
八	七・九	横須賀	沖御親閱式	二六	八六、〇一三	
八	一〇・二八	横濱	沖大演習觀艦式	一一	六二四、一八〇	飛行機 二
昭和二	一〇・三〇	横濱	沖大演習觀艦式	一五八	六六四、三三九	飛行機 八〇 飛行船 一
三	一三・四	横濱	沖大禮特別觀艦式	一八六	七八八、八九二	飛行機 一三〇 飛行船 一
五	一〇・二六	神戸	沖昭和五年特別大演習觀艦式	一六五	七〇三、二九五	飛行機 七一
八	八・三五	横濱	沖大演習觀艦式	一六一	八四七、七六六	飛行機 一六〇
一二	一〇・二九	阪神	沖大演習觀艦式	一〇〇	五八〇、一三三	飛行機數百機

帝國艦船一覽（昭和十一年九月末現在）

（海軍省調査）

艦名（基準）	排水量	竣工	速力	備砲	製造所
軍艦					
戰艦					
金剛	二九、三三〇	大正二	二六・〇節	三六糎八、一五糎一六、一二・七糎高角八	英國ヴイツカース社
榛名	二九、三三〇	同四	二六・〇	同	神戸川崎造船所
霧島	二九、三三〇	同四	二六・〇	同	三菱長崎造船所
扶桑	二九、三三〇	同四	二三・五	三六糎一二、一五糎一六、一二・七糎高角八	呉工廠
山城	二九、三三〇	同六	二三・五	同	横須賀工廠
伊勢	二九、九九〇	同六	二三・〇	三六糎一二、一四糎一八、一二・七糎高角八	神戸川崎造船所
日向	二九、九九〇	同七	二三・〇	同	三菱長崎造船所
長門	三三、七二〇	同九	二三・〇	四〇糎八、一四糎三〇、一二・七糎高角八	呉工廠
陸奥	三三、七二〇	同一〇	二三・〇	同	横須賀工廠
戰艦 計九隻	排水量計（基準）		二七二・〇		
練習戰艦					
比叡	一九、五〇〇	大正三 昭和七 改	二八・〇	三六糎六、一五糎一六、一二・七糎高角四、八	横須賀工廠
練習戰艦 計一隻	排水量計（基準）		一九、五〇〇	糎高角四	
古鷹	七、一〇〇	一五	三三・〇	二〇糎六、一三糎高角四	三菱長崎造船所
加古	七、一〇〇	同一五	三三・〇	同	神戸川崎造船所

艦名（基準）	排水量	竣工	速力	備砲	製造所
一等巡洋艦					
青葉	七、一〇〇	昭和二	三三・〇	同	三菱長崎造船所
衣笠	七、一〇〇	同二	三三・〇	同	神戸川崎造船所
那智	一〇、〇〇〇	同三	三三・〇	二〇糎一〇、一三糎高角六	呉工廠
羽黒	一〇、〇〇〇	同四	三三・〇	同	三菱長崎造船所
妙高	一〇、〇〇〇	同四	三三・〇	同	横須賀工廠
足柄	一〇、〇〇〇	同四	三三・〇	同	神戸川崎造船所
愛宕	九、八五〇	同七	三三・〇	二〇糎一〇、一三糎高角四	呉工廠
高雄	八、八五〇	同七	三三・〇	同	横須賀工廠
鳥海	九、八五〇	同七	三三・〇	同	三菱長崎造船所
摩耶	九、八五〇	同七	三三・〇	同	神戸川崎造船所
一等巡洋艦 計十二隻	排水量計（基準）		一〇七、八〇〇		
二等巡洋艦					
平戸	四、四〇〇	明治四五	二六・〇	一五糎八、八糎二、八糎高角二	神戸川崎造船所
矢矧	四、四〇〇	同四五	二六・〇	同	三菱長崎造船所
龍田	三、三三〇	大正八	三一・〇	一四糎四、八糎高角一	佐世保工廠
天龍	三、三三〇	同八	三一・〇	同	横須賀工廠
球磨	五、一〇〇	同九	三三・〇	一四糎七、八糎高角二	佐世保工廠
多摩	五、一〇〇	同一〇	三三・〇	同	三菱長崎造船所
北上	五、一〇〇	同一〇	三三・〇	同	佐世保工廠
木曾	五、一〇〇	同一〇	三三・〇	同	三菱長崎造船所
大井	五、一〇〇	同一〇	三三・〇	同	神戸川崎造船所
長良	五、一七〇	同一一	三三・〇	同	佐世保工廠
名取	五、一七〇	同一一	三三・〇	同	三菱長崎造船所

艦名（基準）	排水量	竣工	速力	備砲	製造所
巡洋艦					
鬼怒	五、一七〇	二	三三・〇	同	神戸川崎造船所
由良	五、一七〇	同二	三三・〇	同	佐世保工廠
夕張	二、八五〇	同三	三三・〇	一四糎六、八糎高角一	浦賀船渠會社
平鈴	五、一七〇	同三	三三・〇	一四糎七、八糎高角二	三菱長崎造船所
川内	五、一九五	同三	三三・〇	同	浦賀船渠會社
阿武隈	五、一七〇	同四	三三・〇	同	神戸川崎造船所
神通	五、一九五	同四	三三・〇	同	横濱船渠會社
那珂	五、一九五	同四	三三・〇	同	呉工廠
最上	八、五〇〇	昭和一〇	三三・〇	一五糎一五、一三・七糎高角八	三菱長崎造船所
三隈	八、五〇〇	同一〇	三三・〇	同	横須賀工廠
鈴谷	八、五〇〇	同一〇	三三・〇	同	神戸川崎造船所
熊野	八、五〇〇	同一〇	三三・〇	同	三菱長崎造船所
利根	—	—	—	—	呉工廠
筑摩	—	—	—	—	横須賀工廠
二等巡洋艦 計二十五隻（内未成四隻）					
既成艦排水量計（基準）	一〇七、三五五				
海防艦					
淺間	九、三四〇	明治三二	二一・二	二〇糎四、一五糎一三、八糎四、八糎高角一	英國アームストロング社
八雲	九、〇一〇	同三三	一六・〇	同	獨逸ヴアルカン社
吾妻	八、六四〇	同三三	一六・〇	同	佛國ロワール社
出雲	九、一八〇	同三三	二〇・七	二〇糎四、一五糎一四、八糎高角一八糎四	英國アームストロング社
磐手	九、一八〇	同三四	一六・〇	同	同
對島	三、一三〇	同三七	二〇・〇	一五糎六、八糎八、八糎高角一	呉工廠

艦名（基準）	排水量	竣工	速力	備砲	製造所
航空母艦					
春日	七、〇八〇	三七	二〇・〇	二五糎一、一〇糎二、一五糎四、八糎四、八糎高角一	伊國アンサルド社
海防艦 計七隻	排水量計（基準）		五、四五〇		
鳳翔	七、四七〇	大正一一	二五・〇	一四糎四、八糎高角二	淺野造船所
赤城	二六、九〇〇	昭和二	二八・五	二〇糎一〇、一三糎高角三	呉工廠
加賀	二六、九〇〇	三	三三・〇	同	横須賀工廠
龍驤	七、一〇〇	八	二五・〇	一三・七糎高角二	横須賀工廠
蒼龍	一〇、〇五〇	一〇	三〇・〇	同	呉工廠
飛龍	—	—	—	—	横須賀工廠
航空母艦 計六隻（内未成二隻）	既成艦排水量（基準）		六八、三七〇		
潜水母艦					
韓崎	九、五七〇	—	一三・六	八糎一、八糎高角一	英國ホーソンレスリー社
駒橋	一、三五五	大正三	一三・九	八糎二、八糎高角一	佐世保工廠
迅鯨	五、一六〇	一三	一六・〇	一四糎四、八糎高角二	三菱長崎造船所
長鯨	五、一六〇	一三	一六・〇	同	同
大鯨	一〇、〇〇〇	昭和九	二〇・〇	一三・七糎高角四	横須賀工廠
潜水母艦 計五隻	排水量計（基準）		三一、〇一五		
水上機母艦					
能登呂	一四、〇五〇	大正八	一二・〇	一四糎二、八糎高角	神戸川崎造船所
神威	一七、〇〇〇	大正一一	一五・〇	同	ニューヨークシップビルディング會社
千歳	九、〇〇〇	—	二〇・〇	一三糎高角二探二	呉工廠
千代田	—	—	—	—	呉工廠
水上機母艦 計四隻（内未成二）既成艦排水量計（基準）			三一、〇五〇		

敷設艦	常磐	九、二四〇	明治三二・三五	二〇糎二、一五糎八、八糎二、八糎高角一	英國アームストロング社	
	勝力	一、五四〇	大正六・一二・〇	八糎三	吳工廠	
	白鷹	一、三四五	昭和四・一六・〇	一二糎高角三	石川島造船所	
	嚴島	一、九七〇	四・一六・〇	一四糎三、八糎高角二	浦賀船渠會社	
	八重山	一、一三五	七・二〇・〇	一二糎高角二	吳工廠	
	沖島	四、四〇〇	一一・二〇・〇	一四糎四	播磨造船工所	
	敷設艦	計六隻	排水量計（基準）	一九、六三〇		
砲艦	淀	一、三三〇	明治四一・三・〇	八糎二	神戸川崎造船所	
	鳥羽	二五五	四四・一五・〇	短八糎二	佐世保工廠	
	峨嵯	六八五	大正元・一五・〇	一二糎一、八糎高角三	同	
	安宅	七三五	一一・一六・〇	一二糎二、八糎高角二	横濱船渠會社	
	比良	三〇五	一三・一六・〇	八糎高角二	三菱神戸造船所 揚子機器有限公司	
	勢多	三〇五	一三・一六・〇	八糎高角二	播摩造船工場 上海東華造船會社	
	堅田	三〇五	一二・一六・〇	同	同	
	保津	三〇五	一三・一六・〇	同	三菱神戸造船所 揚子機器有限公司	
	熱海	一四〇	昭和四・一六・〇	短八糎高角一	玉造船工場	
	二見	一四〇	五・一六・〇	同	藤永田造船所	
	砲艦	計十隻	排水量計（基準）	四、五〇五		
驅逐艦	艦名（排水量基準）		竣工	速力	備砲	製造所
	澤風	一、二五五噸	大正九	三四・〇節	一二糎四	三菱長崎造船所

驅逐艦	峯風	一、二五五	三四・〇	同	九	舞鶴工廠	
	矢風	一、二五五	三四・〇	同	九	三菱長崎造船所	
	沖風	一、二五五	三四・〇	同	九	舞鶴工廠	
	羽風	一、二五五	三四・〇	同	九	三菱長崎造船所	
	島風	一、二五五	三四・〇	同	九	舞鶴工廠	
	秋風	一、二五五	三四・〇	同	一〇	三菱長崎造船所	
	汐風	一、二五五	三四・〇	同	一〇	舞鶴工廠	
	夕風	一、二五五	三四・〇	同	一〇	三菱長崎造船所	
	灘風	一、二五五	三四・〇	同	一〇	舞鶴工廠	
	太刀風	一、二五五	三四・〇	同	一〇		
	帆風	一、二五五	三四・〇	同	一〇		
	野風	一、二五五	三四・〇	同	一一		
	沼風	一、二五五	三四・〇	同	一一		
	波風	一、二五五	三四・〇	同	一一	三菱長崎造船所	
	神風	一、二七〇	三四・〇	同	一一	舞鶴工作部	
	春風	一、二七〇	三四・〇	同	一二	三菱長崎造船所	
	朝風	一、二七〇	三四・〇	同	一二	舞鶴工作部	
	松風	一、二七〇	三四・〇	同	一三	同	
	旗風	一、二七〇	三四・〇	同	一三	藤永田造船所	
	朝風	一、二七〇	三四・〇	同	一三	佐世保工廠	
	夕風	一、二七〇	三四・〇	同	一四	浦賀船渠會社	
	追風	一、二七〇	三四・〇	同	一四	石川島造船所	
	疾風	一、二七〇	三四・〇	同	一四	藤永田造船所	
	皐月	一、三一五	三四・〇	同	一四	舞鶴工作部	
	如月	一、三一五	三四・〇	同	一四	佐世保工廠	
	睦月	一、三一五	三四・〇	同	一五		

一等驅逐艦	文月	一、三一五	三四・〇	同	一五	藤永田造船所	
	彌生	一、三一五	三四・〇	同	一五	浦賀船渠會社	
	卯月	一、三一五	三四・〇	同	一五	石川島造船所	
	菊月	一、三一五	三四・〇	同	一五	舞鶴工作部	
	水無月	一、三一五	三四・〇	同	一五	浦賀船渠會社	
	長月	一、三一五	昭和二・三四・〇	同	一五	石川島造船所	
	三日月	一、三一五	二・三四・〇	同	一五	佐世保工廠	
	夕月	一、三一五	二・三四・〇	同	一五	藤永田造船所	
	望月	一、三一五	二・三四・〇	同	一五	浦賀船渠會社	
	磯波	一、八〇〇	三・三四・〇	二・七糎六	一五	佐世保工廠	
	東雲	一、八〇〇	三・三四・〇	同	一五	石川島造船所	
	薄雲	一、八〇〇	三・三四・〇	同	一五	藤永田造船所	
	白雲	一、八〇〇	三・三四・〇	同	一五	舞鶴工作部	
	吹雪	一、八〇〇	三・三四・〇	同	一五	浦賀船渠會社	
	白雪	一、八〇〇	三・三四・〇	同	一五	横濱船渠會社	
	初雪	一、八〇〇	三・三四・〇	同	一五	舞鶴工作部	
	叢雲	一、八〇〇	四・三四・〇	同	一五	藤永田造船所	
	浦波	一、八〇〇	四・三四・〇	同	一五	佐世保工廠	
	敷波	一、八〇〇	四・三四・〇	同	一五	舞鶴工作部	
	綾波	一、八〇〇	五・三四・〇	同	一五	藤永田造船所	
	朝霧	一、八〇〇	五・三四・〇	同	一五	佐世保工廠	
	天霧	一、八〇〇	五・三四・〇	同	一五	石川島造船所	
	夕霧	一、八〇〇	五・三四・〇	同	一五	舞鶴工作部	
	狹霧	一、八〇〇	六・三四・〇	同	一六	浦賀船渠會社	
	曙	一、八〇〇	六・三四・〇	同	一六	藤永田造船所	
	朧	一、八〇〇	六・三四・〇	同	一六	佐世保工廠	
	潮	一、八〇〇	六・三四・〇	同	一六	浦賀船渠會社	
	漣	一、八〇〇	七・三四・〇	同	一七	舞鶴工作部	
	雷	一、八〇〇	七・三四・〇	同	一七	浦賀船渠會社	
	電	一、八〇〇	七・三四・〇	同	一七	藤永田造船所	
	曉	一、八〇〇	八・三四・〇	同	一七	佐世保工廠	
	響	一、八〇〇	八・三四・〇	二・七糎五	一八	舞鶴工作部	
	初春	一、三六八	八・三四・〇	二・七糎五	一八	佐世保工廠	
	子日	一、三六八	八・三四・〇	同	一八	浦賀船渠會社	
	初霜	一、三六八	九・三四・〇	同	一九	同	
	若葉	一、三六八	九・三四・〇	同	一九	佐世保工廠	
	有明	一、三六八	一〇・三四・〇	同	二〇	神戸川崎造船所	
	夕暮	一、三六八	一〇・三四・〇	同	二〇	舞鶴工作部	
	白露	一、三六八	一一・三四・〇	同	二一	佐世保工廠	
	時雨	一、三六八	一一・三四・〇	同	二一	浦賀船渠會社	
	村雨	一、三六八	一一・三四・〇	同	二一	藤永田造船所	
	夕立	一、三六八	一一・三四・〇	同	二一	佐世保工廠	
	春雨	一、三六八	一一・三四・〇	同	二一	舞鶴工作部	
	五月雨	一、三六八	一一・三四・〇	同	二一	浦賀船渠會社	
	江風	一、三六八	一二・三四・〇	同	二二	藤永田造船所	
	海風	一、三六八	一二・三四・〇	同	二二	舞鶴工作部	
	山風	一、三六九	一二・三四・〇	同	二二	浦賀船渠會社	
	涼風	一、三六八	一二・三四・〇	同	二二	同	
	朝潮	一、八〇〇	一二・三四・〇	二・七糎六	二二	佐世保工廠	
	荒潮	—	—	—	—	神戸川崎造船所	
	滿潮	—	—	—	—	藤永田造船所	
	夏雲	—	一二・三四・〇	二・七糎六	二二	佐世保工廠	

二等驅逐艦

大潮	—	二四・〇	一二・七糎六	舞鶴工作部			
朝雲	—	二四・〇	—	舞鶴工作部			
山雲	—	二四・〇	—	藤永田造船所			
峯雲	—	二四・〇	—	藤永田造船所			
霰	—	二四・〇	—	浦賀船渠會社			
霞	—	二四・〇	—	浦賀船渠會社			
一等驅逐艦 計八十五隻(内未成一八隻)							
既成艦 排水量計(基準) 九五、四七九							
桃	七五五	大正 五	三一・五	三糎三	同	佐世保工廠	
樫	七五五	六	三一・五	同	同	舞鶴工作部	
檜	七五五	六	三一・五	同	同	同	
柳	七五五	六	三一・五	同	同	佐世保工廠	
梨	七七〇	八	三一・五	同	同	神戸川崎造船所	
竹	七七〇	八	三一・五	同	同	同	
梶	七七〇	九	三一・五	同	同	横須賀工廠	
楡	七七〇	九	三一・五	同	同	呉工廠	
栗	七七〇	九	三一・五	同	同	同	
柾	七七〇	九	三一・五	同	同	石川島造船所	
柿	七七〇	九	三一・五	同	同	浦賀船渠會社	
菊	七七〇	九	三一・五	同	同	神戸川崎造船所	
葵	七七〇	九	三一・五	同	同	同	
萩	七七〇	一〇	三一・五	同	同	浦賀船渠會社	
薄	七七〇	一〇	三一・五	同	同	石川島造船所	
藤	七七〇	一〇	三一・五	同	同	藤永田造船所	
蔦	七七〇	一〇	三一・五	同	同	神戸川崎造船所	

艦

葦	七七〇	一〇	三一・五	同	同	神戸川崎造船所	
菱	七七〇	一一	三一・五	同	同	浦賀船渠會社	
蓼	七七〇	一一	三一・五	同	同	藤永田造船所	
葦	七七〇	一一	三一・五	同	同	石川島造船所	
蓮	七七〇	一一	三一・五	同	同	浦賀船渠會社	
蓬	七七〇	一一	三一・一四	同	同	石川島造船所	
若竹	八二〇	一一	三一・五	同	同	神戸川崎造船所	
呉竹	八二〇	一一	三一・五	同	同	同	
芙蓉	八二〇	一二	三一・五	同	同	藤永田造船所	
朝顔	八二〇	一二	三一・五	同	同	石川島造船所	
刈萱	八二〇	一二	三一・五	同	同	藤永田造船所	
早苗	八二〇	一二	三一・五	同	同	浦賀船渠會社	
夕顔	八二〇	一二	三一・一四	同	同	石川島造船所	
二等驅逐艦 計三十隻 排水量(基準) 三三、三〇							
潜水艦							
艦名	排水量(基準)	竣工	速力	發射管	水上砲	製造所	
伊號第一	一、九五五	順大正一五	一七・〇	二節	六	神戸川崎造船所	
伊號第二	一、九五五	一五	一七・〇	二	六	同	
伊號第三	一、九五五	五	一七・〇	二	六	同	
伊號第四	一、九五五	昭和四	一七・〇	二	六	同	
伊號第五	一、九五五	七	一七・〇	一	六	同	
伊號第六	一、九〇〇	一〇	一七・〇	一	六	同	
伊號第七	一、九五〇	—	一七・〇	二	六	呉工廠	
伊號第八	一、九五〇	一	一七・〇	二	六	神戸川崎造船所	
伊號第二十一	一、一四二	一	一四・〇	一	四	同	

一等潜水艦

伊號第二十二	一、一四二	二	一四・〇	一	四	同	
伊號第二十三	一、一四三	三	一四・〇	一	四	同	
伊號第二十四	一、一四三	大正一三	一七・〇	一	四	呉工廠	
伊號第五十一	一、三九〇	一四	一九・〇	一	八	同	
伊號第五十二	一、三九〇	一四	一九・〇	一	八	同	
伊號第五十三	一、六三五	昭和二	一九・〇	一	八	佐世保工廠	
伊號第五十四	一、六三五	二	一九・〇	一	八	同	
伊號第五十五	一、六三五	二	一九・〇	一	八	呉工廠	
伊號第五十六	一、六三五	四	一九・〇	一	八	同	
伊號第五十七	一、六三五	四	一九・〇	一	八	同	
伊號第五十八	一、六三五	三	一九・〇	一	八	横須賀工廠	
伊號第五十九	一、六三五	五	一九・〇	一	八	佐世保工廠	
伊號第六十	一、六三五	四	一九・〇	一	八	三菱神戸造船所	
伊號第六十一	一、六三五	五	一九・〇	一	八	同	
伊號第六十二	一、六三五	三	一九・〇	一	八	同	
伊號第六十三	一、六三五	五	一九・〇	一	八	同	
伊號第六十四	一、六三五	七	一九・〇	一	六	同	
伊號第六十五	一、六三八	七	一九・〇	一	六	佐世保工廠	
伊號第六十六	一、六三八	七	一九・〇	一	六	三菱神戸造船所	
伊號第六十七	一、六三八	七	一九・〇	一	六	呉工廠	
伊號第六十八	一、四〇〇	九	二〇・〇	一	六	三菱神戸造船所	
伊號第六十九	一、四〇〇	一〇	二〇・〇	一	六	佐世保工廠	
伊號第七十	一、四〇〇	一〇	二〇・〇	一	六	神戸川崎造船所	
伊號第七十一	一、四〇〇	一〇	二〇・〇	一	六	三菱神戸造船所	
伊號第七十二	一、四〇〇	—	二〇・〇	一	六	神戸川崎造船所	
伊號第七十三	一、四〇〇	—	二〇・〇	一	六	同	
伊號第七十四	一、四〇〇	—	二〇・〇	一	六	佐世保工廠	
伊號第七十五	一、四〇〇	—	二〇・〇	一	六	三菱神戸造船所	
一等潜水艦 計三十七隻(内未成六隻)							
既成艦 排水量計(基準) 四九、一五七							
呂號第二十六	七四六	大正一二	一六・〇	一	四	佐世保工廠	
呂號第二十七	七四六	一三	一六・〇	一	四	横須賀工廠	
呂號第二十八	七四六	一三	一六・〇	一	四	佐世保工廠	
呂號第二十九	七四六	一三	一六・〇	一	四	神戸川崎造船所	
呂號第三十	六五五	一三	一六・〇	一	四	同	
呂號第三十一	六五五	昭和二	一六・〇	一	四	同	
呂號第三十二	七〇〇	大正一三	一六・〇	一	四	同	
呂號第三十三	七〇〇	昭和一〇	一七・〇	一	四	呉工廠	
呂號第三十四	八九四	大正九	一七・〇	一	四	三菱神戸造船所	
呂號第五十一	八九二	一〇	一七・〇	一	四	同	
呂號第五十二	八九二	一〇	一七・〇	一	六	同	
呂號第五十三	八九二	一〇	一七・〇	一	六	同	
呂號第五十四	八九二	一〇	一七・〇	一	六	同	
呂號第五十五	八九二	一〇	一七・〇	一	六	同	
呂號第五十六	八九二	一〇	一七・〇	一	六	同	
呂號第五十七	八八九	一一	一七・〇	一	六	同	
呂號第五十八	八八九	一一	一七・〇	一	六	同	
呂號第五十九	八八九	一一	一七・〇	一	六	同	
呂號第六十	九八八	一一	一七・〇	一	六	同	
呂號第六十一	九八八	一一	一七・〇	一	六	同	
呂號第六十二	九八八	一二	一六・〇	一	六	同	
呂號第六十三	九八八	一二	一六・〇	一	六	同	
呂號第六十四	九八八	一四	一六・〇	一	六	同	
呂號第六十五	九八八	一五	一六・〇	一	六	同	

二等潜水艦

伊號第七十四	一、四〇〇	—	二〇・〇	一	六	佐世保工廠	
伊號第七十五	一、四〇〇	—	二〇・〇	一	六	三菱神戸造船所	

呂號第六六	九八八	昭和二	一六・〇	一	六 同
呂號第六七	九八八	大正一五	一六・〇	一	六 同
呂號第六八	九八八	一四	一六・〇	一	六 同
二等潜水艦	計二十五隻(内未成一隻)		既成艦	排水量計	
(基準) 二、九二七					

水雷艦

艦名	排水量(基準)	竣工	速力	備砲	發射管	製造所
千鳥	五三七	昭和八	二六・〇	三糎三	二	舞鶴工作部
眞鶴	五三七	九	二六・〇	同	二	藤永田造船所
友鶴	五三七	九	二六・〇	同	二	舞鶴工作部
初雁	五三七	九	二六・〇	同	二	藤永田造船所
鴻	五九五	一	二六・〇	同	三	舞鶴工作部
鴨	五九五	一	二六・〇	同	三	石川島造船所
隼	五九五	二	二六・〇	同	三	横濱船渠會社
鵠	五九五	二	二六・〇	同	三	大阪鐵工所
雉		一				三井玉工場
雁		一				横濱船渠會社
鷺		一				播磨造船所
鳩		一				石川島造船所
水雷艇	計十二(隻未完成八隻)		既成艦	排水量	計(基準)	二一〇八

掃海艦

艦名	排水量(基準)	竣工	速力	備砲	製造所
第一號	六三五	大正一二	二〇・〇	一二糎二、八糎高角一	播磨造船工場
第二號	六三五	一三	二〇・〇	同	玉造船工場
第三號	六三五	一三	二〇・〇	同	大阪鐵工所
第四號	六三五	一四	二〇・〇	同	佐世保工廠
第五號	六三五	昭和四	二〇・〇	同	玉造船工場
第六號	六三五	四	二〇・〇	同	大阪鐵工所
第十三號	四二	昭和八	二〇・〇	一二糎二	藤永田造船所
第十四號	四九二	八	二〇・〇	同	大阪鐵工所
第十五號	四九二	九	二〇・〇	同	藤永田造船所
第十六號	四九二	九	二〇・〇	同	玉造船工場
第十七號	四九二	一一	一九・〇	同	大阪鐵工所
第十八號	四九二	一一	一九・〇	同	玉造船工場
掃海十二隻	排水量計(基準)		六、六四二		

特務艦

艦種	艦名	排水量(基準)	竣工	速力	備砲	製造所
練習	× 朝日	一八、四一	明治三三	一八・二	節	英國ジョン ブラウン社
特務艦						
同	× 數島	一一、七五	三三	一八・六		英國テームズ社
同	富士	九、一七九	三〇	一八・二五		英國テームズ社
標的艦	× 攝津	一六、一三〇	四五	二一・〇		吳工廠
測量艦	勝州	二、〇八〇	一〇・三	八糎二		獨國
運送艦	洲埼	八、八〇〇	大正七	一四・〇	一二糎二、八糎高角二	橫須賀工廠
同	屋戸	八、一二五	七	一三・五	一二糎二	三菱神戸造船所
同	野島	八、一二五	八	一三・五	同	同

同	知床	一四、〇五〇	九	一三・〇	八糎高角二、三糎三	神戸川崎造船所
同	襟裳	一四、〇五〇	九	一三・〇	同	同
同	佐多	一四、〇五〇	一〇	一三・〇	一四糎二、八糎高角二	橫濱船渠會社
同	鶴見	一四、〇五〇	一一	一三・〇	同	大阪鐵工所
同	尻矢	一四、〇五〇	一一	一三・〇	同	橫濱船渠會社
同	石廊	一四、〇五〇	一一	一三・〇	同	大阪鐵工所
同	隱戸	一四、〇五〇	一二	一三・〇	同	神戸川崎造船所
同	早鞆	一四、〇五〇	一二	一三・〇	同	吳工廠
同	鳴戸	一四、〇五〇	一三	一三・〇	同	橫須賀工廠
同	間宮	一五、八三〇	一三	一四・〇	同	神戸川崎造船所
同	剣埼	一三、〇〇〇	一	一九・〇	一二〇七糎四	橫須賀工廠
同	高崎	一二、〇〇〇	一	一九・〇	同	同
同	大泊	二、三〇〇	一〇	一三・〇	八糎一	神戸川崎造船所
碎氷艦	合計二十一隻		既成艦排水量計(基準)		三九、九三五	
特務艦	×符は華府條約の規定により戰闘任務に堪へざるものとなし保有せるもの。					
(備考)						

太平洋に於ける列國海軍力一覽表

(昭和十一年九月末現在)

國	艦種	艦名	排水量	速力	主砲
支那	ケンウイック	巡	九、八五〇	三一・五	二〇糎八門
	バーウイック	同	八、七五〇	三一・五	同
	ドーセットシヤー	同	九、九〇〇	三二・五	同
	コーンウオール	同	九、九〇〇	三一・五	同
	ケープタウン	同	四、二九〇	二九・〇	一五糎五門

英國

艦隊	艦種	艦名	排水量	速力	主砲	
地中海軍	驅逐艦隊	ハーミース	一四、〇〇〇	二五・〇	一四糎六門	
		河用砲艦スループ	一〇隻	二五・〇	潜水艦	一五隻
			一八隻		潜水母艦	一隻
			五隻		特務艦	數隻
東印度艦隊		ノーフオーク	九、八五〇	三二・五	二〇糎八門	
		エンタープライス	七、五八〇	三二・〇	一五糎七門	
					一五糎四門	
					一五糎七門	
		エメラルド	七、五八〇	三二・〇	特務艦	
		スループ	四隻		二〇糎八門	
濠洲海軍		カンバーラ	九、八五〇	三二・五	同	
		サセックス	九、七五〇	三二・五	一五糎八門	
		シドニー	六、八三〇	三二・五	同	
		アデレード	五、一〇〇	三二・五	一五糎九門	
		アルバトロス	四、八〇〇	二一・〇	一二糎四門	
		水上機母艦	一〇隻			
	驅逐艦隊	スループ	一隻		測量艦	一隻
					特務艦	一隻
新西蘭艦隊		ジユニージン	四、八五〇	二九・〇	一五糎六門	
		アチルス	七、〇三〇	二九・〇	一五糎八門	
		フイロメール	二、五七五	母艦兼練習艦		
		スループ	二隻		其の他	一隻
印度軍	スループ		五隻		巡邏艇	一隻
海軍	測量艦		一隻		トローラ	一隻
	母艦		一隻		母艦	二隻
加奈陀海軍	驅逐艦	掃海艇	四隻			
			三隻			

米國

太平洋方面配備艦隊
- 戰艦 一五隻 潛水母艦 四隻
- A級巡洋艦 一六隻 潛水救難艦 一隻
- B級巡洋艦 九隻 潛水艦 三一隻
- 航空母艦 四隻 敷設艦 一隻
- 補助航空母艦 八隻 輕敷設艦 一隻
- 逐母艦 五隻 掃海艦 九隻
- （註）上記は就役中のもののみを示す。合衆國艦隊及太平洋方面局地配備艦船 特務艦 八隻

亞細亞艦隊
- 砲艦 オーガスタ 巡 一隻 九、〇五〇 掃海艦 一隻 三二・七 二〇糎九門
- ヨツト 一一隻 驅逐艦 一一隻
- 潛水救難艦 一三隻 潛水母艦 二隻
- 逐艦 一六隻 補助航空母艦 二隻
- 特務艦 一隻

佛國

- 砲艦 ラモーピスク 輕巡 七、二四九 測量艦 一隻 一五・五糎八門
- 河用砲艦 一八隻 一〇隻 帆船 三隻
- 潛水艦 二隻 一隻
- （註）スループ型は凡て砲艦として計上

伊國

- 砲艦 一隻 河用砲艦 一隻

和蘭

- ジヤヴア 巡 六、六七〇 三一〇 一五糎一〇門
- スマトラ 同 六、六七〇 三一〇 同 一六隻
- 驅逐艦 八隻 潛水艦 一六隻
- 掃海艦 四隻 砲艦 二隻
- 其の他少艇 一〇隻

ソ聯邦

- 潛水艦 特務氷艦 約四〇隻 一二隻 驅逐艇 約六九、九八九噸
- 砕氷艦 四隻 驅逐艦 一七隻
- 河用航空母艦敷設艦 二隻 河用砲艦 一六隻
- 潛水母艦 一三隻 河用特務艦 一隻
- 補助航空母艦 六隻 潛水母艦 一隻
- 特務艦 一隻

葡國

- 巡洋艦 一隻 河用砲艦 一隻

羅馬尼亞

- 砲艦 六隻 驅逐艦 三隻 假装砲艦 四隻
- 海防艦 一隻 假装砲艦 二隻
- 水雷艇 六隻 其の他一七隻 二〇糎二門 三・〇 二、九九七噸

中華民國

- 海容 巡 四、三〇〇 二〇糎二門 三・〇
- 海籌 同 二、九五二 一五糎三門 一九・五
- 海琛 同 二、九五〇 同 一九・五
- 海瑞 同 二、七五〇 一五糎二門 二〇・七
- 海和 同 二、六〇〇 同 二〇・〇
- 寧海 同 二、四〇〇 一四糎六門 二三・〇
- 平海 同 二、四〇〇 同 二三・〇
- 通濟 同 一、九〇〇 一五糎二門 一三・〇
- 驅逐艦 二隻 水雷艇 八隻
- 假砲艦 二八隻 河用砲艦 二三隻
- 假測量艦 一隻 假巡洋艦 一隻
- 砲艦 二二隻 運送艦 六隻
- 合計 一〇六隻 約六九、九八九噸
- 砲艦合計 四七隻 假装砲艦 四隻

滿洲國

- 砲艦 一五隻

智利國

- 驅逐艦 一一隻 二七、〇〇〇 三六糎一〇門
- スループ 一一隻 海防 二、九二〇 一八・〇 二四糎四門
- 潛水母艦 九隻 巡 八、五〇〇 二一・五 二〇糎四門
- 一隻 同 四、四三〇 二〇・五 二〇糎二門
- 潛水母艦 一隻 同 四、五〇〇 二四・〇 五糎二門

秘露

- アルミラント・グラウ コロネル・ボログネジイ 驅逐艦 三隻 巡 三、一〇〇 二四・〇 一五糎二門
- 潛水母艦 四隻 同 三、二〇〇 二四・〇 同
- 給油艦 一隻 河用砲艦 五隻
- 運送艦 一隻 給油艦 一隻
- 砲艦 二隻 運送艦 一隻

墨國

- 沿岸警備艇 六隻 沿岸警備艇 七隻
- （×）△印建造中のものも含む 砲艦 二隻
- 逐艦 二隻 沿岸警備艇 二隻
- 五隻

哥國

- 驅逐艦 砲艦 二隻
- 河用砲艦 逐艦 三隻

列國主力艦一覽

（昭和十一年九月三十日）

國名	艦名	排水量（基準）噸	速力 節	主砲
日本	長門	三二、九九〇	二六・〇	四十糎八門
	陸奥	三三、八〇〇	二六・〇	同
英國	金剛	三二、七五〇	二六・〇	同
	榛名	二九、三五〇	二六・〇	同
	霧島	二九、三五〇	二六・〇	同
	×既成九隻（二七二、〇五〇噸）			
	建造中なし			
米國	ウエストヴアージニア	三二、八〇〇	二一・〇	同
	×既成十五隻（四六四、三〇〇噸）			
	建造中なし（以下五戰艦を改裝せんとし尙產業復興費に依りテネツシー以下五戰艦を改裝せんとし			
	テネツシー	三三、〇〇〇	二一・〇	同
	カリフオルニア	三二、三〇〇	二一・〇	同
	メリーランド	三二、五〇〇	二一・〇	同
	コロラド	三二、五〇〇	二一・〇	同
	アーカンサス	二六、一〇〇	二一・〇	同
	テキサス	二七、〇〇〇	二〇・〇	同
	ニユーヨーク	二七、〇〇〇	二〇・〇	同
	ネヴアダ	二九、〇〇〇	二〇・〇	同
	オクラホマ	二九、〇〇〇	二一・〇	同
	ペンシルバニア	三二、一〇〇	二一・〇	同
	リゾナ	三一、六〇〇	二一・〇	同
	ミシシツピー	三二、〇〇〇	二一・〇	同
	アイダホ	三二、四〇〇	二一・〇	同
	ニユーメキシコ	三二、四〇〇	二一・〇	同

つゝあり

右の外倫敦條約の結果戦艦より標的艦又は練習艦に改造せる二隻を有す

〔英國〕

	艦名	排水量	速力	主砲
戦艦	クイーンエリザベス	三一、一〇〇	二五・〇	三十八糎八門
	ワースパイト	三一、一〇〇	二五・〇	同
	バーラム	三一、一〇〇	二五・〇	同
	ヴアリアント	三一、一〇〇	二五・〇	同
	マラヤ	三一、一〇〇	二五・〇	同
	リヴエンジ	二九、一五〇	二三・〇	同
	ローヤルサバリン	二九、一五〇	二三・〇	同
	ローヤルオーク	二九、一五〇	二三・〇	同
	レゾリユーション	二九、一五〇	二三・〇	同
	ラミリーズ	二九、一五〇	二三・〇	同
	ネルソン	三三、五〇〇	二三・〇	四十糎九門
	ロドネー	三三、九〇〇	二三・〇	同
	リプルス	三二、〇〇〇	三一・五	三十八糎六門
	リナウン	三二、〇〇〇	三一・五	同
	フツド	四二、一〇〇	三一・〇	三十八糎八門

×既成十五隻（四七四、七五〇噸）建造中なし

上記の倫敦條約の結果戦艦より砲術練習艦に改造せかれし一隻を有す

〔伊國〕

	艦名	排水量	速力	主砲
戦艦	ジユーリオ・チユザーレ	二一、八一八	二一・五	三十糎半十三門
	コンテ・デイ・カヴール	二一、六〇四	二二・〇	同
	カイオ・デユリオ	二一、五五五	二一・三	同
	アンドレア・ドリア	二一、五五五	二一・〇	同

×既成四隻（八六、五三二噸）建造中二隻（七〇、〇〇〇噸）

〔佛國〕

	艦名	排水量	速力	主砲
戦艦	コンドルセ	一七、五九七	一九・七	三十糎半四門
	デイドロ	一七、五九七	一九・八	同
	ヴオルテール	一七、五九七	二〇・六	同
	ジヤンバール	二二、一八九	二三・〇	三十糎半十二門
	クールベー	二二、一八九	二〇・八	同
	パリー	二二、一八九	二一・四	同
	プロヴアンス	二二、一八九	二一・五	三十四糎十門
	ブレターニユ	二二、一八九	二〇・五	同
	ロレーヌ	二二、一八九	二一・四	同
	ダンケルク	二六、五〇〇	三〇・〇	三十三糎八門
	ストラブルグ	二六、五〇〇	三〇・〇	同

×既成九隻（一八五、九三五噸）三隻建造中（八八、〇〇〇噸）

〔獨國〕

	艦名	排水量	速力	主砲
戦艦	ハノーベル	一三、二〇〇	一八・〇	二十八糎四門
	シユレジエン	一三、二〇〇	一八・五	同
	シユレスウイツヒホルスタイン	一三、二〇〇	一九・〇	同
	ドイツチエランド	一〇、〇〇〇	二六・〇	二十八糎六門
	アドミラル・シエーア	一〇、〇〇〇	二六・〇	同
	アドミラル・グラフ・シユペー	一〇、〇〇〇	二六・〇	同
	シヤルンホルスト	二六、〇〇〇	三〇・〇	二十八糎九門
	グナイゼナウ	二六、〇〇〇	三〇・〇	同

×既成四隻（九三、四八〇噸）建造中なし

〔露國〕

	艦名	排水量	速力	主砲
戦艦	パリスカヤ・コンミユナ	二三、二七〇	二三・〇	三〇糎十二門
	オクラブリスカヤ・レボリユーチヤ	二三、二七〇	二三・〇	同
	マラー	二三、二七〇	二三・〇	同
	ミカエル・フランゼ	二三、二七〇	二三・〇	同

×既成四隻（九三、四八〇噸）建造中なし

列國航空母艦一覧

	艦名	排水量	速力
日	加賀	二六、九〇〇	二三・〇
	赤城	二六、九〇〇	二八・〇
	鳳翔	七、四七〇	二五・〇
	龍驤	七、一〇〇	二五・〇
	蒼龍	一〇、〇五〇	三〇・〇（建造中）
	▲能登呂	一四、〇五〇	一二・〇 水上機母艦
	▲神威	一七、〇〇〇	一五・〇 水上機母艦
米	サラトガ	三三、〇〇〇	三三・〇
	レキシントン	三三、〇〇〇	三四・〇
	ラングレー	一一、五〇〇	一五・〇
	レンジヤー	一四、五〇〇	三〇・〇
	ヨークタウン（建造中）	二〇、〇一〇	三二・〇
	エンタープライズ（同）	二〇、〇〇〇	三二・〇
	▲ライト	一一、五〇〇	一五・〇
	▲パトカ	一六、八〇〇	一〇・八七

以下補助航空母艦として現に使用中のもの及び其の設備を有するもの

艦名	排水量	速力
▲サントハイパー	八四〇	一四・〇
▲テール	八四〇	一四・〇
▲ペリカン	八四〇	一四・〇
▲ラツプウイング	八四〇	一四・〇
▲スワン	八四〇	一四・〇
▲スワロー	八四〇	一四・〇
▲ガンネツト	八四〇	一四・〇
▲キングフツシヤー	八四〇	一四・〇
▲アボセツト	八四〇	一四・〇
▲ヘロン	八四〇	一三・七
▲スラツシ	八四〇	一四・〇
▲アルゴンン	一一、一〇〇	一五・〇
▲キユーヤマ	一四、五〇〇	一四・〇
▲ブラゾス	一四、八〇〇	一四・〇
▲ネツチエス	一四、八〇〇	一四・〇
▲オーラ	四、二〇〇	一〇・〇

	艦名	排水量	速力
英	イーグル	二二、六〇〇	二四・〇
	フユーリアス	二二、四五〇	三一・〇
	カレッヂアス	二二、五〇〇	三〇・五
	グロリアス	二二、五〇〇	三〇・五
	アーガス	一四、四五〇	二〇・二
	ハーミス	一〇、八五〇	二五・〇
	▲アルバトロス	四、八〇〇	二一・〇
	▲ペガサス	六、九〇〇	一一・〇
	アークロイヤル	二二、〇〇〇	—
佛	ベアルン	二二、一四六	二一・五
	▲コンマンダンテスト	一〇、〇〇〇	二〇・五
伊	▲ギウスプミラグリラ	四、八八二	二一・五
獨	未命名	一九、二五〇	—
蘇	ツラスヌイモリアル	七、六〇〇	一八・〇

註▲印は軍備制限條約規定の航空母艦に該當せざるものなり

五大海軍國現有勢力（制限内艦船）比較表（基準排水量）

昭和十一年九月三十日調

艦種	國別	條約規定量 隻數	條約規定量 噸數	艦齡(條約規定)內 隻數	艦齡(條約規定)內 噸數	艦齡超過 隻數	艦齡超過 噸數	既成艦計 隻數	既成艦計 噸數	建造中 隻數	建造中 噸數	未起工 隻數	未起工 噸數
主力艦	日	九	三一五,〇〇〇	九	二七二,〇七〇	—	—	九	二七二,〇七〇	—	—	—	—
	米	一五	五二五,〇〇〇	一五	四六四,三〇〇	—	—	一五	四六四,三〇〇	—	—	二	七〇,〇〇〇
	英	一五	五二五,〇〇〇	一五	四七四,七五〇	—	—	一五	四七四,七五〇	—	—	二	七〇,〇〇〇
	佛	△	一七五,〇〇〇	六(三)	一三三,一三四(五二,七九一)	—	—	九	一八五,九二五	三	八八,〇〇〇	一	三五,〇〇〇
	伊	△	一七五,〇〇〇	四	八六,五三二	—	—	四	八六,五三二	二	七〇,〇〇〇	—	—
航空母艦	日	△	八一,〇〇〇	四	六八,三七〇	—	—	四	六八,三七〇	二	三〇,一〇〇	—	—
	米	△	一三五,〇〇〇	三	八〇,五〇〇	一	一一,五〇〇	四	九二,〇〇〇	三	五四,五〇〇	—	—
	英	△	一三五,〇〇〇	六	一一五,三五〇	—	—	六	一一五,三五〇	一	二三,〇〇〇	二	四四,〇〇〇
	佛	△	六〇,〇〇〇	一	二二,一四六	—	—	一	二二,一四六	—	—	—	—
	伊	△	六〇,〇〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
甲級巡洋艦	日	一二	一〇八,四〇〇	一二	一〇七,八〇〇	—	—	一二	一〇七,八〇〇	—	—	—	—
	米	一八	一八〇,〇〇〇	一六	一五一,八〇〇	—	—	一五	一五一,八〇〇	二	二〇,〇〇〇	—	—
	英	一五	一四六,八〇〇	一五	一四三,九七〇	—	—	一五	一四三,九七〇	—	—	—	—
	佛	△	△	七	七〇,〇〇〇	三	三五,九三三	一〇	一〇五,九三三	—	—	—	—
	伊	△	△	七	七〇,〇〇〇	三	二七,三四二	一〇	九七,三四二	—	—	—	—
乙級巡洋艦	日	△	一〇〇,四五〇	一六	八六,八九五	五	二〇,三六〇	二一	一〇七,二五五	四	三三,九五〇	—	—
	米	△	一四三,五〇〇	一〇	七〇,五〇〇	—	—	一〇	七〇,五〇〇	七	七〇,〇〇〇	二	一七,一〇〇
	英	△	一九二,二〇〇	二〇	一三〇,二三〇	一九	九四,八三六	三九	二二五,〇六六	九	七七,八二〇	七	四三,〇〇〇
	佛	△	△	八	五四,一〇二	一	四,七二三	九	五八,八二五	四	三〇,四〇〇	—	—
	伊	△	△	一〇	五五,五八八	七	二二,三八六	一七	七七,九七四	二	一五,七四八	—	—
驅逐艦	日	△	一〇五,五〇〇	六四	八八,一七九	三三	三〇,六九〇	九七	一一八,八六九	一三	一八,四四四	五	七,五〇〇
	米	△	一五〇,〇〇〇	一六	二四,三八五	一八二	二〇六,一三〇	一九八	二三〇,五一五	三六	五七,一五〇	四五	八四,六〇〇
	英	△	一五〇,〇〇〇	六五	八八,九九九	一一三	一三一,〇七〇	一七八	二二〇,〇六九	二九	四四,八六〇	一四	六八,九〇〇
	佛	△	△	六一	一一〇,四四〇	一四	一〇,八〇〇	七五	一二一,二四〇	一三	一五,九六四	三	五,三一六
	伊	△	△	五一	六一,五五八	四〇	三一,七七五	九一	九三,三三三	一九	一七,七八五	—	—
水上補助艦(巡驅)(計)	日	△	三一四,三五〇	九二	二八二,八七四	三八	五一,〇五〇	一三〇	三三三,九二四	一七	五二,三九四	五	七,五〇〇
	米	△	四七三,五〇〇	四二	二四六,六八五	一八二	二〇六,一三〇	二二五	四五二,八一五	四一	一四七,一五〇	四七	八四,六〇〇
	英	△	四八九,〇〇〇	一〇〇	三六三,一九九	一三二	二二五,九〇六	二三二	五八九,一〇五	三八	一二二,六八〇	二一	六八,九〇〇
	佛	△	△	七六	二三四,五四二	一八	五一,四五六	九四	二八五,九九八	一七	四六,三六四	三	五,三一六
	伊	△	△	六八	一八七,一四六	五〇	八一,五〇三	一一八	二六八,六四九	二一	三三,五三三	—	—
潛水艦	日	△	五二,七〇〇	四五	六一,二一八	一〇	八,八六六	五五	七〇,〇八四	七	一〇,二〇〇	—	—
	米	△	五二,七〇〇	二八	三一,四九〇	五九	三八,九九〇	八七	七〇,四八〇	一二	一六,六七〇	一四	二〇,三〇〇
	英	△	五二,七〇〇	三八	四六,九六九	一五	八,五〇五	五三	五五,四七四	七	七,六六五	八	五,七〇〇
	佛	△	△	七四	七〇,九四二	九	七,一三二	八三	七八,〇六三	五	八,三三一	四	三,三七八
	伊	△	△	五四	四四,六三七	一〇	四,三五二	六四	四八,九八七	一四	九,〇七四	—	—
總計	日	△	七六三,〇五〇	一五〇	六八四,五三三	四八	五九,九一六	一九八	七四四,四四八	二六	八二,六九四	五	七,五〇〇
	米	△	一,一八六,二〇〇	八八	八二六,九七五	二四二	二五六,六二〇	三三〇	一,〇八三,五九一	六〇	二五八,三三〇	六三	一七四,九〇〇
	英	△	一,二〇一,七〇〇	一五九	一,〇〇〇,二六八	一四七	二三四,四一一	三〇六	一,二三四,六七九	四六	一五三,三四五	三三	一八八,六〇〇
	佛	△	△	一六〇	五一三,五五五	二七	五八,三六七	一八七	五七二,一三三	二五	一二九,六九五	八	四三,六九四
	伊	△	△	一二六	三一八,三一五	六〇	八五,八五三	一八六	四〇四,一六八	三七	一一二,六〇七	—	—

備考　一、條約規定欄中△印は制限なきものなり。二、佛主力艦括弧内は華府條約に依り代艦を建造し得ざるものなり。三、英國七・五吋巡洋艦「ホーキンス」級四隻は乙級巡洋艦中に計上せり。四、佛驅逐艦建造中には「エスコーター」一二隻を含む。五、驅逐艦未起工中には護衛通報艦四隻を含む。六、艦種艦齡次の如し主力艦二六年航空母艦甲級巡洋艦各二〇年潛水艦一三年乙級巡洋艦及驅逐艦は倫敦條約規定に依る。七、未起工欄には議會の協贊を經たるもののみを掲ぐ。

無條約時代來る

過去十五年間、帝國海軍軍備を拘束し來つた華府及倫敦兩海軍々縮條約も昨十一年末を以て其の効力を解消し、二三ケ國の一部協定を除けば今や全世界は海軍力制限に關しては全くの無條約時代に還元した。抑々軍縮比率條約は偶然の現有兵力を基礎として制定せられたものである點に於て既に現情に即せざる不合理なる條約と化したることを指摘して、我國は極力列國の差別的觀念是正を熱望希求し來つたものであるが、一九三四年の倫敦豫備交渉に於ても一九三五年の倫敦軍縮會議に於ても、帝國の此の公正妥當なる主張は列國の諒解する處とならず、已を得ず昭和十一年一月十五日帝國は會議より脫退するの餘儀なきに至つたものである。

同會議は日本の脫退後、更に伊太利の脫退に遇ひ、結局英、米、佛三國會議となり海軍兵力の質的制限及建艦通報並に情報交換等を規定したが、帝國は既に我が主張の原則が容れられず會議を脫退したる以上、此の規定に何等拘束されるものにあらざる旨を當時明白に聲明した。從つて帝國に關する限り軍縮條約の制限と云ふものは何等存在せず、純乎たる無條約時代に還元したのである。

吾人は十五年に亘る不公正なる桎梏となつた居た華府、倫敦兩條約の廢墟の姿を偲ぶ爲めに敢て右兩條約海軍制限一覽表を參考資料として止め置く所以である。

華府條約海軍制限一覽

國別	主力艦合計總排水量(噸)	航空母艦合計總排水量(噸)	航空母艦	備砲
日本	三一五、〇〇〇(九隻)	八一、〇〇〇	各艦基準排水量二七、〇〇〇噸を超ゆるを得ず。但し(一)合計噸數の六粍)を超ゆるを得ず。備砲口徑一六吋(四〇	一〇、〇〇〇噸又は之に達せざる航空母艦の備砲は口徑六・一吋を超ゆるを得ず
英	五五五、〇〇〇(十五隻)	一三五、〇〇〇		
吉利	五五五、〇〇〇(十五隻)	一三五、〇〇〇		
北米合衆國	五五五、〇〇〇(十五隻)	一三五、〇〇〇		
佛蘭西	一七五、〇〇〇(隻數任意)	六〇、〇〇〇		
伊太利	一七五、〇〇〇(隻數任意)	六〇、〇〇〇		

△主力艦　各艦基準排水量三五、〇〇〇噸を超ゆるを得ず。備砲口徑一六吋（四〇

△航空母艦　各艦基準排水量二七、〇〇〇噸を超ゆるを得ず。但し(一)合計噸數の二割を超ゆるを得ず　(二)口徑六吋を超ゆる備砲ある時は五吋を超ゆる砲數合計十門以內とす。但し噸數二七、〇〇〇噸以上の航空母艦に於ては八門以內とす。(三)航空機防禦用及口徑五吋以下の備砲は無制限。

△其の他の補助艦　合計總排水量制限なし。各艦基準排水量一〇、〇〇〇噸を超ゆるを得ず。備砲口徑八吋を超ゆるを得ず。

△條約有效期限　昭和十一年（一九三六年）十二月三十一日迄とす。

倫敦條約海軍制限一覽

△主力艦

日英米	現存艦中	九隻保有 一五隻保有 一五隻保有
佛伊	一九三六年迄に代艦七〇、〇〇〇噸宛を建艦し得。	

△航空母艦

日英米佛伊	各一基準排水量（噸）	二七、〇〇〇噸を超ゆるを得ず。一〇、〇〇〇噸を超えざる航空母艦を一隻に限り右の制限砲數內に含ましむ。

△甲級巡洋艦

日英米	合計排水量	一〇八、四〇〇噸
	基準排水量	一二隻 一四六、八〇〇噸 一五隻 一八〇、〇〇〇噸 一八隻
	備砲	一、八五〇噸を超ゆるもの。但し一、八五〇噸を超えざるも備砲六・一吋を超ゆるもの。

△乙級巡洋艦

日英米	合計排水量	一〇〇、四五〇噸
	基準排水量	一九二、八〇〇噸 一三、五〇〇噸
	備砲	一、八五〇噸を超ゆるもの。但し一、八五〇噸備砲五・一吋を超えざるも備砲五・砲を超ゆるもの。

佛伊	協定不成立無制限。	

△驅逐艦

日英米	合計排水量	一〇五、五〇〇噸
	基準排水量	一、八五〇噸 一五〇、〇〇〇噸
	備砲	一、八五〇噸を超ゆるを得ず。但し一、八五〇噸備砲六・一吋を超えざるも備砲六・一吋を超ゆるを得ず
佛伊	協定不成立無制限。	

△潛水艦

日英米	合計排水量	五二、七〇〇噸
	基準排水量	二、〇〇〇噸 三、七〇〇噸
	備砲	口徑五・一吋を超ゆるを得ず。但し二、〇〇〇噸を超ゆるを得ず各軍二隻を限り備砲口徑五・一吋を超ゆるを得ず
佛伊	協定不成立。	

條約有效期限　昭和十一年（一九三六年）十二月三十一日

航空

列國の航空界

英國

英國は世界大戰の苦き經驗から空軍を獨立し、空軍大臣の下に空軍次官を配し、參謀各局、補給研究局並に各種委員局も設け別に空軍軍事參議院の最高機關もある。本國は勿論海外植民地の空中防備を充實し、特に海外に於ける艦隊に對しては爆撃戰鬪機の配備に重點を置いてゐる、同國の空軍は百十六中隊あつて、これを晝間爆撃隊二十六、夜間爆撃隊十三、戰鬪隊二十二、陸軍協同隊二十、艦隊攻撃隊十、沿岸攻撃隊七、雷撃隊六、輸送及び偵察隊各五に編制されてゐる。

米國

米國は空軍の擴張、機體の進歩も發達に向つてゐることは素晴しい勢ひで、列國に覇を唱へてゐる、特に機體は新鋭機と逐次更新されつゝあり、合衆國本土の防空は主として陸軍航空兵團が統轄するところであるが、これがため全兵力の四分の一を東西海岸に配置してゐるばかりで、國內に於ける飛行場の如きも列國を凌駕し、また最近では空軍では大型機と、航續力に堪へる新鋭機が續々用ゐられ、空軍の擴充に努めてゐる。

佛國

佛國は航空省の創設以來空軍を獨立し、海洋氣象、農業氣象、山岳氣象等の氣象事務も管轄に含まれてゐる、そして軍事的にも航空器材に重點を置き、不斷の研究を怠らない、最近は三、四十噸の大型水上機も盛んに製作されつゝある。また航空省には航空大臣の下に總務局、經理豫算局、空軍參謀部、技術局、陸、海軍航空局、商業航空局、民間航空局及び航空通信部がある。斯かる機構の下に常に飛行機の裝備、武裝、戰略上の補充を怠らず、新しい機體の研究製作に邁進すると共に空軍の充實强化を圖つてゐる。

伊國

伊太利はムソリーニ首相が航空擴張を重視し、航空兵科はすべて航空最高委員會で鋭意研究施設に努め强大な空軍たらしめんと圖つてゐる。一九三七、八年度の航空豫

算に依つても航空費は十二億九萬リラで前年度に比し二億七千九百萬リラの增加である、この一事に見ても如何に空中に力を注がんとしつゝあることが窺はれる、殊に超重爆撃機の製作には一段と力を注ぎ、空軍獨立は集團や空軍諸學校に統制され、航空工業の如きも自給自足の途を立て機體の製作に躍進を續けてゐる、殊に最近では大型機の製作設計に鋭意研究されてゐる。

獨逸國

獨逸は歐洲大戰以來、隱忍十五年の雌伏から、一九三五年公然空軍再建の爆彈宣言をなし、いたく世界を驚倒せしめた、これに依つて航空は活潑となり全國を五空軍司令區に分け、同時に海軍航空隊も設置し、列國に劣らぬ空軍の擴充を圖つた、この航空兵力の再建方針から飛行機工場も適當に整理し、機體の發達進歩と設計に專念させるやうになり、大量製産のため全能力を發揮させることにした、現空軍勢力は爆撃機を主力として、これに追撃機又は戰闘機と偵察機とを配して編制されてゐる。

蘇聯邦

ソヴイエト聯邦は、その航空兵力は全く會得の知れぬものがある、世界のどの國よりも偉大な航空力を有するとも云はれるかと思ふと、或はそれ程でもあるまいと云はれてゐる、これぞ一流の祕密主義に依つて其の正體を知ることが難いからでもあらう然し航空に關する各種機關を設け獨自の航空科學に邁進してゐる、現在の中央液體力學研究所、科學發動機機關研究所等を設け、科學的研究を怠らない、空軍は五ヶ年計畫に依つて遂に擴充されつゝあることは爭はれない。その空軍勢力の如きも既に一九三六年の始めに於て百三十箇中隊、三千臺に擴張されてゐる。

日本

日本は、陸海軍に航空本部があり、民間は遞信省、航空局で監督してゐる、陸軍は軍事航空を統轄し、所澤、熊谷、下志津、明野、濱松に飛行學校があり、全國に飛行聯隊もある。それに氣球聯隊が屬してゐる。海軍には陸上部隊、海上部隊、航空戰隊、航空母艦があつて航空防禦に當つてゐる、海軍では昭和十一年七月から海軍航空本部令中に改正が加へられ施行されてゐる、また陸軍では昭和十一年八月から新たに航空兵團司令部を制定施行されることになつた。民間でも昭和十二年七月一日から滑空機の規則が公布され、滑空士に對する免狀制度が布かれることになつた。

各國からの訪日飛行（昭和十二年八月十五日現在）

國名	年度	操縱者	機體	發動機	發著地	飛行距離(粁)
伊國	大正九・五	フエラリン中尉 マシエロ中尉	ズヴアS・P・A二四〇馬力	プレゲー一九A二型ローレンルノー四五〇馬力	ローマ＝東京	一六、七〇〇
佛國	大正一三・六	ド・アジー大尉	ヴアルチユフ水陸兩用ネビヤライオン四五〇馬力		巴里＝所澤	二二、五〇〇
英國	大正一三・八	マクラレン少佐 プレダーレス中尉			倫敦＝霞ケ浦＝カムチヤツカ	二〇、五五八
米國	大正一三・八	マーチン少佐、スミス中尉、ネルツン中尉	ダグラス・リバライ四〇〇馬力	シヤトル＝日本＝シヤトル		四六、五六〇
亞爾然丁國	大正一三・一〇	ザンニ中尉、ベロー中尉	フオツカー水陸兩用ネビヤライオン四五〇馬力	アムステルダム＝霞ケ浦		一七、二六七
伊國	大正一四・九	デ・ビネード中佐 カンバニーニ氏	サボイア飛行艇ローレン四五〇馬力	伊太利＝霞ケ浦＝ローマ		五六、〇〇〇
蘇聯邦	大正一四・九	クロモウ氏 ナイデープ氏	R型リパティ四〇〇馬力	モスコー＝所澤		一〇、八五〇
丁抹國	大正一五・六	ホートベツト大尉	フオツカーC複葉ローレン四〇〇馬力	コペンハーゲン＝所澤＝コペンハーゲン		三一、七〇〇
波蘭國	大正一五・九	オルリンスキー中尉	ブレゲー一九A二型ローレン四五〇馬力	ワルソー＝所澤＝ワルソー		二〇、二八〇
米國	昭和二・八	ブロツク シエリー	スチンソン複葉ライト二二〇馬力	デトロイト＝紐育＝英國＝印度＝東京		二五、三八〇
チエツコ	昭和二・九	シエースカラ氏 マテータウフエル氏	エヌ一六型ローレン四五〇馬力	プラーグ＝所澤＝クラスノヤルスク(不時着)モスコー＝シベリア		一五、四〇〇
蘇聯邦	昭和二・九	シエスタコフ外一名	AM・T・三型R・三〇〇馬力 同右	＝東京＝シベリア＝モスコー＝東京＝シベリア＝モスコー		九、一〇〇 九、〇〇〇
佛國	昭和二・一〇	コスト氏 ル・ブリー氏	ブレゲー一九型イスパノ六〇〇馬力	巴里＝所澤＝巴里		五六、三九五
米國	昭和三・七	シービーテー・コリヤ大尉、ジヨン・エツチ・ミアース氏	フエヤチヤイルド型ワスプ四三〇馬力	紐育＝立川		一八、〇一五
獨逸	昭和三・一〇	フユネヘルト男 リンドネル氏 レンゲリツヒ氏	ユンカーW三三型同エル二五〇馬力	伯林＝東京		一五、二〇〇
獨逸	昭和四・八	::ユーゴー・エツケナー博士 ヴアン・リア・プラツク氏、ゲーセンドルフア氏	ツエツペリン伯號(航空船)マイバツハV・L二、五五〇馬力フオツカー機三發動機裝備	米國＝獨逸＝霞ケ浦 英國＝佛國＝支那＝立川		三三、六三二 一七、〇〇〇

伊國	昭和五・七	ソランシス・ロンバルヂー大尉、ジノー・カツパニーニ少尉	フイアット輕飛行機同八〇馬力	伊太利＝モスコー＝追濱＝立川	一九、〇〇〇
英國	昭和五・一一	ブルース夫人	ブラックバーシヂブシー二型一二〇馬力	英國＝カラチ＝立川	一六、五三〇
佛國	昭和六・四	メンシユ氏、ビユルタン	フアルマン四五〇馬力アルサ號	巴里＝印度＝東京＝巴里	一六、六〇〇
英國	昭和六・八	アミー・ジョンソン孃	デハビランド・プスモス輕飛行機ジプシー三型一二〇馬力	倫敦＝シベリア＝立川	一二、〇〇〇
米國	昭和六・八	ヒユー・ハーンドン氏	ベランカ單葉機ワスプ四二五馬力	紐育＝モスコー＝ハバロフスク＝日本海横斷＝北海道＝立川	航空法、要塞地帶法違反に問はれ罰金に處さる
新西蘭	昭和六・八	エフ・シー・チチエスター氏	モス水上機八〇馬力	ニユージランド＝シドニー＝臺灣、上海、鹿兒島＝紀州、勝浦	機體大破、負傷す。
米國	昭和六・八	チヤールス・リンドバーグ氏、アン夫人	ロツクヒード・シリウス單葉機（艀舟附）ライトサイクロン五二五馬力	紐育＝華盛頓、カナダ＝アラスカ＝カムチヤツカ＝根室＝霞ケ浦	計吐夷、紗那東沸に不時着水。
獨逸	昭和六・八	エツツドルフ孃	ユンカース・ユニオールA五〇型ゲーネツト八〇馬力	伯林＝モスコー＝哈爾濱＝奉天＝京城＝廣島＝東京	
米國	昭和六・一〇	パングボーン及ハーンドン氏	ベランカ單葉機J型ワスプ四二五馬力	淋代＝ウエナツチ＝太平洋横斷（無著陸）	
獨逸	昭和七・七	フオン・グロナウ氏	ドルニエ・ワール飛行艇	獨逸＝カナダ＝米國＝千島＝日本＝支那	一七、五〇〇
佛國	昭和八・四	マリーズ・イルズ孃ルメール機關士	フアルマン一九〇型ノーム・ローン三百馬力「ジヨエ第二驅」	巴里＝東京	一八、五〇〇
芬蘭國	昭和八・六	ヴアイノ・プレマー大尉	ユンカース（アームストロング・シドレー八〇馬力）	芬蘭＝東京	
佛國	昭和九・三	マリーズ・イルズ孃プラークス機關士	プレゲー二七＝三型イスパノスキザ六五〇馬力	巴里＝東京（再度）	一六、〇〇〇
英國	昭和一一・二	シドニー・スミス代將統率	シヨート・シンガポール第二〇五（F B）所屬飛行艇	新嘉坡＝マニラ＝上海	突如日本訪問中止
佛國	昭和一一・一一	アンドレー ジヤピー	コードロン・シムーン・ルノー・ペンカリ二二〇馬力	巴里＝印度＝佐賀縣	一四、一〇〇 脊振山中に墜落機體大破。
佛國	昭和一二・五	ドレーミケレツチ	コードロン・シムーン	巴里、印度＝高知縣	一四、二四〇 高知縣吾川郡の海岸に不時着
ラトヴイア	昭和一二・六	ヘルベル・ツクルス大尉	D・Hジブシー、メージョア一三〇馬力	リガ＝印度、香港、蔚山＝東京	——

國際航空聯合會（F・A・I）公認記錄（昭和十二年四月一日調査）

種別		航續時間	直線距離	速度	高度
陸上機		—	九、一〇四粁七〇〇 ロッシ・コドス（佛）	五六七粁一一五 H・ヒューズ（米）	一五、二二三米 S・スウエイン（英）
陸上輕飛行機		—	三、五八二粁— スカルテンスキー（波）	三六六粁五九九 R・A・クリング（米）	一〇、〇〇八米 F・ニクロツト（伊）
水上機		—	五、二八〇粁〇一五 K・マツクギニス J・K・エーヴリル（米）	七〇九粁二〇九 F・アゼツロ（伊）	一一、七五三米 A・サウセツク（米）
水上輕飛行機		—	五、六八〇粁八七一 J・V・ビスメニー V・P・クスネトツオフ（蘇）	一九七粁六七二 G・G・チーシ R・ドメニコ（伊）	八、四一一米 F・ニクロツト（伊）
水陸兩用機		—	二、三〇〇粁八六〇 F・M・アンドリユース（米）	三七〇粁八一四 A・Pドゼヴエルスキー（米）	七、六〇五米 B・サージエヴスキー（米）

自由氣球　八七時　H・カウレ（獨）

航空船　—

グライダー　三六時三五分　K・シュミツト（獨）

ヘリコプター　一時二分五〇秒　M・クレイス（佛）

婦人記錄

三、〇五粁七〇〇　ベルリナー（獨）

六、三八四粁五五〇　エツケナー（獨）

五〇四粁二〇〇　エールツシュネル（獨）

一、〇七八米六〇　M・ネリ（伊）

三、九三九粁二四五　V・イヤーハート（米）

二二、〇六六米　O・A・アンダーソン（米）　A・W・ステヴテンス

四三二五米　H・デイットマル（獨）

一五八米　M・クレイス（佛）

一、四三一〇米　M・イレッ（佛）

四四粁六九二　M・クレイス（佛）

四四五粁〇二八　H・ヴウシエー（佛）

連續長距離飛行

ロンドン間　A・モリソン（英）　時速一一二粁六五〇（七八時間二八分）

ケープタウン間　C・W・A・スコツト（英）　時速二五五粁九四七一（七一時間〇分一秒）

ロンドン間　T・C・ブラック　H・ヒユーズ（米）　時速五二六粁五〇〇（七時間二八分二五秒）

メルボルン間　A・ジヤピー（佛）　時速一〇二粁五〇一（九八時間五二分）

ロサンゼルス間　A・シヤピー（佛）　時速一八〇粁二〇八（五〇時間五九分四九秒）

ニューヨーク　ゼナン（佛）　ロペール（佛）　時速一五一粁九〇八（五七時間三五分二一獨）

パリ間　イサゴリ

ハノイ間　パタナリーヴー

各國別公認記錄保持者（昭和十二年四月一日現在）

	英	獨	伊	蘇	米	佛	白	波	智	計
三	三	八	三〇	九	四八	三六	三	五	一	一四三

民間航空機乘員一覽

（昭和十二年六月現在）

（備考）○印ハ兼一等航空士、▲印ハ二等航空士

一等飛行機操縱士

▲伊藤　治郎　▲石上　金尙　▲乾　將顯
石野　俊夫　五十嵐金一郎　▲飯島　一二
▲岩井　右内　▲伊藤　光義　岩田　源一
▲飯沼　正明　▲池田　安平　▲石田　功
▲池内秀太郎　▲伊藤　定雄　▲池島　鹿治
▲石井　進助　▲市川　梢三　▲岩堀床次郎
▲石井　正弘　飯田　弘孝　▲池田　照雄
▲家花　賴登　▲生駒　常一　▲池田　和夫
▲岩崎三男二　▲石原　喜平　▲石井李喜夫
今井　仁
▲祝　實之　▲石田　英勝　▲飯島　勇
▲伊東　藤雄　飯田　量
服部　良司　▲羽太　文夫　長谷川清登
▲針生　金治　▲早川竹太郎　▲林　茂
▲畑山　武夫　番野　義弘　▲林　種次
▲荻野　益男　▲畠山　雅次　▲半田　才藏
▲西山　勇　▲西村　大助　▲西尾　三郎
▲細川　優　▲堀　剛　▲朴　奉祉
堀　四光　▲本田　長雄　▲豐島　晃
▲鳥居　清次　▲富樫千代吉　▲飛山　政市
▲富山　一男　○戸田　秋雄　▲張　德昌
陳　德儉　陳　立奇　李　永三
▲小川　寛爾　大藏　清三　○荻野　了
○大森　正男　奥山　順治　▲大里　正義
▲小尾　龍治　▲織田　幸吉　▲岡本　德次
▲大浦　市郎　▲岡　貞文　○岡部　猛
▲太田　與助　▲大關　昇　▲大堀　修一
▲尾形　章　▲大西　甫　▲大森　伴白
▲岡　信男　▲大須賀俊介　▲小野　英夫
▲大浦　力　大谷　勇次　小木曾莊作
▲乙訓　輪助　▲小俣　壽雄　▲岡安　宗吾
▲荻原　正祐　▲太田　尙翁　▲岡安　尙助
▲渡部　清藏　▲和田喜三郎　進　▲渡部　稔
▲渡邊　進　▲和久田善雄　▲若林　劍
▲渡邊三千雄　○河内　一彦　▲龜井　五郎
○加賀　要助　片岡文三郎　○勝畑　清
▲金丸　末義　釜田善治郎　▲金谷　準
▲梶間　義孝　▲片山久太郎　▲鎌田　毅
▲梶原音二郎　▲片桐保一郎　▲金子　市男
▲河野　與助　▲片倉　寺夫　▲河野　島八
▲鎌田　正祐　▲鍛治　茂雄　▲影山　太郎
▲加藤　保　▲加藤　守　▲上出松太郎
神谷清四郎　桂林　高廣　▲勝部　良三
▲片山良治郎　▲川崎　一　▲川崎　鶴雄
▲梯　敏男　▲片岡　登　▲片山　金一
▲籠宮　次郎　▲片山　重雄　▲河原　春光
▲川越　武光　▲河野　通正　▲横山　金吉
▲吉原　清治　▲米澤　峯藏　○米澤　太平
▲吉田　重雄　▲吉田　作治　吉田　榮
▲高木　昌巳　○田中勘兵衞　○丹原　芳正
▲丹代　次雄　▲田中　勝藏　▲高橋　勇
▲田中　近美　▲武雄　一夫　▲田中　清治
▲谷口　米一　▲高垣　利一　武中政次郎
▲田中　武雄　▲竹田　伊三　▲高橋繁治郎
▲瀧澤　猛雄　▲武田　正彥　▲高石　晴夫
瀧澤美喜代　▲田中　公光　高階　正二
▲高田　文　▲高橋　國雄　▲高木喜一郎
竹内匡之函　○田中　常吉　▲高橋　隆
▲曾根原　信　▲津本　正市　▲都築德三郎
▲塚原　勇造　▲土屋　雅一　▲土橋　榮
▲堤　彰三　▲根岸　錦藏　▲中尾　純利
▲永田　重治　▲長尾　一郎　▲中島　忠英
▲長島　榮作　▲中村　正　▲中村　厚美
▲中野　政一　▲長友　重光　▲中畑　憲夫
▲中川　伊澤　米三　▲直井　一雄
▲中野目廣肆　▲樽林　壽一　▲難波正三郎
内藤　康　○麥田　平雄　▲村松　定延
▲宗像　中八　▲村岡　▲市　▲海野　昌男
▲上原　紀夫　▲上野　博志　▲宇井　長命
▲漆原　滋　馬道　才一（ヴイクター・イ！ベルトランデアス）
▲宇賀神正典　判治　▲野寺誠次郎
▲延原　正義　野田　金一　▲野村　親正
▲野村　勳　▲國枝　實
▲熊野　季福　▲桑島　稔　▲熊川良太郎
▲黒木　正明　窪田　純孝　久保田　太　黒澤　建

▲黒瀬　寅雄　▲熊谷　悌司　▲桑本康之助
▲艸薙　静夫　▲黒崎　代蔵　▲安岡　駒好
▲山崎　成位　▲山本　董吉　○山口　元松
▲山田　松一　山口　清　▲安田　倫久
▲山内　保三　▲安原　直喜　▲山崎　義房
山本　平治　▲山田　好雄　▲矢野　好六
山崎米太郎　山田　益三　山口　正
▲山形　徳衛　町田　三郎　▲松井　勝吾
松崎　武夫　▲前田　岩夫　▲松下　辨二
▲松本　功　▲松葉　賢雄　▲前田七之助
▲圓山　芳夫　▲松波　義辰　▲前地　泰雄
▲間宮吉太郎　▲松竹　豊吉　▲藤原　照夫
▲藤田　三郎　藤原　延　▲伏見　善一
▲藤田　武明　▲藤澤　秀雄　▲深野　憲男
古川　貞吾　▲藤本　善雄　▲藤本　直
▲不破　垣　▲藤崎　則一　▲藤田榮三郎
▲福田　昌次　▲福田　巽　▲藤田　敏雄
▲福島　信夫　▲藤本　保　▲麓　開作
○札本彌六　▲今野　孝義　▲小阪　禪令　黄　可寛
小杉　義夫　▲江島　三郎　▲遠藤辰五郎
▲遠藤　桂次　▲寺川　建爾　安藤　孝三
▲青木　峯藏　赤池　萬作　▲淺井　兼吉
港　香良一　▲有賀　光司　▲東　善作　松次　松次
▲荒木　次郎　新井　亮助　▲青木　民藏
▲青木　與　▲青山　伊吉　▲阿部　巳則　▲天貝　久助　▲荒川　繁光

▲阿部　美　▲瀬川　良立　▲森田　節夫　▲平井　岩太
▲青木　清衛　○諏訪　宇一　▲瀬川　貞雄　▲日比　省三
○安部　藤平　▲鈴木　兵助　▲鈴木　一雄　▲平松　牛郎
▲安樂末次郎　▲青木　又男　▲佐藤　正　▲沼井市摩呂　▲佐々木泰助　▲木下耶麻次　▲宮本　正義　▲南出　廣
▲澤田　兼一　○齋藤　羊五　▲櫻澤　仁一　▲佐藤　清志　▲佐竹　仁　▲佐藤　良司　▲菊地　仁
猿田　秀文　▲佐藤　成二郎　▲佐々木留一　▲佐藤　博　○岩本　貞　▲宮本　忠光　▲見須　實
▲坂本成二郎　▲佐々木留一　▲木村和一郎　▲宮崎　繁雄　▲右田　潔　▲水本佐一郎　▲新野百三郎　▲愼　鏘頊　▲志摩　勝三　▲白石　重郎　▲柴田　龍男
▲佐藤　博　▲木村和一郎　○岩本　貞　▲宮本　正義　○美濃　勇一　▲南出　廣　▲見須　實　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲木下耶麻次　▲宮本　正義　○美濃　勇一　▲南出　廣　▲見須　實　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲菊地　仁　▲南出　廣　▲見須　實　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲佐藤　良司　▲見須　實　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲佐藤　仁　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲櫻澤　仁一　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲佐藤　清志　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲佐竹　仁　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲佐藤　良司　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲菊地　仁　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲佐藤　勝龜　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲森川　勇一　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲森　勇造　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲瀬川　欣宜　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲鈴木　友茂　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲末松　春雄　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲須藤　一良　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏
▲鈴木　利貞　▲柴田　熊雄　▲柴田　德藏

二等飛行機操縦士

北郷　涼　大野　資　▲志鶴　忠夫
關　房藏　樋　政行　相澤　清志
森　勘六　加藤　文海　若宮　稔
鈴木良之助　吉村　亘意　木部シゲノ
▲山田　秀市　小栗常太郎　小西金次郎
高橋今朝治　梅本　幸一　石川　加一
信田五平治　後藤　儀作　福島　孫七
岸本　密次　平井　二一　今井小まつ
徐　雄成　萩原　嘉重　荒木　清吉
木下　豐吉　古賀　功　▲塚越　賢爾
山本　良三　末藤　廣作　石橋虎眞早
藪内　光子　鈴木　しめ　天野　嗣夫
金東　兼則　稻垣　新吾　金榮　浩
本庄　雄一　田相　國　侯　競寰
澤　修一　山崎房次郎　大崎　資良
加藤　信雄　洪　吉石　惣万菊太郎
水上　俊明　須浦　好二　加藤　正
五十嵐儀美　石橋　雅雄　井上　善一
境　岳　鹽田平四郎　上田　茂樹
平松　時善　大宅　武次　高橋　英次
彭　金國　安多　行英　角替　一彦
館　二三一　山崎　春雄　奥村　六男
尹　昌鉉　上仲　鈴子　田中　春雄
栗村　盛孝　▲早弓　勝巳　川崎　芳治
矢野　香六　▲大野源治郎　外山　達夫

加藤　弘一　陳　鶴犀　和田　正雄
篠田龜久三　野崎　八郎　富崎　隆
北島　昌藏　高橋金三郎　神田　正治
鈴木　克己　甲斐　茂吉　ルス・ネーソン
▲木下　利正　濱野松太郎　小林　公平
小笠原米一　三宅　泉藏　富谷　政一
▲近藤　通　秋谷マリエ　鈴木　昇一
渡邊　義雄　松崎　二郎　加藤　高明
▲大花　八義　武内　政夫　▲中川　伊澤
日比野宗雄　日貝　整一　鈴木　正憲
伊藤　良彌　隅田悠紀雄　杉浦　光夫
ジョセフ・セレース　伊藤　信雄
▲遠山　淡　▲林　由三　グスターブ・ド
ゼーリヒ　奥田鉉一郎　村上　好盛
磯部　昌夫　菊池東之助　田中　善藏
田中　照久　賴　春貴　鈴木　保
矢野　敏男　黄　慶　▲比屋　善文
伊藤　酉夫　淺利　長司　熊谷　義則
蜂須賀正氏　川地　晋次　野村　潔
松本　キク　▲道紺　俊雄　信岡　正典
大久保孝三　大牧準四郎　荻原　周夫
森　三佐男　長山きよ子　梅田　芳江
土岐　清　村尾　誓圓　北村　謙
山中　善一　眞貝　三郎　成田　稔
桑原　香　大原　次郎　矢島　虎雄
櫟田　恒夫　後川　利夫　大岸眞左勝
飯島　行男　淺野　武夫　小木曾新十郎

李　貞　喜　今川　藤重　待場　四平
田畑　勝　足立　正一　杉木　一男
李　繼　煥　周　盛科　▲渡邊　宏
佐久間義雄　小暮　友吉　沖田　新人
▲中川喜久造　小川　政信　大渡　勝
高橋　義光　阿部　茂　▲小松原宗五
原田　隆　花形　昭　島　吉正
高川　一郎　馬淵テフ子　川北　新造
別府　景光　今井　勉　前野　治郎
淺田金三郎　久野　正雄　高村　守雄
西內　滿喜　尹　公欽　伊谷　明一
鄭　正基　縣　信男　清水清一郎
ケー・ガルラヂャニー・フランシス
コ・レース　井尻　信吉　申　載佑
吳　成玉　奥村　正男　深谷吉五郎
加藤　二郎　武藤長四郎　飯沼　五郎
若井　佐吉　内田　正二　梅村　輝美
東儀　正博　長谷川新一郎　遠藤　儀一
渡邊　敏秋　ガジヤナン・ジエーバン
デイヤ　神田　義忠　高橋宗三郎
末永　規市　岡　嘉吉　森本直一郎
河端　福馬　中島　康雄　久田　壽夫
北澤　重雄　矢倉　憲　熊谷　榮一
田中　正志　菅原　正雄　金田　正治
原田　義雄　荒木　孝就　當麻　敦己
木下喜代子　齋藤　照夫　▲寺下　清輝

李　拓　小泉喜久男　青木　正三
廣畑　富男　河合　好夫　小山　三郎
張　坤　燦　マリオ・ペニト
加古　光夫　古賀　達雄　高濱　嘉章
谷　修治　安澤　松夫　尾井　角辰
上林　繁　壁谷　安郎　守屋　哲男
太田　稔　李　振之　辻　賢造
傅　玉德　田中　浩　黒田　元
荒川　少意　安達　則義　曾根孝一郎
長谷川英二　廣瀨　廣義　蘇　英傑
細野　勇　藤澤　典胤　堀尾　薫
酒井　正　小林　晴夫　田居藤市郎
長谷川　正　王　少平　矢澤壽惠治
中山　勇　角　參吉　本多　豐治
柿本英之助　長谷川明治　三好　研吉
田村與志男　林原　基雄　吉田　幸一
西村　阜子　篠原　弘　倉橋　道夫
清水源一郎　梅　里　渓　佐竹　武雄
工藤　哲　鷲見　節雄　菅　義雄
北森　隆生　小池　信夫　梅村　光次
闇　樹模　佐藤　勝平　寺戸　實
前田　博　塚田森三郎　光田　和雄
足森喜代榮　木下　功　尾西初三郎
石井　義明　李　起煥　方　文鑫
宗像　正二　濱口　達司　張　安汝
丸山　茂郷　杉山　惣亟　陳　炯堅

柴田　稔　陶　叔謙　馮　祐金
高僑　三郎　影山　桓虎　谷上　秀雄
▲本多　成一　淺川進一郎　佐藤孝太郎
池　清　河野義則　鄉子南
滑川　博　戸井孝夫　高文孝
中來田隆二　陳懋需　小川健三
金子　良夫　井倉善彌　施德濟
戸野　元　中井　朝一　吉野達二郎
戸次　一男　揚培潮　盧寶森
鍋島　敏龜　田口　莊一　高田政次
長谷川　道　▲森田　武男　▲神田好武
伊藤　光麿　大熊保夫　松枝　鼎　速雄
伊藤　幹雄　和田元太郎　豐房
遠藤　慶三　邱　貫一　玉木五郎　船津　勇
良知　勇　森　謹吾　小倉慶繁　道具　三郎
和崎　正一　久岡　秀子　趙　妙雲　大須賀眞平
梶田久壽男　大貫　正男　氷室　兼義　澤田　芳夫
池邊吉太郎　西村清太郎　久米　透　關　孝
奥村　厚行　溝口　宗彥　山岡　嘉郎　河合　忠夫
三好　正之　吉田　健次　佐藤　誠一　小林　實
北村　典生　齋藤　禮雄　原島　正男　松野　幸典
千野　壯　上保　和一　川本　幸夫　▲篠原　益登
水民　正治　小田切春雄　山田　眞　岡崎　正三
田中　繁守　山下　一郎　足立金三郎　片井　滋夫
▲後藤　安二　▲黒江陽一郎　▲藤原　繁雄
土井　利正　河合　司三　佐久間睦郎
鈴木小三郎　小林銳一郎　鈴木　又一

鄉　德文　井上　太郎　北川　昇平
キショア・ブイ・タッカル　下園　邦博
小泉　一雄　金井　光衛　神田　博
鄉原　統助　野竹才次郎　吉田　正六
石橋　猪作　福田　秀雄　毀國璠
卜南　德永　張　泉生　鄉　海澄
表　明鎬　川口　勇　高部　克己
小林　達郎　玉田　證明
▲加藤　繼彥　杉山　好彥　山內　正一
松本良之助　松屋　幹雄　松平　清
金井　哲夫　小澤　久美　廣瀨清太郎
熊谷　正三　鷲尾　安博　筑井　久雄
橫山　重喜　安田　忍三　石　鐵俊
御酒本芳男　坂井　希　岩倉　具邦
船津　勇　豐田安太郎　前川　貞一
道具　三郎　高橋福次郎　岩崎　哲二
大須賀眞平　佐藤　德　川崎　芳作
澤田　芳夫　小林直太郎　富谷　政七
關　孝　渡邊　國重　今川　重行
河合　忠夫　山本　良作　宮部　正夫
小林　實　加藤長四郎　新屋　弘市
松野　幸典　▲篠原　益登　近藤源三郎
岡崎　正三　片井　滋夫

一等航空士

（技證明書ノミ受有）

關根　幸雄　安邊　浩　中山　賴道
可兒滿壽夫　武田　次郎　室井　留雄
谷　甚吉　下山　二郎　近藤源三郎

二等航空士

飯倉　喜七　高部　克己　矢野　好六
山崎米太郎　小橋　辰雄　小泉　萬吉
遠藤辰五郎　杉浦　光夫

航空機關士

（○印ハ技倆證明書ノミ受有）

○井原　喜藤　井原　慶一　井口　義廣
○伊藤　直人　伊藤　齊　伊藤　靜次
○伊藤　健二　○石川　政雄　石川　金吾
石井　昌治　○今村文治郎　今泉　茂雄
○飯村　三藏　乾　信明　岩田　史郎
○畠山義三郎　○原　隆一　○茨城　寬俊
○早川　知之　羽泉清一郎　葉山　忠次
西田　常次　○西川　雋吉　○丹羽　義房
堀江　正春　堀　順三　本田　文治
土井　藤信　富樫　彥三　○富澤　進
○大場　榮治　○大場　末吉　○大森　晉
大森　義一　大和田武雄　大利田義正
○大久保寅來　岡田　理平　岡本　虎男
岡部　武夫　小川　利衛　○荻原　嘉重
○奥平　延吉　和田　力藏　渡邊　一
渡邊　健藏　川井　喜一　川端　清一
河邊　利一　河村　吉文　河內　博
○河崎　恒次　加藤　健次　○加賀山梅次郎
久茂　○上日向宇三郎　○金光利一

金子　武一　○笠川　與助　梶原音次郎
○吉村　榮作　○吉村安太郎　○吉田　米吉
○横地　秀義　米山　又男　高橋　正
○高橋　晋作　○高橋　良治　高橋　武夫
○高野　秀雄　高岡　芳三　高岡　眞治
高部　俊彥　高津治三郎　武市　勝巳
田代清一郎　○田中　了　塚本　英雄
塚本保太郎　塚越　賢爾　辻田　護
霧崎　一　堤　日出夫　中尾　正直
中島　憲三　中山軍次郎　○長瀨　忠司
長岡　勵　永田　紀芳　○村井　定一
內海　善助　內野　一三　內田　京一
○上田松太郎　上野　正明　○浦川　壽一
梅本　幸一　○頴川　德一　○黒川　春雄
黒木　善直　○桑原英三郎　熊井義三郎
栗田　利平　工藤　久雄　來山　福松
○久保　忠躬　山內　高造　○山內　豐信
○山本惠七郎　倭　實　○八百川長作
增田　清一　○增子　寅吉　眞穗　五
丸山丑三郎　藤田權之助　○小泉　修
○小林英次郎　小池　壽一　小山田二郎
小松　滋美　○後藤安太郎　近藤　通
○兒玉　七次　五味　喜七　伍　國雄
○駒木　綽　○遠藤　六郎　遠藤　久藏
○江戸　太一　寺本　順三　○寺崎　壽雄
有川健太郎　○阿部新太郎　荒井　忠作
○赤井　弘明　赤澤　三郎　○青柳　義房

○佐藤　與一　○佐藤　左內　佐藤　勝平
○佐々木定衛　佐々木春美　佐久間　稔
○坂本　定治　○坂井　利男　○三平利右衛門
○齋藤宮之助　齋藤　茂　○宮田　延雄
○宮城　丈夫　島崎　清　○篠原春一郎
○新開　三郎　神保　錐正　椎木　甚一
下原　繁久　平岡　勇　平野　勝
平川　秀夫　左　右藏　○森　改作
○森田　俊　森下　太郎　仙野　利男
關根　已智　須田　正幸　鈴木　善助
○鈴木　一郎　鈴木米太郎　鈴木　滿平

自由氣球操縱士

小田荒太郎　小濱　鶴一

航空船操縱士

松岡　勝雄

民間航空機及發動機・氣球製作所

〔備考〕機は航空機發は發動機

▲三菱重工業株式會社（機、發）本社東京市麹町區丸ノ內二ノ四△名古屋航空機製作所　名古屋市南區大江町七△東京機器製作所　東京市品川區大井森前町

▲中島飛行機株式會社（機、發）本社群馬縣太田町△太田工場　同上△東京工場（發）東京市杉並區宿町△東京事務所　東京市麹町區丸ノ內三ノ四有樂館內

▲川崎造船所飛行機工場（機、發）本社　神戶市兵庫區東川崎町△工場　神戶市林田區和田山通△分工場　岐阜縣稻葉郡蘇原村

▲川西航空機株式會社（機、發）兵庫縣武庫郡鳴尾村鳴尾大東一△東京事務所　東京市丸ノ內二ノ一二仲一三號館

▲愛知時計電機株式會社（機、發）名古屋市南區千年町字船方

▲日本飛行機株式會社（機、發）本社　東京市麹町區丸ノ內一東京海上ビル新館△工場　神奈川縣金澤町富岡昭和町

▲立川飛行機株式會社（機）本社　東京市麹町區丸ノ內東京海上ビル新館△月島工場　東京市京橋區月島

▲東京瓦斯電氣工業株式會社（發）東京市大森區入新井一ノ一〇〇

▲渡邊鐵工所（機）福岡市外雜餉隈△出張　東京市麹町區丸ノ內東七號館△佐世保市小佐世保免一九六一ノ二

▲東京航空株式會社（機修理）本社　東京市蒲田區新宿町一〇△分工場　東京市蒲田區羽田東京飛行場

▲野澤組航空部（）本店　東京市京橋區銀

座西五ノ二△支店神戸、臺北、シドニー紐育、倫敦、△場 東京府下立川町

▲大倉商事株式會社(機、發、部分品) 東京市銀座二ノ二九

▲株式會社濱松飛行機製作所(機修理) 本社及工場 濱松市段子川八三

▲池貝鐵工所(各種内燃機關) 東京市芝區三田四國町

▲藤倉工業株式會社(氣球、航空船) 東京市品川區五反田三ノ一三二

▲東京EC工業株式會社(氣球) 東京市世田谷區池尻町四三七

▲株式會社氣球製作所(氣球) 東京市蒲田區北糀谷町三四九〇

▲伊藤飛行機製作所(機修理) 千葉縣津田沼町

▲日本計器製造株式會社(飛行機計器) 東京市芝區新堀町二

▲正田飛行機製作所(發)本社及工場 東京市北多摩郡三鷹村上連雀九九七

民間定期航空輸送

日本航空輸送株式會社 社長 原邦造

東京―札幌線(毎週七往復) 東京―大連線(東京―大阪―毎週二一往復、大阪―福岡―毎週十四往復、福岡―大連―毎週十四往復) 東京―新潟線―毎週七往復、東京―富山―大阪線(毎週七往復)大阪―松江線(毎週七往復) 大阪―高知線 (毎週七往復) 福岡―臺北線(毎週三往復) 臺北―臺南線(毎週三往復) 臺北―花蓮港線(毎週二往復) 東京―新京急行線(毎週三往復) 京城―大連急行線 (毎週三往復) (業務開始、昭和四年四月)

日本輸送研究所 所長 井上長一

大阪―高松―松山―別府間(毎週六往復)

大阪―白濱、湯崎間(毎日曜往復)

日本海航空會社

大阪―城崎線

安藤飛行機研究所 所長 安藤孝三

新舞子―二見線

日本航空輸送會社

日本航空輸送株式會社 (東京市芝區田村町一ノ三飛行館内)

昭和三年十月資本金一千萬圓を以て創立同四年四月から定期航空を開始。

旅客、貨物及び郵便物の輸送業。

〔航空路〕

札幌―青森―仙臺―東京―名古屋―大阪―福岡―蔚山―大邱―京城―平壤―新義州―大連、東京―新潟、東京―富山―大阪、大阪―鳥取―松江、大阪―德島―高知、福岡―那覇―臺北、臺北―臺中―臺南、臺北―宜蘭―花蓮港、急行線……東京―福岡―京城―奉天―新京、京城―大連

〔旅客賃金〕

札幌―青森二〇圓、青森―仙臺一七圓、仙臺―東京一八圓、東京―名古屋一七圓、名古屋―大阪八圓、大阪―福岡三〇圓、福岡―蔚山一五圓、蔚山―大邱六圓、大邱―京城一四圓、京城―平壤一二圓、平壤―新義州一〇圓、新義州―大連二〇圓 東京―新潟一六圓、東京―富山一六圓、富山―大阪一四圓、大阪―德島八圓、德島―高知一〇圓、大阪―鳥取一〇圓、鳥取―松江五圓、福岡―那覇六〇圓、那覇―臺北五〇圓、臺北―臺中一〇圓、臺中―臺南一〇圓、臺南―宜蘭七圓、宜蘭―花蓮港十二圓、急行便賃金…… 東京―福岡六五圓、福岡―京城四〇圓、京城―奉天四四圓、奉天―新京二一圓、京城―大連四五圓、

〔遊覽飛行〕

各地飛行場にて申込に應ず

〔貸切飛行〕

フォッカー三發動機附旅客機(八人乘)=一時間二五〇圓。フォッカースーパーユニバーサル旅客機(六人乘)=一時間一七〇圓、エアスピード・エンボイ(八人乘)=一時間二五〇圓、ヒーチクラフト(三人乘)=一時間一〇〇圓、

〔貨物賃金〕 飛行距離一〇〇〇粁迄一瓩に付き一圓。それ以上五〇〇粁毎に五〇錢增。

〔航空郵便〕

航空郵便は各速達扱都市及び飛行機發著都市に宛てた航空郵便はすべて速達なしに即時配達される。

▽航空取扱料金

一、通常郵便

	内地相互、朝鮮内相互、朝鮮關東州間	内地、朝鮮、關東州、臺灣各相互間	内地及臺灣と滿洲間	朝鮮滿洲間
書狀(有封、無封) 封緘葉書	一九錢	三四錢	三九錢	二四錢
葉書	一〇・〇錢	一七・〇錢	二〇・〇錢	一三・〇錢
第三種	二五・五	五〇・五	七五・五	五〇・五

二、小包郵便(重量二瓩迄)

	内地相互、朝鮮内相互、朝鮮關東州間	内地、朝鮮、關東州、臺灣各相互間、朝鮮と滿洲	内地、臺灣、滿洲間
一瓩まで	一圓〇〇錢	二圓〇〇錢	三圓〇〇錢
以上五〇〇瓦增毎に	一〇錢	一圓〇〇錢	一圓一〇錢

東京航空株式會社

【本社】 東京市蒲田區新宿町一〇

【飛行場】 東京市蒲田區羽田、東京飛行場

東京…下田清水間(毎週月、水、金曜)

下り…		上り…	
東京發	午前九時〇〇分	清水發	午後一時〇〇分
下田著	同一〇時〇〇分	下田著	同一時四五分
下田發	同一〇時四〇分	下田發	同二時〇〇分
清水著	同一一時二五分	東京著	同三時〇〇分

【飛行機】 一五式水上機、三菱式S・1型七人乘、水上旅客機、瓦斯電式K・R型旅客機、相羽式ツバメ六型、七型エア・タキシー旅客機

【旅客賃金】 東京…下田間十圓、下田…清水間七圓五十錢、東京…淸水間十五圓。

【貨物賃金】 一瓩全線五十錢均一。

△旅客手荷物十瓩まで無料。

【遊覽飛行】 コース、遊覽コース、各地の飛行場の上空一周、其の他京濱、江ノ島、箱根、銚子、富士五湖、水戸、輕井澤、日光。

【機行料金】 一時間六十圓(一臺三名分)又は一キロ米 四十錢(同上)

遊覽コース	一名當り	三圓卅三錢
京濱コース	同	五圓
銀座コース	同	五圓
江ノ島コース	同	十圓
東京一周コース	同	十圓
箱根コース	同	廿三圓
銚子コース	同	廿八圓
富士五湖、水戸	同	各卅二圓
輕井澤、日光	同	各四十圓

△遊覽飛行は毎日午前八時より午後五時迄平日、日曜日、祭日とも實施す。

日本航空輸送研究所

【本部】 堺市大濱南新公園地海岸

大阪飛行場=木津川國際飛行場

△大阪…高松…松山…別府線

△大阪…白濱、湯崎線(日曜日往復就航)

大阪發	高松著	松山著
後一、三〇	後二、三〇	後三、五〇
松山發	別府著	
後四、〇〇	後五、〇〇	
別府發	松山著	
後〇、三〇	後一、三〇	

松山發　後一、四〇　後二、五〇　大阪著　高松著　後四、〇〇
大阪發　前九、〇〇　白濱著　前九、五〇　大阪著　後四、〇〇
白濱發　後三、〇〇

△使用飛行機
一四式二型六人乘水上旅客機、同四人乘AB四型七人乘飛行機、サザンプトン双發十八人乘飛行艇、KR四型四人乘水上機、ハンザー改造單葉水上機

【旅客賃金】大阪…白濱間十二圓、大阪…高松間十二圓、高松…松山間十圓、松山別府間十圓　大阪…松山間十八圓、大阪…別府間廿五圓

【貨物賃金】四瓩まで一圓（四瓩以上一瓩を增す毎に二十錢）

【配達料】四瓩まで二十錢

航空標識燈所在地

東京飛行場、戸塚、辻堂、平塚、國府津、十國峠、巢雲山、沼津、田子浦、三保、久能、燒津、金谷、袋井、濱松、豐橋、御油幡豆、知多本宮山、明野飛行場、千世崎、關、笠取山、加太、靈山寺山、柘植、上野大河原、笠置、木津生駒山、大阪飛行場、大阪朝日、須磨、室津、玉津、早島、笠岡糸崎、上北方、三永、熊野跡、五日市、岩國、高森、櫛ケ濱、中ノ關、宇部、行橋、若松、福岡飛行場、福岡松屋、筑前鐘崎、秋月、大牟田、川内

民間飛行操縱士長距離飛行記錄

年月日	操縱士	航空路	使用機	飛行距離
大正一四、七	安邊 浩	東京…モスコー	東風號	一三、六七一
河内 一彥	東京…ローマ	初風號	一六、一九六
昭和五、八	東喜作	ロスアンゼルス…倫敦	トラベル・エアス四、〇〇〇型	一六、九一四
昭和五、八	吉原 清治	伯林…モスコー…東京	ユンカースA五〇型	一二、〇九六

本邦民間飛行場

△公共用飛行場　東京（陸）大阪（水、陸）福岡第二（水）蔚山（陸）京城（陸）新義州（陸）新潟（陸）松江（水）富山（陸）名古屋（水、陸）中島大井（東京）（水）川崎（兵庫）（水）東雲原（秋田）（陸）堺大濱（堺市）（水）城崎（兵庫）（水）高知（高知）（水）宮島（水）館山寺（水）桐生愛國（陸）衣ケ原（陸）

△非公共用飛行場　東京（陸）福岡第一（陸）廣島（陸）都城（陸）大連（陸）堺大濱（堺市）（水）城崎（兵庫）（水）東雲原（秋田）（陸）堺大濱（堺市）（水）高知（高知）（水）宮島（水）館山寺（水）桐生愛國（陸）

航空無線電信所在地

東京（東京市麹町區大手町）箱根（靜岡縣田方郡三島町）龜山（三重縣鈴鹿郡龜山町）大阪（大阪市北區堂島濱通）福岡（福岡縣糟屋郡多々良村名島）嚴原（長崎縣嚴原町）富江（長崎縣富江村）鹿兒島（鹿兒島市山下町）那覇（那覇市天妃町）蔚山（朝鮮慶尚南道蔚山面）京城（朝鮮京畿道京城府）大連（大連市）新義州（朝鮮）臺北（臺北市京町）

帝國飛行協會（東京市芝區田村町一ノ三）

大正二年四月、日本航空協會と合併、同會は航空に關する諸般の進歩發達を奬勵し且其の趣味、知識の普及と會員相互研究の便利とを圖るを以て目的とす。

總裁　梨本宮守正王殿下
會長　男爵阪谷芳郎
副會長　田中館愛橘　同橋本野三郎
總務理事四王天延孝、財務理事西野惠之助

航空章受賞者

遞信省航空局では操縱士、機關士等乘務員表彰規程に基き四千時間以上の航空經歷者に航空章を授與して之を表彰す。

【第一回】航空章受賞者（昭和十一年度）
一等飛行機操縱士　安岡駒好、新野百三郎、河島一彥、桑島稔、小川寬爾、熊川良太郎、羽太文夫、張德昌、大藏清三、石上全尙

【第二回】航空章受賞者
「昭和十二年度六月一日」
一等飛行機操縱士、二等航空士　國枝實、同松井勝吾、同鳥居清次、同平松牛郎、同鈴木友茂、同藤田三郎、同宮本正義、同豐島晃、一等操縱士、一等航空士大森正男、同加賀要助、同森田勝人

航空界の殉職者

【昭和十年九月以降】

△陸軍（備考）活弧內（航伍長）は航空兵伍長以下準之

昭和六、八	熊川良太郎	東京…モスコー	石川島R三型
栗村盛孝	伯林 倫敦…羅馬		
昭和九、七	熊川良太郎	デトロイト ロスアンゼルス	スチンソン
			三、八〇〇
昭和一〇、四	阿野勝太郎	倫敦 ラングン	青海號 一九、二六七
昭和二、四	飯沼 正明 塚越 賢爾	香港 東京 東京…河內…カラチ…ローマ…	神風號 往航距離 一五、三七
		倫敦	「往復」

△海軍【昭和十一年九月以降】（備考）活弧內（二空曹）は二等航空兵曹長以下準之

二空曹橫山一正、同宮內正次、三空中男川治男、二空曹林次郎、三整曹北作豐男、二空曹末森壽郎、航兵曹杉本好美、二空曹小島隆二、三空曹賀川一雄、航兵曹向原修、二空曹高橋勇、航特務少尉知久逞一、空曹佐藤昇、三空曹駒井巧、整兵曹森田仁平、海少佐平山五郎、一空曹寺迫勝之助、二空曹堀井清、三航曹舌間榮之助、一空曹菊地正、三空曹佐山里、海軍軍大尉河野勇、二整曹小村長治、海軍大尉野海文雄、三空曹飯田明、海軍大尉栗栖賢、二空曹藤田榮、航曹務少尉甲斐直整兵曹五十嵐金次郎、航兵曹小川壽眞、一空曹長谷川光治、三空曹鷲尾伊勢松、高平、陸軍生徒大西義廣、航曹長大森武夫、航軍曹石井鶴彥、航伍長坂部六雄、航伍長德竹辰夫、航軍曹內田兵行、航少尉彌富哲夫、航大尉中川彰

二空曹伊藤留藏、一空曹和田恒也、三空曹倉本重五郎、二空曹田窪安一、特務研究助手高山正躬、海軍大尉秋山一雄、一航曹阿部武、三空曹山本善平、海軍々醫大尉三谷秀夫、二空曹金光保次、海軍特務少尉龜田三郎、二空曹重松重雄、二空曹立石秀雄、海軍特務少尉藤井亮吾、一空曹東畑正市、三空曹相馬悠紀雄、海軍大尉鍵谷保、二空曹千頭猛輝、一空曹山本喜一郎三空曹村山作藏、同佐藤正三、二整曹伊藤米吉、三空曹天野美拾九、三空曹簸下一雄、整曹空生田同弘、一空曹秋山直之、二空曹永田忠男、海軍中尉田中健三、航曹長中島田光男、一整曹山口政一海軍大尉大久保利武、二空曹那須二郎、二空曹原利一、三空曹村上馨、一空曹石原一男、航曹長伊藤太市、海軍少尉吉利一郎、三空曹青鹿邑吉、三空曹原松藏海軍中佐日高實保、一空曹木原初、同猪原實、二空曹西澤善治郎、海軍大尉村上義雄、三空曹渡邊武、三空曹松重尊、海軍大尉池內清一、航兵曹長村上次男、三空曹賀來尙德、海軍大尉坂本龍、海軍少佐川島忠一、二空曹小野塚武次郎、三空曹山本典夫、同小村璋樹、二空曹門田東一空曹近藤重正、二空曹木倉讓造、一空兵栗林守一、一空兵松崎豐一、三空曹鈴木義雄、一空曹菊池隆、航兵曹長大澤憲錄、一空曹眞鹽富司、二空曹井上信夫、三空曹鹿志村義、同塚田健治、三整曹角皆實、同藤田清次、一空兵松川岩男、三空曹渡邊啓一

民間殉職者

（昭和九年一月以降）

括弧內(一)は一等飛行機操縱士、(機)は機關士、助は助手、練は練習生

鶴原貞一(一)、島村喜久三(一)、田中藤夫(二)、楊治(一)西田要三(機)、田中藤夫(二)、楊清溪(一)、鈴木克衞(三)、黑崎七郎(一)、須田道次(機)、野長忠三郎(一)、清水孝作(一)、原篠喜久郎(機)、志知亮(一)、內村靜則(一)、元島喜讓(一)、武村清(一)、早瀨官五郎(一)、內田次郎(一)、馬場英一朗(一)、本間清(一等航空士)、馬場英一朗(一)、井下知義(無線通信士)、海江田信武(一)、齋藤國松(一)、赤星貞雄(二)、山本誠行(三)、猪原誠雄(練)、小林實(一)、大多和齋(一)、埴山芳瑞(一)、渡邊一(機)、松崎彌十郎(一)、森田近司(一)、積田武雄(練)、中野達二郎(二)

【昭和九年一月以降】

澤山寅彥(旅客)、長島善三郎(川西航空機技師)、宮澤伊勢五郎(西田研究所格納庫主任)、藤原とみ子(同乘)、佐山敏夫(關東軍囑託)服部實(同雇員)、外山四郎(同)、竹內好時(學生)、竹內紀時(同)、菅井定之(降下傘降下手)、鈴木勝江(降下傘降下手)、佐藤一男(寫眞技師)石井吉猶(同)、肥後清三(落下傘降下手)佐藤辰司(發動機部長)中前政二(機體部長)、太石薰一(同部員)廣瀨隆助

民間飛行學校・同操縱術練習所

（昭和十二年八月現在）

各稱	所在地	代表者
日本飛行學校	東京市羽田	相羽有
日本輕飛行機俱樂部	千葉縣津田沼	奈良原三次
東北飛行學校	秋田縣東雲原	鈴木菊雄
東亞飛行專門學校	千葉縣津田沼	川邊佐見
東京飛行學校	東京市深川浦	遠藤辰五郎
德島航空學校	德島市沖ノ洲	橫山友象
朝鮮航空事業社	京城飛行場	愼鏞瑣
小栗飛行學校	東京市深川浦	小栗常太郎
大阪飛行場研究所、大阪飛行場		木下耶麻次
各務原高等飛行學校	岐阜縣三柿野	野田金一
宇部航空輸送研究所	宇部市草江海岸	帝國飛行學校 千葉縣津田沼 鈴木菊雄
山梨在鄉軍人航空研究所	山梨縣玉幡村	安藤飛行機研究所 愛知縣日長海岸 安藤孝三
國粹義勇飛行隊	大阪府盾津村	亞細亞航空學校 東京市深川浦 飯沼金太郎
	梅澤美三	堺水上飛行學校 堺市大濱海岸 井上長一
	笹川良一	宮島航空研究所 廣島縣富島 惠美重美
田中飛行研究所	東京市深川浦	田中不二雄
第一航空學校	千葉縣船橋町	青木松次
高崎航空普及會	高崎市乘附練兵場	山田德藏
根岸飛行場	清水市三保松原	根岸錦藏
名古屋飛行學校	名古屋市外小幡ヶ原	

グライダー團體並に練習所

（昭和十二年八月現在）

團體名稱	會長又は代表者	所在地
相模グライダー倶樂部	會長 伊藤祥三郎	東京市王子區稻付西町
名古屋グライダー研究會	會長 下出義雄	名古屋市南鍛治屋町
日本帆走飛行聯盟	同 荒蒋義勝	大阪市北區中ノ島大每內、麹町區有樂町東日內
都防空會帆走飛行倶樂部	同 小林源次	大森區大森都防空會日本飛行機研究所內
岡本工業グライダー倶樂部	代表者 吉永宏	名古屋市中區東郊通岡本工業株式會社內
大阿蘇グライダー倶樂部	同 丸山一男	熊本市花畑町
日本滑空少年團	同 上村秀二郎	埼玉縣浦利市
築紫帆走飛行倶樂部	同 岡部幸喜	福岡縣築紫那和珀村
報國帆走飛行研究會	會長 篠田輝之助	世田谷區上馬町
九州航空會	代表者 前田建一	福岡市六本松
高崎グライダー研究會	同 山田德藏	高崎市高崎商工會議所
濱松グライダー研究會	同 木下善壽	濱松市廣澤町
酒田航空研究會	同 青塚恒治	山形縣酒田市中之口町
日本帆走飛行倶樂部	代表者 福井喜一	京橋區月島西仲通

三菱グライダー同好會	同	有川藤太郎
靜岡帆走飛行協會	同	八木雄馬
大豐グライダー倶樂部	同	阿部貞一
名古屋飛行學校	校長	御原福平
大阪グライダー倶樂部	代表者	安田正市
東京帝國大學滑翔研究會	同	横山晃成年
中國グライダー倶樂部	同	横根川薫
極東帆走飛行倶樂部	同	利進藤鈔
川西帆走飛行研究會	同	
大日本飛行少年團	校長	東條政二
石橋中學校校友會グライダー部		森川立也
朝鮮グライダー倶樂部		岩尾省三
九州帝國大學航空會		佐藤博
三島帆走飛行協會		河合眞治
霧ケ峰グライダー研究會	會長	藤原咲平
日土講習會グライダー部		藤森良藏
筑波山グライダー倶樂部		井坂定義
帝國航空少年團	團長	出田喜衛
帝國在鄉軍人會諏訪郡聯合分會		折井奈良三
日本輕飛行機倶樂部グライダー部		梅澤義三
山梨在鄉軍人航空研究會		作次
帝國飛行協會桐生支部	會長	堀田鼎
臺灣國防義會		森名秀
市川在鄉軍人分會		一力次郎
河北新報グライダー部	會長	椎名牧衛
新潟航空會		小柳

神戸青年クラブ	會長	山本勳
名古屋航空談話會		三浦一次
東京帆走飛行研究會		奈良原三
亞細亞航空學校グライダー部	校長	村上第六
國粹義勇飛行隊グライダー部		笹川良一
日本學生空航聯盟	同	伊原貞敏
早稻田大學グライダー部	會長	永野毅
厚木中學校校友會		岩森彌助
京都市第一工業學校グライダー研究部		古宇田實
神戸高工グライダー倶樂部		有元史郎
東京高工グライダー倶樂部		宮城音五郎
明治大學航空研究會グライダー部		
東北帝國大學航空研究會		
松本高等學校		
第一高等學校		
法政大學航空研究會グライダー部		
東京帝國大學航空研究會グライダー部		
慶應大學航空研究會グライダー部		

名古屋航空機研究所内	
靜岡市役所　教育課内	
大分市千代町	
愛知縣東春日井郡守山町	
大阪府中河内郡布施市荒川	
東京帝國大學工學部航空學教室	
岡山縣眞庭郡美甘町	
東京市本所區向島須崎町	
兵庫縣武庫郡鳴尾村川西航空機株式會社内	
芝區田村町飛行館内	
栃木縣下都賀郡石橋町	
京城飛行場内	
九州帝大工學部造船教室内	
靜岡縣田方郡三島町役場内	
麹町區竹平町中央氣象臺内	
神田區一ツ橋	
茨城縣筑波郡筑波町	
東京市瀧野川區瀧野川町	
長野縣諏訪郡上諏訪町	
千葉縣千葉郡津田沼町	
甲府市堅町	
桐生市本町	
臺灣總督府交通局　遞信部	
市川市市川	
仙臺市東一番町	
新潟市役所内	

名古屋市須磨區大谷町	
名古屋市商工會議所内	
千葉縣津田沼町	
東京市洲崎埋立地	
大阪府中河内郡盾津町	
大阪朝日、東京朝日新聞社内	
牛込區早稻田大學内	
神奈川縣厚木町	
京都市烏丸上立賣上ル	
神戸市須磨區氷筍通	
芝區芝浦	
神田區駿河臺	
仙臺市北四番町	
松本市縣町	
澁谷區美谷	
麹町區富士見町	
本郷區本富士町	
芝區三田	

航空近事

〔昭和十一年八月以降重要記事〕

□邦人飛行家海外で墜死

八月六日　民間飛行家三等操縱士山本誠行氏は、デンマーク、コペンハーゲン郊外カストラップ空港で催された全歐國際飛行大會に參加したが不幸墜落重傷を負ひ遂に死亡した。

□空中火災で八名殉職

十月四日　木更津海軍航空隊の海軍機三機が靜岡郡賀茂郡城東村地先海上で訓練飛行中、その中の一機は空中で火災を起して海中に墜落、搭乘者左の八名は殉職した。

航空兵曹長亀田三郎、三等航空兵曹原典夫
一等航空兵佐藤正三、同松本哲男、同村山作藏、二等整備兵曹重松重雄、二等航空兵曹山本善一郎、三等整備兵曹伊藤末吉、

□兵團長の搭乘機不時著
十月十日　平壌飛行六聯隊巡視のため航空兵團長德川好敏中將、今澤捨次郎參謀長以下七名搭乘のダグラス大型機は、朝鮮蔚山上空で發動機の故障で飛行場外水田に不時著、機體を大破し、內山邦夫中村昌三兩航空兵大尉、池上雇員は重輕傷を負つたが德山兵團長今井參謀長は無事だつた。

□笹子峠に墜落して殉職
十月十日　所澤飛行學校附二等飛行士、小谷八郎右衞門氏は時間飛行訓練のため偵察機で飛行中、甲州笹子峠の頂上に墜落機體は燒失し同氏は殉職した。

□洲崎でグライダー墜落
十月廿八日　東京高商グライダー研究會々員猪原誠雄氏は深川區枝川町飛行場でB三型グライダーを自動車曳十で練習中、著陸の刹那操縱を誤まり五十米の上空から墜落、機體は大破重傷後死亡した。

□蘇聯機墜落で邦人奇禍
十一月七日　ソヴイエト及びドイツ共營のルフト會社A・M・P九型旅客機は、モスコーを距る九十粁の密林に墜落、搭乘者全員悉死し、同乘客中の邦人北樺太石油社員古澤覺本、越野安二兩氏も奇禍

□訪日機、春振山に墜落
十一月十五日　パリー東京間新記錄樹立の大飛行を目指してアンドレ・ジヤビー氏は愛機コードロン、シムーン單座機を操縱ル・ブールジエ飛行場を出發、ダマスク、カラチ、ハノイ、香港を經て、東京に向ふ途中惜しくもその一步前、濃霧に遭遇し佐賀郡神埼郡脊振村脊振山中に墜落機體は大破し、同氏は重傷を負つた。

□低空落下傘實驗の犧牲
十一月廿一日　野中肖肖氏の發明にかゝる『野中式新落下傘』に依る低空落下實驗を洲崎飛行場で亞細亞飛行學校朴奉祉氏操縱で、パラシユーター肥後清三氏が同乘、高度五十米から降下したが、落下傘は開かず墜落閃後氏は頭部を强打して慘死した。

□訓練飛行中墜落し殉職
十二月一日　佐世保海軍航空隊村上擊一空兵、宮本相馬航空兵搭乘訓練飛行中長崎縣相浦町上空で發動機の故障で墜落村上一空兵は殉職宮本航空兵は落下傘で無事降下した。

□夜間演習中山林に墜落
十二月三日　平壌飛行六聯隊染谷、山本兩曹長搭乘、夜間攻防演習中、發動機から火を發し、朝鮮沙里院の山林中に墜落、山本曹長は殉職、染谷曹長は機體から脫出した。

□機上から寫眞機が落下
十二月四日　所澤飛行學校岩倉貝邦少尉操縱の偵察機から東京市淀橋區柏木に建築中の家屋に寫眞機が落下して同屋根を損傷

□日還親善飛行に成功す
十二月五日　日還親善飛行として新野、長友兩飛行士、永田機關士、搭乘の「鵬型號」は立川陸軍飛行場を出發途中臺北飛行場に著陸した上、六日磐谷ドンムアン飛行場に安著」艦程四千九百三十粁所要時間三十七時間五分。

□艦上機が海中に突入す
十二月七日　佐伯海軍航空隊井野恒一空兵操縱、石橋一男二航空同乘の艦上機が、同隊北東端に機首を突入し、石橋二空兵は負傷後餘病併發して死亡した。

□落下傘が開かせず殉職
十二月十日　各務ヶ原飛行二聯隊竹下義昌上等兵操縱の偵察機は愛知郡丹羽郡古知野町下般若の田圃に墜落落下傘で降下したが開かせず殉職した。

□飛行艇が民家に激突
十二月十一日　橫須賀海軍航空隊山田定一航空兵曹操縱、十名同乘の飛行艇は、橫濱市中區鷲ヶ丘の民家に接觸、機體を大破し搭乘者三名は重輕傷を負つた

□攻擊機が電柱に衝突
十二月十一日　館山海軍航空隊牧秀雄中尉操縱の大型飛行艇は勝山驛附近の電柱に衝突、同驛ホームに激突して機體を大破搭乘者は負傷した。

□夜間飛行中墜落で殉職
十二月十一日　所澤陸軍航空技術學校教官長谷川太郎大尉は、戰鬪飛で夜間飛行訓練中、飛行場々外に不時著して機體を大破同大尉は殉職した。

□夜間飛行中山腹に衝突
十二月十四日　鹿屋海軍航空隊の攻擊機が夜間飛行訓練中、鹿兒島郡肝屬郡花岡村の山腹に衝突、搭乘の伊藤太市、中島田光夫兩一航曹、山口政一二整曹は殉職した。

□日還飛行鵬型號歸還す
十二月十六日　日還親善飛行の鵬號は歸還の途中臺北、大阪に著陸同月十九日羽田東京飛行場に歸著した。

□飛行不明機、山中に墜落
十二月十七日　太刀洗飛行場を出發、明野飛行場に向ふ途中行方不明となつた、林茂曹長操縱の九一式戰鬪機は、三重郡一志郡八幡町の山林中に墜落、搭乘者は殉職してゐるのを發見した。

□空中分解で墜落殉職
十二月廿二日　霧ヶ浦海軍航空隊大久保利義中尉操縱、吉利一郎候補生同乘の九〇式水上中間練習機は、土浦町上空で空中分解して墜落、兩搭乘者は殉職した。

□民間機山形市で墜落
山形飛行義勇飛行協會長谷川正二操縱士は、學生義勇號を操縱、山形市上空を低空旋回飛行の際、高壓線を避けんとして墜落機體を大破重傷を負つた。

□落下傘を放して飛降り
明野飛行學校小笠原常光軍曹は九三式戰鬪機で特種飛行訓練中、同飛行場に墜落、同軍曹は落下傘で降下したが高壓線に觸れかかつたので、傘を放して飛び降りたが輕傷を負つた。

□火を發しつゝ墜落粉碎
所澤飛行學校塚田二郎曹長は九五式練習機で飛行中、狹山飛行場上空で發火、錐揉み狀態に落つた同曹長は落下傘で降下したが、機體は粉碎した。

□練習機が農家に突入す
熊谷陸軍飛行學校助敎官進藤茂仁曹長操縱、操縱學生山下治雄軍曹同乘の練習機は、機體の故障で不時著の刹那機體より投出され埼玉郡大里郡藤澤村の農家金井美代治方の藤澤村の農家金井美代治方の勝手口に突入、搭乘者は機體より投出されて絕命、また同家の妻、並に二女は機體の下敷となり重傷を負つた。

□大型飛行艇の不時著
一月十日　川西航空機會社のダグラス（三十六人乘）飛行艇は、兵庫縣鳴尾から福岡に向ふ途中、荒天のため關門海峽に不時著、再び出發したが更に別府に不時著した

□プロペラに觸れて慘死
一月廿一日　第二航空戰隊「加賀」の艦上攻擊機が佐世保に在泊中、飛行訓練を終へ著艦の刹那艦橋に激突、その際信號兵野田義治水兵はプロペラに觸れて即死した。

□吹流しを索引中墜落殉職
一月廿三日　明野陸軍飛行學校秋山謙一特務曹長操縱、湊省三少佐同乘の偵察機が射擊演習の吹流を索引中、伊勢灣に墜落、搭乘の兩氏は殉職した。

□編隊飛行中海中へ墜落
一月廿七日　佐伯海軍航空隊の九州一周編隊飛行中の靑鹿邑吉一空兵操縱、鈴木二航兵同乘の爆擊機は、佐賀縣松浦郡星賀灣に墜落、靑鹿一空兵は殉職、鈴木二航兵は救助された。

□突風に煽られ機體顚覆
一月廿七日　立川陸軍航空技術研究所の富島軍曹は、戰鬪機を操縱著陸の際突風に煽られて機體は顚覆同軍曹は輕傷を負つた

□吹雪に遭ひ三日不時著
一月廿八日　各務ヶ原飛行一聯隊の六機が大阪府下盾津飛行場の訓練飛行を終へ歸

還飛行に就いたが、吹雪のためその中の三機は新淀川、大阪市此花區島屋町と阪神武庫川尻に何れも不時著し、夫々機體の一部を損傷した、幸ひ搭乘者は微傷を負つたのみであつた。

□特種飛行訓練機の墜落

一月三十日　下志津飛行學校御子柴新一軍曹は銚子陸軍飛行場で九四式偵察機で特種飛行訓練中、同飛行場に墜落、殉職した

□海軍機が山腹に衝突殉職

一月三十日　佐伯海軍航空隊原松藏、松重章兩一空兵搭乘、艦上爆撃機で訓練飛行中、大分縣南海部郡八島の山腹に衝突して墜落、兩搭乘者は殉職した。

□日高飛行長の墜落殉職

二月八日　鹿屋海軍航空隊飛行長日高實少佐は、飛行訓練中、同飛行場に墜落殉職した。

□艦載機行方不明となる

二月十二日　第二航空戰隊「迅鯨」の艦載機に村上次男一空曹、猪原實二空曹、賀來尙德一空曹搭乘、高知縣宿毛灣外で飛行訓練中行方不明となる。

□豐後水道に墜落殉職

二月十六日　加賀艦載爆撃機を池内清一中尉操縦木原初二二空曹同乘、豐後水道附近で訓練飛行中墜落兩氏は殉職した。

□國産發動機の耐熱試驗

二月十九日　東朝の亞歐飛行に對する國産發動機「壽三型」空冷式五五〇馬力の耐熱試驗として東京、屏東間二千三百粁を飯沼飛行士操縦でAN機は東京飛行場出發途中大阪、鹿屋、那覇に著陸の上、同月廿一日臺灣屏東飛行場に到著、同月廿四日屏東出發同月廿八日東京飛行場に歸著した。

□民間機が防波堤に激突

二月廿四日　日本飛行學校戸山飛行士は高田政治練習生を同乘アヴロ機で離陸の後高度三十米で發動機の故障から東京飛行場の防波堤に激突機體を損傷搭乘者は輕傷を負つた。

□特種飛行機墜落

二月廿六日　八日市飛行三聯隊所屬大野清德軍曹は偵察機を操縦、銚子陸軍飛行場から銚子上空で特種飛行訓練中同市外の水田中に墜落、殉職した。

□海軍機が田圃で顚覆

二月廿七日　館山海軍航空隊栗原四萬吉一空兵操縦の艦上攻撃機は館山上空で故障を生じ同町の田圃に不時著したが、機體は顚覆大破した。

□阪神上空で爆撃演練

二月廿八日　阪神民間防空機關提唱の下に甲子園を中心として飛行第七聯隊、濱松飛行學校、各務ヶ原飛行第一、明野飛行學校から數十機の參加の大空中爆撃戰鬪演練を行つた。

□偵察機が水田に不時著

三月六日　霧ケ浦海軍航空隊室町道三郎三空兵操縦の水上偵察機は茨城縣新治郡大津村の水田中に不時著して機體は大破したが搭乘者は無事。

□月島で爆彈投下演習

三月十日　陸軍記念日を卜し、東京月島四、五號埋立地上空で、所澤、下志津、立川濱松、明野各飛行學校から重輕爆撃機を始め空の精鋭百五十餘機參加の下に陸軍空前の航空ページエントを行ひ、機關銃の實射、小型爆彈投下等があつた、當日は數十萬の觀衆が詰めかけた。

□落下傘が烈風に流さる

三月十二日　平壤飛行第六聯隊秋田大尉編隊長の戰鬪機中、檜山三郎伍長操縦の一機は安東省大孤山上空から海中に墜落、同伍長は一旦落下傘で降下したが烈風に流され海中に降下したまゝ行方不明となつた。

□艦上機が夏島沖に墜落

三月十六日　横須賀海軍航空隊川島忠一大尉操縦、村上義武中尉同乘の艦上攻撃機は夏島上空で訓練飛行中、海中に墜落搭乘者は殉職した。

□民間機が庭樹に接觸

三月十八日　日本飛行學校池清飛行士がアヴロ機で練習飛行中、東京世田谷區玉川野毛町の農家庭樹に接觸、機體を大破したが搭乘者は無事だつた。

□旅客機が吹雪に遭遇墜落

三月十八日　日本空輸會社、東京、富山間定期男空旅客機フオツカー・スーパー・ユニヴアサル機を松崎彌十飛行士、森田近司機關士搭乘、富山に向ふ途中、吹雪に遭遇し、高田市外で墜落、兩氏は殉職した

□墜落の刹那機體爆破す

三月十九日　濱松飛行第一聯隊壽圓正隆航空兵大尉、今泉政雄軍曹、小川高平、岡崎勝兩伍長搭乘の九三式重爆撃機が三方ケ原上空で爆撃演習中畑中に墜落、その刹那搭載した模擬爆彈が爆發して機體は燒失し全搭乘者は殉職した。

□佐伯で戰鬪機の空中接觸

三月十九日　佐伯海軍航空隊の小野塚武次郎三空曹は、戰鬪機で飛行訓練中、同隊の濱田稻雄一空兵操縦の戰鬪機と空中接觸して、番匠川に墜落、小野塚三空曹は殉職したが濱田機は無事だつた。

□野外航法演練飛行で殉職

三月廿二日　關東軍所屬梶原元幸、大西義廣兩氏搭乘機と鍋島準二、大森武男兩氏搭乘機は新京周水子間の野外航法演練飛行中兩機共濃霧に惱まされ、吉林省懷德並に鳳凰山麓に不時著したが、機體を大破搭乘者は殉職した

□落下傘降下したが行方不明

三月廿三日　佐伯海軍航空隊の渡邊武志一空兵搭乘の艦上機が森隆藏、山本典男、他機と編隊で朝鮮元山から横須賀に向ふ途中、愛媛縣溫泉郡の釣島の海中に墜落、搭乘者は落下傘で降下したが、渡邊、山本兩一空兵は行方不明となつた。

□遭難した佛飛行家東上

三月廿三日　訪日飛行の一步前、佐賀縣春振山に遭難した佛國飛行家アンドレージヤピー氏は、漸やく傷が癒えたので大阪機大藏飛行士操縦のロックヒード機で東上すべく、福岡を出發、大阪に到着した。

□格納庫内でタンク爆發

三月廿五日　館山海軍航空隊の艦上攻撃機を陸上班格納庫内で、エンヂン調整試驗中ガソリンタンクが爆發し、同機は燒失、附近に居合せた增野久雄、山川高、水谷武二の各一空兵、鈴木秀雄、伊藤千萬億、乙津知市各一空兵は火傷を負ひ遂に死亡、他にも數命輕傷を負つた。

□博多灣上で機體顚覆

三月廿九日　濱松飛行第七聯隊の重爆撃機は、愛知縣丹羽郡の上空で各務ヶ原飛行一聯隊の戰鬪機と接觸、その際重爆撃機に搭乘の石井鶴彥伍長はプロペラーの破片で頭部を强打され殉職した。

□爆撃機から火を發す

三月三十日　濱松飛行學校根本慶介中尉操縦、中山雇員搭乘の重爆撃機は三方ケ原上空で發動機から發火したので不時著したが、その際根本中尉は負傷した。

□ブロペラの破片で殉職

三月三十日　太刀洗飛行四聯隊山下德通一等兵操縦、吉川辰見曹長同上の偵察機は博多灣上での射撃演習後、著陸の際顚覆、機體を大破し、搭乘者は輕傷を負つた。

□海中に墜落行方不明

三月廿六日　横須賀海軍航空隊小林璋樹一空兵は、攻撃機で訓練飛行中、横須賀第二海堡附近に墜落、同氏は行方不明。

□偵察機が火達磨で墜落

三月廿七日　銚子陸軍飛行場に不時著せんとした、山下種三郎曹長操縦の偵察機が發動機に故障を生じ、同曹長は落下傘で無事脫出したが、機體は遂に火を發しつつ墜落した。

□東京札幌間航空路開始

四月一日　日本空輸會社では、東京、札

幌間定期航空路を開始し、兩地から初發旅客機の飛行があつた。

□亞歐連絡神風號引返す

四月二日　東京朝日新聞主催、亞歐連絡飛行の神風號に飯沼正明飛行士、塚越賢爾機關士搭乘、立川非行場出發、飛途に就いたが、流球列島附近から天候險惡のため立川飛行場に引返して來た。

□滑空機の旋回新記錄

四月四日　滿洲飛行協會敎官弘中正利飛行士は、グライダー（セコンダリー應型）で、大連飛行場南方の山腹がら滑空飛行を試み、旋回二十回、滯空二時間七分の記錄を作つた。

□神風號亞歐連絡に大成功

四月六日　亞歐連絡飛行の神風號は、荒天のため一旦引返し、天候回復を待つてゐたが、愈々、立川飛行場を出發、大飛行の途に上り、臺灣、河內、ヴイアンチアンカルカツタ、カラチ、バスラ、バグダツトアテネ、ローマ、巴里經由、同月十日ロンドンに到著した。距離一萬五千三百五十七粁、所要時間九十四時間十七分五十六秒。

□空中滑走で著陸し顚覆

四月六日　立川飛行五俊隊須藤德彌伍長は戰闘機を操縱、夜間飛行訓練中、エンヂンが停止し、空中滑走で著陸せんとした際機體は顚覆、同伍長は負傷した。

□偵察機が空中分解で墜落

四月七日　橫須賀海軍航空隊門田東二空曹、近藤重正一空曹搭乘の水上偵察機は同隊上空で訓練飛行中機體が空中で分解され墜落、兩氏は殉職した。

□水上旅客機の不時著

四月九日　日本航空輸送研究所の一三式水上旅客機を新井亮助飛行士操縱、旅客四名を乘せ、大阪から別府に向ふ途中、大分縣北海部郡新舞子濱沖合に不時著したが、搭乘者は無事だつた。

□貴衆議員の空中戰參觀

四月十四日　陸軍省では貴衆兩院議員、其の他六百餘名を招待し、航空知識普及のため濱松空行場を中心として防空演習を行ひ、戰闘機と高射砲の對地對空射擊を始め重爆機の爆彈投下戰闘機攻擊機の空中戰闘の演習があつた。

□映畫空輸機民家に墜落

四月十四日　東京日日新聞社のロツクヒード機を岡飛行士操縱、須田道次機關士同乘、映畫フイルムを空輸すべく東京飛行場出發大阪城東練兵場に著陸の際附近の民家に接觸、機體は民家に墜落大破し、須田機關士は重傷後死亡、岡飛行士も重傷。

□爆擊訓練中海に墜落

四月十五日　大村海軍航空隊木倉謙造二空兵、栗林守一一空兵搭乘の艦上機は、大村灣內で爆擊訓練中海中に墜落搭乘者は、殉職した。

□亞歐連絡機の歸還飛行

四月十六日　亞歐連絡飛行の神風號は、獨、白、伊の歐洲大陸の首都訪問親善飛行のためロンドンを出發、同月廿七日ロンドンに歸還した。

□機翼を地上に激突發火

四月廿二日　霞ケ浦海軍航空隊松崎豐一空兵は航行訓練後著陸の際機翼を地上に激突し、その刹那火を發し、大火傷を負つて殉職した。

□電線に接觸して殉職

五月三日　立川飛行五聯隊坂部六雄上等兵は九一式戰闘機を操縱、立川町上空に達した處、發動機の故障から引返さんと旋回の際、電線に接觸墜落、同上等兵は殉職。

□大日本航空青年團發會式

五月五日　航上幾太郎大將を團長とする大日本青年航空團發團式を明治神宮神前に奉告祭を行ひ、續いて軍人會館で發會披露式を行つた。

□夜間著陸演習中大破

五月五日　濱松陸軍飛行學校河島大尉操縱近藤准尉、大石曹長、渡邊軍工同乘の九三式爆擊機は夜間著陸練習の際、濱松市外の田圃に不時著機體を大破し搭乘者は重輕傷を負つた。

□燃料不足から不時著

五月六日　館山海軍航空隊菅川秀夫一空曹操縱の戰闘機は、大阪府下盾津飛行場に向ふ途中燃料不足から四條畷附近の畑中に不時著、同一航曹は輕傷を負つた。

□ドイツ航空船の大慘事

五月六日　大西洋定期航空のドイツ航空船ヒンデンブルグ號はレークハースト飛行場に到著、正に著陸せんとした刹那、突如火災を起して爆破墜落し乘組員百五名中四十一名は慘死した、同航空船は一九三六年竣成したものである。

□空中でプロペラが停る

五月七日　太刀洗飛行四聯隊木村哲夫上等兵操縱の戰闘機が突如プロペラが停止して、飛行場外の田圃に墜落機體を大破し、同上等兵は負傷した。

□戰闘機が海中に沈沒

五月八日　鹿屋海軍航空隊山口二空曹操縱の戰闘機は、若松市黑崎の沖合で墜落、機體は沈沒したが、搭乘者は救助された。

□民間機が梨畑に眞逆樣

五月十一日　民間飛行家野呂忠三郎飛行士操縱、瀧澤美喜代飛行士同乘の修理完成のブルバード機の試驗飛行中、東京飛行場附近の梨畑に墜落、野呂飛行士は殉職、瀧澤飛行士は重傷を負つた。

□神風號五十一日目で歸還

五月十四日　亞歐連絡飛行に成功した、「神風號」は、ロンドン、クロイドン飛行場出發歸還飛行の途に就いた、往復と同一コースを經て立川飛行場出發以來五十一日目の同月廿一日東京飛行場に歸著した。

□低空落下傘に成功

五月十七日　落下傘降下の犧牲となつた肥後清三君の靈を慰むべく、野中肖人氏の發明にかゝる、野中式落下傘低空降下實驗を西內滿喜、梅村とよ子兩氏によつて洲崎飛行場で公開試驗が行はれた。

□小型つばめ號の試飛行

五月十七日　立川飛行作製所で製作した十六馬力の「立川式超小型つばめ號」の試驗飛行を行つた。

□墜落剃那落下傘で降下

五日廿日　太刀洗飛行四聯隊立山武雄少佐搭乘の戰闘機は、各務ケ原に向ふ途中、兵車縣氷上郡久下村に墜落したが、同少佐は落下傘で降下して無事だつた。

□民家に墜落六名死傷

五月廿二日　濱松飛行七聯隊鈴木上等兵土生曹長、白倉軍曹搭乘の飛行機が堺市々外から原隊歸還飛行、大阪市東區粉川町上空で發動機に故障を起し民家の屋上に墜落、十戶を大破し、住民六名が死傷。

□航研長距離機の試飛行

五月廿五日　東大航空研究所で試作した長距離機の試驗飛行を東京飛行場で藤田大尉操縱の下に十七分間行ひ、好成績を收む

□成層圈氣球火を發す

五月廿五日　ブラツセル大學物理學敎授オーギユスト・ピカール氏は助手マックスコシーン氏と同乘、ブラツセル近郊から成層圈へ氣球で上昇を試みたが、離陸直後氣球から火を發し、壯擧は挫折、兩氏は無事。

□訪日佛機復も不時著

五月廿六日　巴里東京間記錄飛行として五月廿二日巴里を出發した、ドレー、ミケレツチ兩氏搭乘のコードロン・シムーン機は、荒天に遭ひゴール一步前高知縣吾川郡諸木村戶原の海岸に不時著し可惜雄圖を挫折し、兩氏は負傷した、巴里出發以來百一時間三十四分であつた。

□空輸機墜落五名殉職

五月廿七日　堺大濱の日本航空輸送研究所では愛知時計製作所の愛知AB四型七人乘飛行艇を武石米三飛行士、機體部長技師中前政二、機關士佐藤辰司、同可部薰一同

三式爆擊機は夜間著陸練習の際、濱松市外の田圃に不時著機體を大破し搭乘者は重輕傷を負つた。

□燃料不足から不時著

五月六日　館山海軍航空隊菅川秀夫一空曹操縱の戰闘機は、大阪府下盾津飛行場に向ふ途中燃料不足から四條畷附近の畑中に不時著、同一航曹は輕傷を負つた。

□ドイツ航空船の大慘事

五月六日　大西洋定期航空のドイツ航空船ヒンデンブルグ號はレークハースト飛行場に到著、正に著陸せんとした刹那、突如火災を起して爆破墜落し乘組員百五名中四十一名は慘死した、同航空船は一九三六年竣成したものである。

□空中でプロペラが停る

五月七日　太刀洗飛行四聯隊木村哲夫上等兵操縱の戰闘機が突如プロペラが停止して、飛行場外の田圃に墜落機體を大破し、同上等兵は負傷した。

□戰闘機が海中に沈沒

五月八日　鹿屋海軍航空隊山口二空曹操縱の戰闘機は、若松市黑崎の沖合で墜落、機體は沈沒したが、搭乘者は救助された。

□民間機が梨畑に眞逆樣

五月十一日　民間飛行家野呂忠三郎飛行士操縱、瀧澤美喜代飛行士同乘の修理完成

廣瀬隆輔の五氏搭乘、大阪飛行場に空輸すべく試驗飛行中堺市で工場の煙筒の避雷針に機翼を打ちつけ、同工場のタンクに激突墜落し機體は大破し搭乘者全部殉職した。

□朝鮮の沖合に墜落殉職

五月廿八日　平壤飛行六聯隊德竹辰夫伍長、內田茂行軍曹搭乘の偵察機は、朝鮮平安南道瑞和面沖合に墜落、兩氏は殉職した

□グライダーの滯空新記錄

五月廿八日　日本帆走飛行競技に引續きグライダーの曳航　空によつて志鶴忠夫氏は千五百米滯空三時間十五分、清水六之助滑士は千百米滯空二時間廿六分の記錄樹立

□空中接觸で兩機墜落す

五月廿一日　館山海軍航空隊鈴木義雄三空曹操縱の戰鬪機と菊池隆一空兵操縱の戰鬪機は千葉縣安房郡神戶村平砂沖上で戰鬪飛行訓練中、空中接觸して兩機は墜落搭乘者は殉職した。

□「航空愛國週間始」まる

六月一日　遞信省、帝國飛行協會共同主催の「航空愛國週間」が開始され、同時に民間航空發達奬勵資金に充つる「航空愛國切手並に同葉書」も全國一齊に賣出され又民間機數臺は帝都の上空を大行進を行つた。

□滑空機の規則を公布

六月一日　遞信省では航空法施行令に依り、滑空機の規則を公布し滑空士免狀の制を設けた。

□「大空の女王」世界一周

六月一日　「大空の女王」アメリア・イヤハート女史は、汎米航空會社フレデリツクヌーナン艇長同乘、愛機ロツクヒードエレクトラ型双發單葉機「空の實驗室」を操縱、アメリカ、マイアミ飛行場出發世界一周の壯途に上つた。

□超急行定期航空開始

六月一日　日本空輸會社は東京、新京間東京、天津間一日連絡の超急行定期航空を開始した。

□空の漫步機、東京に飛來

六月二日　「空の世界漫步飛行」とも云ふべきラトヴイアのヘルベル・ツクルス大尉は、自作機U・Hジブシー・メーシヨア（一三〇馬力）の輕飛行機で、昨年十月故國首都リガを出發、途中香港で機體を損傷、修理に手間取つたり、また印度で猛獸狩などに時日を費やし、九ケ月振で漂々と東京飛行場に飛來、東京滯在中航空ページエントにも參加し、同月十日歸還飛行の途に就いた。

□民間機が海中に墜落

六月四日　津田沼帝國飛行學校練習生横田武雄氏は、アジロ機で飛行中、千葉縣幕張の海中に墜落、重傷後遂に死亡した。

□羽田で航空ページエント

六月五日　遞信省、帝國飛行協會、東朝共同主催の航空ページエントが東京飛行場で行はれ、民間機は勿論恰かも來朝中の佛國飛行家ドレ氏並に空の珍客ラトヴイアのツクルス大尉等の特別飛行もあつた。

□空の颱、空中分解で墜落

六月十六日　日本飛行機會社製作のブー（空の颱）ヒバリ一型を日本航空研究所吉野達二郎飛行士が洲崎飛行場で操縱練習中、旋回の刹那空中分解し墜落、同氏は即死。

□旅客機不時著し顚覆

六月十六日　日本航空輸送研究所の一四式水上旅客機を岡信男飛行士操縱藤本保機關士同乘、旅客の代議士名川侃市氏及び夫人しづ子さん、井村貴助の三氏搭乘、大阪から別府に向ふ途中、雷雨に遭ひ香川縣小豆郡坂手村沖合に不時著せんとして機體を顚覆旅客三名は輕傷を負つた。

□空中接觸で八氏殉職

六月十七日　横須賀海軍航空隊の練習機二機は横濱本牧沖合で飛行訓練中、空中接觸して兩機とも海中に墜落沒入した。搭乘者左記八氏は殉職した

航空兵曹長大澤憲錄、一等航空兵曹眞壺富司、二等航空兵曹井上信夫、三等兵曹鹿志村義、同塚田健治、三等整備兵曹角皆實、同藤田清次、一等航空兵松川岩男

□ソ聯機の北極圈横斷飛行

六月十八日　ソヴイエト飛行家ヴアンリー・チヤロフ、ゲオルギ、バイドコフ、アレックス・ベルリアコフ三氏は、愛機A・N・T二五型低翼單葉機（九五〇馬力）を操縱劃期的大飛行とも云ふべき、モスコーから北極圈横斷、加州への壯途に上つたが、無著陸六十三時間十七分で米國ワシントン州バンクーバーに到著した。

□熱氣流で滑空機の記錄

六月廿日　日本帆走飛行聯盟の清水六之助滑空士は伊藤式C二型機グライダーを操縱、松下飛行士のクレム機に曳航され大阪府下盾津飛行場を離陸、高度千米で曳索を脫し高度四百米で突然熱氣流を感じそれを利用して上昇飛翔滯空一時間四十三分の記錄を作つた。

□練習飛行中田圃墜落

六月廿三日　明野飛行學校彌富哲夫航空兵少尉は同飛行場空上で練習飛行中、田圃に墜落、重傷後遂に殉職した。

□イヤハート機行方不明

七月二日　世界一周飛行の壯途に上つたアメリカ女流島人イヤハート女子の「空の實驗室」は南太平洋ハウランド島に向つたまゝ消息を絶つたので、米國では軍艦も出動大捜索に全力を盡したが遂にも機影を發見することが出來なかつた。

□低空飛行で砂利船に衝突

七月三日　吳海軍航空隊山口保彥三空曹同渡邊政一氏搭乘の九二式偵察機は夜間飛行訓練中、同隊沖合で低空飛行の際航行中の砂利船に衝突海中に墜落、清邊三空曹は重傷後殉職山本三空曹と輕傷を負つた。

□不時著の刹那民家に激突

七月五日　館山海軍航空隊沖長一二空曹堀江巖一空兵同藤弘正氏搭乘の艦上攻擊機は安房八幡海岸に不時著せんとして民家に激突、搭乘者は重傷を負つた。

□濃霧のため海中に墜落

七月八日　佐世保海軍航空隊所屬飛行機に大藤寅德淵昇二空曹同山口末次三氏搭乘長崎縣北松浦郡津吉村上空で訓練飛行中霧のため海中に墜落、搭乘者は重傷、

□長沼飛行學校長の負傷

七月九日　熊谷飛行學校長澤賢二郎少將は中尾大郎中尉の操縱する九五式練習に同乘仙臺に向ふ途中、密雲に遡ひ低空で飛行中福島縣の東北本線越河附近の桑畑に墜落兩氏は重傷を負つた。

□重爆機模擬爆彈投下

七月十一日　日本愛水協會、東京市聯合防護團では、陸軍航空本部、東京防衞司令部の後援の下に、京橋月島五號地埋立地で水道鐵管及び家屋の爆破演習を行ひ重爆機の模擬爆彈投下などもあつた。

□ソ聯機復も北極經由飛行

七月十二日　ソヴイエト飛行家グロモフユマジエフ、ダニリン三氏はA・N・T二五噸型新造機に搭乘、モスコー郊外シエルコポ飛行場を出發、北極經由北米間無著長距離行の壯途に上つたが、同月十四日サンジヤシント（カルフオルニア州）に著陸した全翔破距離六千六百廿五哩、所要時間六十二時間九分右はサシデイエゴ一步前に於て給油管の故障から同地に著陸したもの。

□國防費に四十七萬圓獻金

七月廿一日　曩に愛國機を獻納した、東京市日本橋區堀留町株式取引員小布施新三郎氏は北支事變に當つて國防費として四十七萬圓を陸軍省に獻金、これを以て愛國機六機を獻納するものである。

□グライダー競技會延期

七月廿日　明治神宮體育大會に本年から新たに參加する豫定であつたグライダー競技並に選手權大會は、北支事變の際とて無期延期となつた。

外交・列國情勢

外交

成都事件

成都領事館再開の使命を帶びて昭和十一年八月上旬上海を出發した成都總領事代理岩井英一及び同行の大阪毎日記者渡邊洸三郎、上海毎日記者深川經二、滿鐵上海事務所員田中武夫、漢口より同行せる瀨戸尙一の五氏は八月十七日四川の重慶に到着したが、支那側に同領事館再開反對の空氣頗る濃厚であり岩井氏が要用のため重慶に待機中であつたが、同行の四氏は重慶に於て護照を取り廿一日成都の大川旅館に投宿した一方同地方に於ける排日空氣が一層深刻になり廿四日成都小城公園に於て「日本領事館再開反對」の示威大會が開かれ激化せる民衆は大川旅館を襲撃し、公安局員の制止を突破して渡邊、深川兩氏は拉致された上遂に慘殺された。田中、瀨戸兩氏は重傷を負つたが漸く公安局に收容されて漸く死を免れた。

北海事件

成都事件に引續き九月三日廣東省北海に在住する邦人藥商中野順三氏は抗日學生の手により殺害された。犯人は舊十九路軍の指導する抗日民衆團體員で九月三日舊十九路軍長蔡廷楷が抗日軍檢閲のため北海に乘り込むや、舊十九路軍將兵の煽動で暴動が起り中野藥房に侵入し中野氏を引きづり出し散々亂打の末虐殺した上店內を目茶苦茶に破壞したものである。

漢口事件

成都、北海事件未解決の折柄九日正午、漢口日本租界河街大正街角、總領事館警察派出所附近を步行中の吉岡庭二郎巡査は突如支那人のため拳銃にて後頭部を狙撃され即死した。

上海事件

次いで廿三日午後八時半頃第三艦隊乘組の八幡一等水兵、田利棄、田港兩二等水兵が宿舍に歸へらんとする途中、至誠堂書店前の海濱路と吳松路角に於て背後から支那人により突如ピストル數發を發射狙撃され田港二等水兵はその場に即死他の二名は重傷を負ひ陸戰隊病院に收容された。

日支南京交渉

成都事件、北海事件の續發に、危機を孕んだまゝ、日支交渉の幕は開かれた。川越大使は九月十三日南京に乘り込み、張外交部長との第一回會談は十五日に行はれた。日本側の態度は、單に成都事件等の個々の問題の解決のみならず、進んでこれが根柢を爲してゐる問題の終局的解決を遂げ、日支關係の全般的調整を招來せんとするにある。これは日支關係が、如何とも致し難い袋地に、踏み入れて居る現狀に鑑み、當然こゝまで行かなければならぬからである。日本側の提議、或ひは內容については、尙ほ今日明瞭にされては居ないが、我等の見るところによれば、次ぎの諸點は、是非遂

してはならぬ。

(一)排日運動の根絶

(二)北支の問題

(三)日支提携の促進

すなはち、第一項については(一)排日團體の解散(二)排日教育の絶滅(三)國民黨の排日的政策の取締り等が要求せらるべく、第二項については、北支に於ける自治體を始め、これに關聯して起り、若しくは起るこあるべき諸問題を、根本的に一掃するに就いての具體的方法の決定が要望せられ、第三項については(一)關稅調整問題(二)日支航空聯絡等が、含まれてゐる。

今日日支兩國間の懸案、つまり日本側から國民政府に對して、解決を要望しつゝある案件は、實に二百數十件の多きに上つて居る。その何れか一つの懸案の解決すらも日支關係の明朗化に、一道の曙光を、與へ得る性質のものなのである。

さて成都事件を契機として、日支交涉の段取とはなつたが、支那に於ける排日風潮は、依然として何等の變化を、認め得ないのみか、ます〳〵惡化の徵さへも窺がはれる。九月十九日には、漢口に於いて見張中の吉岡巡査が、ピストルを以つて射殺せられた。二十三日には、上海に於いて第三艦隊乘組の田港二等水兵が、街上に於いて、射殺された。日本側は、極度に緊張し、陸海外三省の會議は、連日行はれ、最惡の事態までも、豫想されるに至つたのである。川越、張會談は二十三日にも行はれたが、支那側は廣東に西南問題善後處理の爲め、滯在して居る蔣介石に、一々伺ひを立てるのと、その蔣介石自身の態度に煮え切らない點があるのとで、交涉は何等捗々しい進展を見るに至らなかつた。日本からは蔣介石に會ひたい旨を、申込んで居たのであるが、支那側の不誠意に、業を煮やした現地駐在の少壯外交官、武官連は、二十五日上海大使館に聯合協議會を開き、川越大使の交涉打切り、東京引上げを本國政府に打電するにさへ至つた。支那側も、交涉空氣一層の險惡化の事情を見て、御大將に、報告と、出馬とを要請する目的の爲めに、實業部長吳鼎昌、教育部長王世杰、外交部亞洲司長高宗武の連中が、急遽廣東に赴いて、蔣介石と會見すると云ふことになつた。

有田外相聲明

九月廿八日有田外相は外國新聞記者に對し左の如く聲明をなして、日本の眞劍にして重大なる決意を示した。

我邦の外交方針に就ては本年四月二十五日諸君と會見の際詳しく話して置いたが自分は外務大臣就任以來東亞の安定を確保する爲め先づ日支間の國交調整を企圖したのであつた。然るに不幸にして此の企圖は何等具體的成果を齎らすに至らず諸種の懸案は兩國關係に陰慘なる空氣をさへ漂はさせるに至つたのであるが、果然八月二十四日成都に於て日本人二名は兇暴なる暴徒の爲に虐殺せられ他の二名は重傷を負ふの椿事が起つた。而して右事件の交涉が南京に於て開始せらるゝや北海、汕頭、漢口、上海等に於て相次で日本軍人、官吏及在留日本人に對する幾多不祥事件の續發を見るに至つたのである。從來支那當局は排日抗日取締に就き一再ならず嚴明又は誓約したのであるが顧れば僅々十ケ月間に支那に在住する我國民にして兇暴なる手段に依りて危害を蒙るもの實に頻々其の主要なるものゝみにても既に十餘件を數へ在支多數同胞の生命財產は非常なる脅威を受け深刻なる不安を感じて居るのである。

此等不祥事件は多年國民政府及國民黨として其の責任を免れ得ざる排日教育、排日煽動、排日的政策等の當然の歸結と云

ふべきものである。尤も其中のあるものは支那側の云ふ如く或は共產黨分子の日支離間策として行はれたるものかも知れぬとしてもどの途此等諸事件の解決に當つては支那に於ける普通の殺害事件の如く單に事件自體の解決を計るを以て滿足は出來ない、更に進んで此等不祥事件の再發を防止する爲め其根本に遡つて對策を考へねばならぬ。即將來の保障として支那側をして消極的には排日抗日の取締を勵行せしむるは勿論（敦睦令と云様なものゝ效力無きことは現在の事態が之れを證明して居る）積極的には兩國國交の調整を計り排日抗日の根源を除去し場合によつては共產黨に對する措置をも考へねばならぬのである。上述の主旨により帝國政府は此等諸事件の個々の問題に就き解決を計ると同時に國交調整問題に就き今や折角南京政府と交涉中であるが交涉は遲々として進展を示さず、其內に他方に於ては新なる不祥事件が發生すると云ふ狀態である。

我方としては出來得る限り外交交涉に依りて平穩に解決し眞に東亞の安定を確保するに至らむことを希望するものなるも既に國內及在支邦人間には交涉無用論が盛に擡頭しつゝあるは御承知の通りである。然し乍ら交涉は縱令打切るに至るとも在支多數同胞の生命財產を此の上不安の狀態に曝し置くことの出來ないのは勿論であるから此の場合の措置に付ては別に講究せねばなるまいと思ふ。

今次交涉の結果は日支の關係が非常に善くなるか或は又非常に惡くなるかの二途を出ない。從來の樣な曖昧な事態に置かるることを許されないのである。從て支那側としては此の際日本と握手するか否かを選ぶべき重大なる岐路に立ち居るものである。自分としては支那が萬難を排して我方と握手するに至らんことを希望して已まない次第である。

交涉決裂

日支交涉は依然つゞけられたが世間では此の結果に對して甚だ氣乘うすであつた。交涉以來すでに、二ケ月を經るも日本にとつても支那にとつても滿足すべき點に到着し得ず、川越、蔣介石の十月八日の會見に於ても交涉は何等の進展もせなかつた。しかして日支交涉の最後的段階と目されたる處である。從つて其の源を淸むるにあらざれば、只一片の臨時令を以て能く同種事件の再發を防止し得ざることは成都事件と踵を接して九月三日北海事件、同

總領事、淸水通譯官出席、支那側よりは張部長、高司長、董科長等出席し極めて緊張したる空氣の內に行はれた。川越大使は日支交涉に對する帝國政府の不動の方針と確乎たる態度とを闡明し排日抗日の取締りを斷然として要求し併せて從來の交涉において日支間に諒解せる、(一)經濟問題、(二)重要交通問題、(三)顧問問題等について一々これ擧げての確認を求め事務的技術的處理について南京政府と取極めの實行をなす旨通告した。これに對し張部長は實質的問題については發言せず、かくて約二時間に亘り會見を終り去る九月十五日川越大使と張部長との第一次會談以來實に三ケ月に亘つた日支交涉もこれを以て結末を告げた

外務當局聲明

(一)八月廿四日成都に發生した邦人記者虐殺事件は多年南京政府に於て執り來つた排日敎育及び排日的政策の當然の歸結と云ふも過言でなく右は本事件發生の經緯並に事件內容を知悉する者の能く首肯する處である。從つて其の源を淸むるにあらざれば、只一片の臨時令を以て能く同種事件の再發を防止し得ざることは成都事件と踵を接して九月三日北海事件、同

十七日漢口事件、更に二十三日上海事件等が連續發生した事實に徵するも明かである。仍て帝國政府に於ては此等排日不祥事件に關する交涉に當つては通常の支那に於ける殺人傷害事件として取扱ひ單に事件自體の解決を計ることのみを以て滿足せず、更に進んで南京政府をして此等不祥事件の再發を防止せしむる爲の將來の保障としてこの際根本方策を講ぜしむることが肝要であると思考し、之が爲先づ事件發生の根本原因たる排日策動の取締に關して南京政府が誠意實行に當ることを要求する一方、防共問題及び北支問題等兩國交の調整に直接關係ある問題の外、航空連絡、顧問の傭聘、不逞鮮人の取締、關稅の引下等日支間多年の懸案事項をも解決し仍て以て消極的なる排日取締より一步を進めて排日策動の原因たる南京政府の對日態度を是正すると共に日支國交改善に關する同政府の誠意を具體的の問題に付き表示することを慫慂し來つた次第である。

(二)右の如き政府の方針に基き、九月八日須磨總領事と張外交部長との間に豫備的會談が開始せられて以來、川越大使と張外交部長との間に七回、須磨總領事と張外交部長或は高亞洲司長との間に二十數回の折衝が重ねられた結果、概略左記が我方の提案に對する南京側の意嚮である ことが判明し交涉の將來に對して大體の見透しを着け得るに至つたのである。即ち排日取締問題に關しては、國民政府において自發的に一切排日を根絕し、且黨部その他如何なる團體たるを問はず、其の一切の排日的策動に付國民政府に於て責任を負ふと共に、排日取締命令の徹底、排日敎科書の改訂、排日言論の取締等に付進んで必要の措置を執るべき旨を言明し、又國交調整問題中防共問題に關しては全般的には遂に話合が成立するに至らなかつたが、或る部分に關しては意見の一致を見た點があり、又北支の問題に關しても日支協力して不取敢經濟の開發を計るべき原則に付、話合が纏つた。其の他の懸案事項に關しては日支間航空聯絡問題に就き多少の問題があつたのを除けば顧問の傭聘、不逞鮮人の取締、關稅の引下等に付いて既に意見の一致を見たのみならず、事件自體の解決に關しても南京政府は大體我方の要望を容れ成都總領事館も亦近く再開を見るべき形勢となつた。然るに其の後南京政府では時偶々紛東問題の起つたのを口實とし同問題の解決せざる限り南京交涉を成立せしむることと困難であるとの旨を申出で既往の話合をも否認せんとするが如き態度を示し、川越大使の屢次の申入に對しても張部長は殊更に會見を忌避せんとするが如き有樣であつたから同大使に於ては南京交涉と關係の無い事件のためこの上交涉を遷延せしむることは事態を紛糾せしむるに過ぎずと思考し、十二月三日張部長に面會の際同日までに双方意見の一致をみたる點を覺書に認めこれを手交すると共に南京側が右話合の結果を速やかに實行に移さんことを要求した。

(三)交涉の現狀は概略右の通りであるから帝國政府としては右申入れに對する南京政府側の出方を嚴重見守ると共に、今後同政府の措置、特に排日取締に見るべきものなく萬一在支居留民の生命財產の安全を脅かし或ひは帝國の在支權益を侵害するが如き事態が發生する場合には支那現下の狀勢に鑑み臨機必要なる措置をとる方針である。

日獨協定の發表及兩當局の聲明

帝國政府は共産インターナショナルの脅威に對抗し日獨兩國政府間に反コミンテルンの共同戰線を設定するの基本方針を決定し、去る七月下旬から在ベルリン武者小路大使をしてドイツ政府との間に過去三ケ月に亘り愼重交渉を繼續せしめてゐたが、最近に到り兩國政府の意見は急速に接近し去る十月廿三日には協定案に對し假調印をする運びにまで立到つたので、有田外相は直にこれを閣議に報告した上、政府は十一月始め樞密院に御諮詢を奏請し、同月十三日及び十八日の二回に亘る審議委員會の審議を經て廿五日午前の樞密院本會議で滿場一致之を可決した。よつて同協定は廿五日正午（日本時間午後八時）ベルリンにおいて我が武者小路大使と特命全權大使ヨアヒム・フォン・リツベントロップとの間に歷史的調印を完了し、即日効力を發生した。調印式には兩代表の他ドイツ外務省東亞局長エルドマンストルフ公使、フォン・リツベントロップ大使顧問フォン・ラウメル博士、日本大使館から參事官井上庚二郎並に陸軍武官大島浩少將、海軍武官小島秀雄中佐が出席した。右協定の正文左の如し。

共産インターナショナルに對する協定

大日本帝國政府及獨逸國政府は共産インターナショナル（所謂コミンテルン）の目的が其の執り得る有らゆる手段に依る現存國家の破壞及暴壓に在ることを認め、共産インターナショナルの諸國の國內關係に對する干涉を看過することは其の國內の安寧及社會の福祉を危殆ならしむるのみならず世界平和全般を脅すものなることを確信し共産主義的破壞に對する防衞の爲協力せんことを欲し左の通協定せり。

第一條　締約國は共産インターナショナルの活動に付相互に通報し、必要なる協力に依り右措置に付協議し且緊密なる協力に依り右の措置を達成することを約す

第二條　締約國は共産インターナショナルの破壞工作に依りて國內の安寧を脅さるる第三國に對し本協定の趣旨に依る防衞措置を執り又は本協定に參加せんことを共同に勸誘すべし

第三條　本協定は日本語獨逸語の本文を以て正文とす本協定は署名の日より實施せらるべく且五年間効力を有す締約國は右期間滿了前適當の時期に於て爾後に於ける兩國協力の態樣に付了解を遂ぐべし

右證據として下名は各本國政府より正當の委任を受け本協定に署名調印せり

昭和十一年十一月二十五日即ち千九百三十六年十一月二十五日ベルリンに於て本書二通を作成す

大日本帝國特命全權大使
子爵　武者小路　公共

獨逸國特命全權大使
ヨアヒム、フォン、リツベントロップ

共産インターナショナルに對する協定の附屬議定書

本日共産インターナショナルに對する協定に署名するに當り下名の全權委員は左の通協定せり

（イ）　兩締約國の當該官憲は共産インターナショナルの活動に關する情報の交換竝に共産インターナショナルに對する啓發及防衞の措置に付緊密に協力すべし

（ロ）　兩締約國の當該官憲の國內又は國外に於て直接又は間接に共産インターナショナルの勤務に服し又は其の破壞工作を助長する者に對し現行法の範圍內に於て嚴格なる措置を執るべし

（ハ）　前記（イ）に定められたる兩締約國の當該官憲の協力を容易ならしむる爲常設委員會設置せらるべし

共産インターナショナルの破壞工作防遏の爲必要なる爾餘の防衞措置は右委員會に於て考究且協議せらるべし

昭和十一年十一月二十五日即ち千九百三十六年十一月二十五日ベルリンに於て

大日本帝國特命全權大使
子爵　武者小路　公共

獨逸國特命全權大使
ヨアヒム、フォン、リツベントロップ

帝國外務省聲明

十一月二十五日午後十時外務省は左の通聲明した。

（一）　共産インターナショナル所謂コミンテルンはモスコーに本部を構へ、其の創立以來世界革命の根本方針の下に各國に於ける國家組織及社會組織を破壞せんが爲、各種の工作を施し世界平和に多大の脅威を與へて來たが、昨年夏第七回世界大會を開催しファシズム及帝國主義に對抗する爲、第一インターナショナル等との統一戰線結成に邁進するの方針を決議すると共にコミンテルン今後の活動の目標は日本、獨逸、波蘭等であることを明にし尙日本と鬪爭する爲支那共産軍を援助すべき旨を決議宣言した。コミンテルンの實行方法は、右大會後著しく巧妙となつた爲、其の危險性は益々增大した。而してコミンテルンが如何に各國の內部關係に介入し、現存國家の安寧及世界平和に對し甚しき害毒を齎したかは、今次西班牙の動亂に就てのみ之を見るも其の深刻なるに驚かぬ者は無からう。又夙くとも右コミンテルン大會の際ソヴイエト聯邦政府に抗議した國々に於てはコミンテルンの活動の有害に付充分なる認識を有する筈である。

（二）　赤化の侵寇は從來東洋方面就中支那に於て特に著しく、外蒙古、新疆の如きは既に其の慘禍を嘗め、支那本部に於ては共産軍の甚しき跋扈を見つつあり、中國共産黨を通して行はるるコミンテルンの對支活動は前記第七回大會以後頓に活潑を加へて來た。滿洲國に於てもコミンテルンは中國共産黨滿洲省委員會を指導して各地の細胞組織の扶植及匪賊の懷柔誘導に努め、赤色パルチザン隊を各地に出沒せしむる等其の暗躍甚しきものがある。我國に於ては滿洲事變以後極左運動は一時衰微の兆があつたが、コミンテルン大會後は其の決議に從ひ合法場面に潛入して統一戰線運動を展開し共産主義運動再興の素地たらしめんとし再び該運動の擡頭の勢がある。

（三）　帝國政府としては萬古不動の國體を擁護し、國家の安全を確保し進で東亞永遠の平和を維持する爲、從來共産主義的活動に對しては明確なる方針を堅持して來た次第であるが、右の如きコミンテルンの脅威の增大に鑑み、一層嚴重なる防衞措置を講ずるの必要に迫らるるに至つた。然るにコミンテルンの組織及活動は國際的であるから、之に對抗する爲には國際的協力に俟つことが肝要であるが獨逸に於ては昭和八年ヒトラー政權の成立以來峻烈なる反共産主義的政策を實行し來つた一方前述の如く客年のコミンテルン大會は日本及獨逸等を以て今後に於けるコミンテルン活動の主たる對象と爲して居るので獨逸對コミンテルン關係に於て帝國と著しく類似の立場に在るのである。依て帝國政府に於てはコミンテルンに對する防衞工作の第一步として、先づ獨逸と交涉を重ねた結果、遂に本日協定の調印を了し直に實施せられたのである。

（四）　本協定はコミンテルンの破壞工作に對する共同防衞を本旨とするもので、締約國間に於けるコミンテルンの活動に關

する情報の交換、防衛措置に關する協議及實行竝コミンテルンの脅威を受くる第三國に對する共同勸誘に付規定し、別に附屬議定書に於て本協定の施行に必要な具體的方法を定めて居る。

(五) 帝國政府に於ては今後コミンテルンの脅威に對する防衛措置の完璧を期し成るべく多數の國家と協力せんことを欲する次第であるが、是れ一にコミンテルン防衛の目的に出づるものに他ならないのである。

ゲーリング空相の演說

ヘルマン・ゲーリング空相は左の如く論じた。

『反コミンテルン協定によつて日獨兩國が今後相提携するに至つたことは寔に欣快に堪えない、兩國は相協力してボルシエヴイズムの脅威を排撃、全世界の平和確立に寄與しよう。』

獨逸宣傳相演說

ゲツベルス宣傳相は十一月二十五日夜ヒトラー總統及獨逸政府の名に於て全獨逸國民に左記要旨の放送演說を爲した。

『今次日獨協定は共產インターナショナルの爲歐洲及全世界に漲つたる暗雲に對し光明を放つた。本協定は防衛的性質を有するものでコミンテルンが不斷の挑發革命的內亂、無政府的顚覆運動及良心なき民族破壞運動に依り全世界を混亂の深淵に陷れんと試みたのに基くものである本協定は第二條に示すが如く、何國をも敵とするものにあらず、唯コミンテルンの暴威を抑制せんとする意味と目的とを有するに止まり、右は又獨逸現政權樹立以來の確固たる方針である。吾人は本年ニユールンベルグ黨大會に於て共產主義の禍害を高調したが、果せるかな最近の西國事件は戰慄すべき災禍を示したものと言ふべく、今次日獨の二大文明國間に締結せられた協定は世界平和に對する重要なる貢獻を使命とし、且兩締約國は他の挑發の犧牲たらざらんことを明示した全世界は本協定が人道の脅威に對し、最高の文化擁護及世界の眞正なる平和の爲め鬪爭の嚆矢を爲せることを知悉せんことを希望する。云々』

リツベントロツプの聲明發表

ドイツ代表として日獨防共協定に調印したリツベントロツプ駐英大使は十一月廿五日日ドイツ通信社DNBを通じて左の如きメツセージを發表した。

『ボルシエヴイズムは第七回コミンテルン大會において秩序を愛する世界諸國に對し生命をかけて革命を遂行、世界赤北の徹底を期する旨宣言した 最近この爪牙にかゝつた犧牲者はスペインである今回の協定により日本は最早東亞においてボルシエヴイズムの擴大を許さぬであらう。ドイツは歐洲の核心にこの惡疫に對する防壁を築くであらう。やがてイタリーは南方において反ボルシエヴイズムの旗幟を高揚するであらう。予はボルシエヴイズムの危險を認識せざる國々が何時かヒツトラー總統に感謝する時も來るであらうことを確信する。予は他の國々が共に共產インターナショナルの策動を防ぐ必要を悟り、この招請に參加せんことを望んでやまない。かくてこそ世界の仇敵を膺懲し國家內外の平和を確保し古き文化を救ふことが出來るのである。』

協定の波紋

ソヴエート政府は十一月二十一日午後零時五十分帝國大使館に對し左の如く通告した。

『ソヴエート政府は最近形成せられた險惡な空氣に鑑み、其の拂拭される迄は日ソ漁業條約に調印するを得ない。右通告する』

右は日獨協定に對するソヴエートの曲解に基くものであるが、今春締結せる日ソ漁業條約暫行協定の有効期間は本年一杯で、八日外務省に到着せる公電によれば重光大使も七日信任狀捧呈を終了したとのことであるから有田外相はこの機に同大使をしてソ聯政府との間に折衝を開始せしめ速かに調印遷延狀態にある日ソ漁業條約に調印せしむる方針を決定し、ソ聯側 對し年內調印方を嚴談するやう訓電を發したが、かくて十二月八日、九日の兩日に亘つてリトヴイノフ外相を訪問し、漁業條約を成立せしむべき必要を力說勸告したが、これに對しリトヴイノフ外相は、

『漁業條約その他日ソ懸案の解決により日ソ關係改善に一進展を期待して居た折柄日獨協定の出現によつて新事態が惹起されたのであり、この新事態に對應してソ聯政府としては漁業條約についても考へ直さねばならぬ事情に立至つたことは遺憾とするものである。目下右問題について考慮中であるからこれが決定次第通告するからそれまで待つてもらひたいと述べた。

日伊協定の成立

イタリー政府の滿洲國事實承認、エチオピアの帝國公使館廢止とアデス・アベバへの領事館設置及びこれを機會に帝國がエチオピアに於いて有する經濟權益の確保と伸張とを目的とする通商機益獲得の三大項目を包含する日伊協定に於いては先月初頭來日伊兩國間に於いて愼重交涉中のところ最近に至り兩國の意見は完全に一致し、その發表手續に就いても打合せを完了し兩國間に公文交換を終つたので日伊兩國政府は十二月二日午後八時（ローマ時間同日正午）東京及びローマに於いて同時にその內容を世界に公表した。

【日本外務省發表】

『今般帝國政府は在エチオピア公使館を閉鎖しアデス・アベバに領事館を開設するの用意ある旨を伊國政府に通告した 尙伊國政府はエチオピアにおける通商その他に關する帝國の利益を尊重し右に對し特に好意的考量を加ふる事となつた。』

【イタリー外務省發表】

『チアノ外相は駐伊日本大使杉村陽太郎と會見せるが、同會見は永く忘る能はざる所である。今や本協定の成立により日伊の關係は一層友好の度を深めた。地位と環境の相似點を持つ兩洋の黑邦が今後相携へて世界平和に貢獻し得る素地を作つた事を欣快とする。』

マ日本外務當局談 外務當局は十二月二日午後八時右公表と同時に左の如き談話を爲した。

『エチオピアに於ける事態の變化と共に時機を見て在エチオピア帝國公使館を廢し領事館を設置する事を適當と認めたので本年六月末在歐各大使に訓令してエチオピア內の情勢及び聯盟諸國 動向等を注視せしめて居たのであるが、今回伊國政府と交涉の結果之が實現を見るに至つたのである。既に獨逸國政府は本年七月二十五日在エチオピア公使館を廢し總領事館を設置する旨伊國政府に通告してゐるのは當時發表せられた通である。帝國政府が今回領事館設置を決定するに至つたので伊國政府は通商上其他の利益保護に對し好意的考量を與ふる旨言明した次第である。依て右言明を基礎として本邦とエチオピアとの貿易關係の調整の爲商議が開始されるものと期待されて居る。本件以外目下日伊間には何等政治的協定に關する話合等は行はれて居ないのであるが、兩國が文化的交換等に依て現實に親

日潼驛よりの鐵道電信によれば十二月十二日正午西安を距る三十哩の溫泉華清池滯在中の蔣介石等を張學良麾下の十個師が急襲し、蔣の親衞隊五十名を全滅せしめた後蔣等を逮捕、西安に拉致し來つたものである。

蔣介石と共に逮捕監禁されたものは蔣作賓、陳誠、蔣鼎文、朱紹良、蔣方震、錢大鈞でその中錢大鈞（軍事委員長參謀室侍從長）は張學良軍に抵抗し負傷した。

蔣氏の歸還と其のステートメント

西安に被監禁中であつた蔣介石氏は十二月二十五日午後四時洛陽に生還した旨李外交部情報司長より通報あり、次いで十二月二十六日午後零時二十分無事南京に歸還した。

尙蔣氏は十二月二十六日午後三時南京に於て大要左の如きステートメントを發表した。

『飛行機動搖の爲些か疲勞を感じた。余の西安事件に對する見解は余が西安に於て張及楊兩氏に與へたる訓話中に明かである、一切は總て中央の命により決定せんとす、余は統帥の身にあり乍ら其の法を得ざりし爲今回の如き事變の發生を見たるは眞に遺憾に堪へず、殊に殉難の同志及官兵に對しては氣の毒の至りなり、幸ひ中央機宜の措置に依り全國軍政當局其の職責を盡し國家の安全を常態ならしめたのは深く幸とする所なり、而して事變中海內外同胞同志の熱烈なる同情及友邦朝野竝に世界一致輿論の支援は殊に余の感謝措く能はざる所なり。』

日ソ漁業條約暫定取極め締結

漁業條約の暫定取極締結に對し外務當局は昭和十一年十二月二十八日左の通り說明した。

新漁業協定に就ては大體十一月二十日調印せらるる筈であつたが、ソ聯邦に於ては國內手續未了の理由を以てこれが調印を澁り、其後我方の說得にも拘らず、遂に年內に調印の意向がないことが判明したので、こうした場合に處する條約所定の手續に鑑み、且明年度の出漁に支障なからしめる爲「ソ」側と協議を續けた結果、「ソ」側は現行條約及附屬文書の效力を引續き一年間延長する取極に應ずる意向を明かにした。然るに所謂廣田「カラハン」協定は本年末を以て期限が到來するので、此の際條約の效力のみを延長しても、前記協定の效力が延長せられざる以上は、同協定に基き我方が繼續經營しつつある二百八十餘の漁區は安定を得ざることとなるのである。依て此點に就き折衝を重ねた結果、「ソ」聯邦側は所謂安定漁區を明年度の競賣に上程せず且年內に向ふ一年間の契約延長の手續を完了せしめるべき旨を約言した。斯くて二十八日午後「モスコー」に於て第二次暫定取極の調印を見る運びとなつた次第である。

日濠通商新取極め成立

村井シドニー總領事は十二月廿六日濠洲政府に對し日濠間に於ける新取極めの成立に伴ひ明年一月以來日本政府が濠洲に通商上採るべき措置を內容とする通告文を手交し同時に濠洲政府も之を受領せる旨昭和十一年十二月廿七日松井總領事より公電があつた。

右に關し我が外務當局は左の如き當局談を發表した。

外務當局談

曩に濠洲聯邦政府は本年五月下旬我綿布及人絹布に對し輸入許可制度を採用し且禁止的高率關稅を賦課した爲本邦と濠洲との通商關係は極めて不安なる狀態に陷つたので帝國政府は通商擁護法に基く昭和十一年勅令第百二十四號の規定に依り本年六月下旬濠洲品に對する關稅の增徵及輸入許可制を以て之に對應するのやむを得ざるに至つた。帝國政府は日濠兩國通商關係の改善を顧念し前記對應措置實施後と雖も濠洲政府が右措置を撤回するに於ては何時にても商議に應ずるの用意ある旨を聲明したが、不幸にして同國政府は帝國政府の採りたる右對應措置を不當とし七月初旬我綿布及人絹布のみならず他の本邦品に對し更に廣汎なる輸入許可制を實施するに至り事態は倍々惡化のやむなきに至つた。

爾來濠洲政府當局と在「シドニー」帝國總領事との間に屢々非公式會談が行はれたるも時機未だ熟せず、何等の結果を見なかつたが、八月下旬に至り濠洲政府は稍々從來の主張を緩和し本年よりの前記織物の輸入量及之に適用すべき稅率につき具體案を提議して來つたが、我方の主張と相距ること猶遠かつたので帝國總領事は九月中旬該提案は帝國政府の受諾し得ざる所なる旨を回答した。

その後十一月中旬に至り商議は再開せられたが交涉は進捗を見なかつたので我方は濠洲織物市場の情勢を考慮し濠洲向綿布及人絹布自制の原則を承認すると共に同國への輸入量及之に適用すべき稅率につき前記九月初旬の濠洲政府提案に比し更に一層の讓步方を要求する一方本邦への濠洲羊毛輸入量についても制限の已む無き所以を明にし、日濠双方に於て受諾し得べき數量につき討議をかさねたが意見が容易に一致せず更に紆餘曲折をへて十二月下旬に至り彼我の意見一致をみた。

日印通商交涉成立

四月十二日日印兩國代表者間に「イニシアル」せられた議定書案は追て倫敦に於て正式に締結せられ昭和十五年三月三十一日迄効力を有することとなる筈である。右議定書案の內容は三月三十日期間滿了に依つて終了した議定書と大體同樣であるが左の點に於て異つて居る。

一、日本は每年印度棉花百萬俵の購入に對し綿布二億八千三百萬碼を輸出することを得るが棉花購入が百五十萬俵に達するときは棉布の輸出は最高量三億五千八百萬碼迄增加せられる。

二、或る一年の棉布の輸入超過數量は翌年

西安事件

蔣介石急襲拉致さる

善關係を溫めつゝあるは周知の通である。尙今般伊國政府と滿洲國政府との間に在奉天伊國總領事館開館に關し話合が成立した趣であるが右と本件在エチオピアの領事館設置とは別に關聯は無い右は誤解もある模樣であるから特に附言する次第である。』

▽イタリー外相メッセーヂ發表

イタリー外相チアノ伯は十二月二日日伊協定成立に際し左のメッセーヂを朝日新聞に託し日本國民に傳達方を依頼した。

『氣品高き日本國民に對し衷心よりの挨拶を送るは余の欣快とするところである。余は日本國民が有する智的、精神的天賦、建設的天稟及び國家の幸福のために最大の犧牲を拂ふに躊躇せざる最高の愛國心を高く評價せんとするものである。アヂス・アベバ日本領事館開設に對する認可狀をイタリー政府に要求せんとする日本帝國の決定に對してはファシスト政府及び國民は深くこれを多としその意義の重大性を認識する、かゝる友好的かつ健全なる現實主義は經濟政治、文化の各分野に於ける兩國の關係を一層密接ならしめることを確信する。』

の「クオータ」から控除せられるのであるが超過を許される數量を二千萬碼から二千五百萬碼に增加する。

三、舊議定書中の色物を(イ)捺染と(ロ)反染又は糸染とに二分し各品種間の割當は次の比率に依る。

生無地	四割
緣付生地	一割三分
晒	一割
捺染	二割
反染又は糸染	一割七分

四、綿「フエンツ」は「クオータ」から除外せられる。但し日本は印度に對する綿「フエンツ」の輸出を年八百九十五萬碼に制限し、印度は該品の輸入稅率を從價三割五分以上に引上げぬことに同意する

尙客年十月二十一日英國側から日本に對して爲された日印通商條約廢棄の通告は去る十三日附撤回せられたので同條約は引續き効力を有することとなつた。又右兩商條約を少くとも新議定書の終了の日迄其の効力を存續せしめる爲に必要な措置を執ることに付ても兩國代表者間に意見の一致を見た。

永代借地權の撤廢

治外法權の最後の名殘りである永代借地權の撤廢については駐日大公使を通じ各關係國との間に交涉を進めてゐたがその結果英、米、西との間に合意が成立し、之に伴ふ公文の交換を三月廿五日午後外務省に於て行つた。而して右取極めの結果安政五年以來八十年の永きに亘り英米西國人の享有して來た永代借地權は五年後卽ち昭和十七年に解消し、所有權及借地權に變更され日本人同樣の待遇を受けるわけである。

汕頭事件

五月二十二日午前十一時頃汕頭帝國領事館警察署巡査靑山淸は日本旅館より日商神州洋行の二階に移轉せる處間もなく戶籍係と稱する一巡長來り彼是訊問がましきことを始めたるを以て靑山は移轉のことに付ては豫め支那市政府に通報し置きたるも事を面倒にせざる爲懇切に取扱ひ所持の領事館の證明書を示し歸らしめたり然るに十一時半過八名の巡警來り神州洋行の店前にて長銃を裝塡し又は拳銃を拔き本人出頭せずば拘引すべしとてどや々々二階に踏み込み來れるを以て靑山巡査は無斷侵入の不法を難詰し追出さんとしたる處巡警等は靑山及居合せたる本島人巡査黃祥珙を散々毆打し暴行を加へ本局に連行せり、領事館警察に於ては全員は急を聞き馳け付け嚴談に及び後に山崎領事出向 激論の末漸く同夜九時四十分に至り身柄を引受け歸還せり。

乾岔子島事件

かねてより滿ソ北國境黑龍江の滿洲國領乾岔子、金阿穆河兩島をソ兵が不法古據し居りたるに對し、滿洲國よりソ聯に抗議し居つたのが六月卅日乾岔子島南水道にソ聯軍艦三隻が不法侵入し來りしため、一隻を擊沈し一隻に多大の損害を與へた。かくて同事件が一時日滿對ソ聯邦間の重大問題化し、非常な險惡な狀況を呈したが結局ソ聯側は兩島より撤退することになつて事件が落着した。

關東軍發表

今卅日午後三時乾岔子島南側水道にソ聯船艇三隻侵入し來り、不法にも該地警戒中の日滿軍に射擊を加へたるを以て、我軍が已むなくこれに應戰しその一隻を擊沈、一隻には多大なる損害を與へ他の一隻をして逃走するの已む無きに至らしめたり。日本及滿洲國政府に於ては直ちにソ聯に對し嚴重なる抗議を提出せり。

北支事變

七月七日夜半北支平漢線、蘆溝橋附近に惹起された第廿九軍の我が軍に對する不法射擊問題に端を發した北支事變が、我が政府の「不擴大、現地解決」主義の和平方針にも拘らず支那側の挑戰行爲により天津事件通州に於ける邦人虐殺事件となつて現れた。又一方上海方面に於ては中央軍が停戰協定を無視し停戰區域内に侵入し來り挑戰的行爲をとりたるにより八月中旬同地方の狀勢は益々惡化し、支那空軍は不法にも我が特別陸戰隊並に黃浦江上にある我が軍艦に對し不法空爆を行ひたるにつき隱忍に隱忍を重ねてゐた我が海軍もここに重大決意を固むるの已むなきに至り十四日來我が方は空陸とも多大の損害を敵に與へた。

帝國政府聲明　（七月十一日）

相踵く支那側の侮日行爲に對し、支那駐屯軍は隱忍靜觀中の處、從來我と提携して北支の治安に任じありし第二十九軍の七月七日夜半蘆溝橋附近に於ける不法射擊に端を發し、該軍と衝突の已むなきに至れり。爲に平津方面の情勢逼迫し、我在留民は正に危殆に瀕するに至りしも、我方は和平解決の望を棄てず事件不擴大の方針に基き局地的解決に努力し、一旦第二十九軍側に於て和平的解決を承諾したるに不拘、突如七月十日夜に至り彼は不法にも更に我を攻擊し、再び我軍に相當の死傷を生ずるに至らしめ、而も頻に第一線の兵力を增加し、更に西苑の部隊を南進せしめ、中央軍に出動を命ずる等武力的準備を進むると共に、平和的交涉に應ずるの誠意なく、遂に北平に於ける交涉を全面的に拒否するに至れり。以上の事實に鑑み今次事件は全く支那側の計畫的武力抗日なること最早疑の餘地なし思ふに北支治安の維持が、帝國及滿洲國にとり緊急の事たるは、玆に贅言を要せざる處にして、支那側が不法行爲は勿論排日侮日行爲に對する謝罪を爲し、及今後斯かる行爲なからしむる爲の適當なる保證をなすことは東亞の平和維持上極めて緊要なり。

仍て政府は、本日の閣議に於て重大決意を爲し、北支派兵に關し政府として執るべき所要の措置をなす事に決せり。

然れども東亞平和の維持は帝國の常に顧念する所なるを以て、政府は今後共局面不擴大の爲平和的折衝の望を捨てず、支那側の速なる反省によりて事態の圓滿なる解決を希望す、又列國權益の保全に就ては固より十分之を考慮せんとするものなり。

外務當局發表　（七月九日）

蘆溝橋事件に關し外務當局は九日左の通り發表した。

一、北支駐屯軍は北淸事變に關する千九百一年の連名公書第九條、北淸事變に關する最終議定書第九條、及天津還附に關する日淸交換公文第四節の權利に基き別段地域を限定する事なく演習を爲すことを例とし居れり、卽ち戰鬪射擊（實彈を用ふ）を行ふ場合の外は演習に付き個々の場合に通達を必要とせず、然るに實際上は住民の不安を除く爲め好意的に演習を事前に通知することゝし居り今次は戰鬪射擊に非るも事前に通知に發出しある筈

二、我駐屯部隊が不法射擊を受けたる龍王廟附近（蘆溝橋北側地區は民家乏しく地形上演習好適地）は昨年の秋季演習を始め殆ど我軍の練習場の如くなり居るものなり、又蘆溝橋上下流の水定河磧は西方高地を目標とする實彈射擊場として屢々利用せられつゝあり。

三、我駐屯軍は最近は定期檢閲を前に控へ居る關係上連日連夜本件關係地域に於て演習を實施しつゝありたるものなり。

四、七日午後十一時過我部隊が支那側の不法射撃を受けたる際は演習中の事とて實彈は萬一の場合に備へたる一兵當り一發位の數に當る彈藥を部隊長の手元に保管し居りたるのみ（輕機關銃用實彈は一函のみ）にして支那軍に應射するに足らず依て部隊長は直に傳令を豐臺駐屯部隊に派し應援を求め豐臺駐屯部隊は實彈は勿論歩兵砲をも携へて現場に急行支那軍に對抗し八日午前五時の射撃交換の際我軍は初て實彈を以て應戰したるものなり。

五、支那側は我兵が蘆溝橋村の城壁内に入込みたりと稱し居るも我軍は常に兵に對し局地的事件の發生を警め居るのみならず平常は我兵が城門を通過せんとするも少數なる時は支那側の城門歩哨に理由なく停止を命ぜられ概ね事端發生を避けて通過を强行せざる慣行となり居り、加之演習地より該城門に近付くには土手上に線路を有する鐵道を二回横切るを要し一二の兵が紛れて該門に近付くことあり得ず、又夜間故意に危險を求めて城内に入らんとすることもあり得べからず。

「ハル」國務長官聲明

七月十七日夜米國政府は「ハル」國務長官の名を以て、現下の國際時局に對する米國政府の一般方針に關し、左の如き聲明書を發表した。

世界各地に發生せる切迫緊張せる事態は一見單に隣接諸國のみを渦中に捲込むに過ぎざるが如きも、究極に於ては右は全世界に取り避け得べからざる關心事なり武力に依る敵對行爲若は其の脅威を伴ふが如き情勢は、一切の國家の權利及利益に重大なる影響又は其の脅威を感ぜしむるものなり。何れの地域に於けるを問はず、重大なる敵對行爲の發生にして、何等かの形に於て米國の權益又は義務に影響せざるが如きものゝ存在はあり得ず。

際問題及情勢に關する米國政府の立場に關し聲明を爲すに付て正當の理由を有するのみならず、事實上其の義務ありと思考す。米國は平常に平和維持を强調しつゝあり。吾人は

(一)國家的及國際的自制
(二)一切の國家が政策遂行の爲にする武力行使又は他國に對する內政干渉の回避
(三)平和的協定に依る國際諸問題の調整
(四)國際協定の忠實なる遵守

を主張せり。

(五)條約神聖の原則を遵守すると共に、條約修正の必要ある時は、相互扶助及和解の精神を以て實行せらるべき、秩序ある手續に依り之が修正を爲し得ること

(六)一切の國家に依る他國の權利の尊重及既存義務の履行

(七)國際法の復活及强化を信ず。吾人は

(八)國際經濟安定の增進に對する諸方策

(九)國際貿易障碍の輕減又は排除

(十)商業上の機會均等及一切の國家に對し平等待遇の原則の勸奬等を主張す。

又

(十一)軍備の制限及維持は必要なるを信じ、他の諸國の行ふ軍備縮少又は擴張に順應して米國自身の武力を縮少又は擴張するの用意あり。更に吾人は他國との同盟又は米國を紛爭の渦中に投ずるが如き約束（「エンタングリング・コミットメンツ」）を避くるものなるも平和的且實際的方法に依り前記諸原則擁護の爲協調的努力を爲し居ること

を信ずるものなり。

蔣介石の聲明要旨

（七月十九日）

北支事變に關する七月十九日蔣介石の聲明全文は左の通りなり。

一、中國が對外平和と國內統一維持の根本政策を遂行して居たる矢先突如として蘆溝橋事件發生して全國民を深刻なる憤激の狀態に投込み、全世界に一大危惧の念を與へて居る。此の事件の齎すべき諸結果は、中國の存在自體と東亞平和とを脅威するに至つた。此の重大時期に際して種々なる質問照會に答へ予は次の如く述べ度いと思ふ。

中國民族は終始和平を愛好する。國民政府としては國內政策に關しては常に國內統一の維持を目標とし、且對外關係にては他の諸國との相互尊重と共存を目標として居る。

縱令弱國たりとは言へ、若し不幸にして最後の關頭に立ち到つたならば、我々の爲すべきことは唯一即ち我が全國民の精力の最後の一滴迄も傾倒して國家存立の爲抗爭すべきのみである。而して一度右抗爭が開始された時には時間上、情勢上からも中途にして止み以て和平を求めることは許されない。一旦紛爭の始まつた後に和平を求めれば我國家の屈從、我民族の全滅を意味する條件を甘受せねばならぬ。願くは全國民は「隱忍の限度」とは此限度を越えた後に於て惹起される犧牲の範圍を充分認識されんことを希望する一度段階に到達すれば我々は常に究極の勝利を期待しながら如何なる犧牲を拂ふも最後迄戰ひ拔かねばならぬ、若しも我々が躊躇し徒に一時の偸安を貪ることあらば我々は永久に滅亡する外はない。

二、我々は戰爭を自ら求めるものではなく唯我々の生存を脅威する攻撃に對して應戰するものである。全國民は中央政府が目下防衛手段準備の眞最中であることを了解され度い、縱令弱國であると雖我等は民族の完整を維持して國家の存立自體を保障することを怠ることは出來ない。

三、今回の事件に付いて我等の態度は次の四件に要約出來る。

イ、如何なる解決案も中國の領土完整と主權を侵害することを許さず

ロ、冀察政務委員會の地位は、中央政府の決定する所にして如何なる非合法的變更をも許さず

ハ、冀察政務委員會委員長の如き中央政府の任命した地方官憲が、外部の壓迫に依つて罷免さるゝことに同意することは出來ぬ

ニ、第二十九軍の現在の駐屯區域に對して如何なる制限をも甘受し得ない

北平大使館聲明

（七月二十八日）

七月二十八日午前、左記趣旨の英文聲明書は在北平日本大使館より同地各大公使館及外國通信員に送付された。

「事態を平和的解決に導かんとせる我方最善の努力に拘らず、支那側は屢次の不法行爲就中廊坊及廣安門事件に依り遂に我方が自衞上必要なる行動を執るの已むを得ざるに至れるは極めて遺憾なり。然れども我方は戰禍の北平に及ばざらんことを希望するものにして、支那側挑戰行爲に依り、城內に於て行動するの已むを得ざる場合に至ることあるも、一般非戰鬪員に損害を及ぼさゞる爲あらゆる手段を講ずべし」

尙北平英國大使館は外國通信員に對し、事變に關し日本側との聯絡極めて良好で、日本側に於て外國人に危害の及ぶ惧ある市

內戰關を阻止するの措置を講じたるを多とする旨を述べたといふ。

帝國政府聲明

上海地方の情況が愈々緊迫し兩國の交戰が展開し始めたので政府は十四日夜半緊急臨時閣議を開き左の如き聲明を發表した。

聲明

帝國夙に東亞永遠の平和を冀念し日支兩國の親善提携に力を効せること久しきに及べり、然るに、南京政府は排日抗日を以て國論昂揚と政權强化の具に供し、自國國力の過信と帝國の實力輕視の風潮と相俟ち、更に赤化勢力と苟合して反日侮日愈々甚しくす以て帝國に敵對せんとするの氣運を釀成せり、近年幾度か惹起せる不祥事件何れも之に因由せざるなし、今次事變の發端も亦此の如き氣勢が其の爆發點を偶々永定河畔に選びたるに過ぎず、通州に於ける神人共に許さざる殘虐事件の因由亦玆に發す、更に中南支に於ては支那側の挑戰的行動に起因し帝國臣民の生命財產既に危殆に瀕し、我居留民は多年營々として建設せる安住の地を涙を呑んで遂に一時撤退するのやむなきに至れり 顧みれば、事變發生以來屢々聲明したる如く、帝國は隱忍に隱忍を重ね事件の不擴大を方針とし、努めて平和的且局地的に處理せんことを企圖し、平津地方に於ける支那軍屢次の挑戰及不法行爲に對しても、我が支那駐屯軍は交通線の確保及我が居留民保護の爲め眞にやむを得ざる自衞行動に出でたるに過ぎず、而も帝國政府は夙に南京政府に對して挑戰的言動の即時停止と現地解決を妨害せざる樣注意を喚起したるにも拘らず、南京政府は我が勸告を聽かざるのみならず却て益々我方に對し戰備を整へ、嚴存の軍事協定を破りて願みることなく、軍を北上せしめて我が支那駐屯軍を脅威し、又漢口上海其の他に於ては兵を集めて愈々挑戰的態度を露骨にし、上海に於ては遂に我に向つて砲火を開き帝國軍艦に對して爆撃を加ふるに至れり、此の如く支那側が我國を輕侮し不法暴虐至らざるなく、全支に亘る我が居留民の生命財產危殆に陷るに及んでは、帝國としては最早隱忍其の限度に達し、支那軍の暴戾を膺懲し以て南京政府の反省を促す爲今や斷乎たる措置をとるのやむなきに至れり、此の如きは東洋平和を念願し、日支の共存共榮を翹望する帝國として衷心より遺憾とする所なり、然れども帝國の庶幾する所は日支の提携に在り、之が爲支那に於ける排外抗日運動を根絶し、今次事變の如き不祥事發生の根因を芟除すると共に日滿支三國間の融和提携の實を擧げんとするの外他意なく固より毫末も領土的意圖を有するものにあらず、又支那國民をして抗日に踊らしめつゝある南京政府及國民黨の覺醒を促さんとするも無辜の一般大衆に對しては何等敵意を有するものにあらず、且列國權益の尊重には最善の努力を惜まざるべきは言を俟たざる所なり。

我が海軍見解表明

海軍では暴戾支那に對し斷乎自衞行動を採ることに決定、十四日その旨重大聲明するところあつたが、同日午後九時第二上海事變と帝國海軍の態度につき左の如き當局の見解を表明した。

今次事變勃發以來帝國海軍は事件不擴大の方針に格遵し、只管事變の北支以外の支那各地に波及することを防止すべく最も愼重公正なる態度を以て凡ゆる努力を傾注し來れり、然るに支那各地に於ける抗日、侮日は支那當局の再三の取締誓約

にも拘らず日を追うて陰險且熾烈と爲り邦人經營工場の操業不能、商取引の停止は固より、食糧品其の他の生活必需品の不賣、邦人雇傭支那人に對する脅迫、追放果ては在留邦人に對し需骨なる侮辱、壓迫等凡ゆる惡辣なる手段を弄する一方青島、漢口、上海始め中南支沿岸各地に於ては邦人居留地を包圍して陣地を構築し兵力を增加し露骨なる挑戰的態度を執り、第二、第三の通州殘虐事件は何時何處に發生するや測り難き情勢に立ち至りたり、斯かる情勢に處して我方は中南支各地に事端發生し、全支に動亂の波及せんことを未然に防止せんことを冀ひ、多年苦心經營の結晶たる我が財產、權益を一時遺留し難きを忍んで先づ揚子江沿岸の居留民引揚を行ひ、更に南支方面居留民の引揚を開始せり然るに支那側は我方の斯の誠意を敢へて曲解し日本與し易しと見たるか、却つて益々抗日、侮日行爲挑戰的態度を增長して自ら戰を求めんとするに至れり、斯くて上海に於ては停戰協定を潜りて保安隊に僞裝せる軍隊を進入せしめ、或は夜陰に乘じて陣地を構築するは未だしも、遂には制服公務中の帝國海軍々人を國際公道たる租界越界路上に於て慘殺するの暴擧に出でたり、本事件に於ける支那側の不法極まる暴虐行爲は日支兩國委員及工部局員立會の實地檢證に依り夙に明白に確認せられたる處なるに拘らず支那側は其の非を全く顧みず却て公然租界包圍の陣地を强化し兵力を集中し我方に對する積極的進攻の態度を示し事態は頓に緊迫せり、然れども我方は尙事態收拾の望みを棄てず且多數各國人の居住する國際都市たるの故を以て自重に自重を重ね殊に十三日列國大使より日支兩國に對し調停の申出もあり、我方としては之に對して審議中なりしため昨日來の支那側の不法攻擊に對しては單に應戰するに止め支那機の租界低空飛行に對しても特に攻擊を加へざりしが、本十四日午前十時頃より支那飛行機十數機は我艦船、陸戰隊本部及び總領事館等に對し連續爆擊を加へ來るの不法を敢てし暴戾言語に絕せり、惟ふに支那側は背信暴虐を事とし我一步を隱忍すれば彼二步を增長し矯慢其度を加へ會婪飽くことを知らず、狂暴實に止まるところなし、今や帝國海軍は其の自衞上必要且有効なる手段を執らざるの餘儀なきに立至れり。

列國の元首

國名	元首稱號	
アフガニスタン	モハメット・ザヒール・シャー	王
アメリカ合衆國	フランクリン・デー・ルーズヴエルト	大統領
アルゼンチン	ジュスト將軍	大統領
アルバニア	アーメッド・ツオグー世	王
アイスランド	クリスチャン十世（丁抹國王）	王
イギリス	ジョージ六世	王
イタリー	イマニュエル三世	王
イラク（メソポタミヤ）	ガージー一世	王
イラン（舊ペルシヤ）	リザ・ガーン・パラビー	シャー
ウルグワイ	カビリエル・テラ博士	大統領
エクアドル	フエデリコ・パエス	臨時大統領
エジプト	ファルーク	王
エストニア	コンスタンチン・パエツ	假大統領

エチオピア　ハイレ・セラシエ一世　皇帝
オーストリア　ウイルヘルム・ミクラス博士　大統領
オランダ　ウイルヘルミナ　女王
キューバ　ドクトル・フエデリコ・ヲレド・ブリユー　大統領
ギリシヤ　ゲオルギス二世　王
グアテマラ　ホルセ・ウビコ將軍　大統領
コスタ・リカ　レオン・コルテス・カストロ　大統領
コロンビア　アルフオンゾ・ロペツ　大統領
サルバドル　アナスタシオ・ソモサ將軍　大統領
シヤム　アナンダ・マヒドン　王
スキス　ギゼツペ・モツタ　大統領
スエーデン　グスタフ五世　王
スペイン　マヌエル・アサーニヤ・デイアス　大統領
ソヴイエト聯邦　ミカエル・イワノイウイツチ・カリーニン　聯邦中央執行委員會議長
チエツコ・スロヴキア　ペネシユ　大統領
中華民國　林森　國民政府首席
チリー　アルツーロ・アレサンドリ　大統領
デンマーク　クリスチヤン十世　王
ドイツ　アドルフ・ヒツトラー　總統
ドミニカ　ラフアエル・ツルジロ將軍　大統領
トルコ　ガジ・ムスタフ・ケマル・スタタルグ　大統領
ニカラグア　アナスタシオ・ソモザ將軍　大統領
ネバール　ブクラム・シユ　臨時大統領
ノールエー　ハーコン七世　王
ハイチ　ヴインセント　大統領
ハンガリー　ニコラス・フオン・ホルチ　攝政
パナマ　ホアン・デモステネス・アロセメナ　大統領
パラグワイ　ラフアエール・フランコ　臨時大統領
ヒリツピン　マヌエル・ケソン　大統領
フインランド　キヨスチ・カルリオ　大統領
フランス　アルベール・ルブラン　大統領
ブータン　マハラジヤ・ワンチーク　王
ブラジル　ヴアルガス博士　大統領
ブルガリア　ボリス三世　ザー
ベネズエラ　エレアサール・ロベス・コントレラス　大統領
ベルギー　レオポルト三世　王
ペルー　オスカル・エレナヴイデス　大統領
ホンヂュラス　テイブルコ・カリエス　大統領
ボリヴイア　ヘルマン・ブツシユ　臨時大統領
ポーランド　モスチツキー　大統領
ポルトガル　カルモナ將軍　大統領
滿洲國　康德　皇帝
メキシコ　ヘネラル・ラーサロ・カールデナス　大統領
モナコ　ルイ二世　公
モロツコ　ムライ・モハメツド　サルタン
ユーゴースラビア　ピーター二世　王

ラトヴア　アルバート・クビーシス　大統領
リスアニア　アントナ・スメトナ　大統領
リヒテンスタイン　フランシス一世　公
リベリア　バークレー　大統領
ルーマニア　カロル二世　王
ルクセンブルグ　シヤーロツテ　大公

在本邦各國大公使

（昭和一一・八・一）

アメリカ合衆國（赤坂區榎坂町一）
　特命全權大使　ジヨージ・クラーク・グルー
アルゼンテイン（麹町區内山下町一ノ一帝國ホテル内）
　特命全權公使　エドウアルド・ラセド
アフガニスタン（麹町區五番町二番地）
　特命全權公使　ハピブラー・カン・タルツイ
イギリス（麹町區五番町一）
　特命全權大使　サー・ロバート・クレーギー
イタリー（芝區三田三ノ二八）
　特命全權大使　ジアチン・アウリチ
イラン＝舊ペルシヤ＝（麻布區材木町五五）
　特命全權公使　臨時代理公使　ウイダー・バツゲ
ウルグアイ（麹町區内幸町一ノ三大阪ビル内）
　臨時代理公使　（チリー國臨時代理公使處辨）
オランダ（芝區榮町一）
　特命全權公使　ゼネラル・イエーセー・バブスト
カナダ（赤坂區表町三ノ一六）
　臨時代理公使　イー・デイー・マクグリーア
キユバ（麹町區内幸町一ノ三大阪ビル内）
　臨時代理公使　アメリコ・クルス・イ・フエルナンデス
コロンビア（麹町區内山下町一ノ一帝國ホテル内）
　代理公使　レオボルド・ボルダ・ロルダン
シヤム（赤坂區臺町二）
　特命全權公使　グラ・ミトラカム・ラクサス
スイス（芝區下二番町一番地）
　特命全權公使　ヴアルダー・ツルンヘール
スエーデン（赤坂區氷川町五二）
　特命全權公使　ウイダー・バツゲ
スペイン（麻布區市兵衞町一ノ二）
　臨時代理公使　ホセ・ルキス・アルヴアレス
ソヴイエト聯邦（麻布區狸穴町一）
　特命全權大使　ミハイル・スラウスキー
中華民國（麻布區飯倉六ノ一四）
　特命全權大使　許世英
チエツコスロヴアキア（麻布區簞笥町六七）
　特命全權公使　フランテイシエック・ハヴリチエック
チリー（麹町區内幸町一丁目大阪ビル）
　特命全權公使　マルテイン・フイゲロア・アンギータ
デンマーク（麹町區丸ノ内仲通八號館内）
　特命全權公使　ルドルフ・ベルトウ・シユリーヌ
ドイツ（使町區永田町一ノ一四）
　特命全權大使　ドクトル・ハーバート・フオン・デイルクゼン
トルコ（澁谷區代々木山谷町二三八）
　特命全權大使　ゲレド
ノールエー（麹町區有樂町一ノ一）
　特命全權公使　フイン・コーレン
フインランド（麻布區簞笥町六二）
　特命全權公使

フーゴー・ヴアルヴアンネ
フランス（麻布區富士見町三三）
特命全權大使　シヤルル・アルセーヌ・アンリ
ブラジル（赤坂區表町三ノ二）
特命全權大使　ペートロ・レオン・デローソ
ベルギー（麹町區三年町三）
特命全權大使　レーランス・パツソンピエール
ペルー（麻布區廣尾町二）
特命全權公使　ドクトル・リカルド・リヴエラ・シユレイベル
ポーランド（芝區三田綱町九）
特命全權公使　タデウス・ロメール
ポルトガル（麹町區三年町一）
特命全權公使　テー・アール・ドメロー
滿洲國（麻布區櫻田町五〇）
特命全權大使　阮振鐸
メキシコ（麹町區永田町二ノ二一）
特命全權公使　フランシスコ・ホータ・アギラール
ルーマニア（麻布區材木町五五）
特命全權公使　ジヨルジユ・ジエー・ストイセスコ

各國閣員

英國（一二・五・二八）

首相　ネヴイル・チエンバレン
樞相　ハリフアックス子
藏相　サー・ジヨン・サイモン
內相　サー・キングスレー・ウツド
大法官　ヘールシヤム卿
陸相　ダツフ・クーパー
外相　アンソニー・エデン
自治領相　マルコルム・マクドナルド
植民相　ウエリアム・オームスピー・ゴア
空相　スウインントン子
スコツトランド相　ウオター・エリオツト
保健相　レズリー・ホア・ベリシヤ
商相　オリヴアー・スタンレイ
文相　デ・ラ・ワー伯
農相　モリソン・スコツトランド
勞働相　アーネスト・ブラウン
鑛務相　ウイリアム・オムスピー・ゴア
國璽尙書　デイー・ラ・ウオア卿
國防相　サー・トーマス・インスキップ
海相　サー・サミユエル・ホーア
運輸相　レズリー・バージン
土木相　サー・フイリツプ・サスーン
印度相　ゼツトランド侯

佛蘭西（一二・六・二二）

首相　カミーユ・ショータン
副首相　レオン・ブルーム
無任所相　アルブール・サロー
無任所相　モーリス・ヴイオレツト
無任所相　ポール・フオール
國防相　エヅアール・ダラデイエ
外相　イヴオン・デルボス
法相　ヴアンサン・オリオル
內相　マルクス・ドルモア
藏相　ジヨルジユ・ボンネ
海相　セザール・カンバンキ
空相　ピーエル・コツト
文相　ジヤン・ゼイ
土木相　アンリ・クウイユ
商相　フエルナン・シヤプサル
農相　ジヨルジユ・モネ
植民相　モーリス・ムテ
勞働相　アンドレ・フエヴリエ
恩給相　アルベール・リヴイエール
郵便電信電話長官　ジヤン・ルバ

保健相　マルク・リユカール

獨逸

總統兼首相　アドルフ・ヒツトラー
外相　コンスタンチン・フオン・ノイラート男
內相　ウイルヘルム・フリツク
國防相　ウエルネル・フオン・ブロンベルク
航空相　ヘルマン・ゲーリング
遞信相　オーネゾルゲ
交通相　ドルブシユーラー
財政相　ルツ・シユーウエーリン・フオン・クロスイツク伯
勞働相　フランツ・ゼルテ
經濟相　ヒヤルマール・シヤハト博士
教育相　ベルンハルト・ルスト
宗務相　ハンス・ケルル
法相　フランツ・ギユルトナー
國民啓蒙宣傳相　ヨゼフ・ゲツベルス
農業相　ワルテル・リヒアルト・ダレー
大審院長　エルヴイン・ブムケ

伊太利

首相兼植民相　ムソリーニ
內務大臣　アキルレ・スタラーチエ
外務大臣　チアノ伯
大藏大臣　パオロ・タオン・デイ・レヴエル
文部大臣　チエザレ・マリーア・デヴエツキ
陸軍大臣　デイヴアルチスモン
海軍大臣　フエデリーコ・バイストロツキ
空軍大臣　ドメニコ・カヴアニアリ
農林大臣　ヂウゼツペ・ヴアルレ
土木大臣　エドモンド・ロツソーニ
交通大臣　ルイヂ・ラツザ
司法大臣　アントニオ・ステフアノ・ベソニ
宣傳大臣　アツリーズ・ソルミ
　アルフイエリ

ソヴイエト聯邦

人民委員會議長　モーロトフ
國家計畫委員會議長　メジラウク
外務　リトヴイーノフ
國防　ヴオローシロフ
內務　イエーゾフ
外國貿易　ローゼンゴリツ
重工業　ルヒモウイチ
林業　ローボフ
輕工業　リユビーモフ
食料品工業　ウエイツエル
國內商業　チエルノフ
農務　テイホン・ユールキン
交通　カガノーウイチ
水運　パホーモフ
通信　ベルマン
財務　チユバール

墺地利（一一・一一・三）

首相兼國防相　クルト・シユシユニック博士
外相兼保安相　ルードウイツヒ・ヒユルゲルト
副總理　ハンス・ペルンター
文相　ヨセウ・レツシユ
社會事業相　ピーター・マンドルフアー
農林相　アドルフ・ビルツ
法相　グレーゼ・ホルステナウ
內相　ルドルフ・ヌマイエル
藏相　ウイルヘルム・タウヘル
商相　テイホン・ユールキン

ハンガリー（一一・一〇・一一）

首相兼農相　コロマン・デ・ダランイ
外相　ゴルマン・デ・カンヤ
內相　ニコラス・ヂ・コズマ
國防相　レーダー將軍
產業相兼貿易相　デ・ボル・ネミスツア
文敎相　ホーマン博士
法相　デ・ラザアール博士

藏　相　デ・ファビシイ博士

白耳義（一二・七・一五）

首　相　ヴアン・ゼーランド
藏　相　マクオ・レオ・ジエラール
國防相　デヴエズ
經濟相　フイリツプ・ファン・イサツケール
工部失業　ド・マン
外　相　スパーク
勞働司法　ドラッド
無任所　ヴイクトル・マイストリオ
同　ヴアンデヴエルデ
同　イーマンス
同　プレー

波蘭（一〇・一〇・一三）

首　相　ワレリアン・スラヴイエツク
外　相　ベツク
陸　相　カスプシツキー
軍事監　シミグリー

芬蘭（一二、三、一三）

首　相　カジヤンデル
外　相　ルドルフ・ホルステイ
文　相　マンテレ
藏　相　タンネル
大藏副大臣兼外務副大臣　キツチング
農　相　ジユチラ
社會相　フンニネン
遞　相　リソナ
遞相副大臣　カスケンマア
內　相　ブハツカ
國防相　アクサラ
商工相　キリネン
法　相　セルラチウス

ルーマニア（一二・二・二三改造）

首相兼內相　タタレスコ
外　相　アントネスコ
法相兼農相　サツス
陸　相　パウル・アンゲレスコ將軍
無任所相　ゾユツラ
同　ユカ

希臘（一〇・一一・三〇）

首相兼外相、陸海相　ジヤン・メタクサス
內　相　トリアント・フイラコス
空　相　バブリゴプロス
藏　相　マンサヴイノス
經濟相　カネロブロス
農　相　ベナキス
公安相　デカゾス
法　相　ログテチス
文　相　パラノス

アルバニア（一一・一一・一〇）

首　相　ココ・コツタ
外　相　エクレム・リボホヴア

和蘭（一二・五・二五）

首相兼外相　ヘンドリック・コライン
藏　相　ヴイルド
國防相　ヴアン・デイク
內　相　ヴアン・ボーエン
文　相　ソロテマルレル・ド・ブルーネ
經濟相　ステーンブルー
法　相　ゴセリング
植民相　ウエルター
治水相　ヴアン・ブーレン
社會相　ロムメ

葡萄牙

首　相　サラザル博士
外　相　アルミンド・ロドリゲス・モレイロ
植民相　ホセ・シルヴエストル・フエレイン
ボツサ

瑞典（一一・九・二八）

首　相　ペルアルビン・ハンソン

外　相　リチヤード・サンドラー
法　相　カルル・グスタフ・ウエストマン
國防相　アウグスト・ニルソン
藏　相　エルンスト・ヨハネス・ウイグフオルス

西班牙（一一・一一・五）

首相兼陸相　フランシスコ・ラルゴ・カバリエロ
無任所相　ホセ・ヒラール
同　マリアノ・ルイス・フネス
同　アサスタシオ・デ・グラシヤインダレシオ・ブリエト
海相兼空相　ユリオ・アルヴアレス・デル・ヴアヨ
外　相　アンヘル・ガラルサ
內　相　ホアン・ネグリー
藏　相　ヘスス・ヘルナンデス
文　相　ヴイセンテ・ウリベ
農　相　ホセ・アントニオ・アギルレ
土木相　ベルナルド・ヒネル・デロス・リオス
遞　相　ホアン・トマス・イ・ピエラ
勞働相　ガルシヤ・オリヴイエル
法相　カルロス・エスプラ
宣傳相　ホアン・ペイロ
工　相　ホアン・ロペス
商　相　フエデリカ・モスセニー女史
保健相　ニーゴルフオル

諾威（一〇・三・二〇）

首　相　マリベートル
外　相　ベネシユ

チエコ・スロヴキア

首　相　ウヅノヴイツチ
陸　相　チヴコノウイツチ
無任相　マリコヴイツチ
同　スレキツチ

南阿聯邦

總　督　ピー・ダンカン
首　相　エム・ヘルツオホ
司法相　ジエー・シー・スムツツ
大藏相　エヌ・シー・ハーベンハ
內　相　ピー・グローブラー
鑛務相
商　相　フーリー

勃牙利

首相兼外相　クセヴアノフ
內　相　クレスロフスキー
藏　相　ペトロ・トドロフ
陸　相　プトロ・ツラテフ
商相兼農相　コスタ・バヤヂエフ
文　相　ヤナキ・モロフ
工相兼鐵相　ニコラス・ツアシヤリエフ

埃及

首相兼內相　ムスタハ・エルナバス・パシヤ
外　相　ワシフ・ブートロス・ガリ・パシヤ
藏　相　マクラム・エバイド
商工相　アブデル・サラム・ファーミー・グマ・ベー
土木相　オスマン・マハラム・パシヤ
法　相　ガレブ・パシヤ
交通相　ノクラシ・パシヤ

中華民國（一〇・一一・六）

行政院長　蔣介石　考試院長　鄒魯
立法院長　孫科　司法院長　居正
監察院長　于右任

新西蘭（一〇・一二・五）

首相兼外相　サヴエジ
藏相兼關稅相　W・ナレシユ

内　相　W・パリー
商工相　D・サリヴアン

濠洲聯邦

總　督　サー・アレクサンダー・ホーアルスヴエン
首　相　ジヨセフ・アロイジ・ライオンズ
外　相　ビアース
内　務　バタートソン
保健歸還兵相　ヒユーズ
商務相　メンヂース・ページ・ホワイト
貿易及關稅相（メンヂース商相代行）

米國

國務長官　コーデル・ハル
財務長官　ヘンリー・モーゲンソー
陸軍長官　ハリー・ウツドリング
司法長官　ホーマー・エス・カミングス
遞信長官　ヂエームス・エイ・フアーリー
海軍長官　クロード・エイ・スワンソン
内務長官　ハロルド・エル・イクス
農務長官　ヘンリー・エイ・ウオーレス
商務長官　ダニエル・シー・ローパー
勞働長官　フランシス・パーキンス女史

墨西哥（一〇・六・一五）

外　相　エドアルド・ヘイ將軍
内　相　シルバーノ・バルバ・ゴンサーレス
藏　相　エドウアルド・スアーレス
陸海相　アンドレス・フイゲロア將軍
農務相　サトウルニーノ・セデイーヨ將軍
遞　相　フランシスコ・ホータ・ムヒカ將軍
經濟相　ラフアエル・サンチエス・タピア將軍
文　相　ゴンサーロ・バスチス・ベーラ
聯邦區長官　コスメ・イノホーサ
勞働局長官　ヘナロ・バスケス
農務局長官　ガビーノ・バスケス
衞生局長官　醫學博士ホセ・シウロツブ將軍
山林局長官　ミゲル・アー・ケベード技師
共和國檢事總長　シルベストレ・ゲレーロ
聯邦及直轄區檢事總長　ラウール・カステヤーノス

カナダ（一〇・一〇・二三）

首相兼外相　マツケンジー・キング
藏　相　チヤールス・ダニング
商　相　W・D・パラー
國防相　アイアン・マツケンジー
無任所相　ラウル・ダンデユランド
國務長官　フアン・ロセレマス
司法長官　エスタニスラオ・カルタニア
内務長官　カルロス・ベラエス
文部長官　ルシアノ・マルテイネス
勞働長官　アグスティン・クルース子
遞信長官　ラフアエル・サントス・ヒメネス
大藏長官　ヘルマン・ウバルテル・デル・リーオ
土木長官　ラウール・シメオン
衞生長官　マヌエル・メンシーア
農務長官　ホセ・ゴメス・メナ
商務長官　エウダルド・ボネー

ヴエネズエラ（一一・六・）

内務大臣　アレハンドロ・ララ
外務大臣　エステバン・ヒル・ボルヘン
大藏大臣　アルベルト・アドリアニ
陸海軍大臣　イサイーアス・メデイナ大佐
勸業大臣　ネストル・ルイス・ベレス
土木大臣　トマス・バカニンス
文部大臣　ロムロ・ガリエゴス
衞生社會大臣　エンリケ・テヘイラ
農務大臣　アルフオンソ・メヒン

遞信大臣　オノリオ・シガラ

パラグアイ（一一・二・二五）

内　務　ゴメス・フレイレ・エステベス
外　務　フアン・ステフアニチ
臨時陸將軍　フアン・ステフアニチ（兼任）
司法文部　アンセルモ・ホベル・ペラルタ
農務大臣　ベルナルデイノ・カバリエロ
大臣大臣　ルイス・フレイレ・エステベス

ボリヴイア（一〇・一一）

外　相　エンリケ・フイノト
内　相　アルフレード・ペニヤランダ
藏　相　エクトル・オルマチユア・サリエス
文　相　ホセ・マリア・グテイエレス
國防相　ギリエルモ・アニエス
陸　相　ベルナルド・ナバハス・トリーゴ
勸業相　ホセ・エスパーダ・アギーレ

コスタリカ（一一・七——成立）

外　相　トビアス・スニーガ・モントウフアール
藏　相　ラウル・グルデイアン
内　相　ルイス・フエルナンデス・エレリカルド・パチエコ・エレ
勸業相
文　相　ルイス・ドブレス・エセ

衞生相　アントニオ・ペニア・チヤバリーア
警務相（陸相に相等し大統領自ら當る）

ウルグアイ（一〇・三・一九）

外　相　ホセ・エスバルテーロ

秘露（一一・四・一二）

首　相　モンターニユ
外　相　デ・ラ・フエンテ

伯剌西爾

陸　相　ジヨアン・ブメス
農　相　ブラカ

コロムビア（一二・三・二）

外　相　ガヴリエル・ターベイ
藏　相　ゴンサーロ・レストレーポ
内　相　アルベルト・リエラス・カマルゴ
工　相　アレハンドル・ベルナーテ
文　相　ユリオ・バスコン

サルバドル（一二・一・一）

外　相　ドクトル・マヌエル・コルデロ・レイエヌ

アルゼンチン

外　相　サーペドラ・ラーマス
藏　相　アセベード
内相兼土木相　アルバラード

ニカラグア

外　相　マヌエル・コルデロ・レイエス

イラク（一二・六・二四）

首　相　ヒクマト・ソレイマン
藏　相　モハメツド・エル・マハモード
檢經遞信　アバス・メヂ
法　相　アリ・マハモウド・チエイキ
文　相　アリ・ジヤフアー・アマンヂ

土耳古

首　相　ジエネラル・イスメツト・パシヤ

チリー

外　相　ホセ・ラモン・グテイエレス・アイエンデ

シヤム

内閣は本年七月二十八日論辭職を爲し、開會中の議會は之を承認したり。

閣員は『滿洲國』欄に記載しあり參照を乞ふ。

滿洲國

滿洲帝國

日滿兩國年次對照

昭和七年	大同元年	昭和十年	康德二年	昭和十二年	康德四年
昭和八年	大同二年	昭和十一年	康德三年	昭和十三年	康德五年

帝制實施

滿洲國は建國二周年記念日の昭和九年三月一日を以て帝制を實施し、溥儀新皇帝は順天安民の大義によつて帝位に即かせられ同時に年號を康德と改められた。建國以來日尙淺きにも拘らず、よく幾多の艱難を突破し無秩序を整理克服して近代國家としての組織を整備し、新しき東亞の立憲君主國として萬世不易の國礎を定められた事はまことに世界にその比を見ざる驚異的の事實である。顧れば、昭和六年九月十八日、滿洲事變突發して遂に張學良の政權崩壞し、我軍によつて暫らく各地の治安は維持されてゐたが、此の間滿蒙人士の中に五族協和の安樂土建設の爲め新政權の樹立を希望する者次第に增加し、昭和七年二月中旬頃より建國促進宣傳運動漸次熾烈となり、先づ東北行政委員會の成立を見、同年三月一日淸朝紀元の吉日をもつて、民主共和政體を標榜する滿洲國の成立宣言を行ふに至り、年號を大同と稱し首都を長春(新京と改む)に奠めた。同月九日宣統帝溥儀氏を迎へて執政となし、同日文武百官を集めて盛大なる執政式を行ひ、各部官制を定め即日各官吏を任命し、三月十二日、日・英・米等十七ケ國に對し外交部總長より滿洲國獨立の通電を發した。同年九月十五日我國の正式承認となり、爾來日滿の提携は愈〻緊密を加へ、國內の無秩序は著々として整理され、近代國家の體容いよ〳〵備ふるに至りて三千萬民衆の熱意は更に一步を進め、溥儀執政を仰いで帝制實現を請願するに至つたのである。即ち帝制創設は所謂淸朝の復辟にあらずしてあくまでも三千萬民衆の民意を天意となして行はれたものである。即位改元の大典は三月一日新帝都新京において嚴肅裡に擧行せられ、之れに先立ち渙皇帝は南郊に昊天を祭るべく同日午前八時順天廣場の式典場に親臨、郊祭の儀を行ひ、次いで正午より帝府內勤民樓において登極の儀を行はせられ、即位改元の詔を渙發せられた。禮宴は二日三日と續けられ、五日には軍旗親授の式を擧げ、かくて民衆の歸趨を一にし、不磨の國基を開き王道政治の基礎愈〻堅きを加ふるに至つたのである。

即位詔書

奉

天承運ノ皇帝詔シテ曰ク

我國、基ヲ肇メ國ヲ滿洲ト號シテ玆ニ二年、天意ノ愛民ニ原ツキ友邦ノ仗義ニ賴リ、其始メ凶殘虐ヲ肆ニシ安忍兵ヲ阻ミ無辜天ニ籲フモ能ク自ラ振フコトナカリシニ、日本帝國群疑ヲ冒シテ避ケス、衆咎ヲ犯シテ辭セス、事ハ解懸ニ等シク功ハ援溺ニ同シ、朕親躬ヲ以テ乃チ天眷ヲ承ケ、我ニ尺柄ヲ假シ我ニ丘民ヲ授ケ、流亡漸ク集マリ其謳歌ヲ興シ、兵氣潛銷シ化シテ日月ト爲ル、夫レ皇天親ナク惟タ德是レ輔ク、而シテ生民欲アリ主ナケレハ乃チ亂ル位ヲ正サシコトヲ籲請シ、詢謀僉ナ同シ、敢テ天命ヲ敬承セサランヤ、其大

同三年三月一日ヲ以テ皇帝ノ位ニ即キ改メテ康德元年トナシ仍ホ滿洲ノ國號ヲ用ユ、世難未タ艾キス何ソ敢テ苟安セン、有ラユル守國ノ遠圖、經邦ノ長策ハ常ニ日本帝國ト協力同心以テ永固ヲ期スヘシ、凡ソ統治ノ綱要成立ノ約章ハ一ニ其舊ノ如シ、國中ノ人民種族各異ルモ此レヨリ心ヲ推シテ腹ニ置キ利害與ニ共ニス、此言ヲ渝エサル皦日ノ如キ有リ、朕カ命ヲ替ルコトナカレ咸ヲシテ聞知セシム

御名御璽

康德元年三月一日　國務總理大臣
各部大臣

日滿國交に關する詔書

(一〇、五、二)

朕登極ヨリ以來亟ニ躬カラ日本皇室ヲ訪ヒ修睦聯歡以テ積慕ヲ伸ヘンコトヲ思フ今次東渡宿願克ク遂ク、日本皇室懇切相待チ備サニ優隆ヲ極メ其臣民熱誠迎送亦禮敬ヲ殫竭セサルナシ衷懷銘刻殊ニ忘ルル能ハス深ク惟フニ我國建立ヨリ以テ今玆ニ逮フマテ皆友邦ノ仗義盡力ニ賴リ以テ不基ヲ奠メタリ、玆ニ幸ニ親シク誠悃ヲ致シ復タ意ヲ加ヘテ觀察シ其政本ノ立ツ所仁愛ニ在リ敎本ノ重スル所忠孝ニ在リ、民心ノ君ヲ尊ヒ上ニ親ム天ノ如ク地ノ如ク忠勇公ニ奉シ誠意國ルハ莫シ、故ニ能ク內ヲ安ンシ外ヲ攘ヒ信ヲ講シ鄰ヲ恤ミ、以テ萬世一系ノ皇統ヲ維持スルコトヲ知レリ、朕今躬カラ其上下ニ接ス、咸ナ至誠ヲ使テ相結ヒ、氣同シク道合シ依賴淪ラス、朕　日本天皇陛下ト精神一體ノ如シ、爾衆庶等更ニ當ニ仰イテ此意ヲ體シ、友邦ト一德一心、以テ兩國永久ノ基礎ヲ奠定シ東方道德ノ眞義ヲ發揚スヘシ、則チ大局ノ和平人類ノ福祉必ス致スヘキナリ凡ソ我カ臣民、務メテ朕カ旨ニ遵ヒ以テ萬禩ニ垂レヨ、此ヲ欽メ

御名御璽

康德二年五月二日

國務總理大臣　鄭孝胥
宮內府大臣　沈瑞麟

帝位繼承法公布に關する詔書

我カ滿洲帝國ハ日本帝國ノ仗義援助ニ賴リ斯ノ洪業ヲ開キ斯ノ邦基ヲ奠ム是ヲ以テ朕登極以來仰テ眷命ノ本ツク所ヲ體シ俯シテ國脈ノ繫ル所ヲ念ヒ有ユル守國ノ遠圖經邦ノ長策悉ク日本帝國ト協力同心以テ益〻兩國不可分離ノ關係ヲ敦ウシ一德一心ノ眞義ヲ發揚シ夙夜勤求敢テ或ハ懈ルナシ今玆ニ帝位繼承法ヲ制定シ繼體附託ノ重キニ於テ厥ノ法典ヲ定メ諸ヲ久遠ニ示ス大寶儼然建中昜ラザル實ニ日本天皇陛下ノ保佑ニ是レ賴ル夫レ皇建極アリ惟レ皇極トナリ天道ヲ裁成シ地宜ヲ輔相シ民ノ父母トナリ仁以テ其ノ政ヲ行ヒ義以テ其ノ法ヲ制スレバ則チ重熙治覆燾ノ下永ク君民一體ノ美ヲ懋ニシ當ニ天地ト其ノ德ヲ合シ日月ト其ノ明ヲ合スベキナリ凡ソ朕ガ繼統ノ子孫及ビ臣民タル者深ク肇興ノ基其ノ繇テ奠ル所ト

受命ノ運其ノ繇テ啓ク所トニ鑒ミ咸ナ朕ガ萬方ヲ撫綏シデ宵旰倦マザルノ心ヲ以テ心トナシ聿修惟レ愼ミ欽戴替ルナクンハ即チ垂統萬年必ズ無疆ノ休ヲ享ケ克ク長治ノ福ヲ保タム

御名御璽

康德四年三月一日

國務總理大臣　宮內府大臣

帝位繼承法

第一條　滿洲帝國帝位は康德皇帝の男系子孫たる男子永世之を繼承す。

第二條　帝位は帝長子に傳ふ。

第三條　帝長子在らざるときは帝長孫に傳ふ、帝長子及び其の子孫皆在らざるときは帝次子及び其の子孫に傳ふ、以下皆之に例す。

第四條　帝子孫の帝位を繼承するは嫡出を先にす帝庶子孫の帝位を繼承するは帝嫡子孫皆在らざるときに限る。

第五條　帝子孫皇在らざるときは帝兄弟及び其の子孫に傳ふ。

第六條　帝兄弟及び其の子孫皆在らざるときは帝伯叔父及び其の子孫に傳ふ。

第七條　帝伯叔父及び其の子孫皆在らざるときは最近親の者及び其の子孫に傳ふ。

第八條　帝兄弟以上は同等内に於て嫡を先にし庶を後にし長を先にし幼を後にす。

第九條　帝嗣精神若くは身體の不治の重患あり又は重大の事故あるときは參議府に諮詢し前數條に依り繼承の順序を換ふることを得。

第十條　帝位繼承の順位は總て實系に依る

附則　本法は公布の日より之を施行す。

面積・人口

面積

滿洲帝國の領域は、奉天、吉林、龍江、熱河、濱江、錦州、安東、間島、三江、黑河、興安東、興安南、興安西、興安北の十四省の行政區劃よりなる。

滿洲國は西は蒙古及支那本土に、東北は露領西比利亞に、南は朝鮮及黃海に接し西は東經一一五度二〇分より東は東經一三五度二〇分に至り、南は北緯三八度四〇分より發して北は北緯五三度五〇分に達し、その面積は一、三〇三、一四三平方粁に及び地勢は西部及び北部なる遼河、松花江流域に屬する平原部、他は東より南部に亘る山岳地である。而して其の中央部に地勢最も高く略々南北に兩分されてゐる。南方の傾斜は長白山脈を起點として遼東及び朝鮮南部に向ひ、北方の傾斜は一部分黑龍江に延びてゐる。黑龍江及其の支流である松花江嫩江、烏蘇里江、豆滿江、鴨綠江、遼河等の大水系は、農耕の灌漑、舟筏の利便を惠み河流に沿うて大平原を展開してゐる。

（單位平方粁）

地方別	面積
全省	一、三〇三、一四三、二五二
吉林省	八九、九一〇、三五二
龍江省	一二五、五三六、五五一
黑河省	一〇九、八一三、〇〇五
三江省	一〇七、五四四、六〇八
濱江省	一四三、四三五、四六三
間島省	二九、三九四、八九六
安東省	四八、二一五、七三五
奉天省	八五、五四六、二二四
錦州省	三九、四六一、六四三
熱河省	九六、五八五、四七〇
新京特別市	一九一、〇〇〇
哈爾濱特別市	九三九、五〇〇
北滿特別區	一、一四七、一六七
興安西省	八〇、四一〇、五五二
興安南省	七九、〇三一、五一五
興安東省	一〇九、七五一、〇〇七
興安北省	一六〇、三九六、七三一

（康德二年三月二十五日附公報）

人口

（單位千人）

昭和元年	全人口	二六、一三四
	（內）日本人	一九二
	內地人	一五四
	朝鮮人	三三、四七三

省名	戶數	人口
奉天	一、五一五、四四一	九、六五九、七九一
吉林	七五六、〇八六	五、一〇一、九九六
龍江	三六三、六九六	二、二五三、九五四
濱江	一四〇、九五〇	四、四〇八、三三五
熱河	五九三、四一五	二、七八二、八一八
錦州	六四八、一〇四	三、五六〇、二一四
安東	四〇九、四二四	二、七九一、五三七
三江	一六七、九一六	九七六、五〇三
間島	一〇四、三一三	六一五、四八四
黑河	一二、三一〇	五五、〇四五
興西	九三、一四〇	四五四、一五五
興南	九五、一二一	六二一、五〇四
興東	一三、九三三	一、三三五
興北	一三、七二〇	七〇、四五七

（康德二年末）

本數字は關東州を含む。

省別人口

同二年	二六、七八五	一九九	五五七
同三年	二八、〇三四	二〇六	五七六
同四年	二九、一九八	二一七	五九六
同五年	二九、五七五	二一九	六〇五
同六年	二九、八四一	二三六	八三一
同七年	三〇、七三八	二六九	五九七
同八年	三〇、八八〇	一四八	六六二
同九年	三〇、八八〇	一六八	七〇一

本數字は關東州を含む。

省別人口

（康德二年末）

省名	戶數	人口
奉天	一、五一五、四四一	九、六五九、七九一
吉林	七五六、〇八六	五、一〇一、九九六
龍江	三六三、六九六	二、二五三、九五四
濱江	一四〇、九五〇	四、四〇八、三三五
熱河	五九三、四一五	二、七八二、八一八
錦州	六四八、一〇四	三、五六〇、二一四
安東	四〇九、四二四	二、七九一、五三七
三江	一六七、九一六	九七六、五〇三
間島	一〇四、三一三	六一五、四八四
黑河	一二、三一〇	五五、〇四五
興西	九三、一四〇	四五四、一五五
興南	九五、一二一	六二一、五〇四
興東	一三、九三三	一、三三五
興北	一三、七二〇	七〇、四五七
新京特別市	一三、九三三	一、三三五
哈爾濱特別市	二七、三九九	六、〇六六
北滿特別區	一一、八三八	二三、一七四

外務省東亞局統計表に據る。

（昭和十年末）

	內地人	朝鮮人	臺灣人	計
總數	三三三、〇〇五	八二三、三一九	一、一五六、六四六	二四八、四二六
奉天	一五三、六二五	一二一、〇六一	二九、三二二	二六四、八一五
安東	一八、五三三	九二、〇九〇	一、一五六、六四六	一一〇、六二三
錦州	七、三九三	一、四九七	一九六	九、〇九〇
吉林	五〇、〇八三	四四、三二五	三四	九四、四四三
間島	九、九七七	四六、九六一	一三	四七九、四三八
濱江	四、六〇五	五四、八七〇	一二	五九、八八六
三江	四、八〇〇	一八、七五三	一一	二三、五四四
龍江	二、九二七	四、四三二	三	一六、七七二
黑河	一、〇四七	七七九	一	一、八二六
熱河	五、一二一	七七八	三	五、九〇三
興安西	二四六	一九六	—	四四二
興安南	一、一九五	二、六六七	—	三、八六二
興安東	六七九	一四八	—	八二七
興安北	一、〇六九	一七八	—	一、二四七
新京特別市	二三、四七八	四、二六五	一二六	二七、八五九

氣象

國內の氣候は地勢の關係からして、南と北において甚しい相違がある。南部の遼東半島は海洋の影響をうけて日本內地の東北地方よりも凌ぎ易いが、北滿洲は大陸的氣候の特徵を現して寒暑の差が烈しい。每年四月下旬から五月にかけて急に氣溫は高くなり內地の春に當るが、六七八の三ケ月は日中の氣溫三十五度以上に達し、內地の同緯度地方よりも高溫となる。然して九月に入れば氣溫は下降し下旬には早くも結霜を見るに至り、十月からは冬になり、翌年三月までは寒氣が續き、北方內陸では、零下三十度に降ることも稀でない。滿洲では俗に「三寒四溫」と稱し、三日許りの寒い日と四日位の溫い日とが週期的に循環して、滿洲の冬を比較的住み易いものとするが、これは低氣壓と高氣壓が三、四日每に交替

することによつて起る現象である。降水量は頗る寡く年量平均六〇〇耗内外で、然もその過半が高溫な七、八の兩月に降るために植物の生育旺盛で、滿洲の農作は全くこれによつてゐる。

平均氣溫及降水量（康德二年度）

	氣溫（攝氏）			雨量
	平均	一月	四月	七月	十月	全年
奉天	七・三(一)一三・〇	八・六	二四・八	九・〇	六七五
新京	四・六(一)一六・九	六・五	二三・四	六・五	六四五
大連	一〇・二(一) 五・一	九・二	二三・五	一三・六	六〇九
牡丹江	二・四(一)三〇・四	五・一	二一・九	五四・八	五三
海拉爾	(一)二・五(一)三四・三	〇・七	二一・〇	〇・二	三三
齊々哈爾	二・七(一)三〇・五	四・五	二三・〇	五・二	五一〇
哈爾濱	三・一(一)三〇・二	五・六	二三・二	五・五	六五五

備考　本表中(一)符は零度以下を示す。

政府組織

帝制實施と共に從來の政府組織法は廢止され、新に政府組織法を制定して康德元年三月一日附をもつて發布された。

組織法

第一章　皇帝

第一條　滿洲國は皇帝之を統治す

帝位の繼承は別に定むる所に依る

第二條　皇帝の尊嚴は侵さるゝことなし

第三條　皇帝は國の元首にして統治權を總攬し本法の條規に依り之を行ふ

第四條　國務總理大臣は皇帝を輔弼し其の責に任ず

第五條　皇帝は立法院の翼贊に依り立法權を行ふ

第六條　皇帝は法律に依り法院をして司法權を行はしむ

第七條　皇帝は公共の安寧福利を維持增進し又は法律を執行する爲命令を發布し又は發布せしむ

但し命令を以て法律を變更することを得ず

第八條　皇帝は公安を維持し又は非常の災害を防遏する爲立法院を召集することを得ざる場合に於ては參議府に諮詢し法律と同一の效力ある勅令を發布することを得

但し此の勅令は次の會期に於て立法院に報告すべし

第九條　皇帝は官制を定め官吏を任免し及其の俸給を定む

但し本法又は法律に依り特に定めたるものは此の限りに在らず

第十條　皇帝は戰を宣し和を媾じ及條約を締結す

第十一條　皇帝は陸海軍を統率す

第十二條　皇帝は勳章其の他の榮典を授與す

第十三條　皇帝は大赦特赦減刑及復權を命ず

第二章　參議府

第十四條　參議府は參議を以て之を組織す

第十五條　參議府は左の事項に關し皇帝の諮詢を承けて其の意見を上奏す

一、法律
二、帝室令
三、勅令
四、豫算及豫算外國庫の負擔となるべき契約を爲すの件
五、列國交涉の條約約束及皇帝の名に於て行ふ對外宣言
六、重要なる官吏の任免
七、其の他重要なる國務

第十六條　參議府は重要なる國務に關し意見を上奏することを得

第三章　立法院

第十七條　立法院の組織は別に法律の定むる所に依る

第十八條　凡て法律豫算及豫算外國庫の負擔となるべき契約を爲すの件は立法院の翼贊を經ることを要す

第十九條　立法院は國務院に建議することを得

第二十條　立法院は人民の請願を受理することを得

第二十一條　立法院は皇帝毎年之を召集す

常會の會期は一箇月とす但し必要ある場合は皇帝之を延長することを得

第二十二條　立法院は總議員三分の一以上出席するに非ざれば開會することを得ず

第二十三條　立法院の議事は出席議員の過半數を以て之を決す可否同數なるときは議長の決する所に依る

第二十四條　立法院の會議は之を公開す但し國務院の要求又は立法院の決議に依り祕密會とすることを得

第二十五條　立法院の議決せる法律豫算及豫算外國庫の負擔となるべき契約を爲すの件は皇帝之を裁可し公布施行せしむ

立法院法律案豫算案又は豫算外國庫の負擔となるべき契約を爲すの件を否決せるときは理由を示して之を再議に付し仍ほ改めざるときは參議府に諮りて其の可否を決す

第二十六條　立法院議員は院内に於ける言論及表決に關し院外に於て責任を負ふことなし

第四章　國務院

第二十七條　立法院は諸般の行政を掌理す

第二十八條　國務院は民政、外交、軍政、財政、實業、交通、司法及文教の各部を以て之を組織す

第二十九條　國務院に國務總理大臣及各部大臣を置く

各部大臣は主管事務に付其の責に任ず

第三十條　國務總理大臣及各部大臣は何時たりとも立法院會議に出席し及發言することを得、但し表決に加はることを得ず

第三十一條　國務に關する詔書勅書法律及勅令には國務總理大臣及主管各部大臣之に副署す

第五章　法院

第三十二條　法院は法律に依り民事及刑事の訴訟を審判す、但し行政訴訟其の他の特別訴訟に關しては法律を以て別に之を定む

第三十三條　法院の構成及法官の資格は法律を以て之を定む

第三十四條　法官は獨立して其の職務を行ふ

第三十五條　法官は刑事又は懲戒の裁判に依るの外其の職を免ぜらるることなし又其の意に反して停職轉官轉所及減俸せらるることなし

第三十六條　法院の對審判決は之を公開す但し安寧秩序又は風俗を害する虞あるときは法律に依り又は法院の決議を以て公開を停止することを得

第六章　監察院

第三十七條　監察院は監察及審計を行ふ

監察院の組織及職務に關しては法律を以て別に之を定む

第三十八條　監察官に監察官及審計官を置く

第三十九條　監察官及審計官は刑事裁判若しくは懲戒處分に依るの外其の職を免ぜらるることなし又其の意に反して停職轉官及減俸せらるることなし

附　則

第四十條　本法は康德元年三月一日より之を施行す

第四十一條　皇帝は當分の間參議府の諮詢を經て法律と同一效力を有する勅令を發布し豫算を定め及豫算外國庫の負擔となるべき契約を爲すことを得

第四十二條　敎令院令其の他何等の名稱を

用ひたるに拘はらず從前の法令は總て仍ほ其の效力を有す

重要職員一覽

尙書府	大臣	袁金鎧
祕書官長		高木三郎
宮內府	大臣	熙洽
	次官	入江貫一
侍從武官處	武官長	張海鵬
侍衞處	長	工藤忠
參議府	議長	臧式毅
	副議長	橋本虎之助
	參議	田邊治通
	同	矢田七太郎
	同	齊默特色不丕勒
	同	胡嗣瑗
	同	沈瑞麟
	同	榮厚
	祕書局長	荒井靜雄
國務院	國務總理大臣	張景惠
總務廳	長官	星野直樹
	次長	神吉正一
內務局	長官	大津敏男
外務局	長官	大橋忠一
駐日大使館	大使	阮振鐸
興安局	總裁	扎噶爾
	恩賞局	局長
	審計局	局長官
	治安部	大臣
	民生部	次長
	大臣	
	產業部	大臣
	次長	
	外局 林野局	局長
	畜產局	局長
	經濟部	大臣
	次長	
	外局 專賣總局	局長
	交通部	大臣
	次長	
	技官	
	外局 郵政總局	局長
	司法部	大臣
	次長	
	最高法院	院長
	最高檢察廳	廳長
	第一軍管區(奉天)司令官	干琛澈
	第二軍管區(吉林)司令官	吉興
	第三軍管區(齊々哈爾)司令官	張文鑄
	第四軍管區(哈爾濱)司令官	郭恩霖
	第五軍管區(永德)司令官	王靜修
	第六軍管區(牡丹江)司令官	王殿忠
	興安第一警備司令官	烏爾金
	興安第二警備司令官	巴特瑪拉布坦
	海軍江防艦隊司令官	尹祚乾
	靖安軍司令	藤井重郎
	國都憲兵司令官	德楞額
	警察總監	金榮桂
	同副總監	關口保
	特別市長	
	新京	徐紹卿
	哈爾濱	韋煥章
	吉林	徐家桓
	齊々哈爾	楊乃時
	省長	
	奉天	葆康
	熱河	金名世
	黑河	許桂恒
	間島	金井章次
	通化	呂宜文
	錦州	王鼓棟
	興安東	額噶爾
	興安南	富凌河
	興安北	巴嘎巴廸
滿洲中央銀行	總裁	田中鐵三郎
滿洲興業銀行	總裁	富田勇太郎
滿洲拓殖株式會社	總裁	坪上貞二

壽	津	彭
寺	崎英雄	
芷	山	
于	其昌	
孫	宮澤惟重	
呂	榮寰	
岸	信介	
岸	良一	
濱	田陽兒	
韓	雲階	
西村淳一郎		
姜	恩之	
李	紹庚	
平井出貞三		
直木倫太郎		
鄭	煥禹	
張	煥相	
古田正武		
林	柴	

滿洲建國大學長　陸軍中將　牛島貞雄
滿洲國大陸科學院長　農學博士　鈴木梅太郎
滿洲帝國協和會　會長　張景惠

滿洲國軍管區

第一軍管區	奉天省
第二軍管區	吉林省の大部分
第三軍管區	吉林龍江兩省一部
第四軍管區	龍江省の大部分
第五軍管區	熱河省
第六軍管區	

勳位・勳章

滿洲國の勳位及び勳章令は康德二年四月十八日參議府の諮詢を經て公布された。勳位は大勳位以下勳八位まで、勳章は大勳位蘭花章頸飾、大勳位蘭花大綬章、龍光章及び景雲章とし、大勳位蘭花章頸飾は大勳位に叙せられしものに特旨により賜はり、大勳位蘭花大綬章は大勳位に叙せられしものに、龍光章は勳一位に叙せられ特旨によるもの、景雲章は勳一位より勳八位までのものに賜はるものである。

產業

△農業▽

遼河、松花江本支流、鴨綠江、豆滿江、穆稜等著名なる大河貫流し、その流域を中心として沃野展開して、眞に惠まれたる農業國である。由來國民經濟は農を其の根幹とし大豆、高粱、粟、玉蜀黍の栽培を初め棉、小麥、煙草、麻の耕作を行つてゐる。

耕地面積（單位千陌）

省別	總面積	既耕地	未耕地	不可耕地
吉林	八、九九一	二、九一四	一、五六二	四、五一四
龍江	一三、〇八二	一、九二三	五、九二三	四、二三六
黑河	一〇、九八一	五〇	一〇、一一〇	九、九一〇
三江	一〇、七五四	六、九八	四、四七八	五、五七六
濱江	一四、三四二	三、四〇二	三、一二一	七、八一八
間島	二、九三九	二八二	二一一	二、五三六
安東	四、八一二	四〇二	一〇一二	四、三一八
奉天	八、五五四	二、四九二	五七一	五、四九一
錦州	三、九四六	九九四	五三	二、九〇〇
熱河	九、六五八	六四四	二一	八、八九三
合計	八七、〇三三	一三、八〇二	一七、〇七五	一七、〇七五

（康德二年現在）

農業人口省別（康德元年末現在）

省別	總戶數	人口	農家對總戶數百分比	農業人口對總人口百分比
吉林省	五四一、九九七	三、五二五、一三八	七五・四二	七三・四七
龍江省	一八二、四七四	一、〇七八、五四六	五一・八一	四九・五八
黑河省	七、一四七	三一、〇八三	七一・八七	五八・九三
三江省	一三〇、五三八	七三四、六〇八	七六・三〇	八〇・五〇
濱江省	五八二、〇六九	三、四三八、一〇〇	八三・〇九	八一・六六
間島省	七一、三六八	四〇一、三六九	六六・八六	六六・九二
安東省	三二、三八二	二、二四六、七八五	七八・七五	八〇・七一
奉天省	一、一三四、二六五	七、一〇三、五七七	七五・七〇	七四・六九
錦州省	五三七、四六九	二、七九六、四〇四	九〇・三九	八五・三三
熱河省	五〇四、六四五	二、一八八、五四九〇	八八・八四	八七・五六
計	四、〇〇三、三〇四	二三、六四二、〇九九	七八・四八	七六・四四

農作物作付面積

（單位面積千陌、收穫高千斛）

種別		南滿	北滿
大豆	作付面積	一、六二七	二、三〇一
	收穫高	二、一九八	九八
其他豆類	作付面積	二、六四	一〇四
	收穫高	二、五九	九四三
高粱	作付面積	三、四〇五	七〇三
	收穫高	一、三九〇	九四三
粟	作付面積	一、六二四	一、六五三
	收穫高	一、三三三	四七六
玉蜀黍	作付面積	八〇九	一九九
	收穫高	一、三三三	四七六
小麥	作付面積	一〇〇	八三
	收穫高	一三三	八五
水稻	作付面積	三一五	八五
	收穫高	四五	八九八

陸稻	九四	二一	二九	水稻	二一三
其他雜穀	五三一	五五九	四一八	陸稻	一三七
麻實	二三	一五	四九	其他雜穀	一、〇一五
荏	一七〇	一八	一四五	合計	二三、六四四

但し十一年は豫想

穀類收穫高（單位千瓲）

	昭和九年	同十年	同十一年
大豆	三、三四七	三、七六三	四、二三三
高粱	三、三五四	三、九六二	四、二三四
粟	二、〇七六	二、九一三	三、二三一
玉蜀黍	一、四七〇	一、八六四	二、〇五六
小麥	六三九	一、〇〇五	九七五
其他豆類	二六四	二九〇	三九九

家畜飼養頭數（康德二年）

	牛	馬	騾	驢	羊	豚
奉天	一四七、八八七	一八三、四〇三	一九〇、四一四	一六七、六〇四	五三、〇八〇	一、一三五、〇五三
吉林	六六、七九六	三六〇、〇八二	一五八、九七二	五八、八六八	二八、三一七	七二、九五二
龍江	九四、一七五	二六六、六五八	三五、九四〇	三八、七三九	一四二、三八五	四一八、九五八
濱江	七七、二四三	五一三、七九二	五九、五四〇	三〇、五三九	三三、八〇〇	一、九二〇、七八八
熱河	一〇六、八七九	二四、五三六	一五、七一五	五、九九〇	三一八、八九八	四〇九、五六五

棉花

滿鐵經濟調査會の調査によれば、棉作の行はれてゐるのは奉天省、錦州省、熱河省で、栽培面積は遼陽縣を首位とし、蓋平、遼中、海城縣等之に次ぎ主産地として昭和九年に於ける作付面積は九萬二千八百町歩生産額は滿鐵沿線出廻數量より推定して收穫合せて三十萬町歩に擴張し、生産繰綿一億六千萬斤を得る計畫、一方棉花買入を保證して農民の福利增進を圖る見地より昭和九年四月資本金二千萬圓の滿洲棉花股份有限公司を設立、その奬勵に共力しつゝある。

	錦州	七七、九〇八	五五、八七六	三八、四九八	二二三、三八一	二四七、二七八	五八八、一六一
	安東	一四五、三五三	四五、〇〇七	四二、七八九	一〇一、五七七	三九、四三九	三九四、二三一
	黑河	二、五六二	八、九四〇	三九	二八	三四七	八、五一〇
	三江	六六、四三八	一一、九〇二	一八、三三六	一、七二一	三、九六九	一七〇、七〇〇
	間島	三七、五六九	一三、〇〇八	一、一八一	一、九六七	一、六四三	六二、四三六
	興安四省	四五四、〇七〇	三一九、五七三	六、三〇五	五七、一〇六	一、一八八、四八六	一一三、六四九
	總數	一、二七六、七六九	一、八〇八、八九六	五六七、七二九	六三〇、九七一	三、〇五七、六四一	六、〇九八、五六三

棉花

棉實量一億三千八百八十萬斤と見られてゐる。昭和八年四月奉天省實業廳主唱の下に棉花栽培奬勵策を樹立し將來二十ヶ年を期し奉天省內に於ける栽培面積を陸地棉、在するほどである。玉蜀黍も亦日本、支那へ四五十萬石を輸出して居る。

小麥・陸稻・水稻

小麥は北滿の主要農產物、年收穫高五四〇、八四〇瓲に上り大半は國內で製粉に用ひらる。陸稻は年收穫高一一五、二五〇瓲に達し、水田の開發は主として移住鮮人の努力の結晶にして主產地は滿鐵沿線、間島及海林附近であるが、開田可能地は松花江、牡丹江、嫩江流域に亘り五十萬乃至百萬町歩に及ぶと稱せられ、近き將來一千萬石の產米が可能とされて居る。

棉花收量（昭和十年）

省別	作付面積	豫想收穫高
	日本町歩	日本斤
奉天省	五七、〇四〇	九三、九二一、三九八
錦州省	三三、四八八	四二、二三八、八七二
熱河省	二、一七九	二、五六一、四八六
安東省	一五九	一〇一、二一〇
吉林省	二	二四二
計	九二、八六九	一二八、八四三、六〇八

備考　拓務要覽による。

△林　業▽

森林面積及蓄積量（單位千陌、百萬立方メートル）

	森林面積	立木蓄積
鴨渾兩江流域	六六三	七六
圖們江流域	八三五	一二六
松花江流域	一、四二四	二四二
牡丹江流域	六二九	一二七

拉林河流域　六六八　三姓地方　五、二四七　小興安嶺　九、九一七　大興安嶺　一三、八四　總計　二、四一五　濱綏線　三五、六三一

備考　昭和十年二月、實業部調査

△鑛　業▽

△砂金　國內一帶に廣く分布するも概して北方に多い。近年の產額は六百萬圓內外と推定され、北滿の砂金埋藏量三百五十萬瓲と稱せられ昭和八年五百八十二瓲を產出してゐる。

△鐵　埋藏量は約八億瓲にして鐵鑛主產地は奉天省殊に鞍山一帶及本溪湖附近で、兩者を合せた年採掘量昭和八年に於て百十七萬六千六百四十三瓲、之に依り年產約三十萬瓲の銑鐵を生產してゐる。滿鐵經營の鞍山製鐵所の原料給源たる鞍山鐵鑛は總埋藏量三億瓲、現在大孤山の貧鑛採掘を中心として一日二千五百瓲の採掘能力を有し大倉組の合辦事業たる本溪湖煤鐵公司の廟兒溝鐵山は鐵區十二、現在一日二百五十瓲內外の採掘をなしてゐる。銑鐵生產高昭和六年三十四萬二千二百六十九瓲、同七年三十六萬八千百八十一瓲。同八年四三三、五二三瓲。

△石炭　鑛產物の首位を占め總埋藏量四十八億四百萬瓲、炭田の數大小七十、現在稼行中のもの三十、總出炭量昭和六年九百四萬八千七百三瓲、同七年七百十萬八千二百八十二瓲、同八年九百六萬二千六十四瓲である。撫順炭礦は滿鐵の經營にかゝり鑛區面積千八百萬坪、主要炭層の厚さ平均四十米、最高百三十米、埋藏量九億五千萬瓲を超え年產額七千餘萬瓲で、その大半が古城子の露天掘より採掘されてゐる本溪湖炭礦は本溪湖煤鐵公司の經營で年額五十萬瓲を產出し、札賚諾爾炭礦は埋藏量三億瓲と稱せられ、熱河省の新邱炭鑛は十億瓲の埋藏量ありと稱せられる。

△油母頁岩　撫順の大岩層を百二十米の厚さをもつて蔽ふ油母頁岩は埋藏層五十四億瓲と推算され、昭和八年に二百六十八萬三千四百四十瓲を採掘してゐる。而して含油率平均五・五%、現在古城子の露天掘により剝離さるゝものを原料として一日處理能力四千瓲の製油工場を建設し、原油六萬八千瓲、硫安一萬八千瓲骸炭四千瓲の生產能力を示してゐる。（以上拓務要覽、滿洲經濟地圖に據る）

重要鑛産物

（單位噸）

種別	昭和八年	昭和九年	昭和十年
鐵鑛	一、一七六、六四三	一、一〇五、一三二	一、四六二、五四八
銑鐵	四三二、五三三	四七五、八二六	六〇七、九四八
硫化鐵鑛	一、六七一	七、七七〇	九、一一〇
滿俺鑛	七五〇	二六九	一、四九〇
金（瓩）	一七、八一一	六五三	六六〇
銀（瓲）	——	四六三、六三九	一、六八六、八九五
石炭	九、〇六二、六四四	七六、六〇八	一〇八、八三三
骸炭	四七六、二七八	一〇、七〇二、九二六	一一、四七四、一九一
油母頁岩	二、八八三、四四〇	五七四、四七八	七〇一、八六八
原油	八七、〇七六	三、一〇五、七六三	三、四二六、六四八
蒙苦土鑛	七一、三七六	一〇八、六三九	五九、九一七
耐火粘土	一二三、〇五〇	七八、七五二	一五六、五八六
滑石	六二、四三〇	一三七、四七一	八一、七三〇
苦灰石	一六五、八四五	七五、三六〇	七〇、五七二
石灰石	六一九、〇四〇	一六六、七五八	一七一、〇三三
石綿	一〇六	六五五、一四七	八五五、二六七
硅石	三五、五九二	一一九	七〇
長石	五、六〇〇	一五四、九三〇	一四八、七五四
方解石	一、一八三	三、九七九	二九、八七四
鹽	——	——	四九〇

△水　産▽

漁業者戸數及人員

（昭和九年度）

日本人	專業	戸數	一一〇	一九	四八九一
		人員	四四九	三三	一二、九四二
	兼業	戸數	三、九〇一	八、九二一	
		人員	九、九二五	三、三三八	
	計	戸數			
		人員			
滿洲人	專業	戸數			
		人員			
	兼業	戸數			
		人員			
	計	戸數			
		人員			
合計		戸數			
		人員			

水産物漁獲高

（昭和九年度）

	數量	價額
日本人	六、二三三、八五三 貫	三、〇五五、二八四 圓
滿洲人	五、四八三、〇八九 貫	一、九六〇、六二〇 圓
合計	一一、七一六、九四三 貫	五、〇一六、四四四 圓

水産物製造高

（昭和九年度）

	數量	價額
製鹽	數量	六二七、三五五 石
鹽高	金額	一三一、九二八 圓
製鹽	數量	七六〇、一九三 石
鹽高	金額	六八四、三二一 圓

財政經濟

康德四年度豫算（歲入）

經常部	二一、六三一、八〇四 圓
租稅	一五三、〇三九、〇〇〇

滿洲國は關東州を除けば海岸線極めて短く從つて海産物はいふに足らないが內陸諸河川は淡水魚頗る豐富で、地方の需要を充たしてゐる。鹽は滿洲國自體としては辛うじて自給自足の狀態であるが、關東州の天日鹽は、滿洲の大豆、石炭と共に三大物産の一で、我國食糧及工業原料として頗る價値あるものである。

加工品		八八、八五六	三三、〇七四
合計		一、〇〇三、六一七	一、〇三一、二〇四

生鹽高

（單位千斤）

	昭和七	同八	同九
關東州內	三七五、二〇五	四八五、二八三	四二六、四四六
滿洲國	三七五、〇九七	五三四、五八三	二八〇、四四六

鹽田及製鹽

（昭和九年度）

業者數	日本人	滿洲人	合計
	二一七	一	二一八
鹽田 灘數	五五三	一五四	七〇七
鹽田 面積	一七、七八九、四七一 坪	四、六七六、二五〇 坪	三一、四六五、七四一
製鹽高 數量	六二七、三五五 石	一三一、九二八 石	七六〇、一九三 石
製鹽高 金額	三、四三七、一六〇 圓	六八四、三二一 圓	三、一二一、四八一 圓

印紙收入		九、〇九七、〇三二	
官業收入		四四、三五七、七五二	
官產收入其他收入		五、一三八、〇二〇	
臨時部		三六、四九六、九五六	
雜收入其ノ他		四、〇〇九、六七八	
特別會計		二、九三五、四八九	
國債金		一五、〇〇〇、〇〇〇	
剩餘金		一〇、四一五、九四四	
總計		二四八、〇九八、七六〇	

中央銀行紙幣發行額

（單位千圓）

康德元年	發行額	保證準備額
三月末	一三五、五六一	六八、〇三〇
六月末	一〇〇、五四一	五九、九六二
十二月末	一六八、三三三	七四、八一九
同 二年		
三月末	一四六、九一四	六六、四三〇
六月末	一一三、六九二	五九、五九六
十二月末	一七八、六五五	九二、二三〇
同 三年		
三月末	一六九、七一三	九四、九五二
六月末	一三三、八六四	七七、一八一
十二月末	二五四、二四三	

中央銀行補助貨發行高

産金買上値段

種類	改定年月日	買上價額
一角（白銅貨）	康德二年十二月末現在	金額 圓 一六、三五五、一〇〇
五分（同）		二、二三三、四〇〇
一分（青銅貨）		一、三四七、五六〇
五厘（同）		一七八、七七〇
計		二〇、二八三、九三〇

國富（昭和五年）

		千圓
總額		四、五〇八、五六六
耕地、未耕地		二、八三一、三九五
農家建物、農器具		三三五、九六九
家畜、家禽		四九三、四五五
山林		七二、六四六
鑛山		八九、五五二
普通工業工場設備		六二、二六一
鐵道營業設備		三五七、七八二
船舶、自動車		六、三三六
都會地宅地建物		一二五、一五九
其他		四七三、二五八
對外債務		一三九、二三八

本表は滿鐵經濟調査會調査に據る。地域的範圍は舊東三省に限る。換算率邦貨百圓＝現大洋一六六・三五元（列國

改定年月日	買上價額	
昭和八・七・一四	圓角分 二・四・七	七・二三
同 八・一二	二・四・〇	八・一九
同 八・二六	二・四・九	一〇・七
同 九・一・五	二・九・〇	二・五
同 二・二七	三・一・〇	五・一四
同 一一・二	三・二・五	三・二・〇
同 一〇・一・七	三・三・五	三・八
同 一二・五・一五	三・五・〇	三・四・五

備考　十二年五月十五日日本の産金買上値段改訂と同時に引上ぐ。

（現行）

銀行（康德三年六月末）

行數	資本金 千圓	預金 千圓	貸出 千圓
一	五〇、〇〇〇	一八七、九六六	一五六、九四一
滿洲國側	四三	一四、〇六九	二七、六〇四
	預金	千圓	貸出 千圓
（朝鮮銀行	二六一、四六八		九四、二九六

日本側 正金銀行	五六、八八三	四五、九五九
正隆銀行	八四、九七一	八七、二二一
滿洲銀行	四三、七〇五	四四、九〇三
其他	四、〇二五	九、三四六

（日本側は昭和十年末）

銀行會社資本金現在高

（昭和十一年二月末現在）

業種別	社數	資本金
銀行業	一三	二九、九七五、〇〇〇
取引所・清算會社	九	二四、六八五、〇〇〇
無盡業	一三	二、〇二〇、〇〇〇
金融及賣買仲立業	一三二	四九、〇一三、六〇〇
商事會社	一、〇七四	七二、一八九、六三〇
市場	九	一、〇七五、〇〇〇
紡績及染色工業	二四	二三、六八一、三〇〇
化學工業	六五	六〇、八〇一、〇〇〇
金屬及機械器具工業	六五	一四二、〇五三、六五〇
製材及木製品工業	七一	一六、〇六八、〇〇〇
食料品工業	一三一	五〇、九三八、二五〇
雜工業	六九	一八、七一六、三〇〇
窯業及鑛業	一四一	二一、三九七、五〇〇
電氣・瓦斯	五	一一、七〇〇、〇〇〇
交通運輸	一一九	八五一、七八七、一〇〇
倉庫・保險・通信	一三	五六、三八〇、〇〇〇
土地・建物	一〇四	三六、六一七、五三〇
拓植興業	八二	五二、五九四、〇〇〇
請負・勞力供給	一四七	二三、九六三、三〇〇
新聞・印刷	三六	五、一三九、三〇〇
旅館・娛樂場	四	四、九六八、五〇〇
雜業	一三三	五、六〇九、六〇〇
合計	二、四五八	

全滿會社動態

（昭和十一年末現在）
（大連商工會議所經濟統計月表に據る）

種別	社數	資本金（千圓）	拂込資本金（千圓）
株式會社	六二八	一、四八七、五九九	三七七、六二三
合資會社	一、五五九	五三、六九一	—
合名會社	二七三	二一、六三〇	—
計	二、四五八	一、五六二、九二〇	—

		新設	增資	解散	減資
株式會社	社數	一九	一八	一九	五
	資本金（千圓）	四七、五六八	一六、一〇七	一六、八〇〇	二三、〇四〇
	拂込資本	一七、七五七	八、七六九	七、七六二	一七、九九〇
合資會社	社數	二四七	三三	八二	一四
	資本金	八、七三六	一、〇三一	三、二二一	八二一
合名會社	社數	六三	八	一三	二
	資本金	四、五三九	六五五	二五〇	八〇

國鐵運輸收入概表

（康德三年度）
（大連商工會議所經濟統計月報より）

旅客	乘車人員	一一、〇三八、一一〇	客荷收入	二三、八二九、七〇八
貨物	取扱瓲數	一三、四四四、二三三	貨車收入	五九、七五五、八〇二
食堂車收入		八二五、〇四四	旅館收入	四三、二〇四
諸口收入		一、三六九、〇九〇	收入合計	八五、八二二、八四八

郵便貯金概況

（康德二年度）
（交通部郵務司調査）

局名	人員	金額（圓）
新京	五四、一六五	七八五、四八五
奉天	三一、七一三	八六六、〇一四
哈爾濱	一六、八九七	九八四、五八八
合計	七二、六七五	二、三三六、〇八八

滿洲國工業への日本の投資額

（昭和十二年三月末現在）

	社數	公稱資本（千圓）	拂込資本（千圓）
金屬工業	一六	一四三、四一〇	一一六、四二七
化學工業	一五	一〇、二〇〇	七、七〇七
纖維工業	八	六八、一五〇	四九、七二五
電氣瓦斯	二	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
製材及木製品工業	四	六、一〇〇	四、二〇〇
食料品工業	一三	三一、九五〇	二四、五六〇
計器業	一	三、〇〇〇	五〇〇
窯業	五	一、五八〇	八一〇
セメント業	五	一三、五〇〇	一三、七五〇
印刷業	一	五〇〇	二五〇
商事	二	一五、五〇〇	一一、五〇〇
計	七二	三九九、二九〇	三三一、九一三

對滿投資

（滿洲事變以降）

昭和七年（千圓）

滿鐵株式拂込	二五、〇〇〇	同社債純增加	六九、四七五
同關係會社拂込	二五〇	計	九四、七二五

昭和八年

建國公債	三〇、〇〇	株式投資	一一〇、五一七
社債投資	一三三、七八二	滿洲內會社株式社債賣渡	五、三三三
支店銀行會社	五、五〇六	合資合名會社	六六六
日本國償還賣渡	一九一	日本地方債社債株式賣渡償還	四、八七〇
計			二九〇、八二四
日本國債買入	二	同地方債社債株式募集買入	五、七二七
在滿日本邦人社債株式償還買入	一六四、六二四	對滿投資回收額計	一七、三六三
差引純增加額			一三〇、四六一

昭和九年

投資公債	一〇、〇〇〇	株式投資	五三、三六七
社債投資	一八八、七一八	滿洲內會社株式會社債賣渡	五、一三九
支店銀行會社	四四、〇七六	合資合名會社	三八三
日本國債償還賣渡	一三七	日本地方債社債株式賣渡償還	六、四六二
計			三〇八、二七二
日本國債買入	一四	日本地方債社債株式應募買入	六、一八二
在滿日本邦人社債株式償還、買入	三、一七八	對滿舊投資回收額合計	九、三七四
差引純增加額			二九八、八九八

昭和十年

株式關係純拂込高	四九、九九〇	社債純募集高	一五五、八八〇
北鐵讓渡國債	六〇、〇〇〇	不動產擔保貸付金	八、四九〇
計	二七四、三六〇	總計	七八八、四四四

昭和十一年

國債	六〇、〇〇〇	滿鐵社債	二五五、〇〇〇（千圓）
其他	一三、〇〇〇	滿鐵株式	三六、〇〇〇
其他	二七、〇〇〇	滿鐵株關係株式開放	二一、〇〇〇
合計	四三二、〇〇〇	（借替償還計	一三五、二三五）
差引純增加			三〇六、七七五

貿易

輸出入貿易總額

（康德三年）
（單位國幣圓）

輸出	六〇二、七〇八、九八九
輸出品（內國品）	五三八、六一六、五三六
再輸出品（外國品）	七四、一四二、四五八
輸入	六九一、八八九、二七三
輸入品（外國品）	六九一、八八九、二七三
再輸入品（內國品）	—
輸出入合計	一、二九四、六四八、三六二
輸入超過	八九、一三〇、二八四

備考　本表は大連商工會議所經濟統計月表に據る。

貿易國別表

（康德三年、單位國幣圓）

國別	輸出	輸入
日本	二三七、五四六、〇〇九	五〇七、二一六、〇九八
朝鮮	四八、四四二、九九二	二七、四一三、九六三
中華民國	一三八、五一六、四五二	四七、七四三、八〇一
蘇聯邦	一、五八五、八三七	二六〇、九二七

香港	八、七二七、六三九
英領印度	一、六九一、四六五
蘭領印度	一、四四七、六四三
英吉利	二七、五三〇、八一八
佛蘭西	四、八三七、三四六
獨逸	八九四、七七四
白耳義	七、〇七一、六四八
和蘭	三八二、七九二
伊太利	一六、二五五、五三七
北米合衆國	六七、三七一、六八八
其の他	六〇三、七五八、九八九
總計	四、九四七、三三五

主要輸出品價額（康德三年）

（單位國幣千圓）

大豆	二二六、四七四
其の他豆類	一八、三一八
粟	六、九九五
玉蜀黍	一六、一一〇
落花生	三、五九七
大麻子	五、〇七二
鹽	四、四〇四
豚毛	二、三八二
豆油	二、四三三
硫安	一、九二四
緬羊毛	牛肉
	石炭
	豆粕
	胡麻子
	苧麻
	其他共計

	千圓 三八五
	二六、六六〇
	一九、三五五
	四〇〇 二九〇
	二、五六七

大豆	六〇、五〇六
其他豆類	二三、五二七
糠	一、三三〇
皮類	九二六
銑鐵	一四、六五九
再輸入	八二七

本邦對滿洲國輸出品

（昭和十一年）

小麥粉	六、〇一三
水產物	三三四
精糖及氷糖	一、三八二
綿織物	四七、三二一
生金巾	二、九九九
紙類	三、〇〇八
硝子及製品	千圓 八三
鐵及鐵製品	三、三三〇
機械及部分品	六、三七〇
木材	一、三二三
再輸出	二、六二五
其他共計	一五〇、八五九

交通

滿洲に於ける鐵道は、南滿洲鐵道および北滿鐵路が二大幹線である。北滿鐵路は康德二年三月二十三日滿ソ議定書に基き滿洲國に讓渡されたもので、滿洲里、ポグラニチナヤ間及び哈爾濱、寬城子間一千七百二十一粁、新京で我が南滿洲鐵道と連絡し、滿洲里に於ては、バイカル鐵道に結び、ポグラニチナヤにて同じく蘇聯のウスリー鐵道に連つてゐる。我が南滿洲鐵道（一、一二九・一粁）は大連を起點として北進し、奉天で奉天線に、四平街で四洮線に、また支線に於て北滿鐵路、京圖線に連絡し、また支線安奉線によつて朝鮮鐵道と連絡してゐる。支線には安奉線の外、旅順線、營口線、煙臺炭礦線、撫順線その他がある。滿洲國有鐵道は別項の如くであるが、その他の鐵道には日滿合辦の金福および滿合辦に移稜、民營に開豐、鶴立の諸鐵道がある。

△國有鐵道▽

滿洲國政府は經濟開發を主眼として交通充實を圖り一面道路工事及び自動車網の計畫を進むると共に主要鐵道を國有とし、鐵道一元化を基調としてこれを擧げて滿鐵の委任經營とした。鐵路總局はこの統制を圖るために設けられたものであつて總局の下に奉天（所管粁程一、二一二）新京（同七八三）哈爾濱（同三二七）洮南（同一、〇九二）の四鐵路局があり、運輸及び建設改良計畫に異常の努力振りを示してゐる。問題の奉天輕便鐵道は昭和七年十一月から滿鐵の手によつて廣軌改築工事を行つてゐたが三月末完成して四月一日營業を開始した。從來三十五哩、四時間餘を要したものが、朝陽川、上三峰を直通して五九・五粁となり約一時間の行程となつた。

國有鐵道一覽

線名	區間	營業粁	開業年月
奉山線	奉天—山海關	四一九、六	一九〇八、六
大鄭線	大虎山—鄭家屯	三六七、一	一九二七、二
河北線	溝幇子—河北	九一、一	一九二四、三
錦承線	錦州—凌源	二五一、五	一九三三、九
北票線	金嶺寺—北票	一七、九	一九二四、三
壺蘆島線	連山—壺蘆島	一一、九	一九二〇
平齊線	四平街—齊々哈爾	五七一、四	一九二六、七
白溫線	白城子—索倫	一九〇、八	一九三五、一一
榆樹線	榆樹屯—昂々溪	六、四	一九二九、八
奉吉線	奉天—吉林	四四七、六	一九二八、九
西安線	沙河—西安	七四、三	一九二七、三
京圖線	新京—圖們	五八、〇	一九二二、一〇
奶子山線	蛟河—奶子山	一〇、〇	一九二九、五
朝開線	朝陽川—開山屯	六二、四	一九二四、一一
拉濱線	拉法—濱江	二七一、七	一九三四、九
小新連絡線	小姑家—新沾	九、一	一九三四、九
三稂樹碼頭線	三稂樹、三稂樹碼頭三、五		一九三四、九

銑鐵	七、六五〇
豆粕	五三、一二六
粗蠟	二、〇〇六
蔥麻子	三、〇三五

主要輸入品價額（康德三年）

（單位國幣千圓）

加工綿布	二七、一一五
小麥粉	二九、四二一
砂糖	一、七九九
揮發油	七、六九八
綿織絲	一四、〇二四
毛織物	一四、三一四
鐵及鋼	三九、五〇六
銅	二、六六〇
機械器具	三八、五〇六
電氣用具	一六、三五七
酒類及諸飲料	八、三六八
木材	二、七四五
染料顏料漆	七、三五七
頁岩油	二、四三五
蘇子油	六、七六四
鐵鋼及同製品	九、二三八

開港場（滿洲國概覽による）

港別	開港年月	港別	開港年月
牛莊	一八六四・五	安東	一九〇七・三
大連	一九〇七・七	大東溝	一九〇七・十
滿洲里	一九〇七・二	瑷琿	一九〇七・七
三姓	一九〇七・七	哈爾濱	一九〇七・七
綏芬河	一九〇八・二	琿春	一九一〇・五
龍井村	一九一〇・五	拉哈蘇々	一九〇九・七
壺蘆島	一九三七・五		

日滿貿易狀況

（單位千圓）

年次	輸入	輸出
昭和七年	一三八、二八七	一四六、五三〇
同八年	一六八、〇五八	三〇三、一二九
同九年	一九一、四三一	四〇三、〇一九
同十年	二一六、二九二	四五六、六七四
同十一年	二八五、九八八	五三四、六二九

備考　關東州を含む。

本邦對滿洲國輸入品

（昭和十一年）

各種衣類	一三、五九八
蔬菜類	三、九三七
礦物性原油	六、六〇一
皮革	四、二九六
米及籾	二、五九一
茶	三、七二七
葉煙草	八、八四八
燈油	一、七四〇
棉花	八、六〇一
生綿布	三二、〇四八
晒及染色綿布	四〇、七六九
其他綿布	二、八九四
絹織物	三五、六八二
人絹及製品	一五、八〇一
車輛及船舶	三九、五五〇
水產物	三、〇〇四
紙同製品	二五、〇三三
果實類	八、三七一
化學藥及製藥	一三、五三五

濱北線	王裸樹—北安	三六、一	一九二八、三	年次	人員 運賃
馬船口線	馬船口—新松浦	一一、六	一九二八、一二	昭和七年	六、一二一、二八八 一〇、七一五、五〇〇
齊北線	齊々哈爾—北安	二三〇、四	一九三三、一二	同 八年	九、三〇〇、八三八 一四、七一一、三四一
北黑線	北安—辰清	三〇二、九	一九三四、一〇	同 九年	一〇、三二一、一三一 一五、五六九、三一〇
訥河線	寧年—訥河	八六、八	一九三〇、一二	同 十年	一〇、八三四、一一〇 一七、〇三〇、三三〇
北滿鐵路		一、七二六、〇	一九三五、一二	同十一年	一一、〇三九、一一〇 二三、八二九、一〇八
京白線	新京—白城子	三三一、六	一九三四、九		
濱江線	哈爾濱—濱江	二、五	一九三四、九	**鐵路總局從業員**	
皇姑屯線	奉天—皇姑屯	二、八	——	（康德二年十一月現在）	
京濱線	新京—哈爾濱	二四〇、二	一九〇三、一	滿人 日人 露人 計	
濱洲線	哈爾濱—滿洲里	九三四、八	一九〇三、七	局別	
濱綏線	哈爾濱—綏芬河	五四六、四	一九〇三、七	鐵路總局 四四五 一、九七三 —— 二、四一八	
八區碼頭線	哈爾濱—八區碼頭	三、〇	一九〇三、七	奉天鐵路局 一六、四四一 二、一八五 一四八、七四四	
道裡碼頭線	哈爾濱—道裡碼頭	四、〇	一九〇三、七	吉林鐵路局 一〇、二一三 四〇七九 二一〇 四三、二一一	
四西線	四平街—西安	八二、五	一九三六、一二	哈爾濱鐵路局 一九、四〇七 四、五四二 一、六二七 二五、五九六	
圖寧線	圖們—牡丹江	二四八、七	一九三四、七	齊々哈爾鐵路局 四四九 二三一 一、四二四 —— 一三、六八八	
寧佳線	牡丹江—林口	二一〇、〇	假營業中	哈爾濱水運局 五八、一六六 一四、四二四 一、八三三 七五、四四三	
林密線	林口—宙山	一七〇、九	一九三五、一二	合計	
黑河碼頭線	黑河—黑河碼頭	四、二	一九三五、一二		
合計		七、〇三五、四		**私設鐵道**	

國有鐵道概況

△旅客收入 （單位國幣圓）

金福鐵路	金州城子疃	二四、〇	一九二七、一〇
穆稜鐵路	小城子—梨樹溝	六三、五	一九二五、三
鶴立鎭線	鶴立鎭—興山鎭	五六、〇	一九二六、一一
開豐鐵路	開原—西豐	六三、七	一九二六、五
齊昂鐵路	齊々哈爾—昂々溪	三〇、〇	一九〇九、九

溪城鐵路	本溪湖—牛心臺	一九、三	一九一四、二
琿春輕鐵	琿春—上用灣子	一五、〇	——
滿鐵		一、二三九、一	一九〇七、四

自動車路線

（康德二年十一月末）

△國營自動車路線 二四粁

安城線	安東—城子疃	八
	鳳凰城—大孤山	三六
奉撫線	奉天—撫順	四五
山通線	山城鎭—通化	一三五
新吉線	新京—吉林	一三六
熱河線	北票—承德	三一〇
	朝陽—林西	一〇〇
	承德—豐寧	一〇〇
	赤峰—承德	一三〇
	圍陽—多倫	一三〇
訥黑線	訥河—黑河	三三〇
哈同線	哈爾濱—同江	六三六
奉鄭線	法庫—康平	三〇
民彰線	新民—彰武	六三
海牛線	海城—牛莊	三五
京洮線	安廣—洮南	八〇
敦海線	敦化—寧地	四〇
	東京城—牡丹江	八〇
	額穆—馬號	八〇
東滿線	琿春—東興鎭	一〇〇
	琿—綏芬河	六三

興安線	王爺廟—五叉溝、溫泉—海拉爾洮南—突泉	五三五	〃 一往復
新線	琿春—圖們七三 新立屯—義縣二三四 富錦—寶清一二四 佳木斯—勃利 一七五 哈爾濱—降城 四四	四、四五九	〃 一往復
合計			

△民營自動車路線

路線 二六 粁程總計 二、四二六・一

備考 民營は康德元年九月末現在

定期航空路一覽

一、	新義州—奉天間	每週六往復
二、	大連—新京間	〃 七往復
三、	新京—哈爾濱—齊々哈爾間	〃 十往復
四、	齊々哈爾—滿洲里間	〃 二往復
五、	奉天—錦州間	〃 六往復
六、	錦州—凌源—承德間	〃 四往復
七、	錦州—赤峰間	〃 二往復
八、	新京—圖們間	〃 三往復
九、	哈爾濱—富錦間	〃
一〇、	哈爾濱—東寧間	〃
一一、	哈爾濱—黑河間	〃 一往復
一二、	齊々哈爾—大黑河間	〃
一三、	新京—洮安—齊々哈爾間	〃 一往復
一四、	奉天—通化間	〃 一往復
一五、	新京—吉林—延吉—龍井—清津間	〃 一往復

新京主要地間距離（單位粁）

新京	奉天	三〇五	吉林	一二八
	營口	四八五	敦化	三四八
	哈爾濱	二四〇	清津	七〇三
	海拉爾	九八八		
	浦鹽斯德	一、〇三一		
	齊々哈爾	三三九		
	圖們	七〇三		
大連	新京	七〇三	熱河	二四〇
安東	奉天	二五八	齊々哈爾	九八八
熱河	承德	一七五	滿洲里	一、七五二
齊々哈爾	滿洲里	五一〇	圖們	一二八
滿洲里	哈爾濱	七二五		
吉林	敦化	二一八		
圖們	清津	五二六		

教育（康德元年末）

學校數	職員數	生徒數	
幼稚園	三五	一、八八八	
小學校	二三、八九六	八三〇、九六〇	
中學校	二〇三	一、八四	
師範學校	一一六	七三一	
實業學校	二八	二、六〇三	
高專、大學	三七	三五四	
合計	九五	五四四	
私塾	一三、一九一	二七、二五五	
	五、九八九	八一五、五八九	
	六、〇六四	一二二、一三八	

宗教

滿洲に於ける宗教は佛教、道教、儒教、回々教、喇嘛教及基督教である。支那人は多く佛教又は道教を奉じ、滿洲人や蒙古人は概ね喇嘛教信者である。白露人はギリシヤ教を信奉し、赤露人は無宗教である。なほ近時隱れたる勢力を有するものに道院と世界紅卍字會とがある。道院は民國九年山東省濟縣で洪解空、劉福綠の二人が、老祖（道院の祖神）のお告げに從ひ「太乙北極眞經」といふ經典を作り、道場を設けたのが始まりである。紅卍字會は道院の分院で道院で修養を積み、紅卍字會で社會事業をする組織である。信者は百萬以上といふことである。

標準時變更

滿洲國と日本とは從來一時間の時差を存して居たが、滿洲國では此度標準時を變更し康德三年十二月三十一日即ち昭和十一年十二月三十一日午後十一時を期し康德四年一月一日午前零時とし、一時間繰上げ日本の標準時と合致せしめた。

全滿工事費用（一〇、一一年中）

特殊工事	二一、五〇〇千圓	一三、五四七千圓
關東廳事	二五九	二、八六〇
滿鐵屯地	三六、〇九九	三一、七三七
滿洲國一般	一八、一六六	一八、四六八
	四四、八九三	五八、三五八
計	一三〇、九一七	一三四、九四〇

道府縣・都市

市町村數（帝國統計年鑑）

	昭和六年	同七年	同八年	同九年	同十年
市	一〇九	一一三	一一三	一一四	一二九
町	一、七〇八	一、七一六	一、六六三	一、六八三	一、七一〇
村	九、八八六	九、八四六	九、八三九	九、七八八	九、六六二
計	一二、八〇三	一二、七八四	一二、六六二	一二、五九五	一二、五一一

（備考）各年四月一日現在。郡の數は大正十四年六三五、昭和元年六三三、同三年六三二、同八年六二八、爾後同數を持續す。

役所役場數（帝國統計年鑑）

	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年
支廳	三五	三五	三五	三五
市役所	一一一	一一一	一一四	一二九
町役場	一、六八四	一、六四二	一、六三五	一、七一〇
村役場	九、三四五	九、三九六	九、四〇七	九、五七〇
區役所	四四	四四	七四	七四

（備考）各年四月一日現在

市會

町會

	會數	議員	選舉有權者
昭和五年	一〇九	二四、二九〇	六、七〇九、六六一
同六年	一〇九	二一〇、二四〇	六、七一九、六六一
同七年	一一一	二三六、四二五	六、七二四、六六九
同八年	一一三	二一六、四四三	六、七三五、六七二
同九年	一一七	二一五、二四四	六、七四一、六七五
同十年	一二七	一五四、四九八	六、七五九、六八二

村會

	會數	議員	選舉有權者
昭和五年	九、九四四	二九、〇九四	一、六六一、〇〇二
同六年	九、六三七	二九、二一三	一、六六九、〇一一
同七年	九、五六五	二七、九八五	一、六七二、九九五
同八年	九、四五一	二八、二五三	一、六八四、〇一四
同九年	九、三三一	二八、五四〇	一、六九五、〇二五
同十年	九、二四	二八、九五八	一、七〇五、〇三一

町村組合會

	會數	議員	選舉有權者
昭和五年	三五	四七二	二三、四九四
同六年	三五	四三〇	二〇、八七五
同七年	三三	四二二	二〇、三九七
同八年	三〇	三八六	一九、三六一
同九年	三〇	三九二	一九、五八二
同十年	三〇	三九二	一九、六三二

（備考）町村組合會の存在する縣は岩手三、福島五、東京二、神奈川一、和歌山一、鳥取二、廣島四、熊本一二。

府縣會議員選舉（昭和十年）

地方別	選舉當日有權者數	投票數	棄權數
北海道	四六一、五一五	三一六、五五三	一三三、七九一
青森	一七五、三八三	一三七、二八二	三八、一〇一
岩手	一八〇、九二二	一三九、九八四	四〇、九三八
宮城	一五四、七七一	一二五、一〇五	二六、六六一
秋田	一九七、七四三	一六〇、二四一	三七、四九七
山形	一七四、七一二	一四一、四五〇	三三、二六〇
福島	二七七、九六〇	二三四、八六六	五三、〇八五
茨城	二〇九、三九五	一七三、一九一	三六、七四二
栃木	一三七、二二四	一一二、九二四	二五、八三九
群馬	一三八、一〇一	一一二、八七五	二五、七〇〇
埼玉	一九三、三六一	一五九、一〇五	三三、二五六
千葉	一七三、一九一	一四二、一〇五	三〇、三九五
東京	二〇一、三九五	一六五、一〇五	三五、八一九
神奈川	一四四、七二六	一二四、八六一	一九、八六三
新潟	一四四、七二六	一二四、八六一	一九、八六三
富山	一五五、五七四	一二〇、九九五	三四、八七七
石川	一二五、七七一	一〇七、三〇五	一八、四六五
福井	一二六、三六三	一〇四、八二六	二一、五三七
山梨	三四一、四一二	二六〇、三九九	八〇、四七〇
長野	二三三、八二七	一八八、七二六	四五、一〇七
岐阜	三一二、四九六	二三一、七五五	八二、一二一
静岡	四九九、九一九	三四二、三九〇	一五七、五三〇
愛知	一八三、九四七	一五〇、三〇七	三三、六四三
三重	一三二、六二一	一〇九、八五六	二二、七六七
滋賀	二八〇、一四四	一五〇、〇四四	一三〇、一三九
京都	七八、七四八	四三八、九五七	三一九、七八七
大阪	四九一、六二三	三二三、八五三	一六七、六七一
兵庫	二五五、九〇一	一〇三、〇二八	二三、八七三
奈良	一八〇、二五二	一三三、九一五	五七、三三七
和歌山	九二、一四七	七八、六七九	一三、四六八
鳥取	一六八、五三〇	一七〇、九六一	一七、八一四
島根	二六二、三八五	一八六、八四二	七五、五四一
岡山	四〇。府縣に二二九人、俸給額一五五、〇三三あり。		
廣島	四五	三四〇、八三九	二六三、一八〇
山口	三七	二一〇、四〇一	一四七、三七四
德島	三〇	一三六、四二五	九三、二六五
香川	三〇	一二六、四四三	九一、七五八
愛媛	三八	二一五、二四四	一六〇、四九八
高知	三〇	一五四、四九八	八六、一八九
福岡	五七	四四四九、六一四	三六六、六二四
佐賀	三〇	一三三、二四六	一一、七一〇
長崎	三八	一八九、三九〇	一三三、七九八
熊本	四一	二五三、八九八	一八八、〇九八
大分	三四	一五四、四五六	一一八、六四一
宮崎	三一	一五四、〇七八	一一一、三九四
鹿兒島	四三	二七〇、三九五	一九二、八八〇
沖繩	三〇	一三八、〇三六	八五、七〇〇

（備考）北海道、埼玉、千葉、東京、神奈川は昭和七年。佐賀、沖繩は同八年島根は同九年選擧。

地方廳文官俸給（昭和九年末）

		勅奏判任	奏任	判任	雇	計
北海道廳	人員	五	一五八	二、〇九九	三、四八〇	五、七四二
	給料年額		二一〇	一三三	五五三	七〇六
青森縣	人員	一	八	一四七	五四一	七〇七
	給料年額		一五八	一二四	七〇七	八九〇
岩手縣	人員	一	二	一八九	五七五	七八六
	給料年額		一五六	一三八	六九六	八五九
宮城縣	人員	一	二	一七三	八八九	一、〇九七
	給料年額		一七二	一二四	八八九	一、〇五一
秋田縣	人員	一	二	一五〇	八〇四	九七八
	給料年額		一七三	一二四	七八三	九七九
山形縣	人員	一	二	一七一	一、〇〇〇	一、一九九
	給料年額		一七三	一五六	七六二	一、一四四
福島縣	人員	一	二	一五七	一、〇五一	一、二一六
	給料年額		一七三	一五六	七六二	一、二一六
茨城縣	人員	一	二	一七一	一、〇九七	一、二九九
	給料年額		一七三	一五六	七六二	一、二一六
栃木縣	人員	一	二	一七一	一、〇九七	一、二九九
	給料年額		一七三	一五六	七六二	一、二一六
群馬縣	人員	一	二	一七一	一、〇九七	一、二九九
	給料年額		一七三	一五六	七六二	一、二一六
埼玉縣	人員	一	二	一七一	一、〇九七	一、二九九
	給料年額		一七三	一五六	七六二	一、二一六
千葉縣	人員	一	二	一七一	一、〇九七	一、二九九
	給料年額		一七三	一五六	七六二	一、二一六
東京府	人員	一	二	一七一	一、〇九七	一、二九九
	給料年額		一七三	一五六	七六二	一、二一六
神奈川縣	人員	一	二	一七一	一、〇九七	一、二九九
	給料年額		一七三	一五六	七六二	一、二一六

市町村吏員俸給

		昭和八年末	同	九年末
市	人員	五〇、六五三	五四、二一九	
	俸給	三四、五五六、〇八七	三七六、七三〇	
町村	人員	三五三、七九		
	俸給	二六、六五〇、八五七		

（備考）人員には名譽職を含む。

道府縣文官人員（昭和十年末）

	勅任	奏任	判任	雇	計
道廳	二、二六二	二、二六〇、七一六	三、四七〇	一、九一八、八六〇	
府縣	九、七三五	八、七九八、五五〇	四九、二七〇	二七、七〇一、一五四	
（備考）	右の外囑託なるもの道廳に二、一一六人、俸給額、一、二五八、四四				

道府縣・都市								
滋賀	一	一	一	一	一	一	一	一
三重	一	一	一	一	一	一	一	一
愛知	一	一	一	一	一	一	一	一
岡山	一	一	一	一	一	一	一	一
福井	一	一	一	一	一	一	一	一
静岡	一	一	一	一	一	一	一	一
岐阜	一	一	一	一	一	一	一	一
長野	一	一	一	一	一	一	一	一
山梨	一	一	一	一	一	一	一	一
福島	一	一	一	一	一	一	一	一
宮城	一	一	一	一	一	一	一	一
秋田	一	一	一	一	一	一	一	一
岩手	一	一	一	一	一	一	一	一
青森	一	一	一	一	一	一	一	一
北海道	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一

府縣別道路延長

（昭和九年末　單位粁）

府縣	國道	府縣道	市道	町村道	合計
北海道	五九〇・三	×三二・四	五・〇	三・一	一〇二・四
青森縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
岩手縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
秋田縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
宮城縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
山形縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
福島縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
茨城縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
栃木縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
群馬縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
埼玉縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
千葉縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
東京府	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
神奈川縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
新潟縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
富山縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
石川縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
福井縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
山梨縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
長野縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
岐阜縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
静岡縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
愛知縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
三重縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
滋賀縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
京都府	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
大阪府	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
兵庫縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
奈良縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
和歌山縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
鳥取縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
島根縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
岡山縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
廣島縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
山口縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
德島縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
香川縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
愛媛縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
高知縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
福岡縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
佐賀縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
長崎縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
熊本縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
大分縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
宮崎縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
鹿兒島縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
沖繩縣	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一
計	一六六・九	二〇二・三	一・九	三・〇	三七四・一

×印は準地方費道數を示す。

市町村及水利組合數並に現在世帶人口數

（昭和一一・四・一現在）

市	一二
町	一二七
村	一二七
水利組合數	五六五
水害豫防組合數	一二七
水害通水組合數	一二七

（備考）現在人口及世帶數は昭和十年十月一日の國勢調査速報に據る。

世帶數	六九、三四八、二四三
現在人口	三三、四九四、四八三

地方歲入歲出總覽

（單位千圓）

道府縣・都市	歲入出	昭和七年度	同八年度	同九年度	同十年度	同十一年度
北海道	歲入	六六、二四〇	七五、九八二	八五、〇七七	八五、四三〇	八四、九三二
	歲出	七三、〇九五	七四、八六	八四、三三	八五、八五五	八四、九三二
府縣道	歲入	一二、一四〇	一二、四〇一	一二、四〇一	一二、四〇一	一二、四〇一
	歲出	一二、一四〇	一二、四〇一	一二、四〇一	一二、四〇一	一二、四〇一
市	歲入	四、三三一	四、四六一	四、四六一	四、四六一	四、四六一
	歲出	四、三三一	四、四六一	四、四六一	四、四六一	四、四六一
町村	歲入	四、四六一	四、四六一	四、四六一	四、四六一	四、四六一
	歲出	四、四六一	四、四六一	四、四六一	四、四六一	四、四六一
計	歲入	八四、三三一	九四、四六一	九四、四六一	九四、四六一	九四、四六一
	歲出	九四、四六一	九四、四六一	九四、四六一	九四、四六一	九四、四六一

（備考）昭和九年度迄は決算額、同十年度以降は豫算額。

道府縣歲入內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
地租附加稅	六六、九四七	六九、一六八	六九、五六七
營業收益稅附加稅	二一、四五九	二一、四三一	二四、八五四
所得稅附加稅	三六、五三四	三五、〇九二	四〇、一五四
鑛業稅附加稅	三四八	三一〇	三三四
取引所營業稅附加	二三八	二四五	三三六
特別地稅	九、一五一	九、〇五七	九、一五一
家屋稅	三九、二一二	三九、七二六	四〇、七六三
營業稅	六、九六四	七、一七六	七、一六八
雜種稅	五五、〇七二	五三、九八八	五六、三七八
市町村分賦額	四、六八〇	四、一〇〇	四、三三四
財產收入	一、五〇九	一、七九四	一、七一一
使用料及手數料	四〇、六九二	四三、九八四	四六、五二一
國庫下渡金	二三、一五二	二四、三四二	二四、八七九
國庫補助及補給交付金	一三九、六七三	四七、五八二	五六、九〇四
寄附金	一六、二二四	一二、八三四	一三、八三八
道府縣債	一六八、五八九	七三、〇四〇	五九、〇四〇
賦金	一、九〇一	一、八六七	一、八二四
前年度繰越金	五一、三八八	三、八四一	八、四六六
其他諸收入	七六、四八八	五六、四五五	五九、五五一
合計	七五九、八二九	五〇九、八五八	五三九、五五三

（備考）九、十年度は豫算額。

道府縣歲出內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
教育費	一〇九、三一五	一三二、六九一	一四二、一三五
土木費	一七八、六五五	一二四、六九〇	一二三、四一四
衞生及病院費	一〇、七六五	一二、三三六	一三、三三六
勸業費	一二四、八四九	六九、七九五	七五、七四八
社會事業費	八、二九五	六、〇六三	六、七六六
警察費	八九、〇七九	八八、五七四	九一、三四四
道府縣吏員費	二一、一七五	二一、六八三	二三、一二三
會議費	一、九五〇	一、八九一	一、九四五
道府縣債費	九七、一八三	六〇、九一一	六七、二七四
道府縣費取扱費	八、四四五	八、八〇七	九、一四〇
其他諸費	一七、四七四	一三、二九一	一三、五七八
合計	六五九、〇五七	五〇九、八五八	五三九、五五三

市歲入內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
地租附加稅	三、一四〇	三、一四〇	三、一四〇
營業收益稅附加稅	三〇、八三五	三一、一六五	三二、一六五
所得稅附加稅	二、一四〇	二、一四〇	二、一四〇
鑛業稅附加稅	一、三五	一、三五	一、三五
取引所營業稅附加稅	二三八	二四〇	二四〇
特別地稅附加稅	七三	九一	一〇〇
家屋稅附加稅	四六、一七九	四八、五二七	五〇、〇六一
營業稅附加稅	三、六二七	三、七六一	三、七四八
雜種稅附加稅	二七、二六九	二九、〇九三	三一、〇九七
特別稅 段別割	四八四	四八四	四六七
戶數割	一七、一三二	一八、七四四	一九、七四四
別稅 戶別割	一〇四	一〇八	一一五
家屋割	四、一七四	四、一七三	四、一七三
所得稅	五、二七八	五、七九七	五、七九七
其他	九、一六一	九、一六一	九、一六一
會議費	一、三五〇	一、三五〇	一、三五〇
道府縣債費	二八、一三〇	二三三、八七五	二三三、八七五
道府縣費取扱費	三、一八七	三、一八七	三、一八七
其他諸費	二、七九六	三、〇五四	三、〇五四
合計	一四、一五三	一四、三三四	一四、三三四
國庫下渡金	一四、二六七	一四、二六七	一四、二六七
國庫補助金	一一、三九〇	一一、三八一	一一、三八一
道府縣補助金	五、一七六	八、一四〇	八、一四〇
前年度繰越金	一三三、六四八	三四、四五五	四八、〇五七
寄附金	四、三七一	三、三三五	四、四四九
市債	五〇四、二一四	二八、六二六	二三一、四九九
納付金	六、七六九	六、五五六	七、三八〇
報償金	四、一二四	四、〇二二	四、三三三
繰入金	二四、四六七	六、三八二	八、四二七

町村歲入內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
地租附加稅	六、一四〇	六、一四〇	六、一四〇
營業收益稅附加稅	八、三五〇	八、一四六	八、一四六
特別地稅附加稅	一、四一九	一、四五九	一、四五九
家屋稅附加稅	四、一五五	四、二七六	四、二七六
營業稅附加稅	一、八八一	一、八五五	一、八五五
雜種稅附加稅	二七、五四〇	二七、三四〇	二八、七一〇
特別稅 段別割	四、二三一	四、二三一	四、九三一
戶數割	一〇、四五一	一〇、八一三	一一、五三六
別稅 戶別割	一二、五五二	一二、九四四	一三、六七三
所得稅	六五	八七	六八
其他	三	三	四
役場費	三、三三	三、三一	三、四二四
會議費	四、五三	四、五四八	四、九三三
警備費	三、四三	二、六九一	二、七六一
公債費	二七、八五八	三二七、三三五	三二七、三三五
諸稅及負擔	四、九六九	四、三九八	四、七六七
積立金及基本財產造成費	八、七五五	九、三五五	九、七五五
其他諸費	三六、四〇二	三六、四二六	四二、四二六
合計	八四九、四三二	八四九、八一七	八五九、二一九

町村歲入內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
地租附加稅	二六、九四七	二七、一六八	二七、五六七
營業收益稅附加稅	二一、四五九	二一、四三一	二四、八五四
所得稅附加稅	三六、五三四	三五、〇九二	四〇、一五四
鑛業稅附加稅	三四八	三一〇	三三四
取引所營業稅附加稅	二三八	二四五	三三六
特別地稅	九、一五一	九、〇五七	九、一五一
家屋稅	三九、二一二	三九、七二六	四〇、七六三
營業稅	六、九六四	七、一七六	七、一六八
雜種稅	五五、〇七二	五三、九八八	五六、三七八
市町村分賦額	四、六八〇	四、一〇〇	四、三三四
財產收入	一、五〇九	一、七九四	一、七一一
使用料及手數料	四〇、六九二	四三、九八四	四六、五二一
國庫下渡金	二三、一五二	二四、三四二	二四、八七九
國庫補助及補給交付金	一三九、六七三	四七、五八二	五六、九〇四
寄附金	一六、二二四	一二、八三四	一三、八三八
道府縣債	一六八、五八九	七三、〇四〇	五九、〇四〇
賦金	一、九〇一	一、八六七	一、八二四
前年度繰越金	五一、三八八	三、八四一	八、四六六
其他諸收入	七六、四八八	五六、四五五	五九、五五一
合計	七五九、八二九	五〇九、八五八	五三九、五五三

（備考）九、十年度は豫算額。

道府縣歲出內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
教育費	一〇九、三一五	一三二、六九一	一四二、一三五
土木費	一七八、六五五	一二四、六九〇	一二三、四一四
衞生及病院費	一二、〇〇九	一三、三三六	一四、三三六
勸業費	一二四、八四九	六九、七九五	七五、七四八
社會事業費	八、二九五	六、〇六三	六、七六六
警察費	八九、〇七九	八八、五七四	九一、三四四
道府縣吏員費	二一、一七五	二一、六八三	二三、一二三
會議費	一、九五〇	一、八九一	一、九四五
道府縣債費	九七、一八三	六〇、九一一	六七、二七四
道府縣費取扱費	八、四四五	八、八〇七	九、一四〇
其他諸費	一七、四七四	一三、二九一	一三、五七八
合計	六五九、〇五七	五〇九、八五八	五三九、五五三

市歲入內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
地租附加稅	三、一四〇	三、一四〇	三、一四〇
營業收益稅附加稅	三〇、八三五	三一、一六五	三二、一六五
所得稅附加稅	二、一四〇	二、一四〇	二、一四〇
鑛業稅附加稅	一、三五	一、三五	一、三五
取引所營業稅附加稅	二三八	二四〇	二四〇
特別地稅附加稅	七三	九一	一〇〇
家屋稅附加稅	四六、一七九	四八、五二七	五〇、〇六一
營業稅附加稅	三、六二七	三、七六一	三、七四八
雜種稅附加稅	二七、二六九	二九、〇九三	三一、〇九七
特別稅 段別割	四八四	四八四	四六七
戶數割	一七、一三二	一八、七四四	一九、七四四
別稅 戶別割	一〇四	一〇八	一一五
家屋割	四、一七四	四、一七三	四、一七三
所得稅	五、二七八	五、七九七	五、七九七
其他	九、一六一	九、一六一	九、一六一
會議費	一、三五〇	一、三五〇	一、三五〇
道府縣債費	二八、一三〇	二三三、八七五	二三三、八七五
道府縣費取扱費	三、一八七	三、一八七	三、一八七
其他諸費	二、七九六	三、〇五四	三、〇五四
合計	一四、一五三	一四、三三四	一四、三三四
國庫下渡金	一四、二六七	一四、二六七	一四、二六七
國庫補助金	一一、三九〇	一一、三八一	一一、三八一
道府縣補助金	五、一七六	八、一四〇	八、一四〇
前年度繰越金	一三三、六四八	三四、四五五	四八、〇五七
寄附金	四、三七一	三、三三五	四、四四九
市債	五〇四、二一四	二八、六二六	二三一、四九九
納付金	六、七六九	六、五五六	七、三八〇
報償金	四、一二四	四、〇二二	四、三三三
繰入金	二四、四六七	六、三八二	八、四二七

町村歲入內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
地租附加稅	六、一四〇	六、一四〇	六、一四〇
營業收益稅附加稅	八、三五〇	八、一四六	八、一四六
特別地稅附加稅	一、四一九	一、四五九	一、四五九
家屋稅附加稅	四、一五五	四、二七六	四、二七六
營業稅附加稅	一、八八一	一、八五五	一、八五五
雜種稅附加稅	二七、五四〇	二七、三四〇	二八、七一〇
特別稅 段別割	四、二三一	四、二三一	四、九三一
戶數割	一〇、四五一	一〇、八一三	一一、五三六
別稅 戶別割	一二、五五二	一二、九四四	一三、六七三
所得稅	六五	八七	六八
其他	三	三	四
役場費	三、三三	三、三一	三、四二四
會議費	四、五三	四、五四八	四、九三三
警備費	三、四三	二、六九一	二、七六一
公債費	二七、八五八	三二七、三三五	三二七、三三五
諸稅及負擔	四、九六九	四、三九八	四、七六七
積立金及基本財產造成費	八、七五五	九、三五五	九、七五五
其他諸費	三六、四〇二	三六、四二六	四二、四二六
合計	八四九、四三二	八四九、八一七	八五九、二一九

地方債目的別（各年度末）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
道府縣補助金	三九、八七六	一四、七五六	一六、六九七
寄附金	二二、五三四	一〇、二〇〇	一〇、六四九
町村債	六四、六六一	二九、〇四三	二九、五六二
前年度繰越金	四八、〇二一	二一、七二〇	二一、七一〇
其他諸收入	九〇、五〇〇	六四、七三八	七〇、四〇六
合計	五九五、八三三	四七六、八三六	四九六、二六八

町村歲出內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
教育費	二二、二六六	二〇七、八三七	二一七、〇六三
土木費	七三、九六〇	三一、二六五	三三、四四二
衞生費	一七、一六六	一七、四八三	一七、四八三
勸業費	三三、一五五	二〇、〇八三	二〇、五九五
社會事業費	一一、五九三	一八、五七六	一九、六九四
電氣及瓦斯事業費	一、八三三	二、五六一	三、〇〇一
役場費	七五、〇三七	七二、九六六	七三、九六六
會議費	二、六〇四	二、九四六	二、九四三
警備費	八、六二三	八、八九九	八、三〇九
公債費	三七、一九）	四一、六七四	四一、六七四
諸稅及負擔	一四、三三九	一四、三三九	一四、三三九
積立金及基本財產造成費	四六、六二八	四〇、九五八	四三、三一四
其他諸費	五三九、六三一	四七六、五六一	四九六、一一九
合計	五三九、六三一	四七六、五六一	四九六、一一九

道府縣歲入內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
財產賣拂代	八、五四四	一一、七一九	一一、四三七
雜收入	七九、八八七	七四、六二七	八九、八四二
合計	一、〇一七、六四四	八五〇、四二三	八五九、八四八

（備考）昭和九年度は決算額、同十、十一年度は豫算額。

市歲出內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
教育費	一〇七、三一五	一三二、六九一	一四二、一三五
土木費	四九、二五〇	五八、九八八	七四、二一八
衞生費	九四、三二一	一〇三、八八八	一〇八、九五一
勸業費	八、七五七	九、二五八	一〇、四五一
社會事業費	二一、五五二	二三、八一三	二五、二八〇
電氣及瓦斯事業費	一二六、四六二	一〇八、一三八	一一三、五三六
都市計畫費	三六、五一二	四三、四四三	五四、六七二
役所費	三四、三〇五	三五、六三五	四〇、三八一
會議費	二、一五一	二、四五九	二、五九四
警備費	三、四三三	二、六九一	二、七六一
公債費	二七、八五八	三二七、三三五	三二七、三三五
諸稅及負擔	四、九六九	四、三九八	四、七六七
積立金及基本財產造成費	八、七五五	九、三五五	九、七五五
其他諸費	三六、四〇二	三六、四二六	四二、四二六
合計	八四九、四三二	八四九、八一七	八五九、二一九

町村歲入內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
地租附加稅	二六、九四七	二七、一六八	二七、五六七
營業收益稅附加稅	二一、四五九	二一、四三一	二四、八五四
所得稅附加稅	三六、五三四	三五、〇九二	四〇、一五四
鑛業稅附加稅	三四八	三一〇	三三四
取引所營業稅附加稅	二三八	二四五	三三六
特別地稅附加稅	七三	九一	一〇〇
家屋稅附加稅	四六、一七九	四八、五二七	五〇、〇六一
營業稅附加稅	三、六二七	三、七六一	三、七四八
雜種稅附加稅	二七、二六九	二九、〇九三	三一、〇九七
特別稅 段別割	四八四	四八四	四六七
戶數割	一七、一三二	一八、七四四	一九、七四四
別稅 戶別割	一〇四	一〇八	一一五
家屋割	四、一七四	四、一七三	四、一七三
所得稅	五、二七八	五、七九七	五、七九七
其他	九、一六一	九、一六一	九、一六一
會議費	一、三五〇	一、三五〇	一、三五〇
道府縣債費	二八、一三〇	二三三、八七五	二三三、八七五
道府縣費取扱費	三、一八七	三、一八七	三、一八七
其他諸費	二、七九六	三、〇五四	三、〇五四
合計	一四、一五三	一四、三三四	一四、三三四
國庫下渡金	一四、二六七	一四、二六七	一四、二六七
國庫補助金	一一、三九〇	一一、三八一	一一、三八一
道府縣補助金	五、一七六	八、一四〇	八、一四〇
前年度繰越金	一三三、六四八	三四、四五五	四八、〇五七
寄附金	四、三七一	三、三三五	四、四四九
市債	五〇四、二一四	二八、六二六	二三一、四九九
納付金	六、七六九	六、五五六	七、三八〇
報償金	四、一二四	四、〇二二	四、三三三
繰入金	二四、四六七	六、三八二	八、四二七

町村歲入內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
地租附加稅	六、一四〇	六、一四〇	六、一四〇
營業收益稅附加稅	八、三五〇	八、一四六	八、一四六
特別地稅附加稅	一、四一九	一、四五九	一、四五九
家屋稅附加稅	四、一五五	四、二七六	四、二七六
營業稅附加稅	一、八八一	一、八五五	一、八五五
雜種稅附加稅	二七、五四〇	二七、三四〇	二八、七一〇
特別稅 段別割	四、二三一	四、二三一	四、九三一
戶數割	一〇、四五一	一〇、八一三	一一、五三六
別稅 戶別割	一二、五五二	一二、九四四	一三、六七三
所得稅	六五	八七	六八
其他	三	三	四
役場費	三、三三	三、三一	三、四二四
會議費	四、五三	四、五四八	四、九三三
警備費	三、四三	二、六九一	二、七六一
公債費	二七、八五八	三二七、三三五	三二七、三三五
諸稅及負擔	四、九六九	四、三九八	四、七六七
積立金及基本財產造成費	八、七五五	九、三五五	九、七五五
其他諸費	三六、四〇二	三六、四二六	四二、四二六
合計	八四九、四三二	八四九、八一七	八五九、二一九

地方債目的別（各年度末）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
道府縣補助金	三九、八七六	一四、七五六	一六、六九七
寄附金	二二、五三四	一〇、二〇〇	一〇、六四九
町村債	六四、六六一	二九、〇四三	二九、五六二
前年度繰越金	四八、〇二一	二一、七二〇	二一、七一〇
其他諸收入	九〇、五〇〇	六四、七三八	七〇、四〇六
合計	五九五、八三三	四七六、八三六	四九六、二六八

町村歲出內譯（單位千圓）

種目	昭和九年度	昭和十年度	昭和十一年度
教育費	二二、二六六	二〇七、八三七	二一七、〇六三
土木費	七三、九六〇	三一、二六五	三三、四四二
衞生費	一七、一六六	一七、四八三	一七、四八三
勸業費	三三、一五五	二〇、〇八三	二〇、五九五
社會事業費	一一、五九三	一八、五七六	一九、六九四
電氣及瓦斯事業費	一、八三三	二、五六一	三、〇〇一
役場費	七五、〇三七	七二、九六六	七三、九六六
會議費	二、六〇四	二、九四六	二、九四三
警備費	八、六二三	八、八九九	八、三〇九
公債費	三七、一九）	四一、六七四	四一、六七四
諸稅及負擔	一四、三三九	一四、三三九	一四、三三九
積立金及基本財產造成費	四六、六二八	四〇、九五八	四三、三一四
其他諸費	五三九、六三一	四七六、五六一	四九六、一一九
合計	五三九、六三一	四七六、五六一	四九六、一一九

都市人口

道府縣・都市

市

道府縣・都市	總數	男	女
	（昭和十年十月一日現在）		
小樽市	一九五、五六四	九七、五四五	九七、〇一九
旭川市	一〇二、三一二	五一、〇六五	五一、二四七
札幌市	一七九、五二一	八九、三五〇	九〇、一七一
函館市	一〇五、〇六三	五二、〇六五	五二、九九八
釧路市	一〇〇、一七九	五〇、一〇三	五〇、〇七六
帶廣市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
弘前市	一〇四、〇〇一	五一、〇六五	五二、九三六
青森市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
盛岡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
秋田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
山形市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
福島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
水戸市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宇都宮市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
前橋市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
高崎市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
桐生市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
川越市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
浦和市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
千葉市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
銚子市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
木更津市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
東京市	六、九七四、九六八	三、四八七、四八四	三、四八七、四八四
八王子市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
立川市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
横浜市	八四一、八〇六	四二〇、九〇三	四二〇、九〇三
横須賀市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
平塚市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
鎌倉市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
藤沢市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
小田原市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
厚木市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大船市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
新潟市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
長岡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
高田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
富山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
高岡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
金沢市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
福井市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
甲府市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
長野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
松本市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
岐阜市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大垣市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
高山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
多治見市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
静岡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
浜松市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
沼津市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
三島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
富士市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
名古屋市	一、〇一〇、〇〇〇	五〇五、〇〇〇	五〇五、〇〇〇
岡崎市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
一宮市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
豊橋市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
津島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
半田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
瀬戸市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
豊田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
津市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
四日市市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
伊勢市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
松阪市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
尾鷲市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大津市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
彦根市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
長浜市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
八幡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
京都市	一、〇一〇、〇〇〇	五〇五、〇〇〇	五〇五、〇〇〇
舞鶴市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
福知山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
峰山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宮津市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
園部市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大阪市	三、二五二、九八九	一、六二六、四九五	一、六二六、四九四
堺市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
岸和田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
豊中市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
池田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
吹田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
泉大津市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
高槻市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
貝塚市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
守口市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
枚方市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
茨木市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
八尾市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
泉佐野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
富田林市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
寝屋川市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
河内長野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
松原市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大東市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
和泉市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
箕面市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
柏原市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
神戸市	九七一、〇〇〇	四八五、五〇〇	四八五、五〇〇
姫路市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
尼崎市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
明石市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
西宮市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
洲本市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
芦屋市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
伊丹市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
相生市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
豊岡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
加古川市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
赤穂市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
西脇市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宝塚市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
三木市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
高砂市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
川西市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
小野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
加西市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
篠山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
養父市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
丹波市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
龍野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
土崎市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
西宮市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
奈良市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
和歌山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
海南市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
橋本市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
有田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
御坊市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
田辺市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
新宮市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
鳥取市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
米子市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
倉吉市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
境港市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
松江市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
浜田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
出雲市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
益田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
岡山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
倉敷市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
玉野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
笠岡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
井原市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
總社市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
高梁市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
新見市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
備前市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
瀬戸内市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
赤磐市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
真庭市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
美作市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
浅口市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
広島市	一、〇一〇、〇〇〇	五〇五、〇〇〇	五〇五、〇〇〇
呉市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
竹原市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
三原市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
尾道市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
福山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
府中市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
三次市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
庄原市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大竹市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
東広島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
廿日市市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
下関市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宇部市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
山口市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
萩市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
徳山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
下松市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
岩国市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
光市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
長府市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
小郡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
美祢市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
周南市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
山陽小野田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
徳島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
鳴門市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
小松島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
阿南市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
吉野川市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
阿波市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
美馬市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
三好市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
高松市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
丸亀市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
坂出市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
善通寺市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
観音寺市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
小豆島町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
土庄町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
松山市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
今治市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宇和島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
八幡浜市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
新居浜市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
西条市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大洲市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
伊予市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
四国中央市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
西予市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
東温市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
高知市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
室戸市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
安芸市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
南国市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
土佐市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
須崎市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宿毛市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
土佐清水市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
四万十市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
香南市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
香美市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
福岡市	一、〇一〇、〇〇〇	五〇五、〇〇〇	五〇五、〇〇〇
北九州市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大牟田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
久留米市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
直方市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
飯塚市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
田川市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
柳川市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
八女市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
筑後市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大川市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
行橋市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
豊前市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
中間市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
小郡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
筑紫野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
春日市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大野城市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宗像市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
太宰府市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
古賀市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
福津市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宇美町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
篠栗町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
須恵町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
久山町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
粕屋町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
芦屋町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
水巻町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
岡垣町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
遠賀町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
小竹町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
鞍手町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
桂川町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
筑前町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
東峰村	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大刀洗町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大木町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
広川町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
香春町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
添田町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
糸田町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
川崎町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大任町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
赤村	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
福智町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
苅田町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
みやこ町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
吉富町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
上毛町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
築上町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
佐賀市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
唐津市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
鳥栖市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
多久市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
伊万里市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
武雄市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
鹿島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
小城市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
嬉野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
神埼市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
吉野ヶ里町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
基山町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
上峰町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
みやき町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
玄海町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
有田町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大町町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
江北町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
白石町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
太良町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
長崎市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
佐世保市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
島原市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
諫早市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大村市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
平戸市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
松浦市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
対馬市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
壱岐市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
五島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
西海市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
雲仙市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
南島原市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
熊本市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
八代市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
人吉市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
荒尾市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
水俣市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
玉名市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
山鹿市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
菊池市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宇土市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
上天草市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宇城市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
阿蘇市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
天草市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
合志市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
大分市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
別府市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
中津市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
日田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
佐伯市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
臼杵市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
津久見市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
竹田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
豊後高田市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
杵築市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宇佐市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
豊後大野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
由布市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
国東市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
九重町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
玖珠町	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宮崎市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
都城市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
延岡市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
日南市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
小林市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
日向市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
串間市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
西都市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
鹿児島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
鹿屋市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
枕崎市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
阿久根市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
出水市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
指宿市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
西之表市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
垂水市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
薩摩川内市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
日置市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
曽於市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
霧島市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
いちき串木野市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
南さつま市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
志布志市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
奄美市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
南九州市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
伊佐市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
姶良市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
那覇市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
宜野湾市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
石垣市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
浦添市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
名護市	一〇一、〇〇〇	五〇、一〇三	五〇、八九七
糸満市	一〇一、〇〇〇	五〇、一

青森市	九三、四一四	四六、四五五	四六、九五九	東京市	五、八七五、六六七	三、〇七六、二七九	二、七九九、四五〇
八戸市	六二、一〇	三一、三九一	三〇、八一九	八王子市	五九、四九四	二四、七九六	二八、五八〇
盛岡市	六九、一三〇	三三、九四〇	三五、一九〇	横濱市	七〇四、二九〇	三七、九五三	二三、八七六
仙臺市	二一九、五四七	一一〇、四八六	一〇九、〇八一	横須賀市	一八二、八七一	二四、六七七	三四、三四九
石卷市	三三、五三〇	一七、二七一	一六、二五九	川崎市	一五四、一四八	三五、三四〇	三〇、一〇五
秋田市	六〇、六四六	三〇、三七五	三〇、二七一	平塚市	三八、三四八	二五、〇二八	二七、四六六
山形市	六九、九三一	三五、〇一七	三四、九一四	新潟市	一三四、九二一	一九、一四六	三六、四七〇
米澤市	五〇、四四八	二三、六八〇	二六、七六八	長岡市	六二、一五二	三一、一二四	三四、九四九
鶴岡市	三七、三二四	一七、二二一	二〇、〇〇三	高田市	三一、八六六	一六、七一三	三四、九四九
酒田市	三一、八六六	一五、一五三	一六、七一三	三條市	四八、四八四	二五、三一三	八三、三三四
福島市	四八、四八四	二三、一七一	二五、七〇八	富山市	四六、一九九	二五、八二五	五七、二四九
若松市（會津）	五四、七〇九	二五、八二五	二八、八八四	高岡市	二三、七九一	一六、一三三	一六三、七三二
郡山市	六三、八一六	三一、六七四	三一、一四二	金澤市	五四、七〇九	二八、八八四	七五、二七三
水戸市	八七、一二九	四三、二八四	四三、八四五	福井市	六三、八一六	三一、一四二	七五、二七三
宇都宮市	八七、八五五	二三、六五一	二五、二三四	甲府市	八七、一二九	四三、八四五	八二、六六四
足利市	四八、八七五	二三、六五一	二五、二三四	長野市	四八、八七五	二五、二三四	七七、三二五
前橋市	八七、八一	四〇、五三五	四六、六四六	松本市	八七、八一	四六、六四六	七三、三五三
高崎市	六四、二八三	三二、二六四	三二、〇一九	上田市	六四、二八三	三二、〇一九	三五、三八〇
桐生市	七六、一五五	三五、〇一二	四〇、一三三	岐阜市	七六、一五五	四〇、一三三	一二八、七二一
川越市	三五、一九二	一七、二七三	一七、九一九	大垣市	三五、一九二	一七、二七三	四九、二七三
熊谷市	三七、六四九	一七、七〇三	一九、九四六	靜岡市	三七、六四九	一七、七〇三	二〇〇、七三七
川口市	五三、七一六	二九、〇八五	二四、六三一	濱松市	五三、七一六	二九、〇八五	一三三、三三八
浦和市	四四、三二八	二三、五五七	二一、七七一	沼津市	四四、三二八	二三、五五七	四九、八二四
千葉市	五七、四四六	二八、二一八	二九、二一六	清水市	五七、四四六	二八、二一八	六一、一二三
銚子市	四八、三五二	一三、九一六	一三四、四三六	名古屋市	四八、三五二	一三、九一六	一、〇八二、八一六
市川市	四六、七一一	二三、六三七	二四、〇七四	豐橋市	四六、一一二	二三、六三七	一四〇、七三五
津山市	三六、〇九二	一七、二一一	一八、八八一	岡崎市	七七、一九五	三七、一二四	四〇、〇七一
廣島市	三一〇、一一八	一五八、二四一	一五二、八七七	一宮市	五三、三七六	二四、七九六	二八、五八〇
吳市	一二一、三三三	一二九、一〇〇	一〇二、一三三	瀨戸市	四七、五五三	二四、六七七	三三、八七六
尾道市	三〇、七七七	一五、三五三	一五、四二四	津市	六五、九七一	三一、六二三	三四、三四九
福山市	五八、一八六	二八、七六七	二九、四一九	四日市市	五八、四七一	二八、三六六	三〇、一〇五
下關市	一三三、七三七	六八、〇九六	六四、一四一	宇治山田市	五二、四九四	二五、〇二八	二七、四六六
宇都市	七六、六四二	三九、九三九	三六、七〇三	松阪市	三五、六六一	一六、一九九	一九、一四六
山口市	三四、八〇三	二九、七三一	三三、六一四	大津市	七一、〇六三	三四、九三三	三六、四七〇
萩市	三二、五八七	一五、七〇五	一四、二三六	京都市	一、〇八〇、五九三	五五五、七九二	五二四、八〇一
德島市	九七、〇二一	四七、五七三	四二、六九八	大阪市	二、九八九、八七四	一、五九六、七一五	一、三九六、七一五
高松市	八六、八四〇	四五、〇一七	四三、〇一四	堺市	一四一、二八六	七二、三二七	六八、九五九
丸龜市	二九、六一五	一四、八四八	一四、九六七	岸和田市	三九、〇九七	一八、五六三	二〇、三三三
松山市	八一、九四〇	四〇、九三六	四〇、九四二	神戸市	九二二、一七九	四六七、九四五	四四四、二三四
今治市	五一、六〇二	二三、九二二	二三、九四二	姬路市	九一、三七五	四四、一二五	四七、一三〇
宇和島市	五一、二〇〇	二五、〇八二	二四、七三五	尼崎市	七一、〇七二	三七、五四三	三三、五二九
八幡濱市	三〇、五〇〇	一四、七二五	一五、七五五	明石市	二〇、五一六	四三、一二八	二三、一二八
高知市	一〇三、四〇五	四九、八六六	五五、五三九	西宮市	四二、六四四	四六、一三二	四六、一三二
福岡市	二九一、一五八	一四四、四一四	一五五、七七五	奈良市	八九、九〇九	四三、六五七	二八、三七四
若松市	七三、三四五	三八、二五一	三五、〇九四	和歌山市	三五、六四八	二七、五九四	二八、三七四
八幡市	二〇八、六二九	一一〇、二三九	九八、三九〇	新宮市	一七九、七三二	八八、八八六	九〇、七四六
戸畑市	六七、八〇〇	三五、六四七	三二、一五三	海南市	三三、〇三五	一五五、五六一	一六、四九四
久留米市	九一、九二〇	四六、二一五	四五、七〇五	鳥取市	二九、九一七	一四、八一五	一五、一〇二
大牟田市	一〇四、九二	五三、一二	五一、八七	米子市	四五、三三五	二一、七五一	三三、八一四
小倉市	一一〇、三七二	五六、二四七	五四、〇二五	松江市	三六、六三五	一七、五三二	一八、九八三
門司市	一二一、六一一	六三、〇八五	五八、五三六	岡山市	五二、〇三三	二六、八一七	二五、一二六
直方市	四三、九四三	二三、一五八	二一、七八五	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
飯塚市	三九、六二九	二〇、〇七七	一九、五五九	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
佐賀市	五〇、一五四	二四、一九一	二五、九六三	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
唐津市	三一、〇五八	一五、〇〇〇	一六、〇五八	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
長崎市	二一一、七〇二	一〇六、二五八	一〇五、四四四	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
佐世保市	一七三、二八三	九九、九五一	七三、三三二	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
熊本市	一八七、三八二	九二、四一八	九四、九六四	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
大分市	六一、七三二	三〇、七六九	三〇、九六三	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
別府市	六二、三四五	二九、七三一	三三、六一四	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
中津市	三〇、三二八	一四、二三六	一六、〇九二	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
宮崎市	六四、七二六	三三、六九四	三三、六九四	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
都城市	三六、五七五	一八、五六九	一八、〇〇六	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
延岡市	五六、四二一	二七、五六二	二八、五六九	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
鹿兒島市	一八一、七三六	八八、〇九四	九三、六四二	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
那覇市	六五、二〇八	二九、五二七	三五、八八一	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇
首里市	一九、三〇五	九、〇八七	一〇、二一八	倉敷市	三四、六四九	八一、五九四	八四、五五〇

△岡谷市

長野縣平野村は昭和十一年四月一日市制を施行。人口は五萬三千八百七十五人、面積は三八・四一方粁である。

新市

△**防府市** 山口縣防府、中關の兩町及び華城、牟禮の兩村を合併、その區域に昭和十一年八月二十五日市制施行さる。同市の總面積は四・一八〇方里、世帶數一〇、九〇一、人口五一、四〇三人（昭和十年國勢調査）

△**豐中市** 大阪府豐中町及麻田、櫻井谷、熊野田三ケ村を合併して市制施行の諮問案は昭和十一年十月六日町並びに村會にて可決され愈〻十月十五日豐中市出現。

△**高山市** 岐阜縣大野郡高山町は大名田町を合併、同區域に昭和十一年十月一日市制を施行。人口二八、九六二人（昭和十年）

△**三原市** 廣島縣三原町を中心に糸崎、山中、西野、田野浦、須波の六ケ町村を合併して昭和十一年十一月十五日市制施行、その面積四・五七方里、人口三萬七千人。

△**彦根市** 滋賀縣彦根町を中心として松原、青波、北青柳、福滿、千本五ケ村を合併昭和十二年二月十一日市制を施行。人口三萬五千三百の六人（昭和十年）

◎七市出現

（昭和十二年四月一日附市制施行）

△**栃木市** 栃木縣栃木町單獨にて市制施行面積一五・〇七方粁、戸數六、五〇〇、人口三四、六一六人。

△船橋市　千葉縣船橋、葛飾兩町及び八榮法典、塚田の三村を合併其の區域に市制行戸數八、四三一戸、人口四五、〇〇〇人。

△飯田市　長野縣飯田町及上飯田町を合併し、市制施行、戸數六、三二七戸、人口二、二八九人。

△敦賀市　福井縣敦賀町及杉原村を合併して市制施行、面積五二、二五方粁、戸數六、三二七戸、人口三一、八四〇人。

△桑名市　舊三重縣桑名町、戸數八、〇〇〇人口三七、四五七人、面積一九、〇〇〇平方粁。

△福知山市　舊京都府福知山町、面積四方里餘、戸數六、九八六戸、人口三四、〇五九人。

△布施市　大阪府布施、小阪、楠根三町及長瀬、意岐部、刀彌三村を合併して市制施行面積一九・六四五平方粁、戸數二三、三三二戸、人口九五、九一九人。—以上七市—

△熱海市　靜岡縣熱海町及多賀村の區域に昭和十二年四月十日市制を施行、戸數四三一〇戸、人口一、一五六人、面積六〇〇九方粁。

△平市　福島縣平町は平窪村を合併、五月二十二日内務省告示を以て七月一日市制を施行の公布あり、市は面積一八・七四方粁、人口三二、二九二人。

△釜石市　昭和十二年五月五日岩手縣釜石町に市制が布かれた。戸數七千五百、人口四萬一千。

△豐原市　樺太市制最初の施行地たらんとする豐原町では、五月二十七日市制施行の上申書を可決。

市基本財産（昭和十年度末）

市別	總額	經濟全般の爲に設備するもの	特定目的の爲に設備するもの
札幌	五、九四〇、五三〇	四、一八〇、七六一	一、七五九、七五九
函館	一、一五〇、九八六	七四一、二〇七	四〇九、七七九
小樽	六、〇九八、九二八	二、四八八、四九七	三、六一〇、四三一
旭川	五、〇二〇、八七一	四、八四三、九八三	一二八、八八八
室蘭	一、八二一、四八三	一、七二八、二六〇	一〇五、一二三
釧路	八七四、六三五	八一九、七五六	五四、八七九
帶廣	三九三、二〇二	三七一、七七四	二一、四二八
弘前	二一一、〇八四	二三七、四七二	九七、六五九
青森	一二八、九〇九	一、一五七、一九九	一二、九〇四
八戸	一七七、一九六	一四二、一八〇	八五、〇一六
盛岡	一一七、三七六	三二、五六九	八四、八〇八
仙臺	七八五、三九八	六四三、八〇七	一四一、五九一
石卷	六三一、〇五一	五九七、六六七	一五、三八四
秋田	一、〇〇四、三四六	七四一、二五三	二六三、〇九三
山形	五〇、一六二	二五、一三三	二五、〇二九
米澤	六三、七〇五	三四、五八四	二九、一二一
鶴岡	八〇、四三五	六〇、二四五	二〇、一九〇
酒田	六四、五三九	四七、四四二	一七、〇九七
若松	四七、〇二〇	二六、九七〇	二〇、五〇
福島	二四、三五七	一〇、五八七	一三、七七〇
郡山	五、二三三	—	—
水戸	二九、三六三	二、六六八	二六、九五
宇都宮	一、一五〇、二三四	九七五、四四〇	一七四、七八四
足利	三三〇、二一五	三一二、〇二九	一〇八、一八六
前橋	三五、六八一	一五、三〇八	二〇、三七三
高崎	五八七、三〇八	五三〇、五八五	五六、七二三
桐生	一三一、〇六三	八一、二三九	四九、八二四
川越	四一、一三六	二〇一、五四七	二〇、五八九
熊谷	二五、一四八	三、九八七	二一、一六一
川口	三八、六〇五	三三、六四〇	四、九六五
浦和	一三、六七六	一一、一三八	二、五三八
千葉	一四四、五九三	一四、五九三	—
銚子	一八二、一六一	一六五、七九三	一六、四六八
市川	一〇、八三六	六、一一〇	四、七一六
東京	二一、四二六、七九七	一、一〇四、四八七	二〇、三二一、三一〇
八王子	三三〇、六三五	—	二三〇、六三五

横濱	一、九一五、四三六	一、五九二、六九一	三三二、七四五
横須賀	三三、一三八	二五、一五二	八、〇七六
川崎	二六、三五四	二六、三五四	—
平塚	三、七三九	三、七三九	—
新潟	二、九五三、一九〇	六七、六八六	二、八五五、五〇四
長岡	二三二、〇九五	一四、一七六	—
三條	四、一七六	一三五	一三五
高田	四三、六〇四	一〇、二四二	一〇、二四二
富山	一二七、一九九	一、八一九	一、八一九
高岡	九〇、六〇二	四三、六八一	四三、六八一
金澤	三一、〇三三	三一、〇三三	—
福井	二三九、九八〇	二一〇、七七二	二一〇、七七二
甲府	六二、九一三	一二、八五七	一二、八五七
長野	一一、五六六	八、七〇二	八、七〇二
松本	七四、二〇八	五五、二〇八	五五、二〇八
上田	二三七、八七七	二〇四、四四二	二〇四、四四二
岡谷	八二、九八八	—	—
岐阜	二一一、二二四	二八、六八四	二八、六八四
大垣	一三一、七九三	一二二、六五九	一二二、六五九
靜岡	六四八、二七六	六五、〇八六	六五、〇八六
濱松	二三三、五六三	五三〇、四六九	五三〇、四六九
沼津	二一八、八一〇	一、四三〇	一、四三〇
清水	六三一、五九〇	六三〇、一六〇	六三〇、一六〇
名古屋	六三二、三九九	一〇九、四二二	一〇九、四二二
豐橋	一七二、五二三	一七二、五二三	—
岡崎	六六、一一六	六六、一一六	—
一宮	一一〇、八七四	六八九、一五六	三七、四一四
瀨戸	二二九、八七四	一七三、二六七	一六八
津	五八四、一二八	二八、二七三	一一、五八三
四日市	七六九、九三六	二一六、四一七	二、〇〇三、五五〇
宇治山田	二五二、三二一	三三一、三八二	二一〇、四一七
松阪	四九〇、九九九	八四九、一二〇	四四、九四八
大津	六二、四二九	二〇六、一一〇	一七、四二一
京都	九二一、一九六	五六八、四七八	五四、七一三
大阪	一、九一一、五九九	三三八、四〇三	三三、一四六
堺	二四六、七九三	一、〇五三	二四、三三六
岸和田	七三八、四九九	二、六八五	三、一一五
神戸	二、三一二、六七二	一七三、〇九九	七、九三五
姬路	一六八、八一〇	一一、五八三	九六、〇五六
尼ケ崎	六二、一四〇	二八、二七三	一〇一、二五七
明石	三一、五八七	三六五、〇六六	二九、一七九
西宮	二一六、九一七	五〇、五〇〇	一、七一五
奈良	二六、三二七	三一五、四四	五二、二九九
和歌山	二三三、一四七	六、四八六	二一、六八一
新宮	六、六五一	五、〇四二	—
海南	一〇五、一〇三	四四、五九一	八、七六七
鳥取	二四四、一三一	一七六、〇三八	七四、九三八
米子	一六三、四一六	一七、一五二九	一、一七〇
松江	九二、一八四	五〇、六七六	一三一、七一六
岡山	三〇、三〇〇	—	二、二八二
倉敷	七、九九四	一一〇、六八九	三八、五七八
津山	四二六		
廣島	六八九、一五六	一七二、〇九九	一六、二七七
尾道	二八、二七三	一六、六九〇	二、〇〇三、五五〇
吳	二一九、九六七	三三一、三八二	二一〇、四一七
福山	二、二一九、九六七	四五一、七九九	四四、九四八
下關	八九四、一五〇	二六、一一〇	一七、四二一
宇部	二三三、五三二	五六八、四七八	五四、七一三
山口	五六八、四七八	三八八、四〇三	三三、一四六
萩	四二一、五四九	一、〇五三	二四、三三六
德山	二五五、三八〇	二、六八五	三、一一五
德島	五六、八〇一	七、九四〇	七、九三五
高松	七、九四〇	二、八六五	九六、〇五六
丸龜	九八、九二一	一一三、四六七	一〇一、二五七
松山	一一三、四六七	三六五、〇六六	二九、一七九
今治	三九四、三四五	五〇、五〇〇	一、七一五
宇和島	五二、二一五	三一五、四四	五二、二九九
八幡濱	三六七、七八三	二六、一七	二一、六八一
高知	二〇、八〇六	六、四八六	—
福岡	二八、一六七	五、〇四二	八、七六七
久留米	五、〇四二	—	四四、五九一
門司	八、七六七	一七六、〇三八	七四、九三八
小倉	—	五〇、六七六	一、一七〇
若松	一九、五二九	—	一三一、七一六
大牟田	一七七、二〇八	一八二、五九二	二、二八二
八幡	一、二八二	一一〇、六八九	三八、五七八
戸畑	一四九、二六七		
直方			

飯塚	一六七、四六二	一四五、一二九	二三、三三三
佐賀	二五、一二八	一一、四九二	一三、六三六
唐津	一二五、〇九九	一〇七、九五一	一七、一四八
長崎	三三五、一七八	—	三二五、一七八
佐世保	三九、一八八	一八八、八八六	四〇、四〇二
熊本	一、三六、八一一	一、二七一、四二五	五五、三一六
大分	三七、二四五	一、三一〇	三五、九三五
別府	二、一三一、一一一	二、一〇三、二六六	一八、八四五
中津	一三一、二九七	一三六、八五一	九四、四四六
宮崎	二四五、一二六	二〇九、五六一	三五、五六五
都城	二八、三三一	二三、五六三	四、一六八
延岡	一一二、五五四	一〇五、七五七	六、七九七
鹿兒島	一、四〇三、七九一	一、二六八、六二八	二六、一六三
那覇	一八三、八二九	一八三、八二九	—
首里	四、三六二	一八九	四、一七三
合計	八一、五四一、七八五	四三、〇九二、九五九	三九、四四八、八二六

（備考）昭和十一年度地方財政概要に據る。

市稅課率

	昭和九年	昭和十年
	最高 最低 平均	最高 最低 平均
	厘 厘 厘	厘 厘 厘
地租附加稅	六六五	七四一
營業收益稅附加稅	九〇六	九〇九
所得稅附加稅	一二九	一二八
特別地稅附加稅	一、〇八一	八九二

町村稅課率（昭和十年）

種目	最高	最低	平均
	厘	厘	厘
地租附加稅	二、五四二	一八一	七九九
營業稅附加稅	三、一九三	二三三	九五六
雜種稅附加稅	三、八一七	八	四三八
（昭和十一年度地方財政概要）	×六、四六五	×七二×一、三一七	
家屋稅附加稅	四、四四一	五〇	五三三
特別稅戶數割	二一、一一〇	三〇〇	一五、四八六
特別稅戶數割ニ類スル營業收益稅（營業稅）附加稅	—	—	—
所得稅附加稅	一、九八〇	二〇〇	七三三
營業稅附加稅	三、一二三	三〇	七七
雜種稅附加稅	一、七九	一〇〇	八八一
備考 本表中×印は地租附加稅と併課せる反別割とす。地租附加稅、家屋稅附加稅、營業收益稅附加稅、所得稅附加稅、營業稅附加稅、雜種稅附加稅は本稅一圓當。特別地稅は道府縣制限の一割當。特別反別割は一反歩當。特別稅戶數割は納稅者一戶又は一人當。	五、一六二	五、一六二	五、一六二
	一、〇四一	一、〇四一	一、〇四一
	一、〇一〇	一、〇一〇	一、〇一〇

道府縣稅制限外稅額

稅種別	昭和九年	昭和十年
	圓	圓
地租附加稅	二四、〇四四、三七四	二四、三三二、二八五
營業收益稅附加稅	五、三七、一九六	五、九七六、四七六
所得稅附加稅	七、四五五、三七五	八、八九六、一三一
特別地稅	三、三五八、八一七	三、四八五、二三九
合計	四〇、一九二、七六二	四二、九〇、二三一

列國の大都市

世界に於て三十萬以上の人口を有する大都市は百七十、百萬以上のもの三十七二百萬以上のもの十一で、ニューヨークの六百九十三萬を第一とし、東京は五百八十八萬を算して第二位を占めて居る。本表は列國國勢要覽（昭和十二年版）に依つたもので、順位第八十位までを採つたものである調査年次三〇とあるは一九三〇年の略、他同樣（人口單位千人）

都市	國名	人口	順位
紐育	（米）	六、九三〇	一
東京	（日）	五、八七六	二
ロンドン	（英）	四、一八五	三

ベルリン	（獨）	三六四、二二一	四
モスコー	（ソ聯）	三五	三、六四二	五
上海	（中國）	三五	三、五五九	六
シカゴ	（米）	三〇	三、三七六	七
大阪	（日）	三五	二、九九〇	八
巴里	（佛）	三六	二、八三〇	九
レニングラード	（ソ聯）	三五	二、七四〇	一〇
ブエノスアイレス	（亞）	三一	二、二一五	一一
フイラデルヒア	（米）	三一	一、九五一	一二
ウイーン	（墺）	三四	一、八六〇	一三
リオデジヤネイロ	（伯）	三五	一、七〇一	一四
デトロイト	（米）	三〇	一、五六九	一五
北京	（中）	三五	一、五六九	一六
カルカツタ	（印）	三一	一、四八六	一七
シドニー	（濠）	三五	一、二五五	一八
ロスアンセルス	（米）	三〇	一、一七九	一九
カイロ	（埃）	三三	一、一九六	二〇
ワルソー	（波）	三一	一、一七九	二一
孟買	（印）	三三	一、一六一	二二
天津	（中）	三五	一、一五三	二三
サンパウロ	（伯）	三五	一、一五一	二四
廣州	（中）	三五	一、一一八	二五
マンチエスター	（英）	三五	一、一一五	二六
グラスゴー	（英）	三三	一、一一三	二七
堡	（獨）	三三	一、一二九	二八
漢	（日）	三五	一、〇八三	二九
名古屋	（日）	三五	一、〇八一	三〇

都	（日）	三五	一、〇八一	三〇
ミラノ	（伊）	三四	一、〇四八	三一
バルセロナ	（西）	三一	一、〇四三	三二
ブダペスト	（匈）	三四	一、〇三六	三三
メキシコ	（墨）	三〇	一、〇二九	三四
バーミンガム	（英）	三五	一、〇二四	三五
南京	（中）	三五	一、〇一〇	三六
メルボルン	（濠）	三五	一、〇〇八	三七
マドリツド	（西）	三一	九九四	三八
マルセーユ	（佛）	三六	九九二	三九
神戸	（日）	三五	九二二	四〇
クリーヴランド	（米）	三〇	九〇〇	四一
ナポリ	（伊）	三四	八七二	四二
リヴアープール	（英）	三五	八五五	四三
ブラーグ	（チエツコ）	三〇	八四九	四四
セントルイス	（米）	三〇	八二二	四五
モントリオール	（加）	三一	八一九	四六
パルチモア	（米）	三〇	八〇五	四七
漢口	（中）	三五	七九一	四八
アムステルダム	（和）	三三	七八二	四九
ポストン	（米）	三四	七八一	五〇
ケルン	（獨）	三六	七七一	五一
マンチエスター	（英）	三五	七四八	五二
ミユンヘン	（獨）	三六	七四六	五三
イスタンプール	（土）	三五	七四一	五四
濱	（日）	三五	七〇六	五五

ライプチツヒ	（獨）	三六	六九九	五六
サンチアゴ	（智）	三〇	六九六	五七
ピツツバーグ	（米）	三〇	六七〇	五八
モンテヴイデオ	（ウルグアイ）	三三	六六七	五九
コペンハーゲン	（丁）	三五	六六三	六〇
エツセン	（獨）	三六	六六一	六一
マドラス	（印）	三一	六六〇	六二
アレキサンドリア	（埃）	三二	六四六	六三
ドレスデン	（獨）	三六	六三七	六四
ハルコフ	（ソ聯）	三五	六二五	六五
ゼノア	（伊）	三四	六二四	六六
桑港	（米）	三〇	六二四	六六
パクレスト	（羅）	三二	六二三	六七
ブカレスト	（羅）	三二	六二一	六八
トロント	（カナダ）	三一	六一九	六九
ブレスラウ	（獨）	三六	六一九	七〇
センフランシスコ	（米）	三五	六一二	七一
キエフ	（ソ聯）	三五	六一一	七二
トリノ	（伊）	三四	六一〇	七三
ロツテルダム	（和）	三五	六〇五	七四
リスボン	（葡）	三〇	五九五	七五
ハヴアナ	（キユバ）	三一	五九四	七六
ミルウオキー	（米）	三〇	五八九	七七
バツフアロー	（米）	三〇	五八八	七八
リヨン	（佛）	三六	五七三	七九
			五七一	八〇

六大都市

六大都市市有財産

	土地	建物	有價證券	現金	その他	總數	一人當
	圓	圓	圓	圓	圓	圓	圓
東京	三七〇、六八七、七六三	五五、六〇四、七六五	一、五五一、二四三	八、二〇三、〇四九	四四五、一三六、九一一	八八一、八三、七三一	一四九、九八
京都	二五、八六三、一五〇	一三、九二一、五四七	五三、三七二	五、六八二、六六九	五七、六八六、〇六二	一〇三、二〇六、八〇〇	九五、四一
大阪	三九九、九八〇、七九九	八四、八三〇、〇七六	二、六九六、二九五	四三、二二三、二三三	三三六、二九五、七四〇	八六七、〇一六、一四三	二八九、九八
横濱	二三、二七二、五六五	二六、八一〇、七五五	三、三五二、五七二	二、〇一〇、二一七	六二、六一六、八六八	一一八、五、九、一八〇	八、二七
神戸	二四、〇五九、八一四	一九、三七一、七八〇	一、二四三、九二五	二、〇一〇、二一七	七一、三〇一、九三七	一一七、九七七、六七三	一二九、三八
名古屋	六二、四三七、一九三	二一、一七六、一七九	七六、九二四	七四四、二八八	一五、八四七、八九四	一〇一、二八二、五二六	五四

（備考）本表東京、京都、大阪、横濱、名古屋市は昭和十年十月末、神戸市は同年十一月末現在。

六大都市金融比較（昭和十一年末、單位千圓）

市別	銀行 預金	貸出	手形交換 枚數	金額	不渡手形 枚數	金額
	圓	圓		圓		圓
東京	三七〇、六五六	二〇三、二五〇	一、〇三〇、八五八	一、五五三、一七四	二〇一	七三、六八九
京都	二、四八二、八八三	一五、八七、〇八一	二七、四〇〇、〇八七	二九一	三〇八、四六三	
大阪	一、三七二、八五七	一一、〇八九、八四〇	二四、九七九、二九二	二一六	一七九、四六八	
横濱	二〇六、五七四	二、三二一、九五七	一、五四六、三〇一	六三四	三八、九八八	
神戸	二五一、九一七	二、六四二、六八四	三、三〇五、六四三	三七九	一七五、一二五	
名古屋	四〇九、八五七	二、八六一、四三	六、六六九、七五六	二九	二六、一九五	

（備考）不渡手形は東京、大阪以外は昭和十年末。

六大都市豫算

	歳入 歳出	一人當（歳入）	一人當（歳出）
	圓	圓	圓
東京	三三八、五二一、三五	三八・二六	三八・四四
京都	六〇、五〇三、三九九	三五・八五	三六・四六
大阪	三〇七、五六一、三六八	六一・〇四	六一・九三
横濱	四九、七一五、八五八	四二・九八	四二・九六
神戸	六〇、八一七、二二八	五七・四六	六〇・二五
名古屋	五五、七八六、三〇一	三二・二六	三三・〇九

（備考）本表は昭和十年度當初豫算に據る。

六大都市市稅負擔額（昭和十年度）

市別	府縣稅	市稅	合計	一人當
	圓	圓	圓	圓錢
東京（普通）	五、〇一五、八一五	五、八三七、二八二	一八、三二八、〇五二	二五、八八
東京（特別）	三五六、八四七、七二四			
東京（普通）	四二五、八五五、〇九九			
東京（特別）	七八二、四三五、〇九九			
横濱	三七、六九〇、二〇三	三七、八九〇、二〇三	六九、〇六一、五七七	二一、七五

六大都市市債（昭和十一年三月三十一日現在）

市別	經濟別	金額	合計	一人當
		圓	圓	圓
東京（普通）		三五六、八四七、七二四	八、二一三、四三五、〇九九	一三二・一五
東京（特別）		四二五、八五五、〇九九		
京都（普通）		九、三二一、七八〇	四六三、八二六、一五一	四六・三五
京都（特別）		三七、〇六〇、五八一		
大阪（普通）		六九、一四三、八五二	四九三、三六二、五五五	一六五・〇〇
大阪（特別）		四二四、一九二、九三三		
横濱（普通）		二二、一二九、五五五	一七四、四八八、〇〇六	二四七・七五
横濱（特別）		六二、三五八、四四一		
名古屋（普通）		三五、八二八、五〇〇	一〇六、三一七、二〇〇	二六、三五
名古屋（特別）		大三、七六七、八五九	九九、五九六、三五九	九一、九八
神戸（普通）		四九、三九二、八〇〇	一〇六、三一七、二〇〇	二六、三五
神戸（特別）		五六、七三八、九〇〇		

（備考）△印は區費を示す

六大都市所在地府縣警察統計（昭和一一年警視廳統計一班に據る）

府縣別	警部補以下定員	警察署	犯罪件數（刑法犯）	即決件數	行政檢束	交通事故	新聞紙 有保證	新聞紙 無保證
東京府	一三、八八六	八六	一六三、三九六	三六、九五〇	三六六、九六二	二九、七三六	一、六九二	一、一七五
京都府	二、一一	二六	三五、九三七	三三、三一七	一四一、三二九	二、二五一	三三	二〇五
大阪府	六、〇二七	六二	一二五、二四九	二一七、七〇〇	三三六、九六二	七、四六二	六九一	八五一
神奈川縣	二、二六九	三一	五六、八九一	三七、八八九	一〇一、六一八	一、九〇七	一一〇	一三五
兵庫縣	三、四二三	五六	六六、九一五	八三、七九八	九五、六八七	四、三六一	二八九	三四六
愛知縣	二、八四六	三二	七八、五六二	二七、八九三	七、三五〇	二、六二〇	五一五	一四〇

東京市

廣表

方位	地名	距離
極東	江戸川區東篠崎町東端	三二・二九粁
極西	板橋區西大泉町西端	
極南	蒲田區六郷町南端	三一・〇四八粁
極北	足立區舍人町北端	

土地種別

昭和十年　平方米

	數	
總數	四八四、四九九、四五三	
御料地	六、三九九、〇五七	
國有地	七三、二三三、三二八	
民有地	四〇四、八六八、〇六八	
市有地	一三、三〇九、六三〇、三二九	
私有地	三九〇、六三〇、三二九	

建物棟數（各年末現在）

昭和十一年　平方米

	數	
總數	四八六、一一〇、二〇〇	
土造	六、三九、〇八三	
石造	七四、二三五、三〇七	
煉瓦造	四〇五、四、三、〇六〇	
コンクリート造	一三、七九一、七六三	
木造	三九〇、四六二、三二九	
その他	三九〇、七二五、九二九	

同九年　同十年

	數	
總數	九二〇、〇五三	九二〇、〇五三
平家造	九三九、六九九	五、六二四
二階建	三、六二五	

面積及人口（昭和一〇、一〇、一現在）

區名	面積(方粁)	人口 總數	男	女
麹町	八・七七	六〇、三二七	三二、二二四	二八、一一三
神田	三・一四二	一三六、九〇六	七九、五八八	五七、三一八
日本橋	三・四〇八	一一三、八七一	六六、二六五	四七、六〇六
京橋	五・五五六	一四七、三三四	八一、三三六	六六、〇〇八
芝	一〇・〇八四	一九〇、七七六	一〇四、〇四五	八六、七三一
麻布	三・七七四	八七、八五七	四五、七八八	四二、〇七四
赤坂	四・五四八	五八、七〇〇	三〇、〇五〇	二八、六五〇
四谷	二・八八六	七六、三三一	三七、六三三	三八、六八八
牛込	五・〇六七	一三〇、三四〇	六一、六〇一	六九、七三九
小石川	六・一九六	一四七、一三五	七五、六〇一	七一、五三四
本郷	四・八一六	一四一、一二五	七三、一八	六八、〇三七
下谷	四・九七一	一九〇、五二四	一〇一、六八二	八八、八四一
淺草	五・〇五四	二七三、九七三	一四六、五三八	一二七、一五五
本所	六・六三二	二七八、一九四	一五四、九三九	一二三、二五五
深川	一〇・五二四	二一四、一七五	一二五、〇七四	九九、一〇一
品川	一〇・一六二	二〇四、二六二	一〇五、六〇四	九八、六五八
目黒	一四・七二六	一五三、一八七	七八、一六一	七四、〇三六
荏原	五・七九八	一六一、八六三	八三、二一四	七八、六四九
大森	二三・三九三	二〇一、四二五	一〇一、二三六	一〇〇、一八九
蒲田	二一・八〇四	一四七、五一六	七七、二二二	七〇、二〇四
大井	三八・七九九	一九〇、四八六	九六、七八八	九三、六九八
品川	一五・二三六	二三四、八五〇	一一七、八五四	一一六、九五六

新築家屋棟數（昭和十年中）

	全市	舊市部	新市部
總數	四五、四二〇	八、三〇六	三七、一一四
平家造	二三、九九九	一、六三九	二三、三六〇
二階建	二〇、六五三	六、〇九二	一四、五六一
三階建以上	七六八	五七五	一九三

宅地賣買價格（昭和十年、一平方米當）

區名	最高 地名	賣買價格	最低 地名	賣買價格
麹町	大手町一丁目六ノ五	圓 二〇五・七〇	土手三番町一七ノ一	圓 二三・二九
神田	須田町一丁目三ノ八	二三六・八七	三崎町二丁目二八ノ一七	四二・三四
日本橋	兜町二丁目一九	三〇二・四九	鞘殼町三丁目六ノ二	二一・四四

（備考）面積は九年一月一日調、人口は昭和十年國勢調査速報に據る。（内閣統計局）

區名	町名	人口	區名	町名	人口
淀橋	中野	一〇、〇五四	京橋	銀座四丁目	六六、三〇
中野	並木	一一、四〇五	芝	新橋一丁目六ノ四	一五一、五一
杉並	並木	三四、〇九四	麻布	仲ノ町一九ノ一四	四八、四〇
豐島	千川	一三、三六二	赤坂	一木町二五	七三、五〇
瀧野川	王子	五、一九二	四谷	新宿二丁目七二ノ二	一三〇、〇七
荒川	板橋	一五、八二三	牛込	肴町三四	一三〇、〇七
王子	足立	八〇、六六三	小石川	指ヶ谷町一四四、五	一四七、一三五
板橋	向島	五三、五〇九	本郷	本郷一丁目一ノ三	一三五、一三六
足立	葛飾	七、七八七	下谷	上野元黒門町六	一四一、〇四七
向島	城東	一〇、一七七	淺草	雷町一丁目九ノ一	一三一、〇四七
葛飾	東葛飾	三五、七七六	本所	東兩國四丁目七ノ一五	一五〇、八六八
城東	江戸川	一〇五、六八二	深川	清澄町三丁目五ノ一	一七四、六一二
江戸川		四六、八〇一	品川	西大崎一丁目一ノ四	一七九、六九八
（備考）面積は九年一月一日調、人口は昭和十年國勢調査速報に據る。（内閣統計局）		五五四、五六六 五、八七五、六六七	目黒	下目黒二丁目三七一ノ二	八九、四五〇
			荏原	下神明町五〇五ノ九	二、七九九、四五〇

大森	山王一丁目二五二三ノ三三	二五・〇〇	雪ケ谷町二五五	一・五一	葛飾
蒲田	六郷町四五	六・六一	矢口町七二〇	一・〇三	江戸川
世田谷	太子堂町三九一ノ一	九・〇七	玉川中町三〇九ノ三	四・〇〇	葛飾
澁谷	上通三丁目四八	二〇〇・〇〇	代々木山谷町四〇三	二・一一	日本橋
淀橋	角筈一丁目八四四ノ三	九〇・七五	下落合三丁目一一九三	四・五四	京橋
中野	中野驛前九ノ五	六九・五七	鷺ノ宮五丁目五〇〇	二・一三	麹町
杉並	高圓寺一丁目二七	九・〇七	正保町一三	二・一一	神田
豐島	池袋町一丁目七五五	二五・七八	長崎仲町一丁目二四八三	四・五四	京橋
瀧野川	中里町八五ノ一	一八・九四	瀧野川町二九一	四・一三	芝
荒川	南千住町五ノ六一	三・二	尾久町五ノ一二三九ノ二	四・五四	麻布
王子	王子町二〇八ノ一	三・七〇	浮間町二五七三	〇・六〇	赤坂
板橋	板橋町五丁目九五〇	一三・六三	東大泉町九〇七	〇・七四	四谷
足立	千住高砂町一〇	二四・二四	伊興前沼一二四八	〇・六〇	牛込
向島	寺島町一丁六ノ四	一六・一九	隅田町四ノ一二〇ノ一	六・六一	小石川
城東	龜戸町五ノ九	三〇・三五	南砂町六ノ三一一ノ一	三・九〇	本郷

宅地貸貸價格（昭和十年、一平方米當）

區名	最高 地名	最高 一箇月貸貸	最高 賣買評定價格	最低 地名	最低 一箇月貸貸	最低 賣買評定價格
麹町	丸ノ内二丁目一六ノ二	〇・七六圓	六〇五圓	九段四丁目二ノ七	〇・〇九圓	五四圓
神田	神保町一丁目一一	〇・九四	二一三	駿河臺二丁目三ノ一八	〇・〇五	四五
日本橋	室町一丁目五ノ一	一・九一	六〇五	茅場町二丁目一二ノ九	〇・一五	八四
京橋	銀座四丁目一ノ三	一・六六	九〇八	佃島一三	〇・〇五	一八
芝	新橋二丁目二ノ一	〇・七二	三〇三	白金三光町一〇八	〇・〇六	二二
麻布	宮村町二	〇・四七	八二	霞町五	〇・〇三	一四
赤坂	溜池町五	〇・五一	一三一	青山北町六丁目三二	〇・〇二	二七
四谷	新宿三丁目三五	〇・八五	二八七	旭町六〇	〇・〇五	九
牛込	肴町三四	一・二八	六〇	市ケ谷富久町一六	〇・一二	一三
小石川	關口水道町一四	〇・三六	三六	高田豐川町四三	〇・〇二	一八

本郷	本郷三丁目四ノ一	〇・五四	駒込神明町三六七	〇・〇三	一三六
下谷	廣小路町一	〇・六九	谷中初音町四ノ一七六	〇・一一	一五一
淺草	雷門二ノ二五ノ八	〇・七五	清川町三丁目三ノ三	〇・一四	一八一
本所	龜澤町三丁目一二ノ三	〇・一一	太平町二丁目五ノ二	〇・〇七	二六
深川	門前仲町一丁目三ノ二	〇・一三	毛利町七ノ	〇・〇八	一一
品川	五反田町二丁目三七五	〇・二九	大井伊藤町五七〇〇	〇・〇五	七六
目黒	下目黒二丁目四〇〇	〇・一七	芳窪町九八	〇・〇三	六一
荏原	戸越町六二五ノ一	〇・一〇	中延町六二二ノ二	〇・〇五	八
大森	新井宿一丁目二六九〇	〇・三〇	久ケ原町一一七〇	〇・〇三	七〇
蒲田	御園町二五乃至四〇	〇・四五	羽田二丁目	〇・〇三	四五
世田谷	上馬町一丁目六一五	〇・〇六	玉川中町二ノ五五六	〇・〇三	一五
澁谷	上通三丁目一ノ二	〇・九一	幡ケ谷本町二ノ二五八	〇・〇三	四五四
淀橋	角筈一丁目四	〇・七六	上落合二丁目五六三	〇・〇三	六〇五

世帶數

區名 | 昭和九年末 | 同十年末

總數	一、二六、一四〇	一、二五三、二五七
△舊市部▽		
麹町	一、七五、七五〇	一九、四三三
神田	一〇、三九〇	三〇、六三三
日本橋	一〇、九七六	三五、四六〇
京橋	一〇、三九〇	三七、三八七
芝	二三、五一〇	四二七、〇〇〇
		四六四、六四七

麻布	一七、一八〇	一八、六五三	向島	一四、一九〇	一四、七九〇	三六、五一八			
赤坂	一〇、七四〇	一一、一三一	城東	四〇、六六〇	四〇、七四八	三六、七二〇	三二、八七五	葛飾	二四、七九〇
四谷	一一、八九〇	一六、一九〇						江戸川	二六、七四〇
牛込	二五、三五〇	二五、八八八							
小石川	三一、一八〇	三〇、六八二							
本郷	二七、四〇〇	二八、九六七							
下谷	三七、七二〇	四三、一四四							
浅草	五一、九五〇	五八、〇八八							
本所	五四、四〇〇	五九、五九二							
深川	四〇、九一〇	四八、一三七							
△新市部▽	七八九、一四〇	七八七、六一〇							
品川	四〇、八五〇	四三、八四六							
目黒	三一、七五〇	三七、〇〇〇							
荏原	四一、八八〇	四二、五三八							
大森	四〇、二一〇	三三、三七四							
蒲田	二九、二二〇	四〇、〇〇一							
世田谷	三八、二二〇	三一、九七七							
澁谷	三一、一三〇	四九、二三三							
淀橋	三六、二七〇	三六、三一七							
中野	三六、二四〇	三七、七二六							
杉並	四一、二七〇	四一、四九六							
豊島	六六、六八〇	五八、〇三一							
瀧野川	二五、七一〇	二五、八〇八							
荒川	七九、七二〇	四八、一三七							
王子	三六、九四〇	四三、八四六							
板橋	二九、六六〇	三四、四八〇							
足立									

人口の自然增加

	昭和十年				昭和十一年			
	出生	死亡	差增		出生	死亡	差增	
總數	一四四、四一四	七八、〇七四	六六、三四〇	舊市部	一三三、六一七	八〇、六三五	五三、八二	
麹町	四六、六二四	二八、〇七一	一八、五五三	神田	四一、八九〇	二八、〇八二	一三、八〇八	
日本橋	九五四	六〇九	三四五	京橋	八七	五四八	三二九	
芝	二、五六〇	一、二七六	一、二八四	麻布	二、三三〇	一、四四三	九八七	
京橋	一、七〇二	九九二	七一〇	赤坂	一、六五四	九八三	六七一	
四谷	三、二六九	一、七八〇	一、四八九	四谷	二、八六〇	一、六八〇	一、一八〇	
牛込	三、四一〇	二、二〇五	一、二〇五	牛込	三、二三五	二、三三三	九四二	
小石川	一、七五二	一、〇〇六	七四六	小石川	一、六〇七	一、〇六八	五三九	
本郷	一、〇九〇	五八九	五〇一	本郷	八七四	六四四	二三〇	
下谷	一、四二八	一、〇〇〇	四二八	下谷	一、三六七	九八五	三八二	
浅草	二、六二五	一、七一四	九一一	浅草	二、三四九	一、八四三	七〇六	
本所	三、三四六	一、九二五	一、四二一	本所	三、〇二六	一、八九五	一、一三一	
深川	二、七四四	一、九二一	八五三	小石川	二、三九〇	一、六八二	七〇八	
舊市部	九、九八八	三、八二九	一、五九九	本郷	三、四八三	二、五八七	八九六	
麹町	五、四七一	三、七二四	一、七九七	下谷	五、〇三四	三、八八九	一、三三五	
日本橋	六、七〇九	三、八八六	二、八二三	浅草	五、九〇二	三、八七四	二、〇二八	
京橋	五、五四六	三、一〇五	二、四四一	本所	三、八三八	二、三三八	一、五〇〇	
芝	九七、七九〇	五〇、〇〇三	四七、七八七	深川	三、三一八	一、五五四	一、七七四	
麻布	四、九六六	二、八八四	二、〇七八	新市部	九一、七二七	五三、五五三	三九、一七四	
赤坂	四、九六六	二、八八四	二、〇七八	品川	四、五八六	二、七一八	一、八六八	
四谷	三、九七五	一、八七一	二、一〇四	目黒	三、九七五	一、九八三	一、九九二	

荏原	四、四八五	二、二五九	大森	四、四〇九	二、一二六	四、四〇九	二、一二六		
大森	五、二四九	二、三二一	蒲田	五、一三〇	二、三二一				
蒲田	四、二四七	一、八〇二	世田谷	四、四四五	一、七八六				
世田谷	五、一〇〇九	二、二三三	澁谷	四、四四四	二、二三九				
澁谷	五、一〇七	二、八七八	淀橋	四、五九一	二、一七八				
淀橋	三、七一八	一、九二九	中野	三、三五一	一、七八九				
中野	四、五三九	二、〇五一	杉並	四、一八六	二、四七八				
杉並	四、七三一	二、三三三	豊島	四、五三一	二、三五〇				
豊島	六、六二七	三、五五一	瀧野川	六、一八〇	三、〇七五				
瀧野川	二、九五二	一、六〇一	荒川	七、九三二	四、〇七九				
荒川	九、〇二六	五、一三〇	王子	五、〇七一	二、九七八				
王子	五、三五三	二、三七五	板橋	四、三五四	二、九七六				
板橋	四、五五一	三、一二五	足立	五、〇六四	三、〇七五				
足立	五、二三〇	二、八三〇							
向島	五、四八二	二、九〇二							
城東	五、〇六六	二、八六四							
葛飾	三、二六八	一、六七〇							
江戸川	四、一一〇	一、八七三							

（昭和十一年人口動態速報より）

歴代市長

氏名	就任年月日	辭任年月日
松田秀雄	明治三一・一〇・六	明治三六・六・一五
尾崎行雄	同 三六・六・二九	同 四一・九・二二
尾崎行雄	同 四一・九・三〇	同 四五・六・二六
阪谷芳郎	同 四五・七・一三	大正 四・二・二四
奥田義人	大正 四・六・一五	同 八・八・二一
田尻稻次郎	同 七・四・五	同 九・二・二七
後藤新平	同 九・二・一七	同 一二・四・二七
永田秀次郎	同 一二・五・二九	同 一三・九・八
中村是公	同 一三・一〇・八	同 一五・六・八
伊藤多喜男	同 一五・七・一六	同 一五・一〇・二三
西久保弘道	同 一五・一〇・二九	昭和 二・一二・一三

昭和十二年度豫算

經濟別歲入歲出

普通	一二四、五二、九〇〇	一二四、五六二、九〇〇	圓
水道	四八、一七〇、〇〇〇	四八、一七〇、〇〇〇	
質屋	一、九一六、一四〇	一、九一六、一四〇	
市來乙彥	昭和三・一・七	同 四・二・一四	
堀切善次郎	同 四・四・二四	同 五・五・一二	
永田秀次郎	同 五・五・三〇	同 八・一・二五	
牛塚虎太郎	同 八・五・一〇	同 一二・五・九	
小橋一太	同 一二・六・二七	在職中	

歲入

市稅	四、四〇九、五二、一三〇	四、四〇九、五二、一三〇	圓
使用料	四、四四四、一七四	四、四四四、一七四	
手數料	四、五九一、三五二	四、五九一、三五二	
國庫支出金	四、一八六、四四七	四、一八六、四四七	
府支出金	四、五三一、二〇〇	四、五三一、二〇〇	
財產收入	六、一八〇、一八〇	六、一八〇、一八〇	
寄附金	二、五四一、〇〇〇	二、五四一、〇〇〇	
繰入金	七、九三二、〇〇〇	七、九三二、〇〇〇	
繰越金	五、〇七一、〇〇〇	五、〇七一、〇〇〇	
諸收入	四、七四八、一八〇	四、七四八、一八〇	
市債	五、一五三、一三九二	一〇五、二五一、三九二	
勞働賃金其の他立替資金	四九四、八九九	四九四、八九九	
公債償還金	四六二、六三九	四六二、六三九	
職員貸付資金	四九四、八九九	四九四、八九九	
火災共濟金	四六二、六三九	四六二、六三九	
用品及工場	六、六七五、二五九	六、六七五、二五九	
轉貸資金	二、一七三、七八七	二、一七三、七八七	
土地區劃整理清算金	七九〇、六〇四	七九〇、六〇四	
中央卸賣市場費	二、五三六、七四〇	二、五三六、七四〇	
養育院	六三九、六四八	六三九、六四八	
電氣軌道事業費	三一、六三七、〇〇〇	三一、六三七、〇〇〇	
電氣供給事業費	一四、二六七、〇〇〇	一四、二六七、〇〇〇	
乘合自動車事業費	八、七五九、〇〇〇	八、七五九、〇〇〇	

電氣事業工場勘定及貯藏物品費	五、八二〇、〇〇〇	五、八二〇、〇〇〇
電氣研究所費	三五一、二七二	三五一、二七二
皇太子殿下御誕生記念事業積立金	一六〇、一五八	一六〇、一五八
港灣費	六、五四八、四五〇	六、五四八、四五〇
公園墓地	一、八五三、六六一	一、八五三、六六一
衛生試驗所費	一七三、六三三	一七三、六三三
住宅並浴場費	六三二、七二二	六三二、七二二
計	三六八、六三五、〇七四	三六八、六三五、〇七四

市債（昭和十二年六月末日現在）

	普通 圓	水道 圓	電氣 圓	軌貸關係 圓	其他共計 圓
公募債 內債	一四、三六四、一〇〇・〇〇	一八、一九七、〇〇〇・〇〇	一四九、八〇二、六〇〇・〇〇	—	一八六、三八七、七〇〇・〇〇
公募債 外債	五三、八一三、五八三・九二	二一、三一三、一〇八・五一	七五、五〇七、八七二・九六	—	一四〇、三一一、三九三・四五
國庫債	七三、四五五、七〇〇・〇〇	—	—	—	七三、四四五、七〇〇・〇〇
預金部	六二、九五四、四四九・〇六	四五、七〇六、〇三五・〇〇	—	三四、三六六、一二〇・〇〇	一五三、六二八、八〇四・〇六
簡易保險局	八八、三〇三、一四七・四三	九二、三六七、一二三・一六	四〇、五〇八、七〇〇・〇〇	—	二三五、六五三、六一八・三三
東京府	五、七八三、四五四・七二	二、八七五、九〇〇・〇〇	—	五二、三五五・〇九	八、九六七、九四八・八四
銀行其他	一六、四六四、八〇八・五四	一三、八六〇、七九一・六九	三三、三四一、三〇〇・〇〇	—	五九、〇八四、〇一三・四五
計	二九七、一三九、二四三・六七	一九四、三三〇、〇五八・三六	二八八、一六〇、四七二・九六	三四、四一八、四七五・〇九	八五七、四八九、一七八・一三
內債	二六一、三二五、六五九・七五	一七三、四三七、九四九・八五	二二三、六五二、六〇〇・〇〇	三四、四一八、四七五・〇九	七一七、一七七、七八四・六八
外債	三五、八一三、五八三・九二	二一、三一三、一〇八・五一	七五、五〇七、八七二・九六	—	一四〇、三一一、三九三・四五

（備考）其註共計中には中央卸賣市場、住宅並浴場、質屋、港灣、公園墓地、土地區劃整理清算金を包含しゐた計數なり。

上水道用地（昭和十年末）

	地積
使用土地	二一、七七四、三五〇平方米
水路其他ノ用地	△九二七、八五九平方米
沈澄池	六〇五、〇〇五立方米
濾過池	三六五、三八五平方米
淨水池	二四五、一〇五立方米

本表中△印は官有地を示す

上水道給水（昭和十年末現在）

	舊市部	新市部
鐵管延長	一、八二一、二八九米	二、六六四、三一八米
總水栓數	三八四、九〇〇	四一九、六四四
配水量	二九六、一三三、〇四四立方米	
一日平均水量	八二一、三三一立方米	

私設上水道（昭和十年末）

	給水戶數	給水鐵管	配水量
日本水道	八、四七一	一四四、二五五米	二、三三六、三九一立方米
矢口水道	三、三八一	三三、一五五	五五九、二二〇

醫師及藥劑師（昭和十年末）

	舊市部	新市部	計
醫師	四、七四六	五、六七一	一〇、四一七
齒科醫師	一、九一九	二、二八九	四、二〇八
產婆	二、三六四	四、七七二	七、一三六
看護婦	一三、八五三	七、三三三	二〇、一八五
藥劑師	二、五八八	四、〇七三	六、六六一

傳染病（警視廳統計）

	昭和十年 患者	昭和十年 死亡	昭和十一年 患者	昭和十一年 死亡
赤痢 疫痢	七、五六六	二、九四〇	七、〇二〇	二、七四七
赤痢 其他	七、五四六	七四三	八、四四〇	八九七
腸チフス	二、四〇三	四〇三	二、一〇九	三九四
パラチフス	三八六	三	三七一	二
發疹チフス	一八	—	—	—
痘瘡	—	—	一	—
猩紅熱	九、六〇三	一三一	五、五二七	一一〇
ヂフテリア	五、〇四〇	六〇五	四、〇七五	四四八
流行性腦脊髓膜炎	一七二	八五	九四	四九
コレラ	—	—	—	—
ペスト	—	—	—	—

神社（昭和十年末）

△神社及神職數

	舊市部 神社	舊市部 神職	新市部 神社	新市部 神職
總數	二二九	一六三	六八四	一九一
官幣社	一	五	一	二
別格官幣社	一	三	—	—
府社	九	二二	三	七
鄉社	一八	二三	二三	三三
村社	五九	六三	二〇六	一二三
無格社	一四一	二八	四五一	二八

宗教（昭和十年末）

	舊市部	新市部	合計
△神道教會及信徒數			
教會	三四五	八六二	一、二〇七
教師	四、三一七	四、八一三	九、一三〇
信徒	三〇二、七二四	三〇五、七〇一	六〇八、四二五
△寺院及教會・檀信徒			
寺院	一、〇〇八	八七四	一、八八二
僧侶	二、五八六	一、八七三	四、四五九
檀家	一四八、六二〇	一一九、〇八一	二六七、七〇一
佛道教會	八〇	二〇九	二八
同教師	一一八	三六〇	四七八
同信徒	二〇、一七六	九二、七三一	一一二、九〇七

△基督教信徒數

	男	女	計
基督教會堂並講義所			二四三
宣布者 內國人	二八〇	九五	三七五
宣布者 外國人	四七	二三	七〇
信徒	二九、一二二	二九、九五四	五九、〇七六

校園總覽（昭和十年度）

		學校	教員	生徒及兒童
總數	舊	七九八	一三、〇二九	四一八、一〇七
	新	九三九	一四、一六一	五九四、〇一四
幼稚園	舊	一二四	三八五	九、〇七五
	新	一六一	四八〇	七、六一七
小學校	舊	二一七	五、三三五	二四三、九五六
	新	三七三	九、七一三	四八七、八九九
小學校に類する各種學校	舊	四四	一〇五	四、三〇五
	新	三〇	一〇	一、九九八
盲及聾啞學校	舊	四	一二八	七〇二
	新	五	七二	四九四
中學校	舊	二七	八六四	二三、二八〇
	新	二四	五七七	一三、六五八
高等女學校	舊	三七	九九七	二八、一七八
	新	三七	七四〇	一八、七四八
指定各種學校	舊	一六	三四一	八、八四六
	新	二	二六九	五、三九二

實業學校	舊	八八	一、七〇八	四三、二九八
	新	四九	六六一	一六、二三九
青年學校	舊	六七	一五六	一五、六九九
	新	一三九	一五九	二一、七九二
師範學校	舊	二	六三	一、〇四二
	新	一	四五	六一九
私立各學校	舊	一七二	一、九五七	三九、七二六
	新	一〇九	一、四三五	一九、五五八

		總數	舊市部	新市部
學校	總數	一、七三七	七九八	九三九
	官府立	五五	三三	二二
	市立	九〇八	三七九	五二九
	私立	七七四	三八六	三八八
教員	總數	二六、一九〇	一三、〇二九	一四、一六一
	官府立	一、三九一	八九七	四九四
	市立	一五、九三三	六、〇三三	九、九〇〇
	私立	八、八六六	五、〇九九	三、七六七
生徒兒童	總數	一、〇一二、一三一	四一八、一〇七	五九四、〇二四
	官府立	三三、〇八二	二〇、五五九	一二、五二三
	市立	七八二、二四九	二七一、九一七	五一〇、三三二
	私立	一九六、七九〇	一三五、六三一	七一、一五九

△高等諸學校（昭和九年）

		總數	舊市部	新市部
學校	總數	一〇三	五七	四六
	官府立	二一	一三	八
	私立	八二	四四	三八
教員	總數	七、五四一	四、九一六	二、六二五
	官府立	一、八七四	一、四五四	四二〇
	私立	五、六六七	三、四六二	二、二〇五
學生生徒	總數	一〇三、七八八	六九、二一七	三四、五七一
	官府立	二〇、八八四	一五、八五四	五、〇三〇
	私立	八二、九〇四	五三、三六三	二九、五四一

△市立小學校（昭和十一年三月）

	學校數	教員數	兒童數
麴町	七	一三八	五、九五三
神田	一四	二八二	一一、八三三
日本橋	一三	二〇七	九、四五三
京橋	一四	三三七	一五、〇一一
芝	一九	四四三	一九、九四八
麻布	八	二一〇	九、三三〇
赤坂	六	一三一	五、九六七
四谷	八	一八三	八、〇九二
牛込	一三	二九八	一二、九二〇
小石川	一六	三八八	一六、五八八
本郷	一三	三一三	一五、一八八
下谷	一八	四四五	二〇、九五四
淺草	二〇	五八二	二八、四六八
本所	一四	六四二	三一、八三三
深川	一五	五〇八	二五、九〇四
舊市部計	二〇二	五、〇九六	二三七、四四二
品川	一九	五〇八	二五、五〇八
目黒	一四	三八四	一九、七五〇
荏原	一四	四三〇	二三、八一九
大森	二二	五一九	二五、六七五
蒲田	一四	三八一	一九、五〇三
世田谷	二〇	四九四	二四、九六二
澁谷	二三	五七三	二七、二一九
淀橋	一七	四一二	一九、一七八
中野	一四	三九九	二一、二四七
杉並	二二	四六九	二三、四九四
豐島	三三	六六六	三四、三〇六
瀧野川	一〇	三〇七	一五、〇七三
荒川	二六	八五三	四五、五六五
王子	一六	四六五	二四、九九四
板橋	二三	四九三	二三、五六一
足立	二三	五二三	二六、四七九
向島	一五	五二一	二六、三一一
城東	一四	四七五	二五、〇五九
葛飾	一六	三三二	六、〇九八
江戸川	一六	三九五	二〇、〇一八
新市部計	三五八	九、五九九	四八五、八一九
合計	五六〇	一四、六九五	七二三、二六一

學校數は昭和十一年三月一日現在、教員數、兒童數は同十年五月現在。
中等學校は（昭和八年現在）

圖書館（昭和十年度）

		館數	現在圖書	閲覽人員
舊市部		二四	一、七三八、一五九	二、七八八、五五一
	官立	一	八二三、二六九	四七九、七〇六
	市立	二〇	四五九、二五六	一、七三六、〇八二
	私立	三	四五五、六三四	三五九、九七一
新市部		七	二九、四六八	二三五、二八四
	市立	六	二九、四三八	二三五、二八四
	私立	一	—	—

青年團（昭和十一年三月末現在）

		分團數	團員數
聯合青年團	舊市部	五八〇	四七、六〇三
	新市部	四五八	四三、四二九
女子聯合青年團	舊市部	一九六	一八、四八九
	新市部	二八六	三三、四八九
合計		一、五二〇	一三一、〇〇九

青年學校（昭和十年度）

			學校數	學級	教員	生徒
總數		男	二〇六	一、一六八	二、三〇二	三一、六九六
		女			一七一	五、七九三
舊市部	府立	男	二	一〇	四九	三六二
		女			—	—
	市立	男	四九	三九三	五八九	一〇、八二四
		女			七四	二、六五一
	私立	男	一六	七四	二〇七	一、五八一
		女			一三	二八一
新市部	府立	男	五	三〇	七	六〇〇
		女			六	一八一
	市立	男	一二六	六二七	一、二二三	一七、二一七
		女			七八	二、六八〇
	私立	男	八	三四	一六八	一、二二四
		女			—	—

工場及從業者（昭和十年末）

		舊市部	新市部	合計
工場數		五、六七八	六、六五六	一二、三三四
原動機ヲ有スルモノ		五、四二一	六、四四九	一一、八七〇
原動機ヲ有セザルモノ		二五七	二〇七	四六四
從業員	事務員	九、一八五	一三、七六七	二二、九五二
	技術員	五、〇八八	一〇、二九六	一五、三八四
	職工	一〇一、四二一	一八八、五〇三	二八九、九二四
	合計	一二〇、三五二	二一八、七五五	三三九、一〇七
工産價額		千圓 六七六、七九五	九八四、五一四	一、六六一、三〇九

（備考）職工五人以上を使用する工場、東京府工場要覽による。

產業別工場、勞働者（昭和十一年十月十日現在）

	工場	勞働者 男	女	計
總數	九七五	一二四、八三〇	四六、一九五	一七〇、八三〇
窯業、土石加工業	三九	二、八七四	六三三	三、四九六
金屬工業	一三	一九、〇七三	二、一四二	二一、二一五
機械器具製造業	一六四	二九、八二八	五、九三五	三五、七六三
造船、運搬用具製造業	二九	二一、一四六	四八三	二一、六二九
精巧工業	六四	一三、五五九	三、八八四	一七、四四三
化學工業	一三〇	一一、一五七	六、〇四二	一七、一九九
紡織工業	一四〇	六、二七五	一八、一五一	二四、四二六
被服身裝品	二四	一、五三五	一、三四三	二、八六八
製造業紙工業印刷業	九五	一五、五八三	三、七九三	一九、三七六
皮革、骨、羽毛品製造業	一〇	九五四	一四〇	一、〇九四
木竹草蔓類に關する製造業	四六	二、二九七	三五〇	二、六四七
食料品製造業	三八	二、五四六	一、五三五	四、〇八一
土木建築に關する業	四三	四、六八七	三〇	四、七一七
瓦斯、電氣、水道業	五	七六四	五	七六九
其の他の工業	三七	二、三六七	一、七四〇	四、一〇七

電燈電力需要戸數（昭和十年十二月末）

		舊市部	新市部	計
電燈	常時燈戸數	四二二、三三三	七五四、四八一	一、一六六、七〇四
	臨時燈戸數	一二三	二七八	四〇一
	合計	四二二、三四六	七五四、七五九	一、一六七、一〇五

電力 電動機戸數	二五、七七五	二九、九〇七	五五、六八二
電熱器戸數	四、一六二	三、九九二	八、一五四
其ノ他	一、五七二	一、二一七	三、七八八
合計	三一、五〇八	三五、一一六	六六、六二四
總計	四四三、八五四	七八九、八三五	一、二三三、七二九

電燈需用箇數（昭和十年十一月末）

		從量	定額	孤光燈
總數	總數	六、八四三、八三九	六五八、〇八九	一〇三
	市營	一、一三八、五六七	七一、九二四	一〇三
	私營	五、七〇五、二七二	五八六、一六五	―
舊市部	總數	三、一二三、〇六五	二一〇、二九三	八六
	市營	七二六、八七一	四五、七一五	八六
	私營	二、三九六、一九四	一六四、五七八	―
新市部	總數	三、七二〇、七七四	四四七、七九六	一六
	市營	四一一、六九六	二六、二〇九	一六
	私營	三、三〇九、〇七八	四二一、五八七	―

瓦斯供給（昭和十年）

瓦斯管延長　三、二五九、八三九・九四米
メートル装置箇數　八四七、二三一
使用高　數量　一五三、四〇八、二八四・三六熱位
　　　　代金　三一、三八九、四三六・五七圓

郵便及電信（昭和十一年三月末）

郵便局　一等　九*七　二等　五六*九　三等　五〇一
電信局　一等　一　二等　一
電話局　一等　一　*一九　二等　三
電信取扱所　一八　公衆電話所　一、一三三
郵便切手及收入印紙賣捌所　三、二四六　郵便函　三、九一〇　△一三一
私書函　設備數　一、五五六　貸與數　一、一一五
（備考）＊印ハ分室、△印ハ私書函

小賣市場（昭和十年）

	賣店數	販賣高
市設小賣市場	二〇四	一、八八七、六八四圓
東京府市場協會小賣市場	四六八	五、九一八、一五七圓

東京市中央卸賣市場賣上高（昭和十年度）

	魚類部	青果部	鳥卵部
總數	一三、一〇七、四六九圓	三三、二七二、八五八圓	三〇八、六九三圓
一月平均	一、〇〇八、九五六	二、七七二、七三八	二五、七二四
一日平均	三四、四九四	九五、〇六五	八八二
一〇年・四月	三九、〇五四	二、九八七、九三〇	一八、四四五
一〇・五	二一、二〇四	三、六二七、六九四	一八、〇一八
六	一七三、三三一	三、五九七、四六九	一八、六九四
七	二〇〇、三一八	二、九二三、三九一	二〇、三五二
八	一五九、九七七	二、一九九、七五六	一九、七〇三
九	一九一、五三八	二、七五七、八七八	二一、三六三
一〇	二一七、八九八	三、一八一、三四四	二七、二〇〇
一一	二六三、五七二	二、三八三、〇八二	二九、一一七
一二	三五二、八八九	三、二九五、九二六	四四、五〇五
一一・一	二、二二九、一二九	一、七七五、二一四	三一、三三六
二	三、八六五、九三四	一、八九五、九七一	二九、七二九
三	四、三九三、六四五	二、六四八、二〇三	三〇、二三一

販賣店增減状況（各年七月末）

	八年	九年	十年	十一年
販賣店總數	一六六、四九七	一六七、七六九	一六六、四三〇	一六四、四三八

東京港出入貨物（單位千噸、千圓）

	昭和十年 噸數	昭和十年 價額	昭和十一年 噸數	昭和十一年 價額
入貨	五、二七二	四八二、四五七	五、五七二	四九四、一八五
出貨	七六九	一二〇、二九二	八〇二	一二六、二〇二
合計	六、〇四一	六〇二、七四九	六、三七四	六二〇、三八七
前年比較	三〇〇	五八、五三一	三三三	一七、六三七

（埠頭年報より）

交通

△道路延長（昭和十年末現在）

	總數	舊市部	新市部
總數	七、八五〇、一三〇米	一、三八〇、五八七米	六、四六九、五四三米
×	一、四〇四		
國道	九〇、四七七	三七、六三九	五二、八三八
府縣道	八〇九、一〇〇	六一、五六六	七四七、五三四
市道	六、九五〇、五五三	一、二八一、三八二	五、六六九、一七一
×	一、四〇四		

（備考）本表中×印は市外にある市道を示す。

△鋪裝道路延長

車道　五五三、三九〇米　歩道　五七三、三九六米

△橋梁

	總數	舊市部	新市部
總數	四、七〇一	五五一	四、一五〇
石橋	八三一	一七	八一四
鐵橋	五三三	三〇二	二三一
木橋	一、九四五	一四九	一、七九六
木鐵混合橋	五	―	五
煉瓦橋	五	―	五
混凝土橋	四五七	―	四五七
鐵筋混凝土橋	九三五	八三	八五二

△省線鐵道驛乘降客（十年度、一日平均）

線	驛名	乘客	降客
東海道本線	東京	六四、九五四	六三、三八六
	有樂町	四一、四二七	四三、一六二
	新橋	三七、五八七	三六、〇〇四
	濱松町	八、二九二	八、二六四
	田町	三〇、八七六	三〇、八九九
	品川	一六、六八六	一八、〇〇六
	大井	二六、四四三	二六、六〇五
	大森	二七、五三五	二七、二六一
	蒲田	二八、〇五五	二七、七八〇
中央本線	神田	三四、七〇六	三四、二六二
	萬世橋	二、三九七	二、二九七
	御茶ノ水	三三、五二五	三三、三六〇
	水道橋	三三、二二九	三三、〇〇八
	飯田橋	二一、五一七	二一、二八九
	市ケ谷	一三、〇二八	一三、九六八
	四谷	一五、八一九	一三、八一三
	信濃町	八、九七二	八、八八二
	千駄ケ谷	四、七四六	四、六四六
	代々木	七、一五九	六、八六九
	大久保	六、三七四	六、四〇三
	東中野	一四、七一八	一四、六一八
	中野	一九、九六三	一九、八一七
	高圓寺	一六、三五七	一六、二一九
	阿佐ケ谷	一三、〇八七	一三、九六七
	荻窪	一〇、九七四	一一、〇〇八
	西荻窪	九、八〇六	九、七五六
山手線	大崎	一〇、四七三	一〇、二九三
	五反田	一九、四七三	一九、七一四
	目黑	一四、二七四	一四、八四四
	惠比壽	一三、九二八	一四、〇二九
	澁谷	三九、五六八	四〇、二八七
	原宿	六、九三六	七、七八四
	新宿	七五、九六三	七六、六九六
	新大久保	五、八七〇	五、九〇八
	高田馬場	三一、〇四〇	三一、二三六
	目白	一四、一九五	一四、二九八
	池袋	三二、七六三	三三、三二三
	大塚	一七、三一五	一七、五二五
	巣鴨	一三、二三五	一三、三三一
	駒込	一〇、九七七	一一、一三一
	板橋	六、〇九六	六、一六五
	十條	五、八一五	五、七六九
東北本線	秋葉原	一〇、五三〇	一〇、三〇一
	御徒町	一九、〇六四	一八、九〇六
	上野	三二、六八六	三一、九七九
	鶯谷	一三、七四八	一三、八一〇
	日暮里	一六、八三三	一六、八七〇
	田端	一四、五五〇	一四、五八七
	上中里	二、七二五	二、七一六
	王子	一〇、九七〇	一一、三〇〇
	下十條	八、五七五	八、四八五
	赤羽	一三、一四〇	一三、一四六
	尾久	四五二	四四七

六大都市——東京

公園

公園名	開園	面積
日比谷	明治三四・六・六	一〇・一
芝	明治四五・四・一	一〇・一
上野	大正四・三・一〇	一〇・一
浅草	昭和一・四・二九	一〇・一
深川	昭和一・四・二九	一〇・一
飛鳥山	大正一〇・四・一	一〇・一
芝公園	大正一一・四・一	一〇・一
小石川	大正一一・四・一	一〇・一
隅田	大正一一・四・一	一〇・一
戸山	大正一一・四・一	一〇・一
砧	大正一一・四・一	一〇・一
駒沢	大正一一・四・一	一〇・一
祖師谷	大正一一・四・一	一〇・一
林試の森	大正一一・四・一	一〇・一
舎人	大正一一・四・一	一〇・一
光が丘	昭和四一・四・一	一〇・一
木場	昭和四一・四・一	一〇・一
猿江恩賜	昭和四一・四・一	一〇・一
亀戸中央	昭和四一・四・一	一〇・一
大島小松川	昭和四一・四・一	一〇・一
篠崎	昭和四一・四・一	一〇・一
葛西臨海	昭和四一・四・一	一〇・一
小岩	昭和四一・四・一	一〇・一
水元	昭和四一・四・一	一〇・一
水元中央	昭和四一・四・一	一〇・一
水元小合溜	昭和四一・四・一	一〇・一
水元公園	昭和四一・四・一	一〇・一
神代植物公園	昭和四一・四・一	一〇・一
武蔵野中央	昭和四一・四・一	一〇・一
武蔵野	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井中央	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井桜堤	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井野川	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井野川東	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井野川北	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井野川南	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井貫井	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井貫井南	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井東	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井南	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原東	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原南	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原西	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第五十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第六十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第七十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第八十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第九十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百二十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百三十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百四十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百五十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百六十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百七十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百八十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第百九十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百二十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百三十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百四十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百五十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百六十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百七十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百八十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第二百九十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百二十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百三十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百四十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百五十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百六十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百七十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百八十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第三百九十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十一	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十二	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十三	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十四	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十五	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十六	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十七	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十八	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百十九	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百二十	昭和四一・四・一	一〇・一
小金井前原第四百二十一

				面積
	田原	六・九・一		一、七九八
	金龍	六・九・一		二、七四八
	松葉	六・三・二六		二、九七五
	精華	昭五・五・一		二、八八六
	柳北	大一五・八・一四		二、九八二
	玉姫	昭五・六・三〇		三、五〇七
	駒形	八・四・二九		五〇九
本所	舊安田庭園	昭二・七・一六		一三、三三五
	横網町	五・九・一		一九、五八〇
	綠町	五・三・三一		二、二五九
	隅田	六・三・二三		九六、七七七
	錦糸	三・七・一八		五六、一二六
	中和	四・一二・二五		二、九七九
	業平	五・四・二九		三、三〇六
	横川	六・三・二六		一、九〇一
	江東	四・一・三一		二、九七二
	茅場	六・一・一		二、九八二
	若宮	六・二・二一		四、五五五
	菊川	五・三・三一		二、九七九
	永倉	五・五・一		二、九七五
	本所松坂町	一〇・一二・		九八
深川	清澄	七・七・二四		四八、五五二
	猿江恩賜	七・四・二九		四七、八三一
	深川	明六・一二・一九		二五、六一〇
	元加賀	昭二・八・三一		二、九七五
	八名川	五・七・一		二、九七五
	森下	五・六・三〇		二、九七五
	臨海	五・四・三〇		二、六四五
	東陽	二・二・二八		三、〇〇八
	扇橋	五・五・一		二、九七九
	洲崎	昭八・四・三		八三二
	川南	六・二・二一		二、九七九
	濱園	六・一〇・一		一八、一八一
	枝川町		×	八、七四五
新市部				
品川	八ッ山	昭七・一〇・一		四六三
	權現山	七・一〇・一		三、五〇九
目黒	碑文谷	八・一一・一五		一七、八一八
	清水池	一〇・一二・		三、七七三
	目黒不動	九・一二・二五		八、〇二五
荏原	戸越	一〇・二・二四		一八、五三〇
澁谷	松濤	八・一二・二三		五、〇一一
	羽澤	一〇・四・二九		二一、六二四
中野	中野杉山	九・三・二七		一、四七三
	新井藥師	九・九・一五		一〇、三六五
王子	飛鳥山	明六・一〇・二九		四五、三八二
大森	寶來		×	三、四〇四
	入新井		×	二、五八七
世田谷	宇佐	昭一〇・四・二九		三、六七七
淀橋	大久保		×	一、五三一
荒川	三河島	一〇・一・二七		二、四七九
	尾久	一〇・四・二九		六六一
板橋	板橋氷川		×	一、二五〇
足立	大橋	昭一〇・四・三		一、三〇〇
	千住		×	九九二
葛飾	山王臺	昭一〇・八・一		三、三七〇
江戸川	行船		×	二九、七五二
	大杉	昭一〇・四・二五		二、六六八
郡部	井之頭	大六・五・一		二四一、九三三
	大狹山		×	二五四、三〇八

(備考)本表中×印は未開園にて工事中

本市の耕地面積

		昭和八年	同九年	同十年
總數		一六五、七六三反	一六〇、三四九反	一五七、九五六反
田		六三、一九〇	六一、二〇五	六〇、二八九
畑		一〇三、五七三	九九、一四四	九七、六六七
作付地	總數	一六一、七一三	一五六、一四九	一五三、九〇九
	田	五三、一九七	六〇、三四二	五九、二九〇
	畑	九九、五一六	七五、八〇七	九四、六一九
不作付地	總數	四、〇五〇	四、二〇〇	四、〇四七
	田	九九三	八六三	九九八
	畑	三、〇五七	三、三三七	三、〇四八

農家戸數及人員

		昭和九年末 專業	兼業	昭和十年末 專業	兼業
總數	戸數	一三、四三五	四、五二九	一三、二〇四	四、二四九
	人員	四一、一九九	一〇、六九五	四〇、一〇四	一〇、三四一
自作	戸數	四、五九八	一、二八三	四、五五四	一、三三八
	人員	一四、五一七	三、一九三	一四、三三一	三、二六四
小作	戸數	三、四三一	一、五七〇	三、三一六	一、二八七
	人員	一〇、五八六	三、七八五	一〇、〇五〇	三、四一〇
自作小作	戸數	五、四一六	二、六七六	五、三七四	一、六三四
	人員	一六、〇九六	三、七一七	一五、七一三	二、六六七

農產物(昭和十年)

種別		作付反別	收穫高	價額
茄子		八、五六七反	五、九七九千貫	一、〇六九、八七七圓
大根(生)		三、二二四	三、九三〇	九三三、一九一
			×	三、四四四
漬菜		一〇、〇六二	七、〇四五	六一九、一五八
胡瓜		五、五四六	四、一八〇	六五八、二六五
越瓜		四、二四六	三、七五一	四一二、六〇四
蕪		四、三四七	三、四〇二	三九七、四九九
葱		三、一四一	一、四四七	三〇三、〇〇〇
馬鈴薯		九、〇〇九	四、四九三	四三〇、四三九
牛蒡		三、四四五	一、八一七	二八二、五〇三
小松菜		五、三〇三	二、〇一二	三一〇、九八九
甘藍		二、八七一	三、一一七	二七二、五一二
京菜		二、七七七	一、八八一	二八四、四七六
蓮根		一、九六九	一、三九四	二一三、三五一
里芋		二、八六七	一、〇九三	二二二、〇七二
菠薐草		二、七五七	九四二	一五八、九〇七
南瓜		二、六四五	一、一一六	一四四、一八八
甘藷		二、九六九	九三七	一〇四、八八二
西瓜		一、七三二	七四〇	七八、五五九
其の他		六、四二四	—	七九八、一二八
總數		一〇二、九〇一	—	七、六六八、〇四五
米	總數	五六、四九四反	九八、三二三石	三、六九四、七二六
	水稻	四九、三八七	八八、一七五	三、四一五、七八四
	陸稻	四、一〇七	一〇、〇四八	二七八、九四二
麥	總數	四五、六一七	九二、九二四	八〇八、九七九
	大麥	三一、三八六	六八、〇五六	四八八、九四〇
	小麥	一三、九〇七	二四、三三〇	三一四、一〇七
	裸麥	三二四	五四八	五、九三三
雜穀類		六、六五五	—	一六六、七二一
種苗類		—	—	二五〇、八四八
果實類		—	—	三八、一一〇
花卉		一、五二九	—	三六〇、四六三
製茶		二九七	九、四三六貫	二七、八九六
合計		二二三、四九三	—	一三、〇三五、七七八

(東京市公報より)

墓地(昭和十一年一月一日現在)

△共葬墓地(單位平方米)

墓地名	面積	墓地名	面積
青山	二九五、一三五	谷中	一〇六、八五〇
雜司ヶ谷	一〇九、一八七	染井	六六、九五三
龜戸	九、二四〇	多磨	九九九、六六八
八柱	七四一、七六九	合計	二、三二八、八二四

△寺有又は個人墓地

區名	面積	區名	面積
麴町	二、一一三平方米	芝	一〇七、五三四平方米
麻布	二〇、七六七	大森	五九五
赤坂	一九、二七〇	蒲田	三六七
四谷	三六、六八一	世田谷	五四五
牛込	三五、七一九	澁谷	四、二一五
小石川	六一、九七一	杉並	八三三
本郷	七六、九二六	豐島	四一〇
下谷	八六、〇〇七	荒川	五〇
淺草	三、〇二八	王子	三、四五一
本所	五三九	板橋	四、一七二
深川	一、〇〇二	葛飾	九四二
品川	五、〇六四	江戸川	一、四〇二
荏原	一、三〇九	計	四七四、九二一

火葬場

火葬場別	所在	面積
桐ヶ谷	品川區西大崎町	二、二〇八坪
代々木	澁谷區代々木西原町	二、二〇〇
落合	淀橋區上落合	二、一〇〇
町屋	荒川區町屋町	二、二〇〇
萩新田	城東區北砂町六丁目	二、一〇〇

龜青葛飾區龜有町一丁目　三、〇〇〇
堀之内杉並區高圓寺　九一二
多摩北多摩郡多摩村　五、〇〇〇
（備考）多摩火葬場は計畫中。

會社數（昭和十年末）

		總數	舊市部	新市部
總數	本店	一五、七三三	一〇、三五三	五、三八五
		×四	×四	
		八八五	六七八	二〇七
	支店	四、四三六	三、二八六	一、一五〇
		*五	*一	*四
株式	本店	六五八	五三九	二一九
	支店	九、二八七	五、七四六	三、五四一
合資	本店	一三九	八三	五六
	支店	二、〇一〇	一、三一一	六九〇
合名	本店	八八	五六	三三
	支店			

銀行（昭和十年末）

特殊銀行	本店	本市内所在	二四	
	支店	本市外所在	六三	
普通銀行	本店	本市内所在	一六	
	支店	本市内所在	一六二	
		本市外所在	二四四	
貯蓄銀行	本店	本市内所在	七	
	支店	本市外所在	九一	
			一三	

質屋及質物（昭和十年）

		舊市部	新市部
合計	本店	二七	
	支店	二五六	
	本市内所在	四三九	
	本市外所在		
質屋數		六八八	八四二
貸出	口數	五、一三八、一二三	二、一三七、六三三
	金額（圓）	二、三五、一三二	二〇、〇〇四、八七〇
受戻	口數	四、九二七、一八四、七九一	五二九、一五三
	金額（圓）	三、九二七、一八四、六八八	二、〇六〇、三二七
質流	口數	四七八、六八八	二、〇九七、八六七
	金額（圓）	二、二九〇、三二八	八、九二三、七七七
年末現在	口數	一、七一九、九六四	
	金額（圓）	八、八三一、七八八	

物品販賣店（昭和十一年七月末現在）

		總數	舊市部	新市部
總數		一六四、四三八	七七、五二七	八六、九一一
白米		八、〇五四	三、一八八	四、八六六
乾物穀粉		三、一五七	一、一七二	一、九八四
蔬菜果實		六、八五三	二、八二九	四、〇二四
水產物類		八二八	四四二	三八六
魚類		四、三六〇	一、八五二	二、五〇八
鳥肉		二、九九四	一、一三〇	一、八六四
獸腐		二、六八九	九九七	一、六九二
豆				
酒・調味料・清涼飲料類		九、九九七	三、八二八	六、一六九
菓子（麵麭ヲ含ム）		一八、二三五	七、一八一	一一、〇四四
茶		一、一〇七	四八三	七二四
漬物・煮豆・佃煮		二、一三〇八	七八二	一、四二六
其の他飲食料品		六、一一〇	一、四八五	三、六三五
薪・木炭・石炭		二、〇六五	三、三〇一	
油		一、〇一九	五二七	四九二
陶磁器		九七三	四四四	五二九
硝子及硝子器		一、二九二	七三六	五五六
煉瓦・土管・土石		一、一四九	四三七	七一三
石材・瓦・セメント		二、七一五	一、一〇四	
木材・竹材		三、二六〇	二、〇四二	六四五
建具・家具・指物		七三四	四二三	三一
疊・莚類		四、九二〇	一、九六二	二、九五八
荒物		二、二八六	一、〇六八	一、二一八
皮革及其の製品		八七八	七二七	一五一
呉服太物		二、八六八	一、五八〇	一、一〇八
綿絲編物組物類		二、一八六	九四九	一、三七
洋服		三、七一五	二、四〇六	一、三〇九
羅紗洋服地		四〇四	三〇一	一〇三
夜具蒲團		七四七	三五八	三八九
洋品雜貨類		六、〇四五	三、〇〇九	三、〇三六
足袋		一、三〇八	六四八	六六〇
小間物化粧品		二、八四六	一、一六八	一、六七八
履物傘類		四、四一〇	二、一五四	二、二五六

お買物は
東横百貨店
東京・澁谷

各種印刷用インキ製造販賣
印刷材料附屬品一式眞輸入

M

合資會社 三門商會

東京市城東區龜戸町三ノ一一八
電話墨田(74)二八八三番

SKT

阪田印刷商会

輪轉機・原紙・インキ

本店

株式會社 阪田商會

大阪市此花區上福島北一丁目一四
電話福島 (45) 2351・2352

支店 ・東京市芝區金杉濱町七十一
同 ・名古屋市西區傳馬町一ノ三三 (電話本局3621)
同 ・門司市小森江矢筈町一丁目
同 ・福岡市博多瓦町 停留所前
特約店 盛文堂 京城府長谷川町九十一
同 平安堂 京都市河原町竹屋町上ル
同 喜香堂 廣島市段原東浦
同 岩崎商工社 山口縣柳井町新町
愛媛縣販賣所 愛媛縣八幡濱市棧橋通

貨物一般運輸請負業

新古自動車賣買仲介

中村自動車商會

東京市芝區櫻川町廿五番地

電話芝(43)二九六五番

罫と輪廓

弘榮堂

木村重藏

東京市麹町區内幸町壹丁目五番地

電話銀座2533番・振替口座東京72853番

安質母尼
歐文地金
活版地金
軟質地金
錫鉛亞鉛
半田銅鑞
機械用メタル各種

合金地金商

小瀧增藏商店

電話 東京市神田區旅籠町二丁目一番地
(83)
電略 神下谷 (タ)二三一一 (キ)六六

寫眞製版用藥品
各種工業用藥品

甲

甲子商店

工場　東京市京橋區銀座西三丁目三番地五號
　　東京市葛飾區小菅町六一二番地
電話　京橋(56)〇七二七番
振替口座　東京六八六九五番
出張所　京城府黃金町四丁目六六番地
電話　本局五九五〇番

罫、輪廓、鉛版

名古屋東區宮町四

林弘文堂

電話　東(4)三二七六
振替　名古屋四三七
振替　大阪一〇三五五

經濟·法律·計理·商業專修

專修大學

總長 男爵 阪谷芳郎 法學博士

創立 明治十三年

書·夜（豫科）專門學部

入學案內送呈

募集

經濟學部長 道家齊一郎

法學部長 須賀喜三郎

商學計理學部長 小泉嘉章

東京市神田區神保町

六大都市——東京

社會事業主體別

紙・文房具類	四、二八六	二、四〇〇	一、八八六
書籍雜誌	二、一七四	一、一九二	九八二
玩具・遊戲品・運動用具類	一、五八八	一、〇〇〇	五八八
藥劑賣藥	四、一九七	二、〇〇三	二、二九五
染料・顏料・塗料・工業藥品	六二六	四二七	一九九
金物	三、三〇一	一、八八八	一、四一三
金屬材料	一、二七一	六六八	三〇四
計器・理化學・醫療機械器具類	九九一	七七二	二一九
時計貴金屬類	一、七八三	一、〇一〇	七七三
瓦斯及電氣器具	二、三九七	一、一八〇	一、二一七
其他の機械器具車輛	四、八三二	二、七九七	二、〇三五
古着	九七七	五八九	三八八
其他の被服類	六六六	四四四	二三三
樂器類	六六二	三七九	二八三
古道具・畫書骨董類	三、八〇三	一、七四〇	二、〇六三
漆器	一九一	一六一	三〇
草花・植木・盆栽	一、四四四	五六五	八七九
禽獸魚類	三九〇	一三四	二六六
其他の物品販賣	二、九四七	五、九一五	六、〇三二
不詳	一、一七八	六八三	四九五

社會事業々別（昭和十年度）

	昭和九年度	昭昭十年度
事業別		
妊産婦保護事業	一、三〇三	一、一九二
兒童保護事業	一四、三三一	一四、三三一
經濟保護事業	一五、九九〇	一三、六〇五、八一一
失業保護事業	一三、六〇五、八一一	一〇
救護事業	五一九	三〇
社會敎化事業	二八六	五四五
醫療保護事業	九〇	二八四
其他一般社會事業	一三〇	九〇
	一四〇	一三〇
	一一八	一〇九
		四二
市設 其の他	三三	二六
合計	一八六	三一〇
	一五八	二五三
	四三	一三三
	八一	一
	四一	四三
	五八	八一
	二三	一三三
	四一	一六四
	一三二	二四五
	九三	

經濟保護事業

（昭和十一年三月末）

△住宅供給

施設數	棟數	戸數	建物延坪數
總數	一、三〇三	一、三三二	一、三〇三
職員從事員	一五、九九〇	一五、九九〇	一五、九九〇
基金其他の財產 一三五、七九三、六四七 圓			
【經營主體別】			
官府市設	三〇	三〇	三〇
財團法人社團法人會員及組合	五四五	五四五	五四五
私設 個人經營	二八四	二八四	二八四
其の他	九〇	九〇	九〇
	一四〇	一四〇	一四〇
	一一八	一一八	一一八
市設	三三	二、三二三	二、三二三
私設	五一	二、〇一八	七、〇六二

△無料宿泊所

	所數	宿泊人員總數
總數	四	二八七、九五三
市設	三	五四五、三〇三
私設	一六	

△公益質屋

	施設數	年度末現在貸出 口數	金額
總數	三一	一五〇、二一五	八〇〇、一〇一
市設	一〇	一一三、〇七六	四九一、一四八
私設	二	五七、一三九	三〇九、〇五二

△公設市場

	施設數	現在店舖數 直營	指定	賣上總高
總數	四四	一〇九	五八七	七、八一四、七九八 圓
市設	一〇	一	二〇四	一、八五二、二三一
私設	三四	一〇九	三八三	五、九六二、五七七

△公設浴場

	施設數	入浴人員	一日平均
市設	三	七九六、六七一	二、一四七

△公衆食堂

	施設數	人員	金額
總數	二九	五、六九九、六三三人	六〇九、五九七圓
市設	二三	四、二九四、六三〇	四四八、二二四
私設	六	一、四〇五、〇〇三	一六一、三七三

△職業紹介所

一般職業紹介

	施設數	求人數	求職者數	就職者數
總數	四九	五一二、八〇四	四九二、三三〇	一四〇、六〇一
市設	三九	三四四、六一二	三二四、三九三	九八、六四五
私設	一〇	一六八、一九二	一六七、九二七	四一、九五六

自由勞働者紹介

	施設數	求人數	求職者數	就職者數
總數	三八	二、四五五、三一五	三、三〇九、二九七	二、三九七、五四六
市設	三六	二、四五〇、五八二	三、二八五、七九二	二、三九二、八〇〇
私設	二	四、八〇三	七、二四九	四、七四六

△方面事業

社會調査	四一六、三九八件	保護救濟	四、三六三件
相談指導	一五七、四五〇	保護救療	五四六、六三七
戸籍整理	九、六二三	方面救助	六、八二一
居宅救護	二一五、四二四	收容救護	二四、一六九
育兒奬學	二五、二五九	周旋紹介	二三、一一三
金品給與	七九三、八二一	其他	六六〇、七四〇

(備考)委員數は昭和和九年七月調査。

中央卸賣市場取扱高(昭和十年度)

魚類部	一、六七二、〇七四圓	鳥卵部	二四九、三九五圓
青果部(本場)	九、六三〇、九四六	江東	五、三七一、二七六
青果部(神田)	一四、八三九、四六二	合計	二九、八四一、六八四

人事相談取扱件數累年比較

	昭和九年	同十年	同十一年
一身上の問題	三、六五六	四、四三三	四、六八一
家庭親族間の問題	九、一九三	九、八八七	九、五七四
職業上の問題	七、二六三	八、〇〇五	七、八四二
商業上の問題	一三、一〇一	一三、七四九	一三、一五三
土地建物上の問題	一〇、九五三	一〇、六一九	九、八九一
其他の問題	九、四一七	九、七九七	八、三九九
計	五二、五八二	五五、四七九	五二、五四〇

(警視廳調査)

人事相談取扱件數處理別累年比較

年次	受理件數	處理別 調停成立	處理別 對策指示	處理別 打切	翌年繰越
八	四八、二七三	二四、六一九	一六、二七四	二、三四五	五、〇三四
九	五二、五八二	二七、五〇一	一八、六五五	一、九九一	四、四三五
十	五五、四七九	二九、七三三	二〇、〇八六	一、八一七	四、二〇四
十一	五二、五四〇	二八、一一一	一九、二六四	一、二七七	三、八八八

(警視廳調査)

諸税負擔一戸當平均

	昭和八年	同九年	同十年
直接國税	六五・三一圓	七九・八七圓	九六・七三圓
府税	一六・五七	一八・四六	一九・二三
市税	二五・八九	二九・九三	三一・七九
區に關する市税	六・〇六	六・三四	六・九三
計	一一三・八六	一三四・六〇	一五四・六八

東京市內火災原因(昭和十一年)

電氣(漏電)	一〇六	行火炬燵	八七
電氣(電燈)	七	焜爐	五五
瓦斯(焜爐)	三一	火消壺	一三
瓦斯(瓦斯)		燐寸	三〇
瓦斯(漏引火)	九	瓦斯倫	一〇三
瓦斯(其他)	二一	燈火	五九
乾燥場	三五	煙突	一七六
竈	四八	セルロイド	四一
風呂場	三四	藥品	二五
爐	五	弄火	三六
煖爐	二三	放火	九九
取灰	五八	機械磨擦	一九
焚火	六〇	不明火	一七
煙草吸殻	一八五		
火鉢	八三		

(警視廳調査)

最近五ケ年間の興行場趨勢(警視廳調査)

年次	個所數	興行日數	入場人員	一日一ケ所當入場者
△劇場				
昭和七	三一	九、三一六	七、三三四、八六三	七七六
同八	三三	八、九五五	八、一二〇、三九五	九〇七
同九	三六	一〇、二七三	一一、九五四、七三五	一、一六四
同十	三八	一〇、七六八	一三、二八六、一一八	一、二四一
同十一	四〇	一一、五一三	一一、五〇二、九六一	九九九
△活動寫眞館				
昭和七	二三八	七九、一九九	三五、九七九、九九二	四五七
同八	二四一	八一、七〇六	三八、五三五、一四三	四七二
同九	二四〇	八三、一七九	三八、九二四、八四一	四八〇
同十	二三九	八三、〇六〇	三六、一三二、八七四	四三五
同十一	二四〇	八四、八〇八	三六、〇六三、三六三	四二五
△演藝場				
昭和七	一七二	四〇、九九〇	四、一〇五、二四五	一〇〇
同八	一五六	三九、五九九	三、七七三、一七〇	九五
同九	一四四	三六、九四八	三、五六二、七九一	九六
同十	一三六	三四、九六七	三、一六〇、四九七	九〇
同十一	一三六	三〇、三六三	三、〇三六、八四〇	一〇〇

遊技場(昭和十年末)

	舊市部	新市部	合計
總數	二、二三〇	二、六六七	四、八九七
弓戯	二四	六四	八八
球戯	九六七	九〇一	一、八六八
室內射的	九九	二七	一二六
麻雀倶樂部	六三八	六八四	一、三二二
魚釣	一四	二七四	二八八
碁會所	三八〇	五九三	九七三
ベビーゴルフ	五	二	七
プール	八	二一	二九
其の他	七五	一二一	一九六

東京港出入商船舶(昭和十年度)

	入港 船數	入港 噸數	出港 船數	出港 噸數
總數	三一、三六五	九、六一七、四〇五	三一、三七六	九、六一八、七〇八
汽船	二二、四一二	九、一五九、二六五	二二、四一五	九、一五九、九八四
帆船	八、九五三	四五八、一四〇	八、九六一	四五八、七二四
乘降客	(下船)	六八、五二七	(乘船)	一〇一、〇四五

選擧有權者名區別(昭和十年度選擧人名簿確定數)

區名	市會	府會	衆議院
麹町	一〇、四六八	一〇、五五九	一一、二一三
神田	二三、〇一三	二三、七六三	二三、九一〇
日本橋	二〇、三二七	二〇、一一三	二一、四〇三
京橋	二七、九二一	二八、二三五	二九、一七一
芝	三四、六四八	三三、九二三	三六、二三五
麻布	一六、九九二	一六、六九一	一七、八五七
赤坂	一〇、一八三	一〇、〇八二	一〇、七六〇
四谷	一四、四三三	一四、三七九	一五、二二五
牛込	二三、九九〇	二三、八三三	二五、三一七
小石川	二八、五九三	二八、〇二三	二九、八四四
本郷	二五、〇八三	二四、四八二	二六、三六三
下谷	三五、二四三	三四、五七二	三六、七六二
淺草	五四、一八五	五四、九三一	五六、九五三
本所	五三、一三一	五三、六六九	五五、六四四
深川	四六、五七九	四五、二九四	四九、一七七
品川	三八、七〇一	三八、五三九	四〇、九五九
目黒	三一、〇三二	二九、七三五	三二、六五五
荏原	三三、四二一	三三、二九一	三五、五六一
大森	三九、八二一	三八、四一八	四三、六五七
蒲田	三〇、八八二	二七、九一六	三三、四一九
世田谷	四〇、一一〇	三四、〇三〇	四二、六三三
澁谷	四三、〇五七	四一、七六六	四五、五七四
淀橋	三三、五七九	三一、六五三	三四、四九二
中野	三四、三〇八	三三、二七九	三六、四七一
杉並	三七、三九九	三四、〇〇一	四〇、一五一
豐島	五一、七三七	四八、八三二	五四、六六一
瀧野川	二三、九一四	二三、五三九	二五、〇三六
荒川	六八、一四三	六五、六〇九	七一、三二九

王子	三六、三七六	三四、五六七	三八、八〇九
板橋	三一、二五九	二九、四四四	三三、九二六
足立	三七、二七三	三六、〇二七	四〇、〇六九
向島	三七、一二七	三六、一六三	三八、九九三
城東	三四、四二三	三三、六〇七	三六、四七〇
葛飾	三二、六五一	二一、一五六	三三、七三七
江戸川	二八、三八五	二六、四四〇	二九、八七六
計	一、一五七、三八八	一、一〇六、九八	一、三三、三三

（備考）衆議院は昭和十一年十二月三十一日現在、府會は昭和十一年六月十日の投票日に於ける有權者數。

大阪市

廣袤

方位	地名	
極東	旭區今津町	一五・九八粁
極西	西淀川區布屋町西端海岸	
極南	住吉區杉本町大和川彎曲點流心	二〇・二九
極北	東淀川北大道町北端用水路流心	

面積（昭和一一、一、一）

區別	面積	區別	面積
	方粁		方粁
北區	八・七五	住吉區	二八二、八七九
此花區	一一・四四	西成區	二〇二、五三〇
東區	六・五五	全市	二、九八九、八六六
西區	四・二六		
港區	九・三三		
大正區	九・一七		
天王寺區	四・四〇		
西成區	七・〇八		

人口（昭和一〇・一〇・一國勢調査速報）

區別	總數	男	女
北區	二五〇、二六九	一二三、五三一	一二六、七四七
此花區	二二三、六〇九	一一五、五八三	一〇七、〇二六
東區	一七一、二六三	八九、〇三六	八二、二二七
西區	一三一、五二四	六九、〇〇一	六二、五二三
港區	三一七、七二一	一七四、三五〇	一四三、三七一
大正區	一三一、〇三八	六三、一〇三	六八、九三五
天王寺區	一三四、四五三	六一、二四九	七二、二〇四
南區	一九、〇九四	八二、七六六	一〇〇、三二八
浪速區	一五一、一五一	七六、〇四一	七五、一一〇
西淀川區	一八九、六三八	九七、七五六	九二、八八二
東淀川區	二二六、九四五	一一四、八九	一一二、〇三八
東成區	三〇六、六一八	一五四、九一〇	一五二、〇〇八
旭區	一七〇、一三五	八八、〇六六	八一、〇六九

歷代市長

姓名	任年月日	退職年月日
田村太兵衛	明治三一・一〇・二	明治三四・八・一〇
鶴原定吉	三四・八・一	三八・七・二〇
山下重威	三八・二・一一	四二・一二・二〇
植村俊平	四二・八・八	四五・七・三五
肝付兼行	大正二・一・二七	大正二・八・一
池上四郎	二・一〇・一五	二・一一・九
關一	二・一二・一	昭和一〇・一・二六
加々美武夫	昭和一〇・一二・一三	同一一・七・
坂間棟治	昭和一一・七・	現在

財政

純歲入總額（圓）

昭和六年度	一二五、七三六、五八二
同七年度	一五四、三九四、三〇五
同八年度	一四〇、七五七、三七八
同九年度	一五五、三四四、五七二
同十年度	一七三、八六七、五五一
同十一年度	一八三、七九五、六七九
	（一〇、八〇七、三九三）

純歲出總額（圓）

昭和六年度	一二四、九八八、五二三
同七年度	一五五、八六〇、三二七
同八年度	一四二、六九三、六九九
同九年度	一五〇、八八六、三九三
同十年度	一五二、五三八、九一九
同十一年度	二〇六、八三四、九五五
	（一一、八七、三五七）

（備考）十一年度は豫算。括弧内數字は純收支中に加へ難き爲め別途計。

市債

	昭和九年度	昭和十年度
起債額	九八、九三七、四〇〇圓	一〇三、二六七、二〇〇圓
償還額	九一、五三一、六二六	六一、一一三、四〇五
未償還額	四八五、七七九、七六一	五二七、九三三、五五五
一戶平均	八〇六	八三八
一人平均	一七八	一七七

諸稅負擔一戶平均

	昭和七年	同八年	同九年	同十年
直接國稅	五三・九五圓	六二・三九圓	七八・八圓	八六・六三圓
府稅	一七・二九	一九・五四	二三・四八	二五・五七
市稅	三二・一三	三五・三八	三六・一四	三七・六二
區稅	〇・三三	〇・三三	〇・三一	〇・三一
計	一五三・六九	一七七・六四	一三七・八一	一五〇・一三

土地高低

最高地名		最低地名	
大阪城公園	三一・五米	西淀川區中島町	〇・一米
天滿宮	四・五	梅田町	一・七
堂島大橋北詰	二・六	春日出町一丁目	一・三

（昭和一一・四・一現在）

區名	總數	北	二四、〇四七
天王寺	二四、〇四七		七、五七一・三〇
南	二〇、五四九	此花	七、五七〇・五四

土地種別（單位ヘクタール）

種別	昭和九年	同十年	同十一年
總面積	一八、七三三・〇〇	一八、七三三・〇〇	一八、七三三・〇〇
宅地	五、八三七・六四	五、九七〇・三七	五、九七〇・三七
田	四、〇一〇・〇〇	二、九三五・五一	二、九三五・五一
畑	一、三一四・八二	一、二五五・八二	一、二五五・八二
其の他	七、五七〇・五四	七、五七一・三〇	七、五七一・三〇

建物戶數（昭和一一・四・一現在）

區名	總數	北	四七、一七六
天王寺	二四、〇四七		三七、四四五
南	二〇、五四九	此花	三七、四四五

新炭屋町 四・五 大正通三丁目 一・六
内安堂寺町一丁目 二・〇 日本橋筋四丁目 三・六
河原町 四・五 西濱北通三丁目 一・〇
天王寺上汐町三丁目 三・七 逢坂下之町 二・七
東成、御勝山 一三・二 中本町 一・七
住吉、阿部野交叉點 一七・七 北島町 〇・五
西成、岸松通一丁目 七・五 津守町 〇・九
西淀川、大仁本町一丁目 三・二 中島町 〇・一

外國貿易（單位千圓）

年次	輸出	輸入	合計
昭和五年	二九九、三一九	二三一、三四五	五三〇、六六五
同六年	二一八、九一四	二一五、八三六	四三四、七五〇
同七年	三三四、二一二	二六七、九八七	六〇二、一九九
同八年	四六三、五三〇	四四一、六九一	九〇五、二二一
同九年	三八六、一八〇	五三三、二九〇	一、一〇九、四七一
同十年	六二〇、一四二	五四六、七五〇	一、一六六、八九二
同十一年	六七二、二三三	四九三、二六四	一、一六五、四九七

浪速 二八、〇〇三 西淀川 三五、六七三 東淀川 四四、八〇三 東成 六一、三一四 住吉 六一、六九三 合計 五七〇、三三九

東 三〇、七六 西 三五、五五三 港 五六、六一一 大正 二一、五〇三 旭 三六、一九三 西成 三八、九〇四

學校（昭和十年度）

學校	教員	學生兒童
幼稚園	一一九	五二七	一五、〇八六
小學校	二五〇	六、九一〇	三四七、三〇七
小學校に類する各種學校	四	四六	一、三四六
盲及聾唖學校	四	一二六	九一四
中學校	一三	五〇九	一二、一八九
高等女學校	二一	六七三	一七、七〇九

實業學校	商業學校	三〇	六三四	一六、一四九四
	工業學校	五	二六八	三、九八一
	職業學校	八	三〇六	三、九三〇
	商工學校	二	七〇	二、三〇四
	商船學校	一	一一	六九
	計	三六	一、一八九	二六、六六八
青年學校		一四八	一、二七八	二九、二七一
家政高等女學校		四四	五一六	七、七八三
師範學校		二	六四	一、〇〇九
專門學校		七	三九九	五、三九一
高等學校		一	四五	四七五
大學		二	三三七	二、〇七一
其他各種學校		一一七	一、三五七	一九、六二三
合計		七六七	一三、九六六	四八六、八四二

圖書館（昭和十年度）

		閲覽人員	藏書冊數
大阪府立圖書館		二〇四、四四二	五五、〇五七
大阪市立阿波座圖書館		一〇、四〇八	三八、一〇、七八二
同西野田圖書館		八、七八九	一六二、一〇九、八一二
同清水谷圖書館		二一、一四五	六八四
同御藏跡圖書館		一〇、一三一	三三、九六、一五九
同今宮圖書館		六、三二五	一二、六六、四七
同城東圖書館		一〇、一四五	一三九、一五三
同	和漢書		
同	洋書		

青年團（昭和十一年三月）

男子	團數	人員	一五七、八一八
	二五八		
女子	團數	人員	
	一三五	四二、〇九七	

神社及宗教（昭和十年末）

△神社及神職數	社格	社數	神職數
	官幣社	二	二
	別格官幣社	一	四
	府社	九	一三
	郷社	一四	二三
	村社	八八	八八
	無格社	六	四
△神道教會及信徒數	教會	八三九	教師 九六九
△寺院及住職	寺院	八一七	住職 七五三
△佛教々會及教師	教會	二〇三	教師 一九七
△基督教會堂	教會	九八	
宣布者	內國人	一〇五	
	外國人	一四	

交通

△鐵道乘降客驛別（昭和十年度一日平均）

		乘客	降客
東海道大阪		三七、一三一	三八、〇四九
西成線大阪		一、六六七	一、八四五
安治川口		二、二六九	二、二二二
野田		二、一〇二	二、〇〇七
關西線湊町		二、五七〇	二、三一九
天王寺		四、四二七	四、四二九
平野		一、六八九	一、六七九
天滿		八、〇三八	七、七六四
塚本		三、八二一	三、五八
福島		二、〇七三	二、〇一四
西九條		二、〇一〇	一、九二七
櫻島		二、〇四四	二、〇二七
今宮		一、三一六	一、三一〇
百濟		三	一〇
城東大阪		二、七九五	二、二〇七
京橋		九、五二七	九、三四三

機	宮	四、四四七	四、四三五	七、九五五
森之宮		五、四七一	五、五三三	二、〇七三
寺田町		五、一〇六	五、一四九	五、七一二
城東天王寺		一五、二二九	一五、二〇六	三、二七五
京橋		八二五	七六九	一六二、二五八
鳴野		二、九六〇	二、九五五	

△市營電車

昭和九		同一〇	
營業線路粁程	二〇六・五七二粁	二〇七・一一粁	
車輛數	七四〇	七六五	
乘客人員	二五四、七三千人	二六〇、七〇五千人	
乘客賃銀	一四、二一三千圓	一四、六二三千圓	
平均一日乘客人員	一四、二一三千人	一四、六二三千人	
平均一日乘客賃金	六九八千圓	七二二千圓	
△市營乘合自動車			
昭和九		同一〇	
車輛數	六一七	七三七	
乘客數	五八、七五五、五五九人	七二、四一六、九六五人	
乘客賃金	三、三〇〇、三一三	四、二五四、三六九	
△地下鐵道			
營業粁程		四・一〇〇粁	
車輛數		一八	

玉造		四、四三五	七、九五五
鶴橋		五、五三三	一一、〇七三
桃谷		一四、一九	五、七一二
片町		一五、一〇六	三、二七五
放出		七六九	一六二、二五八
合計		二、九五五	

乘客數		一二、一四四、七八九	七、七八七
乘車料金		一、〇四五、〇九〇	一〇、三四八
一日平均乘車人員		三三、一八三	五、六四三
一日平均乘車料金		一、〇五九、二八〇	五四、五四四
△郊外電鐵			
電鐵會社數		八	三
營業粁程合計		三八七、六九五	一〇五、九三七
乘車人員		一二四、四三七	三三、二七七
乘車收入		三、四二〇	一、〇一二
一日平均乘車人員		三四一、三五〇	九一、三一九
一日平均乘車收入		一〇、三四五	二、五五〇
（備考）地下鐵道は昭和十年十月三十日心齋橋難波間運轉開始。			

鋪裝道路（昭和十年度末）

延長		米	平方米
車道		一三一、〇六三	一、六一七、五二二
歩道		一一三、五七五	七二五、一三七
歩車道の區別なき分		五〇六、五八七	二、五五一、八八三

橋梁（昭和十年末）

石橋		一九九	鐵筋混凝土橋 一五四
鐵橋		三四〇	其の他 三六
木橋		四九一	合計 一、二三〇

諸車及艀船

普通自動車	總數	昭和九	昭和一〇
	乘用	六、三八七	六、八八六
	貨物用	四、六二八	四、八二五
		一、七五九	二、〇六一
特殊自動車	自動自轉車類	三三八	三三八
	其の他	七四	七九
小型自動車	自動自轉車	四、六四〇	四五三
	自動三輪車	一三六	九四七
	其の他		五、四三六
			五三六
自轉車	營業用	二七九、一九四	二九四、八〇六
	自家用	一三、四三三	一五、二三四
人力車		一、一九二	一、一一〇
輓手車	自家用	二五、〇二四	二四、八二〇
荷馬車	營業用	九九六	一、〇二七
	自家用	四、六二三	四、六一四
荷牛車	營業用	五五一	五三三
	自家用	七三〇	六四二
艀船		三、六九九	四、〇〇七
遊		二、六四五	二、六四四

公園數（昭和十一年一月現在）

區名	數	面積（アール）	區名	數	面積（アール）
北	六、二	二、三三一	南	三	二三
此花	五	一九八	浪速	二	三六
東	三一	一、一七九	東淀川	四	四一〇
西	一七	九七	西淀川	一	二五〇
東成	三	九七	港	四	六六三
旭	八一	六、四六	大正	一	八六
住吉	九	四、〇九九	天王寺	三	二、三一九
合計				五三	一三、三四七

商工業

△會社（昭和十年末）

	社數	拂込資本金又は出資額（千圓）	積立金
株式會社	二、二四一	二、二九六、九五一	五四一、二五九
合資會社	四、四一九	二九〇、四八九	二七、八五〇
合名會社	二、九一五	二〇六、〇四六	一一、一一〇
計	九、五七四	二、七九三、四八六	五八〇、二一九

△銀行（昭和十年末）

	本店	支店	資本金（千圓）	拂込額（千圓）
特殊銀行	一	七	七、〇〇〇	七、〇〇〇
普通銀行	三	一七五	三三三、三〇〇	一六七、五一三
貯蓄銀行	三	五〇	一二、五〇〇	九、三七五
計	九	二三一	二五二、八〇〇	一八三、八八八

＊印は休業

△工業（昭和十年末）

事業別	工場數	職工數	生産額（千圓）
紡績工業	一、四五八	四三、八四六	二四三、七三一
金屬工業	二、三二七	六〇、六四九	三八一、五〇五
機械器具工業	二、四九六	六七、九八八	二七七、六五一
窯業	三四六	一四、六〇七	四三、三六三
化學工業	八一三	二七、六二一	二四〇、一〇七
製材及木製品	九、二三	二八、七四三	
印刷及製本業	五四七	三三、〇八九	五三、〇八六
食料品工業	七六九	一〇、四〇八	七一、七六二
瓦斯及電氣業	一五	一、四二七	
其他の工業	二、二〇五	七八、三三一	
合計	二一、六〇四	二七六、一八四	一、四一七、〇七八

銀行預金及貸出累年比較

年次	預金（百萬圓）	貸出（百萬圓）
昭和七年	一ケ年年末現在 一八、六八三	一ケ年年末現在 一八、一二三
同八年	一、〇三五	一、六四六
同九年	一、一三四	一、七九二
同十年	一、二七、一八四	一、三五三

銀行預金及貸出累年比較

年次	預金（百萬圓）	貸出（百萬圓）
昭和七年	一ケ年年末現在 一八、六八三	一ケ年年末現在 一八、一二三
同八年	一、〇三五	一、六四六
同九年	一、一三四	一、七九二
同十年	一、二七、一八四	一、三五三

保險業概況（昭和十年）

△生命保險（三十七社）　單位千圓

種別	新契約 人員	新契約 金額	年末現在 人員	年末現在 金額
死亡	一〇九、八六一	二二、二五八	五五三、一七一	一、一六二、一八八
生存	八、四六七	八、七六八	二七、六五四	二九、三九七
合計	二八、三三八	三三〇、〇三三	五六〇、八三五	一、一九二、五八五

△傷害保險（一二社）　單位千圓

種別	新契約 件數	新契約 金額	年末現在 件數	年末現在 金額
個人	八、三三一	一二、三八	七、七四六	一一、二七一
團體	七五六	一三、五一九	五三八	九、一一三
旅行	二七九	一、四〇四	二〇	三五
合計	九、二六七	二七、一五一	八、三〇四	三〇、五一九

△簡易生命保險（官營）　單位千圓

種別	新契約 件數	新契約 金額	年末現在 件數	年末現在 金額
小兒	五一、六六四	七、七一三	二〇七、五三五	三〇、六一四
終身	三一、七四四	六、八三五	二八一、二三五	三九、九五〇
養老	一四〇、九二四	二六、一三八	九八八、五七九	一五三、九五二
合計	二三五、三一二	四〇、六八六	一、四二三、四九	二二九、五一六

△其の他の保險　單位千圓

種別	新契約 件數	新契約 金額	年末現在 件數	年末現在 金額
徵兵（四社）	一八、三六一	一八、三九八	七四、四三三	二六三
盜難（四社）	三〇八	三〇〇	一九七	一

△火災保險（四十六社　×二十六社）

種別	新契約 件數	新契約 金額	年末現在 件數	年末現在 金額
動産	一、一六一、四二五	二、一七三、六五四	六八八、四二九	一、〇六〇、〇三九
×	四五、三一六	二一八、四九七	三一、〇三九	一二九、一二三
不動産	五五三、二〇〇	一、一三六、九一六	五九、一九九	一〇五、二九九
×	二四、五七五	九九、八五三	一三、二七二	七六、〇〇四
森林（三社）	一、七一四、六一八	三、三一〇、六〇一	一、二一三、三八〇	二、一一三、三七〇
合計	六九、八九一	三一八、三五九	四四、三一一	二〇五、一一七

（備考）×印は外國保險會社の計數を別記したるもの。

無盡會社

	昭和九年	昭和十年
社數	九	一三
拂込資本金	千圓 五三六	千圓 九八一
諸積立金	三九〇	五二一
給付契約高	五一、二五五	五八、七二六

信託會社（昭和十年）

	本店	支店	拂込資本金	諸積立金
計	七	四	二九、七五〇	一四、二一三
二				

水道（昭和十年）

濾過水量　給水量　總量　一日平均水量

	濾過水量（立方米）	給水量（立方米）
總量	一七六、六八九、五三四	一六、三五四、八〇
一日平均水量	四八三、六二五	四八、〇四一

醫療機關（昭和十年末）

醫師	三、二二一	產婆	三、五四〇
藥劑師	二、八三三	看護婦	八、七四〇
醫科醫師	一、二八七	官公私立病院	一四三

傳染病（昭和十年）

	發生 男	發生 女	死亡 男	死亡 女
コレラ	—	—	—	—
赤痢	一、四〇三	一、二三二	一七九	一四二
疫痢	一、〇六六	一、〇〇六	四四〇	四七三
チフテリア	一、二一五	一、〇八〇	三三六	一九六
腸チフス	一、九七〇	一、五六八	四一三	三五三
猩紅熱	一、〇五五	一、〇六三	四八	三
パラチフス	一六一	一二五	一八	一四
痘瘡	—	一	—	—
流行性腦脊髓膜炎	八	六	六一	五〇
發疹チフス	—	—	—	—
ペスト	—	—	—	—
合計	六、九四五	六、〇一三	一、三八五	一、二六〇

区	名	市会議員選挙権者数 昭和十年十二月末現在	総人口 昭和十年末	男	女
北	此花	四三、八五六	一五七、四三〇	七四、〇三一	八三、三九九
東	東成	四五、一四八	一七二、八五〇	八四、九三六	八七、九一四
西	西成	三一、一四八	一〇五、九二二	五一、四〇〇	五四、五二二
港	港	三七、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
大正	大正	三七、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
天王寺	天王寺	三三、〇七〇	一二五、〇七〇	六一、〇三五	六四、〇三五
南	南	三三、〇七〇	一二五、〇七〇	六一、〇三五	六四、〇三五
東成	東成	三〇、九八六	一一三、三五二	五五、〇三四	五八、三一八
東住吉	東住吉	三七、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
西成	西成	三一、一四八	一〇五、九二二	五一、四〇〇	五四、五二二
住吉	住吉	三七、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
東淀川	東淀川	四三、八五六	一五七、四三〇	七四、〇三一	八三、三九九
西淀川	西淀川	四五、一四八	一六五、〇七〇	七九、〇三五	八六、〇三五
淀川	淀川	四八、七四四	一七五、〇七〇	八四、九三五	九〇、一三五
旭	旭	三七、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
浪速	浪速	三七、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
大正	大正	四八、七四四	一七五、〇七〇	八四、九三五	九〇、一三五
此花	此花	四五、一四八	一六五、〇七〇	七九、〇三五	八六、〇三五
北	北	四三、八五六	一五七、四三〇	七四、〇三一	八三、三九九

選挙権者数

在留外地人（昭和十年末）

	総数	男	女
朝鮮	三三、三一二	二三、四〇〇	九、九一二
台湾	九五	四四	五一
樺太	一	一	一
関東州	一	一	一
南洋群島	一	一	一
支那	一	一	一
満洲国	一	一	一
中華民国	一	一	一
無国籍	一	一	一
旧露国	一	一	一
英領印度	一	一	一
其他共産国	一	一	一
其他諸国	一	一	一
合計	三五、四〇〇	二四、〇〇〇	一一、四〇〇

職業紹介事業（昭和十年度）

	一般紹介 求人数	一般紹介 求職者数	就職者数
北	四八、九二七	四五、〇二一	三九、九三〇
東	一二、〇〇一	一一、四二一	一〇、一三一
西	一五、四〇二	一四、六二六	一二、九一一
港	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
大正	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
天王寺	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
南	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
東成	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
東住吉	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
西成	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
住吉	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
東淀川	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
西淀川	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
淀川	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
旭	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
浪速	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
大正	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
此花	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一
北	一二、七六六	一一、九一一	一〇、一三一

公益質屋状況

年次	貸出高	流質高	貸出品換価合計
昭和三年	三九、八〇〇、四〇〇	三七、九〇〇、四〇〇	三七、九〇〇、四〇〇
四年	四一、〇〇〇、四〇〇	三九、〇〇〇、四〇〇	三九、〇〇〇、四〇〇
五年	四二、〇〇〇、四〇〇	四〇、〇〇〇、四〇〇	四〇、〇〇〇、四〇〇
六年	四三、〇〇〇、四〇〇	四一、〇〇〇、四〇〇	四一、〇〇〇、四〇〇
七年	四四、〇〇〇、四〇〇	四二、〇〇〇、四〇〇	四二、〇〇〇、四〇〇
八年	四五、〇〇〇、四〇〇	四三、〇〇〇、四〇〇	四三、〇〇〇、四〇〇

市設小賣市場賣上高（昭和十年）

	市場数	金額
北	一四	一、二三六、〇〇〇
東	一四	一、二三六、〇〇〇
西	一四	一、二三六、〇〇〇
港	一四	一、二三六、〇〇〇
大正	一四	一、二三六、〇〇〇
天王寺	一四	一、二三六、〇〇〇
南	一四	一、二三六、〇〇〇
東成	一四	一、二三六、〇〇〇
東住吉	一四	一、二三六、〇〇〇
西成	一四	一、二三六、〇〇〇
住吉	一四	一、二三六、〇〇〇
東淀川	一四	一、二三六、〇〇〇
西淀川	一四	一、二三六、〇〇〇
淀川	一四	一、二三六、〇〇〇
旭	一四	一、二三六、〇〇〇
浪速	一四	一、二三六、〇〇〇
大正	一四	一、二三六、〇〇〇
此花	一四	一、二三六、〇〇〇
北	一四	一、二三六、〇〇〇

社会事業総覧（昭和十年三月末）

	総計	官設	市設	法人	その他
救護	一	一	一	一	一
一般社会事業	一	一	一	一	一
方面事業	一	一	一	一	一
総計	一	一	一	一	一

大都市——大阪

	一般救護	医療救護	社会事業	児童保護	婦人少年保護	失業救済	経済保護
総計	一	一	一	一	一	一	一
方面事業	一	一	一	一	一	一	一
一般社会事業	一	一	一	一	一	一	一

大都市——京都

区	名	市会議員選挙権者数 昭和十年十二月末現在	総人口 昭和十年末	男	女
上京	上京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
下京	下京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
中京	中京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
伏見	伏見	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
右京	右京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
左京	左京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
東山	東山	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
山科	山科	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
西京	西京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五

屋代市長

年次	最低地価	最高地価	貸出百に付評価額
昭和三年	京都市	京都市	三、六〇〇
四年	京都市	京都市	三、六〇〇
五年	京都市	京都市	三、六〇〇
六年	京都市	京都市	三、六〇〇
七年	京都市	京都市	三、六〇〇
八年	京都市	京都市	三、六〇〇

廣麥（昭和十一年一月一日現在）

	最低地価	最高地価	極寒	極暑
北	右京区嵯峨所地	伏見区納所	一、八四〇	四九〇
東	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
西	右京区嵯峨所地	伏見区納所	一、八四〇	四九〇
港	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
大正	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
天王寺	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
南	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
東成	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
東住吉	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
西成	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
住吉	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
東淀川	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
西淀川	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
淀川	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
旭	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
浪速	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
大正	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
此花	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
北	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇

京都市

年次	最低地価	最高地価	極寒	極暑
同	東山区東大路	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
同	東山区東大路	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
九年	東山区東大路	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
十年	東山区東大路	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇

家畜家禽飼養調

	牛 戸数	牛 頭数	豚 戸数	豚 頭数	緬羊山羊 戸数	緬羊山羊 頭数	鶏 戸数	鶏 羽数	蜜蜂 戸数	蜜蜂 箱数
昭和九年度	九四	一〇〇	三五	七七	一	一	一、四〇〇	一、九〇〇	一	一
昭和十年度	九三	一〇二	三五	七七	一	一	一、四〇〇	一、九〇〇	一	一

農家戸数（昭和十年末）

	専業	兼業
北	一、三四〇	一、四一〇
東	一、三四〇	一、四一〇
西	一、三四〇	一、四一〇
港	一、三四〇	一、四一〇
大正	一、三四〇	一、四一〇
天王寺	一、三四〇	一、四一〇
南	一、三四〇	一、四一〇
東成	一、三四〇	一、四一〇
東住吉	一、三四〇	一、四一〇
西成	一、三四〇	一、四一〇
住吉	一、三四〇	一、四一〇
東淀川	一、三四〇	一、四一〇
西淀川	一、三四〇	一、四一〇
淀川	一、三四〇	一、四一〇
旭	一、三四〇	一、四一〇
浪速	一、三四〇	一、四一〇
大正	一、三四〇	一、四一〇
此花	一、三四〇	一、四一〇
北	一、三四〇	一、四一〇

水産業者（昭和十年末）

	総数	男	女
北	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
港	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
大正	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
天王寺	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
南	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東成	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東住吉	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西成	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
住吉	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
旭	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
浪速	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
大正	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
此花	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
北	一、二四〇	一、〇二〇	二一九

入港船舶（昭和十年）

	外航 船舶数	外航 総噸数	内航 船舶数	内航 総噸数
北	一	一	一	一
東	一	一	一	一
西	一	一	一	一
港	一	一	一	一
大正	一	一	一	一
天王寺	一	一	一	一
南	一	一	一	一
東成	一	一	一	一
東住吉	一	一	一	一
西成	一	一	一	一
住吉	一	一	一	一
東淀川	一	一	一	一
西淀川	一	一	一	一
淀川	一	一	一	一
旭	一	一	一	一
浪速	一	一	一	一
大正	一	一	一	一
此花	一	一	一	一
北	一	一	一	一

在留外国人数（昭和十年末）

	総数	男	女
英国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
仏国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
独逸	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
露国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
米国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
支那	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
印度	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
其他諸国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
合計	一、二四〇	一、〇二〇	二一九

職業紹介事業（昭和十年度）

	一般紹介 求人数	一般紹介 求職者数	就職者数
北	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
港	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
大正	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
天王寺	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
南	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東成	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東住吉	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西成	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
住吉	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
旭	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
浪速	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
大正	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
此花	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
北	一、二四〇	一、〇二〇	二一九

社会事業総覧（昭和十年三月末）

	総計	官設	市設	法人	その他
救護	一	一	一	一	一
一般社会事業	一	一	一	一	一
方面事業	一	一	一	一	一
総計	一	一	一	一	一

大都市——大阪

	一般救護	医療救護	社会事業	児童保護	婦人少年保護	失業救済	経済保護
総計	一	一	一	一	一	一	一
方面事業	一	一	一	一	一	一	一
一般社会事業	一	一	一	一	一	一	一

大都市——京都

区	名	市会議員選挙権者数 昭和十年十二月末現在	総人口 昭和十年末	男	女
上京	上京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
下京	下京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
中京	中京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
伏見	伏見	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
右京	右京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
左京	左京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
東山	東山	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
山科	山科	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五
西京	西京	三四、〇七五	一三五、〇七〇	六五、九三五	六九、一三五

屋代市長

年次	最低地価	最高地価	貸出百に付評価額
昭和三年	京都市	京都市	三、六〇〇
四年	京都市	京都市	三、六〇〇
五年	京都市	京都市	三、六〇〇
六年	京都市	京都市	三、六〇〇
七年	京都市	京都市	三、六〇〇
八年	京都市	京都市	三、六〇〇

廣麥（昭和十一年一月一日現在）

	最低地価	最高地価	極寒	極暑
北	右京区嵯峨所地	伏見区納所	一、八四〇	四九〇
東	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
西	右京区嵯峨所地	伏見区納所	一、八四〇	四九〇
港	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
大正	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
天王寺	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
南	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
東成	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
東住吉	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
西成	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
住吉	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
東淀川	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
西淀川	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
淀川	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
旭	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
浪速	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
大正	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
此花	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
北	伏見区妙心寺	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇

京都市

年次	最低地価	最高地価	極寒	極暑
同	東山区東大路	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
同	東山区東大路	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
九年	東山区東大路	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇
十年	東山区東大路	上京区相国寺	一、八四〇	四九〇

家畜家禽飼養調

	牛 戸数	牛 頭数	豚 戸数	豚 頭数	緬羊山羊 戸数	緬羊山羊 頭数	鶏 戸数	鶏 羽数	蜜蜂 戸数	蜜蜂 箱数
昭和九年度	九四	一〇〇	三五	七七	一	一	一、四〇〇	一、九〇〇	一	一
昭和十年度	九三	一〇二	三五	七七	一	一	一、四〇〇	一、九〇〇	一	一

農家戸数（昭和十年末）

	専業	兼業
北	一、三四〇	一、四一〇
東	一、三四〇	一、四一〇
西	一、三四〇	一、四一〇
港	一、三四〇	一、四一〇
大正	一、三四〇	一、四一〇
天王寺	一、三四〇	一、四一〇
南	一、三四〇	一、四一〇
東成	一、三四〇	一、四一〇
東住吉	一、三四〇	一、四一〇
西成	一、三四〇	一、四一〇
住吉	一、三四〇	一、四一〇
東淀川	一、三四〇	一、四一〇
西淀川	一、三四〇	一、四一〇
淀川	一、三四〇	一、四一〇
旭	一、三四〇	一、四一〇
浪速	一、三四〇	一、四一〇
大正	一、三四〇	一、四一〇
此花	一、三四〇	一、四一〇
北	一、三四〇	一、四一〇

水産業者（昭和十年末）

	総数	男	女
北	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
港	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
大正	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
天王寺	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
南	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東成	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東住吉	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西成	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
住吉	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
旭	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
浪速	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
大正	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
此花	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
北	一、二四〇	一、〇二〇	二一九

入港船舶（昭和十年）

	外航 船舶数	外航 総噸数	内航 船舶数	内航 総噸数
北	一	一	一	一
東	一	一	一	一
西	一	一	一	一
港	一	一	一	一
大正	一	一	一	一
天王寺	一	一	一	一
南	一	一	一	一
東成	一	一	一	一
東住吉	一	一	一	一
西成	一	一	一	一
住吉	一	一	一	一
東淀川	一	一	一	一
西淀川	一	一	一	一
淀川	一	一	一	一
旭	一	一	一	一
浪速	一	一	一	一
大正	一	一	一	一
此花	一	一	一	一
北	一	一	一	一

在留外国人数（昭和十年末）

	総数	男	女
英国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
仏国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
独逸	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
露国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
米国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
支那	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
印度	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
其他諸国	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
合計	一、二四〇	一、〇二〇	二一九

職業紹介事業（昭和十年度）

	一般紹介 求人数	一般紹介 求職者数	就職者数
北	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
港	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
大正	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
天王寺	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
南	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東成	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東住吉	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西成	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
住吉	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
東淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
西淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
淀川	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
旭	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
浪速	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
大正	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
此花	一、二四〇	一、〇二〇	二一九
北	一、二四〇	一、〇二〇	二一九

就任年月日	退職年月日
内貴甚三郎 明治三一・一〇・二二	明治三七・一〇・一一
西郷菊次郎 三七・一〇・一二	四〇・七・一三
川上 親晴 四五・一・六	大正元・一二・二〇
井上 密 大正二・三・三一	五・七・一九
大野 盛郁 六・一・一〇	七・五・七
安藤 謙介 七・一一・二九	九・一二・三
馬淵鋭太郎 一〇・七・三	一三・九・九
安田耕之助 一四・二・二一	昭和二・八・一〇
市村 光惠 昭和二・八・一〇	二・一一・一三
土岐 嘉平 二・一二・一三	六・一二・二二
森田 茂 六・一二・二二	七・一一・三〇
大森吉五郎 七・一二・一八	一〇・一・一五
淺山富之助 一〇・二・一七	一一・六・三
市村 慶三 一一・六・四	現在

民有地（昭和十一年一月現在）

總數	二〇七、四四四	反 田	四四、二七三 反
畑	一二、七一六	宅地	三四、四九七
池沼	一、〇五六	山林	一二三、九六〇
原野	三九一	雜種地	五四八

人口（昭和一〇・一〇・一國勢調査）

	總數	男	女
上京區	二五四、五二九	一二七、六七四	一二六、八四五
左京區	二三三、八五八	一一四、〇二〇	一一九、八三八
中京區	一八一、四五一	八七、三五八	九三、〇九三
東山區	一一八、三三五	五六、一六三	六二、〇七三
下京區	二三五、二九一	一一四、七四七	一二〇、五四五
右京區	七七、九七〇	三七、六二五	四〇、三四五
伏見區	八九、二六八	四四、七四一	四四、五二七
全市	一、〇三〇、五九三	五二四、八〇一	五五五、七九二

交通及運輸

△市營電車

	昭和九年度	昭和十年度
營業粁（粁）	二、五四	二、五四六
停留場數	九七、二七五	九七、二七六
乘車人員（人）	五、六〇一、三〇〇	五、七〇一、三七六 人
乘車料（圓）	二六六、〇一三	二七一、〇三一
一日平均乘車人員（人）	一五、三四〇	一五、六〇一
一日平均乘車料（圓）	七三〇	七四二

△市營バス

	昭和九年度	昭和十年度
車輛數	四一	四一
營業粁（粁）	一〇、七六三	一〇、七六三
乘車人員（人）	九三一、一四三	九三一、一四三
乘車料（圓）	二九、四八九	二九、四八九
一日平均乘車人員（人）	二六六、三〇八	二六六、三〇八
一日平均乘車料（圓）	八二二	八二二

△鐵道乘降客（昭和十年度）

驛名	乘客數	乘客收入	降客數
京都	七、二五九、〇四三 人	六、六九三、五〇〇 圓	七、二八六、三七六 人
山科	三八一、一三二	九五、三九三	三九〇、八〇三
丹波口	二六八、〇九四	四二、五一五	二六三、六八六
二條	九六八、二四三	三七、〇〇三	一、〇一六、〇三一
花園	三九、五二七	六六、八七〇	三九四、四一五
嵯峨	一四三、四四五	五三、四三二	一四四、二八三
稻荷	九九、五一〇	三二、三三八	九六、二四九
桃山	一六七、六七六	四二、〇八〇	一七五、五四一
計	九、六八六、六七〇	七、三九八、〇九二	九、七六七、三八三

銀行（昭和一〇年）

特殊銀行	本店	支店	出張所
	一	二	一

	一	一	一〇
普通銀行	五	三五	六
貯蓄銀行	一	一	一六
計	七		

會社（昭和一〇年）

組織別	會社數	拂込資本金（千圓）
株式會社	四三九	二〇三、五三三
合資會社	一、一六三	三五、四三一
合名會社	一、六四四	五五、九一七
計	三、二四六	二九三、八七〇

主要工産物（昭和一〇年）

絹織物及絹綿交織物	七七、四六七、四六五	圓
晒及染物	三三、二九、八六一	
陶磁器	六、三五二、一〇五	
漆器	四、三三九、七九	
木製品	四、二三二、二三四	
綿糸紡績	三、九五、三三七	
絹糸紡績	一三、八五一、二七五	
被服絹綿及麻製品	三四、三八一、八二	
糸物及袋物	七、八〇四、三四三	
電氣及瓦斯機械器具材料	九、二〇三、〇五四	

工場（昭和一〇年）

種別	工場數	從員業數	生産額	
總數	二、〇九五	五三、四一六	一九七、五七七、一五四	圓
紡織工業	一、〇二〇	三〇、六〇六	九二、八一四、九五	
金屬工業	一三五	二、八八二	一三、一七九、一五〇	
機械器具工業	一八五	七、九二	三二、九二九、八七九	
窯業	五一	九八三	三、四六六、五七六	
化學工業	七〇	一、八七七	一三、九六三、九七一	
製材及木製品工業	一三二	一、二九一	五、九一八、九六六	
印刷及製本工業	七九	一、五七〇	六、五六八、三三二	
食料品工業	二九四	四、六〇五	二八、〇五〇、九七八	
瓦斯及電氣	二七	三六〇	五、九五三、四四〇	
金屬製品	一三、一二一、七三五			
印刷製本	四、四五五、六五五			
機械類及標本	二、一三七、二一八			
紙製品	四、八九九、一六三			
醸造物類	一七、七八七、九九九			
賣藥及清涼飲料水	四、六四四、四〇二			
飲食物雜類	一〇、二九三、四九六			
綿織物	三、三一四、四〇二			
鹼	三、二一三、五六			
石	一三、一二一、七三五			

昭和十年三百萬圓の産額のみを摘出す。

其他工業	一〇一	一、六〇五 四、七二一、四六七

（工場調査規則第一條該當）

生産物總額（昭和九年）

農産物	四、一六八、五九六	圓
林産物	八一三、九九三	
水産物	五一、一〇〇	
總額		
畜産物	三、八七七、六九一	圓
鑛産物	二一三、五五三	
工産物	二五五、〇〇三、二一七	
	二六四、一三八、一五〇	

教育（昭和一〇年末現在）

種別	學校數	職員	兒童生徒學生	
總數	二、〇九五	五三、四一六	七、七二一	人
幼稚園	三〇	三〇、六〇六	一、九三七	
小學校	一三五	二、八二一	二七、七八七	
青年學校	一〇六	七、九二一	八四、八四八	
盲學校	一	一	一七	
聾學校	一	一	二四	
女學校	一八	一七〇	一、七〇二	
中學校	一三	五、九一八	七、五九九	
實業學校	一三	一、二九一	四、七二一	
師範學校	二	一、五七〇	九四	
高等學校	一	六、五六八、三三二	六二	
專門學校	一六	二八、〇五〇、九七八	七、二〇三	
		五、九五三、四四〇	六、二〇三	

大學豫科	五	一八〇	一、六五一
大學々部	六	九〇四	六、九三七
私立各種學校(男)	三	一五三	三、九三三
私立各種學校(女)	一九	二四六	三、八七一

神社・寺院(昭和一〇年末)

△神社數			
總數			四〇三
官幣社	二	別格官幣社	四
府社	一三	郷社	一三
村社	一〇六	無格社	五〇
△寺院數			
總數			一、四一三
天臺宗	六〇	眞言宗	七九
淨土宗	五六	禪宗	三一
曹洞宗	二六	黄檗宗	三
日蓮宗	三〇五	眞言宗	二五六
時宗	一七	律宗	一
法相宗	一〇		
△神道數			
總數			三三四
神道	八	扶桑	一九
實行	五	黒住	五
大成	二	御嶽	一九
金光	五六	天理	一七〇
修成	一	神習	一三

水道 昭和一〇年度)

栓數			一三五、五八一
給水量			立方米 四一、三五九、〇八七
平均一日給水量			一一三、五二二
水道費收入總額			一、六三九、二〇九圓

醫療機關(昭和九年)

官公私病院及産院

醫師			四〇三
藥劑師			四
齒科醫師			一三
産婆			一〇六
看護婦			五〇

傳染病(昭和一〇年)

發生	男	コレラ	一
	女	赤痢(疫痢ヲ含ム)	一、二六一
	男	腸チフス	五三
	女	パラチフス	六一
死亡	男	痘瘡	一
	女	發疹チフス	一
	男	猩紅熱	七四
	女	ヂフテリア	三四
	男	流行性腦脊髓膜炎	二四
	女	ペスト	一
	男	總數	二、三八
	女		二、六七五

			一
			一
一九			三三
四一			三三
一四			四
一四			四
			三七六

財政

歳出入			
昭和八年度			六〇、八五四、二一七圓
同九年度			七三、七七三、八四五
同十年度			六八、一五三、一五八
同十一年度			六四、二七八、一〇三
八年度九年度は決算他は純收支豫算(各年度當初)			

市債(昭和一一年五月末現在)

起債總額			六三、六三三、九三五圓
未償還額			五六、八六六、一六一
未償還額負擔(一世帶平均			二四六、九八圓
一人平均			五一・三五

社寺有の國寶、同建造物(昭和九年末)

書蹟(軸物			四〇六
其他			六六
繪畫(軸物			二七
其他			一四八
文書			一〇五
籍			九
彫刻物			一五八
刀劍			二
美術工藝品			二四
金石文			一
玩具			一
建造物			二三四
計			八三〇

公園

公園名	位置	開設年月	總坪數
岡崎公園	左京區	明治三七・七	平方米 八七、一五〇
圓山公園	同	一九・八	九六、三三六
五條公園	下京區	同 三八・一一	一、〇七九
嵐山公園	右京區	同 三九・三	九九、八一三
御香宮神社附屬公園	伏見區	同 四四・四	四、一四三
二條公園	上京區	昭和 九・一一	九、一〇一
城南宮公園	伏見區	明治三九・四	二、九九一

觀光里程表(京都驛基點)

	里町	
御所	一・〇五	平安神宮
	一・〇七	里町

二條離宮 三四
修學院離宮 二・一五
桂離宮 一・二一
下鴨 一・二四
伏見 一・二六
高雄 三・二八
圓山公園 一・二七
東本願寺 〇・四
六角堂 二・一
三十三間堂 一・三
清水寺 三・〇
金閣寺 二・二四
大德寺 一・二八
北野神社 一・三〇
八坂神社 一・二
上賀茂 二・〇四
宇治 三・一五
仁和寺 二・〇六
山 二・二一
植物園 一・二八
西本願寺 一・二
東福寺 二・二
豐國廟 一・二
南禪寺 一・〇九
銀閣寺 一・二八
桃山御陵 二・二

名古屋市

廣袤

東西	一四・六一八粁(三里二十六町)
南北	一五・七〇九粁(四里三町餘)
周圍	五五・四〇〇粁(十四里十三町)
面積	一五一・〇四四平方粁(九・七九三方里)

本邦都市中第四位。

土地種別

	昭和十年	前年比較
	町	
御料地	三〇、五七〇、	不變
國有地	二、二九七、四八一一	二、八二四增
他	三、〇一七、三二〇一	九、三五〇四減
總面積	一五、三三五、二七一〇	二、五七一〇增

建物棟數

	昭和十年末	前年比較
數	二八九、七九九	二、三八增
棟坪數	五、八八三、八四一	

宅地賣買價額(昭和十一年)

最高	西區御幸本町九丁目	一、五〇〇、〇〇圓
最低	南區鳴尾町	四、〇〇

宅地賃貸價格(昭和十一年)

最高	西區御幸本町九丁目	六五、〇〇圓
最低	南區鳴尾町	〇、一八

面積・人口(昭和十一年一月調)

△面積 四九五

東區	二九、四六四方粁	（一、九二一方里）	
西區	二九、三三	（一、二四六方里）	
中區	二九、二九二	（一、八九九方里）	
南區	七三、〇六五	（四、七四〇方里）	
計	一五一、〇四四	（九、七九六方里）	
東區	二九、四六四方粁	（一、九二一方里）	
西區	二九、三三	（一、二四六方里）	
中區	一九、二〇八	（一、二四六方里）	
南區	二九、三〇七	（一、九〇〇方里）	

歳入・歳出累年表

（單位千圓）

年度	歳入				歳出			
	計	經常	臨時		計	經常	臨時	
昭和二年度	一〇、四一五	六、五六六	三、七八八		一〇、三五四	六、五六六	三、七八八	
同三年度	一九、四三八	七、二七五	一一、六六三		一八、九三九	七、二七五	一一、六六三	
同四年度	二五、三九〇	七、〇三四	一八、二一九		二三、三五四	七、〇三四	一八、二一九	
同五年度	三一、四七七	六、八七八	二三、五四五		三〇、四二四	六、八七八	二三、五四五	
同六年度	三七、九六三	七、一二六	二八、九四六		三六、〇七二	七、一二六	二八、九四六	
同七年度	三七、七七九	一四、二八七	二三、四九二		三七、七七九	一四、二八七	二三、四九二	
同八年度	三八、〇五五	一六、〇三八	二二、〇一六		三八、〇五五	一六、〇三八	二二、〇一六	
同九年度	三五、八九五、四一〇	一六、四七〇、九五七	一九、四二三、四五三		三五、八九四、四一〇	一六、四七〇、九五七	一九、四二三、四五三	
同十年度	五四、〇四三、六三九	二三、六四七、七一九	三〇、三九六、二九〇		五四、〇四三、六三九	二三、六四七、七一九	三〇、三九六、二九〇	
同十一年度	五三、七八六、三〇一	三九、五六六、八六	一六、八二八、二三八		五五、七八六、三〇一	三九、五六六、八六	一六、八二八、二三八	
同十二年度	五九、四四二、〇一〇	四二、八五、六九一	一六、九二、三一八		五九、四四二、〇〇九	四二、八五、六九一	一六、九二、三一八	

市債（昭和十二年四月一日）

起債額	未償還額
圓	圓
二〇、七六五、二〇〇	一四、〇五三、四六三・四〇
五五、七二一、三〇〇	二四、九八三、〇〇〇・〇〇
二七、六四四、六〇〇	二七、五三一、九四五・四三
二四五、八〇〇	二〇七、七〇〇・〇〇
四五、〇九、〇〇〇	三九、〇三三、七〇〇・〇〇
一九、四三五、九〇〇	一〇五、八〇六、七〇八・八三

上水道費	經濟
都市計畫	經濟
電氣軌道	經濟
公益質屋	經濟
一般市費	經濟
計	

世帶數（昭和十一年推計）

東區	五六、五〇〇	西區	四〇、一〇〇
中區	五二、三〇〇	南區	六一、三〇〇
計			三三一、一〇〇

寄留外國人數（昭和十年末）

中區	二九六	南區	七〇九
西區	一三八	東區	九四

在留外人數（昭和十年十二月現在）

國別	男	女	計
イギリス	八	六	一四
ロシア（白系ロシア）	三五	三一	六六
ドイツ	二一	一八	三九
北米合衆國	一三	一七	三〇
中華民國	三〇一	一四六	四四七
滿洲國	六	四	一〇
オランダ	二	二	四
加奈陀	五	八	一三
ベルギー	一	一	二
シヤム	二	一	三
印度	一	一	二
ポルトガル	三	三	六
チエツコ・スロバキア	一	一	二
スイス	一	一	二
ハンガリー	一	一	二
フイリツピン	二	一	三
計	四〇三	二三七	六四〇

名古屋港上陸（下船）外人

（昭和十年四月——十一年五月）

北米合衆國	三	蘭	一
英吉利	四	比律賓	一
中華民國	二	獨逸	一

歷代市長

	就任年月日	退職年月日
中村 修	明治二二・一二・二八	明治二五・九・一一
志水 忠平	二三・一一・六	二七・二・二三
柳本直太郎	二七・二・二八	三〇・六・二六
志水 直	三〇・七・一九	三四・二・二
青山 朗	三四・一二・二七	三九・四・一二
加藤重三郎	三九・六・二七	四四・七・四
阪本彰之助	四四・七・四	大正 六・一・三
佐藤孝三郎	大正 六・七・三	一〇・七・二
大喜多寅之助	一〇・七・二	一一・二・二
川崎 卓吉	一一・二・二	一三・六・二一
田阪 千助	一三・六・二一	昭和 二・八・一
大岩 勇夫	昭和 二・八・一	現在

市財政

昭和十二年度豫算

歳入出	一般會計	一九、四三四、九七五 圓
	特別會計	四〇、〇〇七、〇三四

市内物價指數（昭和十一年）

月別	公設市場	市中
一月	九七・一	九〇・二
二月	一〇九・六	一〇一・六
三月	一一三・三	一〇四・一
四月	一一五・四	一〇八・三
五月	一一〇・九	一〇三・一
六月	九九・六	九二・四
總平均		

月別	公設市場	市中
七月	一〇七・二	九七・一
八月	一〇三・一	九四・八
九月	一〇一・三	九二・九
十月	九七・六	八九・七
十一月	九八・七	九一・五
十二月	一〇三・一	九三・九
	一〇四・七	九六・三

上水道（昭和十一年末）

配水管延長	米	九六一、三四八
總栓數		一三二、八四一
瀘過水量	立方米	五〇、一六七、五五〇
一日平均水量		一三七、〇七一
配水量		四七、六五三、七一〇
一日平均配水量		一三〇、一〇一
給水人口	人	九二三、九九二

醫療機關（昭和十一年度末）

市立病院	二〇	産婆	一、〇〇八
病院（官立私立）	五〇	看護婦	二、三六九
公益診療機關	一四	醫師	一、三二六

藥劑師　八一五　　齒科醫　四六六

傳染病（昭和十一年度）

	發生數	死亡
腸チフス	七三三	一五四
パラチフス	七五	六
赤痢（含疫痢）	二六七	九〇
猩紅熱	二三四	一二
ヂフテリア	三二四	四三
流行性腦脊髓膜炎	五	五
痘瘡	—	—
計	一、六三七	三一〇

墓地（昭和十一年末）

	坪	
寺院並私有墓地	一一三、四九九	
市有墓地	七一、三五一	
計	一八四、八五〇	

學校統計（昭和十二年四月末日現在）

△小學校

	兒童數	學級數	教員數	學校數
東區	三八、五六四	六六八	七五七	二
西區	三〇、四〇〇	五五六	六二七	二五
中區	四九、七三三	九〇一	一、〇三五	三五
南區	一六四、五二四	七九九	九〇二	二八
計	二、九二四	三、三一一		一二五

△市立幼稚園

	組數	保姆數	園數
一四、五二四	三五	三五	四

△市立中等諸學校

	學生徒數	學級數	職員數	學校數
種別				
高等女學校	二、八四六	五八	一〇八	三
商業學校	二、八五九	六〇	一二三	三
工藝（本科	五一四	三五	四九	一
學校（第二科	一八九	八	—	
商業專修學校	九三	二	一〇	一
工業專修學校	四三〇	一二	三九	一
機械專修學校	二九七	六	一七	一
實業學校	四、一六五	一七	二九	一〇

△高等、專門學校、大學

	教員數	生徒數
名古屋高工	六〇	四九
名古屋高商	六九八	八〇三

青年學校職員數調（昭和十二年三月一日調）

	校數	校長	專任教員	兼任教諭	兼任教諭	助教諭	兼任助教諭	指導員	書記	計
南區	二五	二五	二	三	一	一四	一一〇	二五	二四	二一五

圖書館（昭和十一年末）

	館數	現在圖書	閱覽人員
		冊	人
市立	一	一三八、一〇七	三一〇、〇四三
私立	九	二五、八六八	二七三、八五五

青年團（昭和十二年六月）

聯合青年團　一三團　三一、〇〇〇

青年學校在籍生徒數

（昭和十二年四月末日現在）

	普通科	本科	研究科	專修科	計
南區	二五	一三六	三七九六	一一七九	五二一
西區	二四	四五	三三七五	一二七八	四八六一
中區	三四	九四	五一九七	一九〇三	二九九 七四九二
南區	二七	九四	四三四三	一三六六	七一〇 六五一二
計	一一〇	三六九	一六七一〇	五七三五	一一七三 三五九七六

選舉有權者確定數

（昭和十一年十二月）

		前年比較增
衆議院	一三三、五三一	一三、六二四
縣會	二一二、九九四	三、五三八
市會	二一二、九九四	一四、二六九

史蹟名勝

熱田貝塚　南區熱田旗屋町
櫻田貝塚　南區呼續町櫻田
瑞穗町東牧遺物包含地　南區瑞穗町字東牧
西志賀貝塚　西區西志賀町字貝塚
白鳥古墳　南區熱田白鳥町
斷夫山古墳　南區熱田西町字根山四
八幡山古墳　中區御器所町字北丸屋
名古屋城　西區南外堀町六丁目
末森城址　東區田代町城山
古渡城址　中區下茶屋町、本願寺境內
荒子城址　南區荒子町字大和ヶ池
源賴朝誕生地　南區熱田旗屋町誓願寺境內

西區	三三	一〇	六	一	一〇三
中區	三三	二四	八	四五	一六一
南區	三三	一九	一〇	一八	一三五
計	一〇三	六四	二七	一〇八	五二四

豐臣秀吉誕生地　西區中村町
加藤清正誕生地　西區中村町妙行寺境內
德川家康幽居地　南區熱田羽城町加藤景美氏宅內
德川氏歷代墓　東區筒井町一丁目建中寺
織田信秀墓　中區裏門前町萬松寺
織田信長墓　中區裏門前町一丁目總見寺
平手政秀墓　世區矢場町二ノ切、政秀寺
平岩親吉墓　東區平田町、平田院
成瀨氏歷代墓　中區矢場町
性高院　中區門前町一丁目
陳元贇墓　東區筒井町建中寺境內
田宮如雲墓　中區目出町一丁目
明治天皇駐蹕地　南區熱田東町濱新開
明治天皇行在所　中區下茶屋町、大谷派本願寺別院
裁斷橋址　南區熱田傳馬町四丁目
笠寺一里塚　南區笠寺町字七反田七一
鶴舞公園　中區鶴舞町
志賀公園　西區志賀町
名古屋城二之丸庭園　西區南外堀町一丁目
烏ヶ池庭園　東區飯田町五〇
龍門庭園　中區大池町一ノ五八
大須觀音　中區門前町四丁目
七ッ寺　中區門前町五丁目
小林城址　中區矢場町五ノ切清淨寺內
建中寺　東區筒井町一丁目
長母寺　東區矢田町
覺王山　中區田代町

商工業

△會社（昭和十年末）

	社數	資本金
		千圓
株式	五七四	五三〇、〇九八
合資	二、〇九八	四三、六一七
合名	一、一九三	五六、八九九
合計	三、八六五	六二九、五八五

△銀行（昭和十年末）

	本店	支店	計
特殊銀行	一	三	四
普通銀行	五	五七	六二
貯蓄銀行	一	一九	二〇
計	七	七九	八六

主要工產物（昭和十年）

	製造場數	產額
		圓
綿織物	一七八	九七、八六八、六三二

綿糸	八	五八、三八七、〇九六
陶磁器	二五二	三三、七八〇、四二〇
車輛	二七四	二一、九九六、四二九
毛及其交織物	七五	一七、六四九、九六九
製粉	六	一六、八五七、五四五
毛絲	四	一五、四七九、二七五
菓子	九〇七	一五、三七二、〇〇〇
木製品	一、九二九	一五、〇二六、一七一
履物類	三五三	一一、九一三、九〇〇
莫大小	四五七	七、六九五、七八八
麥酒	一	六、三八六、四七六

工場・勞働者數及生産額（昭和十年末）

工場數 一三、八七八　職工數 一四三、六二五人

生産額 五五五、八九九千圓

外國貿易

△輸出入品價額（單位千圓）

	昭和九年	同十年	同十一年
輸出	一二五、五一五	一三九、四七八	一三一、五〇一
輸入	八八、五二六	九五、五二八	一〇八、七七七
計	二一四、〇四一	二三五、〇〇一	二四〇、二七八

△重要輸出品（昭和十一年）

	數量	價額
綿織物	四五、三一七噸	四三、四三五、一一二圓
陶磁器	四四三、〇一七	三七、二三五、四六四
毛織物	二、九二三	六、一八八、六七五
車輛	三〇、〇五一	五、四二九、六九九
玩具	四〇、二二三	三、八九七、一九六
紡織機	一三、八三九	三、三二四、四二二
ベニヤ板	二三、一一三	三、二一九、七九一
箱板	四五、六五五	二、四九六、〇七五
鐵製品	一五、三〇九	二、一八六、八五〇
毛絲	一、三五八	一、六九七、六三八
人造絹糸	一、九四五	九〇一、七〇五
麥酒	一三、八〇九	八九五、八一八

△重要輸入品（昭和十一年）

	數量	價額
羊毛	六四、七三三噸	四八、四七二、九一七圓
飼料及雜穀	一四五、九六八	九、五九九、五一六
人絹用パルプ	三四、九〇四	七、九二六、八五五
木材	二五一、六〇八	六、七二〇、四一五
石炭	四四二、五六三	五、三五八、九六四
繰綿	四、八七六	三、六七二、五八六
肥料	六一、二三〇	三、六六八、四〇七
採油用種子	二三、五六四	三、三〇二、五七九
小麥	三〇、五三六	三、〇五四、四三一
豆類	二九、六〇八	二、九九一、四七五
鐵類	四六、三三〇	一、八七二、二三九
機械類	一、〇四三	一、六七〇、〇〇一

道路及諸車

△道路延長（昭和十年末）

	國道	府縣道	市道
東區	—	二三、六七五	六二七、三三七
西區	五、二二四	五、九四六	四三四、三〇一
中區	二、九五六	二〇、八〇七	六五九、六〇九
南區	一四、六一五	三七、五五五	一、三〇九、八六五

計 三、一四二、七八〇メートル

△自動車及自轉車（昭和十一年三月末）

乘用	一、一七三	トラック	六六五
自轉車	一二〇、二三四	牛馬車	一、八三〇
荷車	二六、六三〇	自動自轉車	八〇九
人力車	五四	計	一九一、三九五

交通

△入港船舶（昭和十一年）

		汽船	帆船
內國船	隻數	四、二四九	一二八、六七九
	噸數	一三、四七八、七四八	三、三四八、四四八
外國船	隻數	四六八	—
	噸數	三、〇四二、三三〇	—
計	隻數	四、七一七	一二八、六七九
	噸數	一六、五二一、〇七八	三、三四八、四四八

△鐵道乘降人員（昭和十一年度）

	乘車	降車
名古屋驛	四、八五四、九七三	四、七一〇、五四〇
熱田驛	一、三一四、八二六	一、三四三、四五七
千種驛	六一九、六四三	六二七、三八四
大曾根驛	五三三、三一〇	五三一、七七七
八田驛	一八八、九三三	一九九、〇六〇
市內案內所及市內扱所	六九、四六九	—
計	七、五七一、〇六三	七、四二一、一四八

△電車（昭和十一年）

	車輛	乘客乘	乘車料收入
市電	九三、七八六輛	七六、〇七八、八七〇人	四、〇〇一圓
名鐵			
瀬戸電鐵			
計			

△バス（昭和十一年）

	車輛	乘客	收入
市營	一〇五、〇三〇	五三、九〇四、四〇一人	三、〇二二千圓

（各社バス昨年末市營に統一）

市內鎭座神社數（昭和十一年末）

官幣社	縣社	郷社	指定村社	無指定村社	無格社	計
一	五	三	七四	一〇四	八三	二八九

外に無指定郷社一あり。

宗教（昭和十一年末）

	東區	西區	中區	南區	計
寺院數	一三九	九三	一八五	一三四	五五一
僧侶	四二三	一九七	七八〇	一三四	一、五三四
神職	一四	一〇	二五	一九	六八
神道教會	一二	五六	九四	六七	二二八
キリスト教會	二九	二	二	七	四〇
佛教教會	六六	四七	五六	六六	二三五

橫濱市

廣袤（昭和十一年）

方位	地名	距離
極東	鶴見區安善寺二丁目	一五・二三九粁
極西	保土ヶ谷區川島町	
極南	磯子區氷取澤町	二一・四七二
極北	神奈川區北綱島町	

面積（昭和一一・一）

（單位方粁）

總面積	一三三、八七五		
鶴見區	一九、七四二	神奈川區	四四、一一一
中區	三三、四六九	保土ヶ谷區	一八、九七〇
磯子區	一七、五八三		

人口（昭和一〇・一〇・一國勢調査速報）

區別	總數	男	女
鶴見	一一三、九六三	六〇、一一八	五三、八四五
神奈川	一五五、九〇八	八〇、四八〇	七五、四二八
中	三四八、九四一	一七八、六六二	一七〇、二七九
保土ヶ谷	四七、六四二	二三、七四〇	二四、九〇二
磯子	三七、八三六	一八、三六三	一九、四七三
計	七〇四、二九〇	三六〇、三六三	三四三、九二七

歴代市長

氏名	就任年月日	退職年月日
増田知	明治二二・四・一	明治二三・三・四
佐藤喜左衛門	同 二三・三・四	同 二九・三・一
梅田義信	同 二九・六・三	同 三五・九・二〇
市原盛宏	同 三六・一・九	同 三九・五・二
三橋義方	同 三九・九・二八	同 四三・六・二五
荒川義太郎	同 四三・九・一〇	大正 二・一一・一三
安藤謙介	大正 三・七・二四	同 七・七・二三
久保田政周	同 七・八・二七	同 一一・五・二七

渡邊勝三郎	同	一二・一一・三〇	同	一四・四・一〇
有吉忠一	同	一四・五・七	昭和	六・二・二六
大西一郎	昭和	六・三・三	同	一〇・六・
青木周三	同	一〇・七・三〇		現在

宅地賃貸價額（昭和十年）

	最高地名	價額（圓）	最低地名	價額（圓）
鶴見區	鶴見町豐岡五五七	・五〇〇〇	獅子ケ谷町内町一九八	・〇二〇〇
神奈川	青木通一七	一・四〇〇〇	太尾町	・〇三〇〇
中區	伊勢佐木町一丁目一	五・〇〇〇〇	日野町字峯二七四七	・〇八三〇
保土ケ谷	天王町三七九	・三〇〇〇	川島町二四〇	・〇三〇〇
磯子區	磯子町一	・三五〇〇	氷取澤町三八四	・〇三〇〇

財政

	純歳入	純歳出
昭和八年度	三一、六七四、五六九圓	二七、九六二、四四二圓
同九年度	二三、六〇二、二八五	二六、三九二、四〇六
同十年度	二五、六八一、九七二	二六、二九六、五九五
同十一年度	二八、八七八、四二七	二九、六五一、三三三

（備考）十年度十一年度は豫算額なり。

諸税負擔額（昭和十年度）

税種	金額	一戸當	一人當
直接國税	七、三七四、九五四圓	四九、六五〇圓	一〇、四七〇圓
縣税	五、〇一五、八一五	三三、七七〇	七、一二〇
市税	五、八三七、二八二	三九、三〇〇	八、二九〇
計	一八、二三八、〇五二	一二三、七一〇	二五、八八〇

在留外國人數（昭和十年末）

	戸數	男	女	計
イギリス	二四八	二八〇 ×五	三〇三 ×二	五八三 ×七
アメリカ	一五三	一八三 ×二八	一四八 ×一四	三三一 ×四二
ドイツ	九四	一一〇 ×五	九二 ×二	二〇二 ×七
フランス	四三	五四 ×三	四八	一〇二 ×三
瑞西	二九	三〇 ×二	三〇	六〇 ×二
イタリー	一三	一二 ×一	一七	二九 ×一
中華民國	九一〇	二、〇九三 ×四	一、二三七 ×一	三、三三〇 ×五
印度	三三	四〇 ×四	二	四二 ×四
ロシア	六五	七二 ×二	八四 ×二	一五六 ×四
瑞典	二	一三	七	二〇
カナダ	三	一四	七	二一
其他共計	一、六八七	三、〇一三 ×五七	二、〇五三 ×二三	五、〇六六 ×八〇

×印は滯在者にして外書。

横濱港上陸外人數（昭和九年）

北米合衆國	四、一四三	英吉利	二、三三三
獨逸	三一五	佛蘭西	一四〇
蘇聯邦	七二	中華民國	一、〇八〇
和蘭	八〇	印度	四六
比律賓	三一	加奈陀	一八二
滿洲國	五	其他共計	九、〇三九

會社（昭和十年）

業態別	社數	資本金（千圓）	拂込額（千圓）
商業	一、〇一九	二七七、六三九	二一七、九六四

工業	四三一	一二六、一九一	八五、一六一
運輸業	八八	二三、三二九	一八、六五一
鑛業	八	四、五八六	三、五〇〇
農業	九	四、八二一	三、一六一
水産業	一	三	—
計	一、五六六	四二六、五六〇	三二八、四三六

工場（昭和十年）

種類別	工場數	職工數	工産額
紡織工業	一一五	六、二三八	一五、三九〇、七九八
機械工業	一〇七	一六、八七二	一四五、九一五、五〇四
化學工業	六九	三、八二三	八六、七三六、五四四
飲食工業	一〇八	二、八七六	四二、九五二、一二六
金屬工業	四七	五、五六〇	四九、四五四、四二七
窯業	一五	一、四〇一	一〇、四九〇、〇一四
製材及木製品工業	六五	一、二三五	三、九一四、〇八五
印刷及製本工業	四四	六〇五	一、七九二、五一五
瓦斯電氣工業	四	三三三	一三、八八一、九五八
其の他の工業	一三五	一、八六八	三、八八一、九〇九
計	六九九	四〇、七九〇	二七四、四〇六、八八〇

外國貿易

△輸出入價額（單位千圓）

	昭和十年	同十一年
輸出	六一六、〇一七	六七八、三三三
輸入	六二六、二八八	六八七、〇二一
計	一、二四二、三〇五	一、三六五、三五四

△重要輸出品

	昭和十年	同十一年
小麥粉	二七、一七三	一四、一一三
鑵詰食料品	二五、四一〇	二四、一一八
生絲	二八三、七七一	二九六、六〇一
絹織物	三一、六三八	二九、八一七
電球	五、七六四	八、三三〇
玩具	一七、九四六	二〇、二八五
きもの	九、四六七	九、一一〇
人絹織物	一八、二二五	二六、〇四五
綿織物	一〇、二四七	九、一三〇
機械類	三、七六九	一七、七六二
鐵類	一六、一四六	一五、二三二

△重要輸入品

	昭和十年	昭和十一年
小麥	三〇、七八九	二一、九二二
豆類	一八、六五一	二〇、〇九四
原油及重油	四七、七五三	六三、七九八
揮發油	一四、四二四	一九、九四三
生ゴム	一一、九四四	一七、七八一
棉花	五三、二一一	五〇、六三四
羊毛	四〇、七六五	四九、一六九
パルプ	一三、八二一	一六、四四六
石炭	一一、七八六	一三、四一四
銅	一八、二八五	二〇、〇六二
鐵	五九、一〇六	五三、七一〇
自動車及同部分品	二一、三八二	二三、一八九
機械類	四五、七八四	四三、七五〇
木材	一四、六六一	一六、一〇六
硫酸安母尼亞	六、一〇三	一四、九一九
鹽化加里及硫酸加里	一一、三五六	一三、三一〇

（横濱貿易協會交易に據る）

交通

△入港船舶（昭和十年）

	隻數	噸數
入港内國船	一、六三七	九、七九八、一八一
同外國船	一、二四三	九、八七〇、九七七

△電車（昭和十年）

市電	營業線路	四六、四三九粁
	車輛數	二〇〇輛
	乘客數	四三、八二五、九八九
市バス	營業路線亘長	六四・九九粁
	車輛數	一一八
	乘車人員	三、三七九、六〇八

△私設鐵道（昭和十年）

	乘車人員	乘車料金
京濱電鐵	一三、七〇三、五二四人	七四九、七六九圓
東京横濱電鐵	五、五七八、九一四	四八五、九三三
神中鐵道	一、一一四、六六一	七一、三三三

湘南電鐵　二、八二四、三八六
鶴見臨港　四、二四、一六六
△外國航路旅客數
昭和八年　乘客　降客　計
同　九年　六五、一三三　七五、〇一四　一四〇、一三六
△諸車(昭和十年度)
牛馬車　八〇五　大小車　一三、二七五
人力車　三四八　自轉車(乘用一、四八九　荷積用九八六)　自動車(通常七五、七七一　其の他三)
△船舶(昭和十年度)
汽船　船數　一〇三　噸數　四九、〇二九
帆船　二、二三一　三九、九二二
小船　二、一六三　六八二
發動機船　四一七
其の他　五、五九六　八八、九五一
合計

道路及橋梁(昭和十年度)

△道路　米
國道延長　二七、八三四　縣道延長　七四、九一六米
市道延長一、九六四、〇一九　計　二〇六六、七六九
△橋梁
鐵桁橋　一六三
混凝土桁橋　一二六
木鐵混合橋　二
石桁橋　一三
計　六三七
木桁橋　三三三

社會事業(昭和十年度末)

△託兒所　設備數　十七ヶ所
男　女　計
年末現在員　五六五　五六五　一、一五一
受託延人員　一五六、〇三五　一四七、八五五　三〇三、九一〇
△授産施設
就業者數　入所　年末　人員計　四六、八〇一
人員　現員　延人員　二、一五二
△市設職業紹介所(昭和十年度)
求人數　男　女
一般職業紹介　一六、一一〇　一一、九五八　二九六、五〇一
自由勞働紹介　一、五五五　一、一五三　二四三
俸給者紹介　九、七一一　一、〇六四
少年少女相談
求職數　男　女
一般職業紹介　一九、六八七　九、四七一　二九六、五〇一
自由勞働紹介　三〇〇、〇五〇　三六六　九四七
俸給者紹介　一、五五五　五九二
少年少女相談　五、二一三　一、五五二　一、五四九
設備數　三ヶ所
就職數　男　女
一般職業紹介　四、八〇四　三、五七三　三六六
自由勞働紹介　二九六、五〇一　二三〇　三三六
俸給者紹介　五九二
少年少女相談　一、五四九

水道(昭和十年)

△給水戶數　一〇九、五四二
家事營業用　一〇、五四三
官公署　八三二　學校　一〇三
兵營　一　病院　五五
噴水娛樂用　三五　船舶　一九
自動車其他洗滌用　一、八九　撒水用　八九

市會議員

縣會議員　一七　一三四、七九六
市會議員　五六　一三三、八九九　一九・〇

名所舊蹟

△中區內
三溪園(中區本牧町)
弘明寺(中區弘明寺町)
横濱公園、伊勢山皇大神宮。
△鶴見區內
生麥ノ碑、總持寺、花月園、子生山、
諏訪守城址、不動尊。
△神奈川區內
小机城址、浦島寺舊址、綱島桃園及礦泉、熊野神社、本覺寺、豐顯寺、神奈川公園、神奈川行在所舊址、洲崎神社。
△保土ヶ谷區內
御所臺ノ水、岡野公園、保土ヶ谷ゴルフ場。
△磯子區內
杉田梅林、岡村天滿宮。

公私設　共用栓　一、一〇三　一時用　二一　消火栓　四、三三九　立方米　四五、五〇三、〇五三
△給水消費量

醫療機關(昭和十年度)

病院(官・公・私)　五九　醫師　七八
齒科醫　三五五　藥劑師　四五九
產婆　八〇一　看護婦　三、二八四
療屬　一、一五三　製藥營業　三三三
賣藥請賣　一、六二九　賣藥行商　一六三
賣藥部外　一六二　輸移入業者　三三
醫藥用阿片指定販賣人　八
(備考)療屬とは柔道整復術、按摩鍼灸術者を總稱す。

傳染病

	昭和九年		昭和十年	
	發生	死亡	發生	死亡
痢	八八八	二八六	六九六	一六六
腸チフス	三四八	六五	四〇五	九九
パラチフス	二六	三	七八	
痘瘡	二			
發疹チフス				
コレラ				
猩紅熱	五五五	一四	四三三	一六

ヂフテリヤ　七三　流行性腦脊髓膜炎　二、五四二　一九・一
計　五五　八〇三　一　四　一　一九・〇

瓦斯及電氣(昭和十年)

△瓦斯製造量
一日最高　一年間
製造量　七三、一五五　立方米　二一〇、四三三、二四六
送出量　七四、三五五　立方米　二一〇、四三三、二四六
消費石炭　三三　三三〇　噸
△瓦斯供給
供給戶數　五三、三七二　火口數　一〇八、一八五
△電燈及電力
需要戶數　燈數　一ヶ年電燈料
電燈　一四六、二三二　六二六、六五〇　四、五三三、七二〇　圓
(街燈)　七二、六四七　四、四六三、八七〇
電力　八、四〇三　六一、六七八　キロワット　四、五三三、七二〇

選擧有權者(昭和十年十二月末現在)

種別　議員選擧有權者　人口百に對する有權者
衆議院議員　一四四、九〇六　二〇・六

縣會議員　一七　一三四、七九六
市會議員　五六　一三三、八九九　一九・〇

名所舊蹟

△中區內
三溪園(中區本牧町)
弘明寺(中區弘明寺町)
横濱公園、伊勢山皇大神宮。
△鶴見區內
生麥ノ碑、總持寺、花月園、子生山、
諏訪守城址、不動尊。
△神奈川區內
小机城址、浦島寺舊址、綱島桃園及礦泉、熊野神社、本覺寺、豐顯寺、神奈川公園、神奈川行在所舊址、洲崎神社。
△保土ヶ谷區內
御所臺ノ水、岡野公園、保土ヶ谷ゴルフ場。
△磯子區內
杉田梅林、岡村天滿宮。

神戸市

廣表

方位	地名	粁程
極東	石屋川	一四、四七〇米
極西	多井畑北西割谷	
極南	境川口	一三、五〇〇
極北	六甲山頂	

面積（昭和十年一月一日）

灘区	一九・四八〇	平方米	葺合	七・五六〇	平方米
神戸	七・八六〇		湊東	二・〇四〇	
湊	六・九六〇		兵庫	四・〇〇〇	
林田	一〇・二〇〇		須磨	二四・七四〇	
全市	八三・〇六〇				

人口（昭和一〇・一〇・一國勢調査速報）

區別	總數	男	女
灘区	一二八、一八六	六四、三五五	六三、八三一
葺合区	一二四、五五六	五九、四七〇	六五、〇八六
神戸区	八八、一一〇	四六、九八六	四一、一二四
湊東区	六五、七四九	三三、七五二	三二、九九七
湊区	四九、九一九	二五、四九四	二四、四四五
兵庫区	一四五、〇六四	七五、九九〇	六九、〇七四
林田区	二一六、一一三	一一〇、七五七	一〇五、四五六
須磨区	九四、三八二	四六、三五二	四七、八五七
全市	九一二、一七九	四六七、九四五	四四四、二三四

土地高低

最高地名	米	最低地名	米
六甲山	八〇三・三	岩屋（敏馬）	〇・四五
摩耶山西山	九二五・八	新生田川尻	〇・九一
再度山	四六五・二	辨天町海岸	一・二一
大倉山公園	三六・五	東川崎町一丁目	一・〇六
平野谷山頂	三八三・〇	矢部町字十王堂	一六・九七
會下山	七〇・〇	島上町海岸	〇・四五
大日山	二八二・七	野田村海岸	〇・六一
鷹取山	三三八・五	一ノ谷國道	二・四二

土地種別（單位（クタール））

種別	昭和八年	昭和九年	昭和十年
總面積	六、五七九・七八	六、六一〇・九二	六、六七〇・三〇
宅地	一、八七二・四五	一、九八二・一四	二、〇四九・一九
田	五三〇・三四	四九四・七五	四九六・〇五
畑	一五三・七六	一五三・〇七	一五三・〇七
その他	四、〇二三・〇三	三、九七一・三五	三、九七二・四九
計	六、五七九・七八	六、六一〇・九二	六、六七〇・三〇

宅地賃貸價格（昭和九・一・一）

地名	一坪當賃貸價格 圓	一坪當賃貸評定價格 圓
神戸區海岸通一ノ一〇	七五・〇〇	一、二〇〇・〇〇
兵庫區大開通	四・三六	六二・〇〇
須磨區西代字鷹取一ノ五	〇・一四	二・二四

校園總覽（昭和十年四月末現在）

學校種別	學校	教員	學生生徒及兒童
幼稚園	市立	七	五〇
	私立	三七	一一九
小學校	市立	六四	一、〇二〇
	私立	三	二、四〇六
市立尋常夜學校		九	一六
中學校	縣立	一〇	五〇
	市立	七	三八
	私立	一六	二〇七
私立各種學校		三四	四四六
大學專門學校		三七	七、八四二
青年訓練所（市立）		二	一一七
青年學校（私立）		三四	一一九
計		六	八三
		二四三	一、〇九五
			一六五、四二九

圖書館（昭和十年度）

閲覧圖書	和漢書	洋書	計
	三六四、五三五	三、四五一	三六七、九八四
備付圖書數（昭和一一年七月現在）			七九、七八一
開館日數			三三五
閲覧人員（男）			二〇一、五五七
		（女）	一二、六六七

（備考）本市には市立一あるのみ。

上水道消費量（昭和十年度）

給水戸數		一六七、五七六
總消費量	立方米	五二、八〇三、二八〇
一日平均	立方米	一四四、六六六・八

昭和八年消費量細別

	立方米		立方米
家事專用	一二、一七四、〇六四	共用	九、四二三、九二八
工場	六、一三三、六七六	營業	七、六四五、三二一
湯屋	五、五二九、一三九	噴水	一一七、九四九
船舶	四四一、三六九	市用	三四一、三八三
計			四七、四三二、七七〇

醫療機關

	昭和八
病院	八五
醫師	八二四
齒科醫師	三三二
藥劑師	七八二
産婆	一、〇一六
看護婦	三、二三七

神戸港上陸外人數（昭和十年）

北米合衆國	三一九	英吉利	四三八
獨逸	一	佛蘭西	四二五
中華民國	三、八四七	和蘭	八、六四四
佛蘭西	六八	白耳義	五二四
瑞西	八七	伊太利	八三
和蘭	五一	丁抹	一
白耳義	一七	瑞典	二七
伊太利	一八	葡萄牙	一四
西班牙	一六	瑞西	七
葡萄牙	八四	諾威	一二三
瑞典	一七	其他の歐洲人	四〇
其他の歐洲人	七四	計	二、九八八

在留外國人

	昭和八	同九	同一〇
總數	五、七一一	七、四九〇	九、一四七
英吉利	五〇四	七一四	八〇九
英領印度	二三一	二七二	三五三
濠洲	二七	四七	三〇
加奈陀	六一	八三	七四
エヂプト	一〇	二七	一六

歷代市長

氏名	就職年月日	退職年月日
鳴瀧幸恭	明治三三・五・二一	明治三四・五・二〇

坪野平太郎	同	三四・五・二九	同	三八・三・一七	水上 浩躬	同	三八・九・一七
同	四三・二・二八	大正 九・三・一三	櫻井鐵太郎	大正 九・一〇・一八	同	一一・五・二七	
石橋爲之助	同	一一・二・二三	同	一四・六・三	黒瀬 弘志	同	一四・八・一七
昭和 八・八・一六	勝田銀次郎	昭和 八・一二・二〇	現	在			

財政

年度	純歳入	純歳出
昭和六年度(決算)	三九、九九三、三四〇圓	四六、八九七、五八八圓
同 七年度(同)	四〇、三六二、九二〇	四一、五六六、三一六
同 八年度(同)	四四、三五〇、六四七	四二、六五二、七六五
同 九年度(同)	四七、八五九、六〇五	四四、四三六、八五八
同 十年度(豫算)	五三、四二一、一七三	五三、九三八、五七九
同十一年度(同)	五三、九〇三、三九六	五六、一七四、八七四

社寺・教會(昭和十年度)

神社總數一〇〇にして官幣社二、別格官幣社一、縣社三、鄉社四、村社五九、無格社三一である。寺院は總數一五五、眞宗最多にして四一、次は淨土二九、臨濟二七、日蓮宗一七、眞言宗一八等である。

神道教會總數三九五、天理教二三一、金光教三一、神道、扶桑何れも三〇の順序である。基督教會堂五六。

銀行(金額單位百萬圓)

種別	昭和八	昭和九	昭和十
總數	一六	一六	一六
本店	二	二	二
支店	一四	一四	一四
預金高	三七七	四三一	四三二
諸貸金高	二五五	二九一	三二一

會社(昭和九年末)

組織別	社數	公稱資本金又は出資額	積立金	社債額
株式會社	六八九	六九七、七二〇 千圓	七八、一七四 千圓	八八、〇八〇 千圓
合資會社	一、六四〇	五〇、九四一	六、〇〇五	—
合名會社	七五三	三二、三五八	二、八九九	—
計	三、〇八二	七八〇、八三〇	八七、〇七九	八八、〇八〇

會社營業別(和昭九年末)

	總數	株式	合資	合名
農業	二	二	—	—
水產業	七	七	—	—
鑛業	一	一	—	—
工業	六五一	一六七	三五六	一三八
商業	二、〇八一	三七二	一、一〇八	六〇一
運輸業	三三八	一三五	一七一	三一
總數	三、〇八三	六八九	一、六四〇	七五三

工場

	昭和九年	昭和十年
工場數	八九九	八四六
職員	五、八八八	—
職工	六二、〇二三	六、七〇〇
生産額	三六七、三七九、三二五圓	四三五、〇〇〇、〇〇〇圓

外國貿易(單位千圓)

	昭和九年	同十年	同十一年
輸出	七九〇、六〇一	八一〇、八九九	九七〇、七八四
輸入	七九一、五四四	八二一、六四一	九五八、三三〇
計	一、四八二、一四五	一、七三二、五四〇	一、九二九、〇〇四

電燈電力

		昭和九年	昭和十年
電燈(需用戸數)	數	八三六、一七六	一、一八三、八六一
	數	一七八、七三七	一八一、三〇七
電力(キロワット數)需用戸數		八九、三二一	九八、七三三
		七、三〇八	七、六七七

供給電力量	三一、一〇六、〇三〇	三九三、一三七、六七八					
料金收入	三八〇、〇八一、二七六	一三、六〇二、三三八					

瓦斯

	昭和八年	昭和九年	昭和十年
戸數	七六、九七〇	一三三、四四八	—
燈燃料孔口數	二四四、九七一	—	—
機關(臺數)	二六	—	—
(馬力數)	一、七一二	—	—
瓦斯代	四、〇三三、三二六圓	四、三七七、四七一圓	—

乘降船客總數

	昭和八年	昭和九年	昭和十年
内航	八二、四六四	八六八、七二六	八五〇、三四三
外航	三〇一、七〇九	三三〇、三四一	二一七、九二三
總數	一、〇三三、一七三	一、〇九九、〇六七	一、〇六八、二六五
一日平均	二、七七六	二、九八四	二、九二七

自動車・自轉車(各三月末)

		昭和八	昭和九	昭和一〇
總數		一、五八四	一、五九八	二、三三三
自動車	乘用(自家用)	二六四	二七五	—
	乘用(營業用)	八五五	八八	—
	荷積用	三九〇	四二八	—
	其の他	六五	六七	—

自動自轉車

自轉車	七二、六〇六 七四、〇三〇 六二、九八八
	八六二 九八九 一、五七二

市營電車成績

	昭和九年	昭和十年
運轉車輛	九六、三七〇	九六、三七〇
乘客數	八〇、四一〇、一〇三 千圓	八八、八三四、〇〇九 千圓
乘車券發賣 乘客	四、四五五、八二三圓	四、八七九、八五三圓
乘車券發賣	二三〇、三二九	二四三、三五三
一日平均(乘客)	一三、二三〇	一三、三六九圓
一日平均(乘車券發賣)	一二、二三〇	一三、二三九

諸稅負擔一戸當平均(單位圓)

	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年
直接國稅	四一・九四	四六・七五	五一・一三	九五、一〇一圓
市稅	四七・〇二	五四・〇〇	五七・四五	八八、八三四、〇〇九圓
計	八八・九六	一〇〇・七五	一〇八・五七	四、八七九、八五三圓
				二四三、三五三圓
				一三、三六九圓

市債(單位圓)

	昭和九年度	昭和十年度
起債額	四〇、九六七、二〇〇	四〇、九六七、二〇〇
償還度	七、九八〇、八五八	七、九八〇、八五八
支拂利子	四、四九〇、九七四	四、四九〇、九七四
取扱費	未償還額 一〇七、二七三、九三八	一〇六、九六四、七〇〇
	一戸平均 五五四	五四〇
	一人平均 一二六	一二七

選擧有權者(昭和十一年)

區名	衆議院	縣會	市會
灘	二一、一九二	二五、八一八	二〇、〇三六
葺合	二二、八〇六	二五、六〇五	二三、〇二三
神戸	一三、〇八八	一四、一五九	一三、四三三
湊東	一二、九三三	一三、九〇一	一三、〇六四
湊	九、六三〇	一〇、七七一	九、四一三
兵庫	二八、六一七	三〇、八五四	二八、四五三
林田	四〇、〇二九	四四、四四四	三九、三五ノ
須磨	一七、〇九三	一九、八八〇	一六、二八九
全市	一六四、三九一	一八四、四三三	一六一、九五一

市會は昭和八年四月、衆議院は昭和十年

公園

名稱	位置	開設年月	總坪數
東遊園	加納町六丁目	明治八・	二三、一八九坪
大倉山公園	楠町七丁目	四四・四	一九、四一二
湊川公園	舊湊川埋立地	四四・一	一一〇、九二四
諏訪山遊園	山本通四丁目	三六・九	二、五〇九
會下山遊園	會下山町二丁目	四三・一	一三五、二五〇

外地

外地の法制

◎朝鮮に施行すべき法令に關する法律
（明治四十四年 法律第三十條）

第一條　朝鮮に於ては法律を要する事項は朝鮮總督の命令を以て之を規定することを得

第二條　前條の命令は內閣總理大臣を經て勅裁を請ふべし

第三條　臨時緊急を要する場合に於て朝鮮總督は直ちに第一條の命令を發することを得

前項の命令は發布後直に勅裁を請ふべし若し勅裁を得ざるときは朝鮮總督は直に其の命令の將來に向て效力なきことを公布すべし

第四條　法律の全部又は一部を朝鮮に施行するを要するものは勅令を以て之を定む

第五條　第一條の命令は第四條に依り朝鮮に施行したる法律及特に朝鮮に施行する目的を以て制定したる法律及勅令に違背することを得ず

◎臺灣に施行すべき法令は制令と稱す
第六條　第一條の命令は制令と稱す

◎臺灣に施行すべき法令に關する法律
（大正十年 法律第三號）

第一條　法律の全部又は一部を臺灣に施行するを要するものは勅令を以て定む

前項の場合に於て官廳又は公署の職權、法律上の期間其の他の事項に關し臺灣特殊の事情に因り特例を設くる必要あるものに付ては勅令を以て別段の規定を爲すことを得

第二條　臺灣に於て法律を要する事項にして施行すべき法律なきもの又は前條の規定に依り難きものに關しては臺灣特殊の事情に因り必要ある場合に限り臺灣總督の命令を以て之を規定することを得

第三條　前條の命令は主務大臣を經て勅裁を請ふべし

第四條　臨時緊急を要する場合に於て臺灣總督は前條の規定に依らず直に第二條の命令を發することを得（以下略）

◎樺太に施行すべき法令に關する法律
（明治四十年 法律第二十五號）

法律の全部又は一部を樺太に施行するを要するものは勅令を以て之を定む但し左の事項に關しては勅令を以て特別の規定を設くることを得

一、土人に關すること
二、行政官廳又は公署の職權に關すること
三、法律上の期間に關すること
四、裁判所又は裁判長が職權を以て選任し又は選定する辯護人、訴訟代理人又は訴訟承繼人に關すること

氣候・風土

外地に於ける氣候風土を一瞥する

朝鮮は大陸續きのため北方部は概して大陸性氣候で寒暖の差が甚しく、從つて冬期の寒氣は極めて嚴しく、又夏期は內地に比して更に高溫である。熱し南方經は內地と同樣で氣候は一般に溫和である。

臺灣は北回歸線が島の中央部を橫斷して居るので當然亞熱帶に屬し、從つて冬でも高山の外は降雪なく結霜することも極めて稀に、氣溫の氷點下に降つたことは領臺後僅か二回を數ふるに過ぎない。

樺太は沿岸を寒暖二種の海流に洗はれ、近くアジア大陸の影響をも受けてゐる。卽ち暖流に洗はるゝ南西沿岸部は比較的溫暖であり、寒流の影響を受くる北東海岸は寒冷であり、中部は山脈に圍まれて大陸的氣候を呈し寒暑の差が甚しい。

關東州は遼東半島の尖端に位し東は黃海に西は渤海に瀕し、鐵道附屬地は大連、新京間、安東、奉天間、旅順線、營口線の鐵道用地及市街地である。滿洲の氣象は沿海一帶の地に於て多少海洋の影響を受けるも概して大陸的氣候の特色を現はし、冬期に於ては比較的溫暖なる關東州附近においても零下二十度前後に下ることがある。

南洋群島は全管內悉く熱帶圈內にありて四季の別なく、謂はゆる常夏の國である。

住民

朝鮮の住民は朝鮮人に次いで內地人多數を占め、外國人は昭和九年末（以下同じ）において五萬餘、臺灣人は僅かに六名を算するのみである。

臺灣は本島人に次いで內地人、中華民國人、朝鮮人、中華民國以外の外國人といふ順位で、本島人は更に漢人種平埔族、高砂族とより成り更に漢人種も福建族、廣東族に大別され本島住民中の九割四分餘を占めてゐる。蕃族は本島內に於ける最も古い種族で生蕃、化蕃と熟蕃の三種とし、その生蕃と化蕃を通じて更に七種族に分類せられる。タイヤル族、サイセツト族、ツオウ族、プヌン族、パイワン族、アミ族、ヤミ族のそれである。

樺太は內地人、朝鮮人、土着人、外國人の順序で、土着人の主なるものはアイヌ人これに次いでオロツコ、ニクブン、キーリン、サンダー、ヤクーツでヤクーツの如き僅かに三名に過ぎない。

關東州及附屬地は滿洲人、內地人、朝鮮人及び其他の外國人。

南洋は島民、內地人、外國人、である。また島民は人種學上總稱してミクロネシア族と呼ばるゝものが最も多きを占めてゐるが一定はしてゐない。寧ろ數種族の混血せるものであるらしく、而かも同一群島內に在る島嶼にして猶種族の異るほど複雜したものである。大別すればカナカ族とチヤモロ族の二種族で、カナカはミクロネシア族の一部、チヤモロはカナカ族と白人との混血であるらしいとはれてゐる。

面積
（單位方粁）

朝鮮	二二〇、七六八・六五
樺太	三六、〇九九・七七
南洋	二、一四八・八〇
臺灣	三五、九六一・二一
關東州	三、七五七・四七
臺灣	三八二、五四五・四三

現在人口
（昭和十年末）

	人口	男	女
朝鮮	二四、一四二、九七六	一一、二一六、一二四	一〇、七七五、〇三六
臺灣	九二四、六六九	二、七一四、八九六	二、六〇〇、七四六
樺太（關東州及附屬地）	六二、四三三	一七六、五七一	一四五、九〇四
	二七七、二五九	九六四、〇九九	六五七、一六七
南洋	三二、五五八	五七、三三三	四五、二〇四

（國勢調查速報に依る）

現住人口種別
（昭和十年）

	本地人	內地人	其他の本邦人	外國人
朝鮮	二、二四八、八六四	五八三、四一七	一一	五八、八八三
臺灣	四、九九〇、一三一	二六九、七九八	一、六〇四	五四、一〇九
樺太	一、九五五	三一三、一一五	七、〇五二	三五二
關東州	一、二三三、八九九	三五〇、三五七	三四、六六六	二、四四四
南洋（備考）	五〇、五七三	五一、三〇九	五五二	一〇三

關東州は鐵道附屬地を含む

婚姻及離婚數
（昭和十年）

	婚姻	離婚
朝鮮	一三、四一六	五、三三五

臺灣	四六、二七九	三、八五一	
樺太			
關東州	六、一七〇	一六五	
附屬地	一、四二一	三五六	
南洋			

極南　高雄州七星岩南端　北緯　二一・四五
極北　基隆市彭佳嶼北端　同　二五・三八

本島の地勢、氣候

地形は東西に狹く南北に長い、東海岸は屈曲少く、中央部は山脈南北に縱走しその西方に分岐するはシルビヤ山脈、水社山脈、新高山系、東部海岸山脈、北端近く大屯火山系の、約三分の二は山岳地帶である。然かも之等山脈中に海岸山脈ありて、全島總面積の、約三分の一は三千三十米以上の高山が四十八座ある。斯く南北を貫通する山脈により地勢自ら東西に分れ、西部は平野を成して濁水溪、下淡水溪、大甲溪その間を貫流して本島主要產業を爲す農產物を豐富に產出する。氣溫は亞熱帶で氷點以下に降ること稀なる爲め、四季草花の絕え間なく常綠の美觀を呈して居る。

出生、死亡數（昭和十年）

	出生	死亡
朝鮮	六四〇、五六八	四三〇、六九八
臺灣	三三五、九四五	一〇六、九〇五
樺太	一二、〇五九	五、〇四七
關東州	三八、一八六	二五、〇〇七
附屬地	三、八七六	一、七八三
南洋		

臺灣

位置

方位	地名	經緯度	分
極東	基隆市棉花嶼東端	東經 一二〇	〇六
極西	澎湖廳花嶼西端	同 二一九	一八

面積（方粁）

臺北州	四、五九四・二四	新竹州	四、五七〇・〇一
臺中州	七、三六二・九四	臺南州	五、四三一・四六
臺東廳	三、五一五・二五	高雄州	五、七二一・八七
澎湖廳	一二六・八六	花蓮港廳	四、六二八・五七

總數　三五、九六一・二一

備考　昭和十年拓務統計による。

人口（昭和十年末）

	總數	男	女
本島人	四、九九〇、一三一	二、四五二、六八八	二、五三七、四四三
內地人	二六九、八四八	一四一、七六五	一二八、〇八三
其他の本邦人	一、六〇四	五八三	一、〇二一
外國人	五四、一〇九	三五、八五〇	一八、二五九

國語を解する本島人

年	總數	男	女
明治三八	一一、二七〇	一〇、八〇一	四六九
大正 四	五四、三三七	五〇、一四三	四、一九四
同 九	九九、〇六五	八七、八九七	一一、一六八
昭和 五	三六五、四二七	二九四、六七七	七〇、七五〇

本表は大正四年迄は戶口調査、同九年以後は國勢調査の結果で、何れも十月一日現在である。

世帶人口（昭和十年十月一日國勢調査速報）

州廳別	世帶合計	男	女
臺北州	三六二、八四一	一、七四〇、一四一	六八五、九〇〇
臺中州	三六一、〇四一	一、一八五、三三一	六〇二、八〇〇
臺南州	三五二、一八二	一、〇五二、三二七	五四五、八三五
臺東廳	一二、九五四	七〇、一四三	三六、二七三
澎湖廳	一一、一三	六七、六〇一	三二、四五五
總計	八九八、六四五	五、三二五、六四二	二、七四、八九六
高雄州	一三〇、八三四	七四二、六八二	三七九、八四一
新竹州	一一一、八八八	七三四、二七二	三七、九三五
花蓮港廳	三三、一六一	二一一、七四五	一五、八四一

歷代臺灣總督

總督	就任年月日
樺山 資紀	明治二十八年五月 十日
桂 太郎	同 二十九年六月 二日
乃木 希典	同 二十九年十月 十四日
兒玉源太郎	同 三十一年二月二十六日
佐久間佐馬太	同 三十九年四月 十一日
安東 貞美	大正 四年五月 一日
明石元二郎	同 七年六月 六日
田 健治郎	同 八年十月二十九日
內田 嘉吉	同 十二年九月 六日
伊澤多喜男	同 十三年九月 一日
上山滿之進	同 十五年七月 十六日
川村 竹治	昭和 三年六月 十六日
石塚 英藏	同 四年七月 三十日
太田 政弘	同 六年一月 十六日
南 弘	同 七年三月 二日
中川 健藏	同 七年五月二十七日
小林 躋造	同 十一年九月 二日

總督府文官人員（昭和十年末）

勅任	五三	奏任	八五〇
判任	五、四三三	囑託	一六二
雇	八、八一一	傭	—

歲入歲出（單位圓）

△歲入之部　昭和十年度

	豫算
經常部	一一三、四〇七、八三四
臨時部	三三、一四一、五三五
總計	一五六、五四九、三六七

△歲出之部

	現計
經常部	一六三、一四〇、三五四
臨時部	一五、一四三、五三五
總計	一七九、一八三、八八九

國稅總覽（單位圓）

	國稅總額	內國稅	關稅、噸稅
昭和九年	一九、三三七、九七二	一六、七八、二四二	二、六一九、七二一
昭和十年	二三、八八七、七四二	二〇、二三五、八八八	二、六〇三、三五四

家畜及家禽

昭和八年末　同九年末

	八年末	九年末
牛	三八六、二七〇	三九四、八六五
山羊	八七、〇二九	八三、六九九
豚	一、八〇六、四八九	一、八三八、一六九
鷄	五、七四六、五一四	六、一九八、六九三
鴛鴦	三一九、六〇六	三三六、四五三
鷲	一、四九六、一六五	一、六一六、八〇七
七面鳥	一二、二一九	一五、一四四

昭和十年分は非公表扱に付き省略

田畑面積（單位甲）

昭和五年末	總數	田	畑
	八三七、三〇二	四〇八、九七二	四二八、三三〇
同 六年末	八三五、四〇六	四一一、〇七三	四二四、三三二
同 七年末	八三九、七三〇	四三五、四六六	四〇〇、二六四
同 八年末	八四五、四七九	四五〇、四五五	三九四、九九五
同 九年末	八五一、三三四	四六二、九一四	三八八、四一〇
	八五六、七六二	四九三、五二七	三六三、二三五

（註）一甲は九段七畝二十四歩

林野面積（昭和十年）

國有	森林 一、七六〇、二〇二	公有	森林 二、九八五
	原野 五二八、八八二		原野 三、八一

水産製鹽

（十年年度數量は非公表扱に付省略）

	從業者	鹽田	數量
		町	瓲
昭和五年	一、八八二	一、八九〇・〇	一、四七三、三〇〇
六年	一、八四八	一、八四八・〇	一、四四四、四四〇
七年	一、八二一	一、八二一・〇	一、四二四、四六〇
八年	一、八三一	一、八三一・〇	一、四三二、九八〇
九年	一、八一〇	一、八一〇・〇	一、四一四、九七〇
十年	一、八一〇	一、八一〇・〇	一、四一四、九七〇

林産

數量及價額

	數量 立方米	價額 圓
昭和九年	三、九七〇、七六四	四、三五八、七三四
昭和十年	三、八六二、〇九四	四、〇五〇、七三四

總其他木材價額

	竹	木炭	薪	材
	千本	瓲	瓲	瓲
昭和九年	一、八四〇、三五〇	六四〇、七三二	四五四、七三二	一、八四〇、三五〇
昭和十年	一、八四〇、三五〇	六四〇、七三二	四五四、七三二	一、八四〇、三五〇

農業生產總價額

	計	原森林	外地——臺灣 計	原森林
昭和九年	四九、三五七	一、九九、四五八		
昭和十年	四九、三五七	一、九九、四五八		

畜產園藝特產物價額

	畜產	園藝作物	特產物	普通作物
	瓲	瓲	瓲	瓲
昭和九年	三、七九〇、三五九	三、四四〇、〇九二	一八八、七〇一	一九、八四三
昭和十年	三、八六二、〇四〇	三、四四〇、〇九二	一八八、七〇一	一九、八四三

果實收穫高

	茶（粗製）（千斤）	梨（千斤）	蕉（千斤）	芭蕉
昭和九年	一、八三一、〇三六	八五、四六七	三〇二、四八	
昭和十年	一、七八〇、〇三六	八七、一一九	三〇二、四八	

鑛產額

（單位圓）

	金	銀	金銅鑛	金銀鑛（浚渫物）	金銅鑛（浚渫物）
昭和八年	一、七八一、三六	一、七四二	三、七七、四二四	三、四四、五三六	三、四四、五三六
同九年	一、六六二、三四	一、八〇〇	三、四九、四三三	三、四四、五三六	三、四四、五三六
同十年	一、六四〇、〇四三	一、八三四	三、四八、八七七	三、四四、五三六	三、四四、五三六

養殖漁獲物別

	漁獲物	養殖物
	瓲	瓲
昭和七	一、一三、三五一	三、一三四
同八	一、〇八、七九一	三、一三四
同九	一、一四三、一二一	二、八九〇
同十	一、一二〇、一四三	三、四八四

工業（昭和十年）

	工場數	職工數	工產額
共其他ラヂウム鑛			
天然瓦斯			
原油發揮			
硫黃			
石炭			
沈澱砂金			
計	一、〇〇二	一、四一四	四、〇五〇、七三四
銀行及金融業	一、一二三	一、一二三	一、一二三、四五六
運輸業	一、一二三	一、一二三	一、一二三、四五六
商業	一、一二三	一、一二三	一、一二三、四五六
工業	一、一二三	一、一二三	一、一二三、四五六
電氣瓦斯業			
印刷業			
食料品製造業			
化學工業			
窯業			
機械器具工業			
金屬製品工業			
紡織業			

貿易（單位千圓）

（工場、職工數非公表に付き省略）

	合計	其他の及瓦斯工業	電氣業
工場數	一、〇三七		
職工數	六、九五四		
工產額	四九、三五七		

△移出入品價額

	移出	移入	計	出超
同七昭和八年	二九、〇四五	四四、九八五	七四、〇三〇	一四、九四〇
同八年	三三、六三一	四四、九八五	七八、六一六	一一、三五四
同九年	三六、〇六九	四五、〇六六	八一、一三五	九、〇〇三
同十年	三六、〇六九	四五、〇六六	八一、一三五	九、〇〇三

△輸出入品價額

	輸出	輸入	計	入超
同七昭和八年	一八、四五一	三、〇四一	二一、四九二	一五、四一〇
同八年	一八、四五一	四、九六〇	二三、四一一	一三、四九一
同九年	一八、四五一	四、九六〇	二三、四一一	一三、四九一
同十年	一八、四五一	四、九六〇	二三、四一一	一三、四九一

社會

私立學校數

	公稱資本 千圓	拂込 千圓
昭和十年末	二、四五一、四三四	二、三五九、四四四

公私立學校數

	大學	高等師範學校	高等商業學校	高等工業學校	高等農林學校	高等醫學校	高等盲啞學校	高等音樂學校	高等美術學校	臨時教員養成所	臨時教員養成所講習科	臨時教員養成所附屬小學校	臨時教員養成所附屬幼稚園	公學校	小學校	幼稚園
	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	校	園
昭和八年	一	一	一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一〇四	一、〇三二	一
同九年	一	一	一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一〇四	一、〇三二	一
同十年	一	一	一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一〇四	一、〇三二	一

在學人員

	大學	高等師範學校	高等商業學校	高等工業學校	高等農林學校	高等醫學校	高等盲啞學校	高等音樂學校	高等美術學校	臨時教員養成所	臨時教員養成所講習科	臨時教員養成所附屬小學校	臨時教員養成所附屬幼稚園	公學校	小學校	幼稚園
	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
昭和八年	三、七一一	一、〇四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一
同九年	三、七一一	一、〇四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一
同十年	三、七一一	一、〇四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一	一、一四一

教育（昭和十年度末）

	學校數	教員數	生徒數
同十一年	三、一四一	一〇一、一一一	四五、六三一
同十年	三、一四一	一〇一、一一一	四五、六三一
同九年	三、一四一	一〇一、一一一	四五、六三一

茶（昭和十年）

	數量	價額
	瓲	瓲
綠茶	一、三〇〇、〇三一	三、三八、三三一
紅茶	一、四〇、〇六一	三、〇六、〇六一
包種茶	一、〇〇	三、〇〇
烏龍茶	一、三〇〇	三、三〇〇
計	一、四〇〇	三、三〇〇

國有鐵道

收入輸送數量

	手貨旅總小荷物	手貨旅總小荷物客數	停車場	營業	種別	數量 粁
昭和九年	三、七一一、三五六	四、九九、七九一	三三	一、八		
同十年	三、七一一、三五六	四、九九、七九一	三三	一、八		
昭和十一年	三、七一一、三五六	四、九九、七九一	三三	一、八		

地方鐵道

種別		昭和九年	昭和十年
營業粁		二、三四一	二、三七一
		*一、八三一	*一、八六六
運輸數量	旅客（人）	三、一八九、二八五	三、八七一、八六二
	手小荷物（瓩）	—	—
	貨物（瓲）	三、七五四、三五四	四、四一七、九六三
		△二、九七五、九二〇	△七八九、七〇四
運輸收入	總數	二、一二一、八三三	二、八四〇、〇〇八
	旅客	四三九、三一二	四〇七、七五〇
	手小荷物	八、一二六	九、九五六
	郵便物	四、一五七	三、八五四
	貨物	一、六四三、三七八	二、二六二、一九五
	雜收入	*一、〇二一、三六九	三六、二五二

（本表中、*印數字は專用線、社用品にして再揭なり）

醫療機關

		昭和九年	昭和十年
病院	官	一四	一五
	公私計	一八一	一八一
		二一六	二二五
醫師		一、三九〇	一、五一八
限地開業醫		一九	一五六
生醫		二五六	二三三

齒科醫師		二八九	三三六
藥劑師		一五二	一五八
產婆		一、六三一	一、六六一
看護婦		六八	六八
藥種商		二、七二三	二、五一四
製藥者		三三	二一

神社及神職數（昭和十年）

總數	官幣社	縣社	無格社	社
二六	二	九	一七	一〇五
神社				
神職	三三	九	一〇	—

宗教別信徒數（昭和十年）

神道	布教所	七八	
	布教者	一四〇	二七、五六四
佛教（寺除五六）		二一	二三五	一六四、五〇三
基督教		二五九	二七一	五六、四六二

主要都市人口（昭和十年）

臺北市	二六七、八四六	臺南市	一二三、四二
基隆市	八七、四〇〇	高雄市	八六、八四八
嘉義市	七三、一八〇	臺中市	七一、七四二
新竹市	五三、四六九	彰化市	五三、六三三
屏東市	四三、九九七		

傳染病

	昭和九年			昭和十年		
	患者	死亡	死亡率	患者	死亡	死亡率
總數	二、九四五	六六五	三三・六	二、九七九	六八一	三三・九
コレラ	—	—	—	—	—	—
赤痢	二八	三六	一八・五	二五三	四七	一八・六
腸チフス	一、一六二	三〇一	二五・九	一、四五〇	三八	三三・六
パラチフス	三八	八	二一・一	五五	七	一三・七
流行性腦脊髓膜炎	二七二	一六七	六一・四	二七三	一六二	四五・七
痘瘡	五	—	—	二	一	五〇・〇
發疹チフス	—	—	—	—	—	—
猩紅熱	四八	二	四・一	三七	二	四・八
ヂフテリア	八三	二四	一六・九	七二〇	一二五	一七・三
アメーバー赤痢	—	—	—	—	—	—
再歸熱	—	—	—	—	—	—
嗜眠性腦炎	—	—	—	—	—	—

距離（基隆基點の直航浬程）

那覇	三三四	鹿兒島	六四一
長崎	六三三	門司	七三九
神戸（門司經由）	九八二	横濱	一、一五七
釜山	七一五	大連	八五〇
福州	一五一	廈門	三二六
汕頭	三一八	上海	四一八
香港	四七九	麻尼剌	七七四

海防（香港經由）	九六一	香港	一、三〇〇
盤谷	一、二〇〇	新嘉坡	一、八三四

州制施行

臺灣總督府令第五十七號を以て昭和十年律令第一號臺灣州制は昭和十一年十月一日より施行さるゝことゝなつた。州會議員の定數は左の通りである。

臺北州	三六人
臺中州	三二人
高雄州	二六人
新竹州	二二人
臺南州	三六人
計	一五二人

人口累年比較

	戸數	總數	男	女
昭和六年	三、八三一、一七九	一〇、二六七、九五八	一〇、三二一、四二七	九、九四一、五三一
七年	三、九一三、一三	一〇、三五九、八七六	一〇、四八二、八四一	一〇、一七〇、〇三五
八年	三、九五二、〇四九	一〇、七一一、三三一	一〇、三八一、五四一	一〇、三〇九、七九〇
九年	四、〇一〇、六〇六	一一、一三五、八二七	一〇、七四四、四三九	一〇、三八一、三八八
十年	四、一四二、九七六	一一、八九一、一八〇	一一、一六一、一四四	一〇、七七五、〇三六
	×四、二九七、八〇三	三、八九八、六九五	二、一六六二、六四〇	二、三六、〇三五

（備考）×印は國勢調査概數。　國勢調査分の戸數欄は世帶數

現住人口

外地——朝鮮

朝鮮

位置

方位	地名	經緯度
極東	鬱陵島竹島	東經一三〇・五六
極西	平安北道鞍島西端	同 一二四・一
極南	濟州島馬羅島	北緯 三三・〇六
極北	咸鏡北道北浦面	同 四三・〇〇

道行政區劃（昭和十年末）

道	面積方粁	府	郡島	邑面
京畿道	一二、八一四・三四	三	二〇	二四四
忠清北道	七、四一八・三八	一	一〇	一〇六
忠清南道	八、一〇六・四八	一	一四	一七四
全羅北道	八、五五三・二七	二	一四	一七六
全羅南道	一三、八八七・三七	二	二一	二五三
慶尙北道	一八、九八八・八三	一	二三	二五五
慶尙南道	一二、三〇四・五八	二	二九	二四六
黃海道	一六、七五七・六六	一	一七	二三一
平安南道	一四、九二五・二八	一	一四	一四三
平安北道	二八、四四四・五〇	一	一九	一七八
江原道	二六、二六二・九九	—	二一	一七五
咸鏡南道	三一、九七八・四七	二	一六	一四〇
咸鏡北道	三〇、三四六・五〇	一	一一	八一
總計	二三〇、七六八・六五	一七	二八	三九〇

人口累年比較

	戸數	人口	戸數	人口
	昭和九年		昭和十年	
內地人	一四一、四一七	五六一、三七八	一四四、八一五	五八三、四二八
朝鮮人	三、八五七、一六九	二〇、五一三、八〇四	三、九八四、七七二	二一、二四八、八六四
滿洲國及中國人	—	—	—	五七、六三九
外國人	—	—	四八一	一、二四九
合計	四、一四二、九七六	二一、八九一、一八〇	四、一三二、九七六	二一、八九一、一八〇

（備考）內地人の中には昭和九年度戸數一、人口六同十年度戸數一、人口一一の臺灣人を含む。

昭和十年朝鮮國勢調査

世帶人口概數

	世帶數	人口總數	男	女
全鮮	四、二九七、八〇三	二二、八九九、〇三八	一一、六六二、六四〇	一一、二三六、〇五五
京畿道	四五九、六五七	二、四五一、六九一	一、二六三、八六九	一、一八七、八一八
忠清北道	一七五、六九五	九五九、四九〇	四九一、一五八	四六八、三五九
忠清南道	二八〇、二二〇	一、五二六、八二五	七八二、五九七	七四四、一八五
全羅北道	三〇八、四二四	一、六〇七、二三六	八二三、九六四	七八三、一九三
全羅南道	四九八、五七二	二、五〇八、三四六	一、二五六、一七二	一、二五二、一三六
慶尙北道	四七八、一三四	二、五六三、二五一	一、二九六、九四四	一、二六六、三一五
慶尙南道	四四三、一一三	二、二四八、三三八	一、一二九、五四五	一、一一八、七六二
黄海道	三三二、〇一六	一、六七四、二二四	八四五、四八一	八二八、七四九
平安南道	二七五、六〇一	一、四六九、六三一	七三九、三一七	七三〇、三一四
平安北道	三〇六、一三〇	一、七一〇、三五二	八七〇、九九三	八三九、二九七
江原道	二九六、七九四	一、六〇五、二七四	八三一、九〇六	七七三、三六八
咸鏡南道	二九八、九三三	一、七二一、六七六	八八五、四一〇	八三六、二六六
咸鏡北道	一五五、五二五	八五二、八二四	四四五、二八四	四〇七、五三三

耕地面積（各年末）

	昭和八年	昭和九年	昭和十年
	千町步	千町步	千町步
田（畑）	一、六八二	一、六九二	二、七九七
畓（田）	二、八〇七	二、八一二	一、七〇三
火田	三六七	四二三	四一八
合計	四、八五六	四、九二八	四、五〇〇

本表は朝鮮總督府施政年報に據る。

農業者戸口

	昭和九年	昭和十年
總數	三、〇一三、一〇四戸	三、〇六六、四八九戸
本地人	三、〇〇一、八三九	三、〇五五、四三三
內地人	八、七〇二	八、四一九
滿洲國及支那人	二、五六三	二、六三七
自作	五四二、六三七	五四七、九二九
自作兼小作	七二一、六六一	七三八、八七六
	◉一〇三、三三五	◉七六、四七二
小作	一、五六四、二九四	一、五九一、四四一
	×八一、二八七	×一二一、七七一

（備考）本表中◉印は火田民を、×印は被用者を示す。

主要農產物

	昭和十年	昭和十一年
粳米	一七、一三一、九九一石	一八、七七〇、六九八石
糯米	四七九、八七七	四〇三、五八八
陸米	二七三、八〇一	二三六、四七七
大麥	八、七五一、九六三	六、八一三、六九六
小麥	一、九三三、八一七	一、六〇五、二三五
裸麥	一、六二六、五一六	一、九六三、七七八
粟	四、八六〇、七四七	四、八六〇、七四七
稗	四五九、三五八	四五九、三五八
大豆	四、三七五、二七八	三、七八四、二一五
小豆	九三四、一二九	七五九、〇九二
大麻	五、〇七四、六二六貫	一、三四九、五五九貫
陸地棉	一六九、九四八、八一八斤	八九、三九二、四七四斤
在來棉	四三、八〇〇、一四九	四七、九八二、七三八

特用作物生產高（昭和十一年）（調査月報に據る）

	作付反別	收穫高
大麻	二六、四六二町	四、七九四、五三一貫
苧麻	一、四三七	一一六、五四六
青麻	三三三	五三、六四七
黄麻	九	八六三
亞麻	一、八〇七	三三三、三三九
楮	七、二〇七	一、八四〇、八三七
莞草	四、二三八	一、三四九、五五九
胡麻	一〇、〇七四	三五、三五三
荏	三、九八八	四六、九一八
蓖麻	二、二〇八	一一、八四二
亞麻種子	一、八二二	二、一九五
杞柳	一八四	一九、三〇九
除虫菊	二七一	二六、〇〇七
薄荷	一、四三三	一、〇二一、二五一

主要都市人口

京城府	四四四、〇九八	仁川府	八二、九九七
開城府	五五、五三七	太田府	三九、〇六一
群山府	四一、六九八	全州府	四二、三八七
木浦府	六〇、七三四	光州府	五四、六〇七
大邱府	一〇七、四一四	釜山府	一八二、五〇三
馬山府	三一、七七八	平壤府	一八二、一二一
鎭南浦府	五〇、五一二	新義州府	五八、四六二
元山府	六〇、一六九	咸興府	五六、五七一
清津府	五五、五三〇		

備考 昭和十年十月一日國勢調査人口概數に據る。

林野面積

	昭和九年末	昭和十年末
	ヘクタール	ヘクタール
總數	一六、二一〇、九〇二	一六、三三三、五〇二
國有林	五、八一六、二四八	五、七四一、〇五〇
公有林	八六八、五〇〇	九〇一、六四二
寺刹有林	一八二、七七六	一八四、七二〇
私有林	九、五二六、一五三	九、五〇六、〇九〇
造林面積	九一、六四〇	

林產額（昭和十年）（單位千圓）

用材	一八、一三七	竹材	二四六
薪	二六、四一三	枝葉（燃料）	二八、一三七
其他林產	一八、五〇三	綠肥	二、六一一
燃料	八、五六〇	飼料	三、九五六
堆肥原料		種實	二、三三四
木炭	二、六八六	菌蕈	二一
筍	一六	松脂	一
漆液	三	竹皮	一
アベマキ		藥草	五三九
樹皮	四三	五倍子	一七
山野菜	三五三	其他	二〇
染料	五		
土石類	一、〇一七		
合計	一二四、〇〇五		

家畜及家禽

種類	昭和八年	同九年	同十年
牛	一、六六三、一三六頭	一、六七一、一八五頭	一、六七九、四七〇頭
馬	五二、九二四	五三、八〇四	五二、六〇八
驢	四、八九〇	四、七三五	四、三六九
騾	一、四六二	一、四三六	一、二六九
豚	一、四二五、一四二	一、五八三、五一三	一、六一六、四〇八
緬羊	二、六七五	五、四七三	九、三八八
山羊	二六、六五二	三一、一七七	三四、三九五
鷄	六、八六八、〇三七	七、一七八、七二五	七、一一七、一四七
鶩	二八、六五六	三六、二六九	三七、七七二
七面鳥	一、一五〇	一、〇五六	一、一一七

桑田面積（昭和十一年七月末現在）

	本面積	見積面積	計
既設桑田	二五、三五八・七町	四五、七九五・九町	七一、一五四・六町
新設桑田	一、九三九・二	三、七七九・〇	五、七一八・二
合計	二七、二九七・九	四九、五七四・九	七六、八七二・八
山桑利用見込面積			三、五三九・二

養蠶

		昭和十年	昭和十一年
家蠶	養蠶戸數（春蠶）	八二一、五七三	八二六、一〇九
	養蠶戸數（夏秋）	五七六、四七〇	五八八、三三一
	掃立枚數	一、〇四五、四〇〇	一、〇五三、一一四
	繭產額	二、三一八、五六〇	二、五七一、五三一
柞蠶	飼養林（陌）	三四〇	七八〇
	放養蛾數	二〇七、〇〇〇	八六〇、〇〇〇
	繭產額（顆）	二、二六六、〇〇〇	八、〇六〇、〇〇〇

（備考）繭產額單位は瓩。

總督府職員（昭和十年）

	人員	年俸及給料年額 俸給
勅任官	九三	五七一、七一九
勅任官待遇	二五	四九、二〇〇
奏任官	一、三五四	三、九五一、七七〇
奏任官待遇	九三	一四五、七五三
判任官	一三、一三一	一五、二九二、四八六
判任官待遇	一九、七六一	一三、三五〇、〇八一
囑託	八一三	七九三、七一七
雇員	二〇、六九五	一一、〇三九、三四九
總數	五五、九六五	四五、一九四、〇七四

歷代朝鮮總督

		就任年月日
伊藤博文	統監	明治三八・一二・一
曾禰荒助	同	同 四二・六・一四
寺內正毅	統監	同 四三・五・三〇
	總督	同 四三・一〇・一
長谷川好道	總督	大正五・一〇・一六
齋藤實	同	同 八・八・一三
宇垣一成	總督臨時代理	昭和二・四・一五
山梨半造	總督	同 二・一二・一〇
齋藤實	同	同 四・八・一七
宇垣一成	同	同 六・六・一七
南次郎	同	同 一一・八・五

歲入歲出（單位圓）

	昭和十年度決算	昭和十一年度豫算
△歲入		
經常部	二六三、三六三、四二八	二六九、九八八、九四一
臨時部	六七、八五七、〇五五	五九、〇一四、一〇一
總計	三三〇、二一九、四八三	三二九、〇〇三、〇四二
△歲出		
經常部	二〇五、九七九、四六〇	二三四、一四一、四二八
臨時部	七七、九七九、四八二	九四、八六一、六一四
總計	二八三、九五八、九四三	三二九、〇〇三、〇四二

酒稅（昭和十年度）

	査定石數	稅額（圓）
釀造酒	一四八、三一五	四、〇六〇、五三九
蒸餾酒	五〇二、五九三	八、〇六五、四八六
再製酒	五、七九七	一九八、七五六
朝鮮酒	一、九四六、八五八	七、八八八、九三七
合計	二、六〇三、五六三	二〇、二一三、七〇八

水產

	水產製造物（千圓）	漁獲高（千圓）	合計（千圓）
昭和六年	二八、三七〇	四六、五七八	七四、九四八
同七年	二七、三八四	四六、二六四	七三、六四七
同八年	三三、五八九	五一、三七八	八六、九六七
同九年	四五、五三三	五七、七七八	一〇三、二九三
同十年	六五、〇一三	六五、九六六	一三〇、九七九

（調査月報、文書課調）

會社（昭和十年）

業態別	朝鮮に本店を有するもの 社數	資本金（千圓）	朝鮮に支店を有する內地會社 社數	資本金（千圓）	朝鮮に支店を有する外國會社 社數	資本金
農林業	一三〇	五四、六二一	三	二五八、八〇五	—	—
商業	七四五	六六、六〇六	四	七二三	四	三五、〇〇〇、〇〇〇（千弗）
					二	二三〇、〇〇〇（千圓）
工業	六七二	二一三、一一三	三〇	五八一、〇五二	二	六、七五〇
鑛業	四六	八四、七八六	三三	八八四、五七六	三	一七、七五〇
水產業	二七	三、五九五	五	一五、〇二五	—	—
銀行及金融業	一三三	一三九、二五〇	六	三四〇、七〇〇	—	—
運輸業	二四六	一一一、二八三	三	二、六〇〇	三	五、一三〇
瓦斯及電氣業	四三	一〇七、六六〇	—	—	—	—
土木請負業	一三九	一三、四六三	七	一一、〇〇〇	—	—
其の他	二〇〇	一一八、一七七	一三	五五、六〇〇	一	五〇〇（千弗）
總計	二、三五八	九〇二、五五三	一一三	二、一五〇、〇八一	四	三五、〇〇〇、〇〇〇（千弗）
					一一	三〇、三六〇、〇〇〇（千圓）

鑛產額

鑛種	昭和九年（圓）	昭和十年（圓）
石炭	九、九四〇、五六六	一二、九二五、一四九
金	三三、二二四、九一四	三八、三二〇、九二一
鐵鑛	八七九、八一〇	一、二七九、二六九
金銀鑛汰鑛	二、五一一、四八一	六、五〇二、九五九
砂金	五、三二三、三四四	七、一三六、七九六
黑鉛	五二四、八〇四	一、二〇七、五六八
銀	一、四六八、〇七九	二、五五八、一三〇
銅	九三三、〇三三	一、五三五、七九七
銑鐵	七、七三三、〇八八	七、三三二、三一〇
鋼鐵	四、一七八、八六〇	六、七六四、一四八
タングステン	七三四、二一〇	一、三八八、九五三
鉛	三〇六、三三九	三八八、七六二
硫化鐵鑛	二四三、〇七七	三〇八、〇二八
水鉛鑛	二六三、四五〇	二六四、七二九
明礬石	二五九、九一〇	三八一、四六五
其の他共計	六九、一七二、九四〇	八八、〇三九、二〇一

工場數及生產額（昭和十年）

	工場數	職工（人）	生產高（千圓）
紡績工業	二七七	二九、一二七	七一、一六四、六〇七
金屬工業	二三九	六、二八七	二一、三三七、六七九
機械器具工業	三二四	六、四九〇	六、六一八、六七六
窯業	三三六	七、九八三	一四、九九六、八六七
化學工業	一、一六一	三四、四一二	一一七、九八三、〇九一
製材及木製品業	二四〇	四、四八〇	一四、三九二、七五一
印刷及製本業	二八五	五、九四四	一二、一六八、八二三
食料品工業	二、三三六	三四、九五七	七六、五〇七、〇八一
瓦斯及電氣業	五一	七四八	三九、八〇三、六五八
其の他の工業	二九六	五、三六九	一〇、一六一、七〇三
總計	五、六三五	一三五、七九七	三八五、一三五、九三四

國有鐵道

	昭和九年度	昭和十年度
營業粁程	三、〇七七	三、三九〇
停車場數	四三九	四九三
旅客人員（千人）	二五、六一三、八一五	二九、三四四、一八八
貨物噸數（噸）	七、六八一、七七六	八、六六七、六四二
手小荷物（瓩）	五〇、三〇七、六四〇	五七、九二一、九八一
運輸收入 客車（千圓）	二三、四〇〇	二五、五六七
運輸收入 貨車（千圓）	二五、七九一	二八、三〇五
運輸收入 手小荷物	一、九五八	二、六〇五
運輸收入 合計（千圓）	五〇、一四九	五六、四七八
營業收入（圓）	九、〇八二、五三二	四、一六二、九三七
營業費（圓）	七、三九四、〇五〇	三、三〇四、八八一
營業益（圓）	一、六八八、三八二	八五八、〇五六

備考 本表中に北鮮鐵道管理局線を含む

私設鐵道及軌道（昭和十年度）

	私設鐵道	軌道
粁程 開業	一、七六四・八	八二・三
粁程 未開業	三三三・七	—
旅客人員（人）	一〇、〇五一、四九三	八四、七八二、〇八一
貨物噸數（噸）	一八、三三〇、七三〇	二三五、七五一

船舶（昭和十年度末）

	登簿船舶 船數	登簿船舶 總噸數	不登簿船舶 船數	不登簿船舶 總噸數
汽船	三二〇	五八、五八八	五五〇	六、〇五三
帆船	九四七	三二、七五二	九、一九九	九七、九〇九
石數船	—	—	三五九	三、七二五
合計	一、二六七	九一、三四〇	一〇、一〇五	一〇七、六八七

保險業況（昭和十年）

	件數	金額（圓）
△生命保險		
年始現在契約高	三二二、〇一三	三五七、四一三、九八八
增加契約高	八九、八七四	一四七、〇九二、四一三
減少契約高	三七、九四七	五九、四〇八、〇二六
年末現在契約高	二八二、九四〇	四四五、〇九八、三七五
△損害保險		
年始現在契約高	三二八、一〇〇	三六四、七二五、二五六
新契約高	七二八、九八一	一、一六九、八四六、五四一
年末現在契約高	三六一、九七〇	四三二、五五二、八七三

簡易生命保險（年度末現在）

年度別	件數	保險料	保險金
	件	圓	圓
昭和八年	五三一、三〇五	五二九、六一九	九七、三一〇、二八一
同 九年	六五五、五〇九	六四八、一五〇	一一〇、〇一三、四一〇
同 十年	八一〇、四一一	八〇五、一八三	一五〇、一四二、四一四
前年度比較增減	一五四、九〇二	一五七、〇三三	三〇、一三〇、〇一四

郵便貯金

	人員	金額
		圓
昭和八年度	二、八四〇、六五六	四四八、〇七、一五四
同 九年度	三、一五六、〇九四	五三、六三一、五五三
同 十年度	三、五七一、二三七	五四、八二〇、七一〇
前年度に比較し增減	四一五、一四三	二、一八九、一五七

（備考）十年度預ケ人員及預金額中には行賞貯金其他の預ケ人員四四、〇一三人、預金額一、一八〇、五八七圓を含む。

警察官署及職員（昭和十年）

警察部	一三	警察部長 一三
警察署	二五三	警視 五七
警察官駐在所	二、三一八	警部 四二六
同 派出所	二一三	警部補 七六〇
同 出張所	一八一	巡査 一八、一五三

合計 二、九七六

（註）警視中九、警部中八七、警部補中一五五、巡査中七、九二六の朝鮮人を含む。

電氣・瓦斯（昭和十年度）

電氣事業	瓦斯事業		
事業者數	五〇	官廳用	九七、三一〇、二八一
	二	自家用	一一〇、〇一三、四一〇
資本金（拂込）	九五 千圓	公稱	一五〇、一四二、四一四
	二、一七五 千圓		
	一八、六二六		三〇、一三〇、〇一四
發電力	二、〇一〇 KW	瓦斯發生高（立方米）	
	四三〇、〇七六		
電燈	三一、二七九	官廳用	一七、五三三
	七〇、五五一	自家用	一七、五三三
電力	四二五、九二五	需用家數	一七、五三三
	一、四九八、三二七	取付キロワット數	三五、八二六
	三一、七七八		
	三一四、三二六		

學校（昭和十年）

小學校（官公）	二 四八九	教職員	二、二八二
		學生生徒	八三、八一五
普通學校（官）	二		二、九二四
（公私）	一〇、七八九		一〇、七〇七
	五四二		三五二、〇三〇
同附屬簡易學校	八七		六、六六〇
	五七九		三五、六九六
公立中學校	一三		二九〇
	六二九		六、七一五
高等普通校（公）	一五		三七〇
（私）	一一		八、一三三
	二一〇		二一〇
高等女學校（公）	二七		三八八
（私）	一		一〇、〇一四
	二一		五一一
女子高等普通校（公）	九		二、一八六
（私）	一〇		三、七六一
	一〇一		一七五
實業學校（官）	一		二一八
（公）	五四		一三、五三九
（私）	九		三、六九二
	一四三		
實業補習學校（官）	一		三一
（公）	四		四、五九八
（私）	九四		二九四
	三三		
專門學校（官）	五		一、二一三
（公）	五		五六七
（私）	八		二、七二一
	二〇四		
帝國大學豫科	一		三九
帝國大學	一		五六五
	四		三〇九
官立師範學校	一		六七五
	一三五		
私立各種學校	四三		二、四三四
	二九九		七二、〇三四
公私立幼稚園	六、八六六		一六、七〇〇
書堂	六、二〇八		一六、一七四

醫療衛生機關（昭和十年末現在）

官公立	醫師	朝鮮人	一、三三六
		外國人	二五六
		計	一、五九二
	看護婦	朝鮮人	一、三四四
		外國人	四一九
		計	一、七六三
	種痘施行者		二〇
	鍼術業		一
	灸術業		一
	按摩術業		一
私立	醫師	朝鮮人	一、一四六
		外國人	二四
		計	一、一七〇
	看護婦	朝鮮人	一、四四五
		外國人	四三四
		計	一、八六九
	種痘施行者		五四七
	鍼術業		二七七
	灸術業		一
	按摩術業		八三五
官公私立	醫師		二、三〇六
	齒科醫師		七四四
	齒科技工士		五四一
	藥劑師		一、一〇〇
	藥種商		三、一三五
	產婆		一、一四六
	看護婦		一、三四四
	種痘施行者		四一九
	鍼術業		二〇
	灸術業		一
	按摩術業		一

（附記）他に醫生四、〇八二人　限地醫業者三二二人、限地産婆四九人　入齒業者二〇〇人、柔道整復術者三八人あり、調査月報より。

傳染病（昭和十一年中）

	患者	死者
コレラ	—	—
腸チブス	六、七四八	一、一〇三
痘瘡	一、四〇〇	三七一
猩紅熱	一、一四七	一六八
流行性腦脊髓膜炎	三三三	一六四
赤痢	四、五八四	八五九
パラチフス	五〇七	三七
發疹チフス	一、三〇四	一四五
ヂフテリヤ	一、八五六	四七四

各刑務所在所人員（昭和十一年十二月末日現在）

（警務局調、調査月報）

	内地人	朝鮮人	外國人	計
受刑者	四五三	一五、八六三	一七	一六、三二三
刑事被告人	一〇八	一、六一〇	一	一、七一九
勞役場留置者	三	一、四八〇	一	一、四八四
合計	五六四	一七、八六九	一九	一七、八八九

（法務局調、調査月報）

神社・宗教（昭和十年末）

神社	五三	神祠	二六七
寺院	一二五		
△教會堂布教所及講義所	二七八		

	數	宣布者	信徒
神道	五一七	一、三〇九	二八五、〇二四
佛教	四、四九三	二、八三〇	四六九、二四二
基督教			

輸移入重要品價額（昭和十一年）

（單位圓）

米及籾	五、〇一七、三五〇
豆類	七、六八一、六八四
砂糖	九、一三二、〇八一
揮發油	九、九〇一、〇九九
繰綿	二五、三八〇、五四〇
打綿	四、四六三、〇八九
柞蠶生絲	一三、二三九、八七九
毛織物	一三、九四六、六二七
紙類	二五、七三三、八九〇
人絹織物	四五、七二一、八九八
鐵條板、レール	四五、七八六、〇八八
機械類	六、〇三二、二三五
綿絲	一〇、四八四、四四六
綿織物	四、二七七、四一七
原油	二、一九二、一三六
重油	一、四四五、一五二
爆發藥	一七、二三〇、一七三
玉蜀黍	九、一七二、五九九
蕎麥	三、四五七、九六三
石炭	七、八二八、六六三
豆粕	二、七七七、三四六
粟	五、四〇五、九六〇
小麥粉	三四、〇九一、七八一
酒類	一〇、〇三一、五五五
燈油	七、四〇〇、〇五五
綿織物	二八、七二六、八三六
絹織物	五、六四八、一八九
セメント	一五、五三五、九八九
肥料	二、八七一、九二八
陶磁器	
木材	
葉煙草	

安全燐寸	一、八三一、八〇九
黍	一、五二一、五七七
天日鹽	一、九七一、〇九〇
其他の諸品共總計	七六二、四一六、三二四

輸移出重要品額價

（昭和十一年）

（單位圓）

品目	金額
米及籾	三五〇、九五四、四一六
鮮魚乾魚	一二、二三二、七〇三
砂糖	四、〇一七、七四五
牛皮	二、一九九、一四三
繰綿	一一、四五七、四四七
蘭、生絲	一六、八一三、四六六
石炭	六、三五九、二七三
金鑛	六、四九七、七〇三
鉛	二、二六四、六六〇
黑含金銀粗銅	二〇、四九九、〇九二
絹織物	三、一六四、〇八四
洋紙	四、四〇一、三一〇
林檎	二、九三五、〇七四
セメント	一、一四五、三五九
大豆	二三、四六〇、九八九
乾海苔	三、九六九、三六一
コーンスターチ	二、二七〇、八一五
綿織物	一、八三一、八〇九
鐵及鐵鑛	一、五二一、五七七
牛	一、九七一、〇九〇
木材	七六二、四一六、三二四
紅蔘	三九、六九二、九六〇
肥料	一、七四四、八七九
海藻	八、一七六、三九六
魚油	三、四〇四、六九二
硬化油	五九三、三二八、五五
其他共總計	

對外貨物輸出入額

（單位千圓）

		金額
昭和九年	輸出	五七、七三
	輸入	七九、五二七
	合計	一三七、二〇〇
	超過額	△二一、八五五
同 十年	輸出	六四、九〇二
	輸入	一〇〇、五八九
	合計	一六五、四九一
	超過額	△三五、六八九
同十一年	輸出	七五、二六六
	輸入	一二四、四九九
	合計	一八九、七六五
	超過額	△三九、二三三

對內貨物移出入額

（單位千圓）

		金額
昭和九年	移出	四〇七、六九四
	移入	四三九、九二三
	合計	八四七、三二七
	超過額	△三一、九二九
同 十年	移出	四八五、八八三
	移入	五五八、六七七
	合計	一、〇四四、五六一
	超過額	△七三、七九二
同十一年	移出	五二八、〇四七
	移入	六四七、九一七
	合計	一、一六五、九六四
	超過額	△一二九、八七〇

樺太

沿革・地誌

樺太古代の先住者は北海道より移住したアイヌ族と西比利亞地方より渡來したニクブン、オロツコ等の祖先であると想像されてゐる。樺太を邦領として認めたのは豐臣秀吉時代（文祿二年）で、「爾來明治七年まで我國の統治下にあり德川時代は松前藩をして主として經營せしめた。明治八年千島樺太交換條約に依り露國に讓渡せらるるに至つたが、明治三十八年日露戰役の結果、北緯五十度以南の地は再び我が領有に歸したものである。本島はオホツク海と日本海との間に介在し、西は間宮海峽を隔てゝ沿海州に對し、宗谷海峽を隔てゝ北海道宗谷岬と相呼應し、北は北緯五十度を以て露領樺太と境してゐる。地貌及地質により東部山地帶、中央低地帶、西部山地帶の三地帶に區別され、幌內、內淵、鈴谷、留多加の諸川其間を緩流し、沿岸は概して海岸線の屈曲に乏しく、特に西海岸は殆んど子午線に併行して單調である。たゞ南端は屈曲に富む。（樺太廳治要覽から）

位置

方位	地名	經緯度（度分）
極東	東海岸北知床岬	東經 一四四・五五
極西	西海岸鵜城岬	同 一四一・五一
極南	西能登呂岬	北緯 四五・五四
極北	國境	同 五〇・〇〇

面積（行政區劃別）

支廳	面積（方粁）	支廳	面積（方粁）
豐原	四、七五〇・五	大泊	四、八四三・〇
眞岡	二、四九〇・一	本斗	一、五六六・六
泊居	一、七三七・二	元泊	六、九〇二・七
敷香	一三、四一六・五	計	三六、〇九〇・三

土地處分面積（單位アール）

	讓與地	貸付地
昭和六年	五、〇三〇	三二七、〇一〇
七年	三、三〇三	三二四、四一〇
八年	一一、三六四	一九五、三六七
九年	二、一〇四	一二〇、一四四
十年	三、〇八二	一四三、八七九

現在戶口

	昭和九年	昭和十年
戶數	一四、三五八	一四、五四四
人口	六一、〇〇九	六二、四三三

人口累年表（各年末）

	總數	豐原	大泊	留多加	本斗	眞岡	泊居	鵜城	元泊	敷香
大正一四年	六一、〇〇九	一三、〇六七	九、八九三	三、三四二	四、二三〇	八、四七四	四、二一九	六、二九六	五、四七一	六、〇一七
×一三、三七八	六二、四三三	一三、一三八	九、八三一	三、四三一	四、二三〇	八、四七四	四、二一九	六、二九六	五、四七一	六、〇一七
昭和元年	六二、四三三	一三、一三八	九、八三一	三、四三一	四、二三〇	八、四七四	四、二一九	六、二九六	五、四七一	六、〇一七
二年	三三、三三二	一二、七二七	六四、八八二	三、一一三	四、三二九	九、〇五〇	四、一〇二	三、三〇〇	二、六一三	四、一〇四
三年	四七、三五五	一二、七二七	九四、六七九	一六、三五七	三一、三六八	九、〇五〇	四、一〇二	三、三〇〇	二、六一三	四、一〇四
四年	四七、三五五	一二、七二七	九四、六七九	一六、三五七	三一、三六八	九、〇五〇	四、一〇二	三、三〇〇	二、六一三	四、一〇四
五年	四七、三五五	一二、七二七	九四、六七九	一六、三五七	三一、三六八	九、〇五〇	四、一〇二	三、三〇〇	二、六一三	四、一〇四
×六、八五二	五四、二〇七	一二、七二七	九四、六七九	一六、三五七	三一、三六八	九、〇五〇	四、一〇二	三、三〇〇	二、六一三	四、一〇四
六年	五四、二〇七	一二、七二七	九四、六七九	一六、三五七	三一、三六八	九、〇五〇	四、一〇二	三、三〇〇	二、六一三	四、一〇四
七年	五四、二〇七	一二、七二七	九四、六七九	一六、三五七	三一、三六八	九、〇五〇	四、一〇二	三、三〇〇	二、六一三	四、一〇四
八年	五四、二〇七	一二、七二七	九四、六七九	一六、三五七	三一、三六八	九、〇五〇	四、一〇二	三、三〇〇	二、六一三	四、一〇四
九年	五四、二〇七	一二、七二七	九四、六七九	一六、三五七	三一、三六八	九、〇五〇	四、一〇二	三、三〇〇	二、六一三	四、一〇四
十年	六一、〇〇九	一三、〇六七	九、八九三	三、三四二	四、二三〇	八、四七四	四、二一九	六、二九六	五、四七一	六、〇一七

人口累年表（各年末）

	戶數	男	女	計
大正一四年	一〇八、五一七	八〇、五一九	七〇、五一七	一五一、〇三六
×一三、三七八	一一三、三七八	八一、三五五	七一、三五九	一五三、七一四
昭和元年	一一七、一六九	八六、三〇四	七五、二〇九	一六一、五一三
二年	一二七、〇二三	九四、二〇一	八二、一〇二	一七六、三〇三
三年	一三四、五六一	一〇五、九四一	九二、一〇二	一九八、〇四三
四年	一三九、五〇一	一一一、八二二	九五、一〇二	二〇七、〇二四
五年	一五九、九一九	一二五、〇一一	一〇八、四一一	二三三、四二二
×六、八五二	一五九、九一九	一二六、六五九	一〇八、四一一	二三五、〇七〇
六年	一六一、七六七	一二五、六一〇	一〇八、四一一	二三三、〇二一
七年	一六四、三〇四	一二八、八六八	一一〇、四一一	二三九、二七九
八年	一六七、〇二四	一三三、一七二	一一四、四一一	二四七、五八三
九年	一七五、一九四	一三七、九三六	一一八、四一一	二五六、三四七
十年	一七六、五七一	一四五、九〇四	一二三、四一一	二六九、三一五

種族別戶口（昭和十年末）

種別	戶數	人口 男	人口 女	計
內地人	六〇、五一〇	一七〇、八六八	一四二、二四七	三一三、一一五
朝鮮人	一、四〇三	四、五二一	二、五三一	七、〇五三
アイヌ	三一一	七五八	七五〇	一、五〇八
オロツコ	七四	一二八	一七六	三〇四
ニクブン	二九	五三	五六	一〇九
キーリン	四	一三	一一	二三
サンダー	三	六	三	九
ヤクーツ	一	一	一	二
滿洲國人	二	一	一	二
波蘭人	九	二五	一七	四二
中國人	四一	九一	一二	一〇三
露國人	四五	一〇〇	九七	一九七
獨逸人	二	五	二	七
チエツコ・スロバキア人	一	一	一	一
總數	六二、四三三	一七六、五七一	一四五、九〇四	三二二、四七五

十年 ×一七六、五七一 一四五、九〇四 三二二、四七五 六二、四三三

×一八六、三三一 一四五、七一八 三三一、九四九 六五、五四二

備考 ×印は國勢調査、國勢調査分の戶數欄は世帶數。

歷代樺太廳長官

用　　勲勅　同同同同同同同同同長同長民
任任　　樺太支庁人員　　官官官
　　　　　　　　　　　　　　（兼任）
一一一一　今岸縣喜豐昌永昌岡平床楠熊　外
七七七七　村本　多田井谷金定竹幸一　地
　　　　　武正　孝勝　次文太二幸一　樺太
嘱託任官待遇　志雄忍治藏彰郎彰次郎彦郎　名
二一七　同同同昭和十年末　同同同大正　同同明治　就任年月日
　　　　六・三・一　六・九・一　四・六・三　四・六・三　四・七・三
　　　　五　五　五　五　五　五　五

作付面積（単位ヘクタール）

作付面積	総数	計	畑	田
昭和八年	三三六	三六六	〇	三三
昭和九年	三七四	四二五	〇	三三
昭和十年	三七八	四二五	〇	四〇

歳入歳出（単位圓）

	歳出 総額	臨時	経常 部	計	歳入 総額	臨時	経常 部	計
決昭和十年度算	三七、四六一、三五八	四二、九四五、三五四	三五、〇五〇、六二一	三七、四六一、三五八	三七、四六一、三五八	四二、九四五、三五四	三五、〇五〇、六二一	三七、四六一、三五八
豫昭和十一年度算	四〇、三六六、三二八	四、〇六六、三二八	三六、三〇〇、〇〇〇	四〇、三六六、三二八	四〇、三六六、三二八	四、〇六六、三二八	三六、三〇〇、〇〇〇	四〇、三六六、三二八

計　四三

生産額（九年迄単位千圓）

	昭和七	昭和八	昭和九	昭和十
農産物	二、九四四	三、六三五	四、〇四九	三、七四四
畜産物	一、二六四	一、六四〇	二、一一六	二、六四六
林産物	七四二	一、三四三	三、一一三	二、九六二
水産物	九九五	一、三三六	一、六四四	一、七五〇
鑛産物	一〇一	六四四	九一一	一、四七六
工産物	四四二	六二七	七五六	八三七
計	七、三九八	九、七八八	一二、六八五	一三、〇二四

小作（畑）　三、六六　三、五七

農業戸數

雇傭業	業業數	昭和七	昭和八	昭和九	昭和十
		一〇、七五九	一一、〇七〇	一一、三五四	一一、六八六
		二、三六	二、四一	二、四六	二、四四

水産業者戸口（昭和十年末）

	戸數	人口
外地	六、〇〇八	三七、八六〇
樺太	一、一	一、一

鑛區數（昭和十年末）

	鑛區	採掘權 面積	鑛區	試掘權 面積	鑛區	砂鑛權 面積
	一	二三、三五六	四	一一、八四四	一	一
	一〇	二、九四一	六四	一一、八三三	一	一
	一〇	二、九四一	六四	一一、八三三	一	一

米七〇

入港船及乘降客

	汽船	帆船	上陸客	乘船客
昭和六年	一六、三三隻	二五九隻	三七、三二人	三五、六七八人
十七年	一六、三〇九	六五九	三七、三二人	三五、六七八人
十八年	一六、四六九	一四六隻	八、一二一	八、一二一
十九年	一六、九九六	一四一隻	一〇八、三五四	一〇八、三五四
昭和九年	一六、九九六	一四一隻	九七、七三五	九七、七三五
十年	一六、九九六	一四一隻	一〇八、三三	一〇八、三三

腦

	數量	價額
昭和九年	四、七七四	二、三五九、三三四
十年	四、九五〇	二、一、三六、一四六

外地―樺太　獸

	數量	價額
昭和九年	一〇八、三五四	一一、三五、三三六
十年	一〇八、三三	一一、三五、三三六

林産物（単位用材數量立方米、金額單位圓）

	用材	薪	炭	他	總額
昭和十年	三四、九三	三六、六九	七、三九	一、一	三六、六七四
價額	三六、七四	三三、一四六	七、三九	一、一	三六、六七四

水產物總

	金額	石炭	油	鑛區	採掘權 面積	鑛區	試掘權 面積	鑛區	砂鑛權 面積
昭和十年	一〇	六三	三一、三五六	一	二三、三五六	四	一一、八四四	一	一
十一年	一〇	二、九四一		六四	一一、八三三	六四	一一、八三三	一	一

移出入額（單位圓）

	超過	輸入	輸出	總額
昭和八年	△二五一、三三	一〇七、八八三	三七、〇八八	一〇七、八八三
昭和九年	△二七七、三五六	四〇九、〇三〇	三一、六三四	四〇九、〇三〇
昭和十年	△二六三、〇〇九	四〇、〇〇〇	三七、九九一	四〇、〇〇〇

△印は輸入超過を示す。

輸出入額（單位圓）

	總額	昭和八年	昭和九年	昭和十年
其他共計	六、八九三、三四一	六、八九三、三四一	八、三一、一九五	八、四〇、〇〇〇
昆布	三〇、三四一	三〇、三四一	四五、〇六〇	四五、〇六〇
水産動物類	六、八六三、〇〇〇	六、八六三、〇〇〇	八、二八五、一三五	八、三五、〇〇〇
貝類	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六
鰒	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六
鰊	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六
鮭	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六
鱒	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六
鰯	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六

水産物（単位圓）

	昭和八年	昭和九年	昭和十年
生産額	一、九三、〇八六	一、三四、〇六六	一、三四、〇六六
移出入超過	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六
移出入總額	一、一、一四六	一、一、一四六	一、一、一四六

産業獎勵

	獵獲頭數	多士醴頭數	兒數	産
昭和七年	一一七〇	一、三八九	三、〇〇〇	
八年	一、七〇〇	一、三六五	三、〇〇〇	
九年	二、〇〇〇	一、三八〇	三、〇〇〇	
十年	二、〇〇〇	一、〇八二	一、〇〇〇	

養狐（各年末）

	飼養場數	黒狐	銀狐	赤狐	十字狐	紅狐	計	生産頭數
昭和七年	三六	二、三五九	三、八三	六、六三	九、三九	二、三六	二、三五	二、三五
八年	三頭	一〇七	一、八六	三〇六	一、三四	四	三、三四	三、三四
九年	七頭	七〇	一、一〇	一、三三	一、三四	一、三四	四、六六	四、六六
十年	六〇	一、三三	一、三四	一、三四	一、三四	一、三四	六、七四	六、七四

鐵道（昭和十年）

	官設鐵道	地方鐵道
收貨旅營業		
物客業料	三四三・九	三七・四
入數（圓）（託）	一、七四、三六五	三六、一六〇
	九三、七四四	三六、一六〇
	三、六四〇	一、六四〇
	一、六三、七七	三六、一六〇

會社（昭和十年度）

社數	公稱資本金千圓	拂込資本金千圓
	一、七四、三六五	一、六三、七七

株式會社	一三五	八二、七五〇
合資會社	二一六	三、〇二三
合名會社	四六	一、四八四
總數	三八七	八七、三五七

備考 拂込資本金欄は株式會社の外は積立金を示す

銀行（昭和十年度現在）

本店	一	四八、〇九六
支店	一三	一、四五五、〇〇〇
拂込資本金		二〇五、二五〇
積立金總額		一六、九六七、七〇三
貸付金（年末殘高）		三三、五〇七、五八六
預金（年末殘高）		

工場（昭和十年末）

種別	工場數	職工數	生産價額（圓）
亞麻系紡績業	一	—	—
銑鐵鑄物業	一	八	五、九二〇
建築用及家具用金物製造業	四	四六	七三、一八六
内燃機關製造業	六	五五	九三、七一〇
船具製造業	三	四〇	七七、八〇〇
造船業	八	五六	一〇六、九一〇
その他の機械器具製造業	一三	七一	六八、一五三
煉瓦製造業	一	一四	五、六〇〇
その他ノ工業	二	一六	一、五三〇、三五二
藥品製造業	二	八	三、〇五五
魚油製造業	九	四、〇六五	七一、三七〇、〇三五
パルプ製造及製紙業	六八	四七八	二、〇四〇、五四二
製材業	七	四一	二一、一七四
建具及家具製造業	二	七七	一七、〇四〇
その他ノ木製品製造業	一七	三三六	六、八二五、二〇五、四二〇
和酒釀造業	四	二一	六九、七四八
醬油味噌及食酢製造業	三	二一	四一、六〇一
清涼飲料製造業	一六	七五五	二、一〇一、七四一
罐詰製造業	五	二九〇	四六一、六六三
水產品製造業	一七	七九、三〇四	八、六〇〇
澱粉製造業	一	一四	一〇一
製麵業	一	一	一
印刷及製本業	二	二五	二九九
計	三六	三三六	四六、二七二

電燈・電力（昭和十年末）

供給業者	自家用
需用戸數	三三、一四一
電燈個數	一四〇、七五六
燭光數	二、七九九、二〇〇
電氣力總數「キロワット時」	四三、三四八
電動機裝置數	二、三五〇、三四〇
電力	三四九

學校（昭和十年）

種別	校數	教員數	生徒數
私立幼稚園	三	一〇	一八八
小學校	一	二四〇	一、二三九
實業補習學校	一	一〇	五一、八一三
高等女學校	一	四	八一二
中學校	一	七〇	一、六一三
土人教育所	三	八九	一、九九九
その他の學校	一	一	二四
	五	五三	三三九

宗教・寺院（昭和十年末）

種別	寺院及布教所	僧侶及布教師	信徒數
神道	五	五	二、三七九
佛教	一一	一七	五三、六四五
基督教	三	三	一、二三三

主要市街地（昭和十年末）

	戸數	人口
豐原町	六、八一九	三五、三九〇
大泊町	五、四七六	二七、九六三
落合町	二、七八二	一四、四二一
知取町	三、六六四	一八、二九八
本斗町	二、一三八	一一、〇四〇
眞岡町	三、六二	一八、八一〇
泊居町	二、一〇三	一〇、九六六

關東州

位置

方位	地名	經緯度		
極東	貔子窩海洋島東端	東經	一二三・一三	二三五、七四三
極西	旅順山頭會螺島西端	同	一二〇・三五	二七、三八五
極南	旅順方家屯會單家屯	北緯	三八・四〇	九、四七五
極北	普蘭店朝陽寺會北端	同	三九・三三	八、二八九

面積（方里）

	本土	島嶼	計
關東州	一六・〇八九		一六・〇八九
民政署	三〇八・四〇三	三二四・四九二	三二四・四九二
旅順	三九・六五五	三九・八六二	三九・八六二
大連	二六・八七七	二七・一四三	二七・一四三
金州	四六・〇七五	四六・四〇〇	四六・四〇〇
普蘭店	六四・三一九	七一・八一八	七一・八一八
貔子窩	三一・四七七	三九・二六八	三九・二六八
鐵道附屬地	一九・三一六	一九・三一六	一九・三一六
總數	三三七・一一九	一六・〇八九	二四三・八〇八

人口動態（昭和十年末）

民政署市	區會	街屯	惠須取町	數香町	留多加町	野田町
戸數	六四	七三	五、〇五三	五、〇二一	一、七八五	一、五三六
人口	一五三	一三	二五、七四三	二七、三八五	九、四七五	八、二八九

人口總數（各年末）

	男	女	計
昭和六	一一三、七三九	九四四	一、二七五、一八五
同七	三三三、五〇三	七七九、三九九	五四四、四六七
同八	二三六、七八二	八三一、七八三	五七六、九七二
同九	二五三、九三二	八八六、九四八	六一〇、五三一
同十	二七七、二五九	九六四、〇九九	六五七、一六七
同十一	二八九、八四五	九九五、四六六	六八五、一六一

（關東局統計表）

現住人口（昭和十一年末）

關東州	南滿鐵道附屬地	計	
内地人 男	八七、〇七一	一〇九、九五四	一九七、〇二五
内地人 女	七九、四三九	九三、二八〇	一七三、七一九
内地人 計	一六六、五一〇	二〇三、二三四	三六八、七四四
朝鮮人 男	二、一七六	一六、八三四	一八、〇一〇
朝鮮人 女	一、八四八	一三、九五三	一五、八〇一
朝鮮人 計	四、〇二五	三〇、七八七	三四、八一二

民政署市會街屯數（昭和十年末）

民政署市	區會	街屯
旅順	一	一
大連	一	一
金州	一	—
普蘭店	一	一
貔子窩	一	一
計	五	四

人口動態（昭和十年）

	内地人	朝鮮人	滿洲人	外國人
婚姻	四六	一六	五、六八二	四
離婚	一五	一	一四九	—
出生 男	四、三一六	二七七	一五、〇六九	三
出生 女	四、〇七〇	二五五	一四、一八七	一
出生 計	八、三八六	五三二	二九、二五六	四
死亡 男	一、九七〇	二九七	二、一七〇	一〇
死亡 女	一、七二六	三三三	九、四〇〇	五
死亡 計	三、六九六	八三〇	一一、五七〇	一五

本表は鐵道附屬地を含む。△印は臺灣人

日本人渡歸航者數

年度別	渡航者	歸航者
昭和十年	一四九、七六三	一〇七、八三五
同九年	一三五、九二八	八七、四〇三
同八年	一二九、四四七	七七、六七六
同七年	八三、六六〇	五七、七四四
同六年	六五、一〇六	四二、一〇二

現在人口總數（各年末）

昭和	戸數	男	女	計
同六	二一三、七三九	七五三、九四四	五二一、二四一	一、二七五、一八五
同七	二三三、五〇三	七七九、三九九	五四四、四六七	一、三二三、八六六
同八	二三六、七八二	八三一、七八三	五七六、九七二	一、四〇八、七五五
同九	二五三、九三二	八八六、九四八	六一〇、五三一	一、四九七、八〇〇
同十	二七七、二五九	九六四、〇九九	六五七、一六七	一、六二一、二六六
同十一	二八九、八四五	九九五、四六六	六八五、一六一	一、六八〇、六二七

（關東局統計表）

國籍別人口

昭和十年末現在

關東州	内地人	男	五六四、四九四	二一三、七三	七七八、〇六七
		女	四二一、四四一	八三、九五	四九五、四三六
		計	九七五、八三五	二九七、五六八	一、二七三、五〇三
	朝鮮人	男	八二	五四三	一、三六四
		女	七四三	四六一	一、一〇四
		計	一、五六四	一、〇〇四	二、五六八
	滿洲人	男	三五四、五六二	三四〇、九〇四	九九五、四六二
		女	四九三、四七二	一九一、六八九	六八五、一六一
		計	一、〇三四	五三二、五八三	一、六八〇、六二七
	外國人	男	六五四、五六二	三四〇、九〇四	九九五、四六二
		女	四九三、四七二	一九一、六八九	六八五、一六一
		計	一、〇三四	五三二、五八三	一、六八〇、六二七
	總計	男	六五四、五六二	三四〇、九〇四	九九五、四六二
		女	四九三、四七二	一九一、六八九	六八五、一六一
		計	一、一四八、〇三四	五三二、五八三	一、六八〇、六二七
鐵道附屬地	内地人	男	七九、四三九	一〇九、九五四	九三、二八〇
		女	一六、八三四	一三、九五三	八五、一七六
		計	九六、二七三	一二三、五七三	一七九、四五六
	朝鮮人	男	五四三	四六一	一、三六四
		女	四六一	四二一	一、一〇四
		計	一、〇〇四	八八二	二、五六八
	滿洲人	男	三四〇、九〇四	九九五、四六二	三四、九〇四
		女	一九一、六八九	六八五、一六一	七四三
		計	五三二、五八三	一、六八〇、六二七	三四、九〇四
	外國人	男	三四〇、九〇四	九九五、四六二	三四、九〇四
		女	一九一、六八九	六八五、一六一	七四三
		計	五三二、五八三	一、六八〇、六二七	三四、九〇四
	總計	男	七七八、〇六七	二一三、七三	七七八、〇六七
		女	四九五、四三六	八三、九五	四九五、四三六
		計	一、二七三、五〇三	二九七、五六八	一、二七三、五〇三

本表は關東局統計要覽に據る。

鐵道附屬地人口累年表

（各年末）

	内地人	朝鮮人	滿洲人	外國人	計
昭和十一年末現在	八七、〇七一	七九、四三九	一〇九、九五四	九三、二八〇	三九、二八七
同 五年	二、一七六	一、八四九	一六、八三四	一三、九五三	八五、一七六
同 六年	二、一七六	一、八四九	一六、八三四	一三、九五三	八五、一七六
同 七年	二、一七六	一、八四九	一六、八三四	一三、九五三	八五、一七六
同 八年	二、一七六	一、八四九	一六、八三四	一三、九五三	八五、一七六
同 九年	二、一七六	一、八四九	一六、八三四	一三、九五三	八五、一七六
同 十年	二、一七六	一、八四九	一六、八三四	一三、九五三	八五、一七六

歳入歳出

昭和十年度決算

歳入	經常部	一九、一九一、一六二	昭和十一年度豫算 一八、六八五、九二〇
	臨時部	一九、七一六、八一五	昭和十二年度豫算 一〇、一〇三、八七三
歳出	經常部	一八、一九一、一六二	
	臨時部	一、五二五、六五三	
總計		一九、七一六、八一五	

歷代關東長官

關東都督	就任年月日	
大島 義昌	明治三十九年	九月一日
福島 安正	同	四十五年四月二十五日
中村 覺	大正	三年九月十五日
中村雄次郎	同	六年八月六日
關東長官		
林 權助	大正	八年四月十二日
山縣伊三郎	同	九年五月二十四日
伊集院彥吉	同	十一年九月八日
兒玉 秀雄	同	十二年九月二十六日
木下謙次郎	昭和	二年十二月十七日
太田 政弘	同	四年八月七日
塚本 清治	同	六年一月十六日
山岡萬之助	同	七年一月十二日
兼武藤信義	同	年八月八日
兼菱刈 隆	同	八年七月二十八日
兼南 次郎	同	九年十二月十日
兼植田謙吉	同	十一年三月六日

關東局文官人員

（昭和十年末）

		俸給年額
人員	勅任官	一 八、三五五圓
	奏任官	一八〇 五九、七一九
	同待遇	一〇 三五、四四五
	判任官	一、八七五 二、七八五、五三七
	同待遇	三、三三三 一、五三、〇一二
	囑託	一八二 三〇二、八一八
	雇員	一、八八三 一、五六〇、九五〇
	巡査	一、〇九〇 三、三六三、一三六
	傭員	三、七一一 一、七八二、五四五
	總計	一三、三一九 一〇、六八九、六六五

農業戸數

（昭和十年末）

		日本人	滿洲人	合計
關東州	專業	三一四 四九、七四六	五〇、〇六〇	
	兼業	一二一 一四、〇七一	一四、一九二	
鐵道附屬地	專業	一、二四五 一、三四二	一、五八七	
	兼業	一、三五七 四五八	七二五	
總計		一、九三七 六五、六一七	六七、五五四	

耕地面積

（昭和十年末）

	水田	畑地
地方別		
關東州	六、八一五	一、九五七、七〇七

鐵道附屬地

關東州農家一戸平均耕地	一反六歩 三十町四反六畝九歩
鐵道附屬地農家一戸平均耕地	一町五反五畝七歩 十二町八反九畝八歩

農産物價額

（單位千圓）

		昭和	昭和	昭和
穀菽類		三、〇二六	二、八二一	二、〇六四
蔬菜類		三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
果實類		三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
特用作物		三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
家畜	牛	三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
	騾馬	三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
	驢	三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
	山羊	三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
	緬羊	三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
	豚	三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
家禽	鷄	三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
	鶩	三、〇三六	二、八二一	二、〇六四
	七面鳥	三、〇三六	二、八二一	二、〇六四

（備考）滿鐵附屬地を含む。

林野面積

年次	官有地	民有地	合計
	町	町	町
昭和十年	七三、四五六	二〇、四二三	九三、八七八
同 九年	七八、一三八	一五、七四五	九三、八八三
同 八年	七八、七〇〇	一五、四四五	九四、一四五
同 七年	七八、六一三	一五、五二三	九四、一三五
同 六年	七八、六一二	一五、五二三	九四、一三五

本表は關東州内各地方の集計である。

漁獲物

（單位圓）

關東州	數量	二、七九〇、八〇八 石
	價額	三一、七二六、二四六 圓
鐵道附屬地	數量	二九九、九六八 斤
	價額	二、六四二、〇四七 圓
總計	數量	一七、三八〇、四〇九 斤
	價額	四八一、二三三 圓

	昭和八年	昭和九年	昭和十年
鱈	五三五、三三三	三九四、七〇三	三八一、一六〇
太刀魚	二八一、六八九	四三六、五七八	三九五、一五五
黃花魚	一、二四〇、四〇三	一、一七五、五七四	一、二九一、六二八
鮁魚	四〇三、八三八	三六〇、八〇八	三五七、九九八
鰈鮃	五七五、八三〇	五九七、五五一	七五四、八五六
火魚	一〇〇、六七八	一一七、八〇三	一六〇、九七七
海鼠	七九、七三八	一一五、三八三	一三一、三九三
海蝦	五五四、九〇三	六六二、二四五	五九五、六三〇
其他共計	五、〇三三、八六七	五、〇一六、四四四	五、五一八、六九七

製鹽（昭和九年末）

		日本人	滿洲人
鹽田	灘數	五〇八	八六
	面積	一八、七二一、九六一坪	二、五三七、八三三坪
製鹽高（一年間）	數量	五六五、五三七石	一三七、二五八石
	價額	一、九〇九、七一八圓	四八〇、三九八圓

鑛產額（單位千圓）

	昭和七年	同八年	同九年
鐵	九三七	一、八七六	二、八五八
石炭	三五、一一四	五〇、二五〇	五八、七二一
苦灰石	七五	一八二	一九九
石綿	二三	二七	一七
計	三六、一四九	五二、三三五	六一、七八四

工場數

（備考）滿鐵附屬地を含む。

種別	工場數	投資額
紡績工場	九六	一九、五二一、六七三圓
金屬工場	一五一	八二、六八九、三三三
機械、器具工場	一四一	二〇、〇五九、三七七
窯業	一三五	一八、四一二、四二八
化學工場	一八七	六八、五七六、一〇四
製材及木製品工業	八九	三、九六〇、六六〇
印刷及製本業	一〇六	四、五三五、八〇〇
食料品工業	三五九	二三、〇二九、九八〇
電氣及瓦斯業	一二	三五、〇七七、五〇四
其他の工業	一、三八八	二八三、二〇六、一六五
總計	二、六六四	五五八、八五八、七四四

備考　關東州及滿鐵附屬地、大連商工會議所滿洲工場要覽より

工產物（昭和十年）

	關東州	附屬地	合計
綿絲	三、九七五千圓	三、五六五千圓	七、五四〇千圓
生絲	九、二五三	三五九	九、六一二
絹	三〇二	一、五〇八	一、八一〇
織物	二八〇	三、六一〇	三、八九〇
麻袋	一、五五〇	二、四五〇	四、〇〇〇
鋼鐵	八八四	一四、五九七	一五、四八一
銑鐵	—	一三、八五〇	一三、八五〇
鑄鐵	—	二一七	二一七
鑄鐵製品	二四〇	七八七	一、〇二七
荷車	八二	九	七一
煉瓦	一、二六五	一、〇〇二	二、二六七
瓦	三六	五九	九五
セメント	二、一四七	二、七一六	四、八六三
石灰	八三	二〇	一〇四
玻璃	二、九六〇	四	二、九六四
豆油	二七、九三〇	一、四〇〇	二九、三三〇
豆粕	三九、六五九	二、六一四	四二、二七三
油類	六、〇五一	一、三〇一	七、三五二
藥品	四〇七	四、一九五	四、六〇二
石鹼	二九三	二二七	五二〇
蠟燭	八七	一、八三二	一、九一九
染料	一六一	—	一六一
塗料	七八八	一、三二五	二、一一三
人造肥料	五〇〇	—	五〇〇
皮革類	二三七	三八九	六二六
ゴム製品	七六	八一六	八九二
紙	四二四	二、二六九	二、六九三
燐寸	二四二	五四〇	七八二
日本酒	九二五	二、六二三	三、五四八
支那酒	四九四	一、六八一	二、一七五
味噌、醬油	八九〇	七四三	一、六三三
菓子パン	八三六	一、〇一二	一、八四八

煙草	九二六	七、〇五七	七、九七三
製材	一、一一五	七、九三八	九、〇五三
其他共計	一〇六、五七一	八七、一五一	一九三、七二二

大連港輸出入總額

	輸出	輸入	合計
昭和十一年	四三二、〇五七	五二一、〇六六	九五三、一二三
昭和十年	三七三、八〇六	五一六、七八三	八九〇、五八九
昭和九年	三三二、一三六	四七〇、六八四	八〇二、八二〇
昭和八年	三二七、一一三	三七三、五七一	七〇〇、六八四
昭和七年	三〇三、一九一	二〇六、九二〇	五〇九、一一〇
昭和六年	二八八、四四九	九七、五一九	二八五、九六九

備考　昭和十一年分は海路貿易額

內國貿易價額（單位圓）

	昭和十年	昭和十一年
總額	五八〇、〇七七、八七三	六〇七、八五六、一五八
移出	一八七、八五九、二五七	一八五、八八二、七五〇
移入	三九二、二一八、六一七	四二一、九七三、四〇八
超過額	△二〇四、三五九、三六一	△二三六、〇九〇、六五八

外國貿易總價額（單位圓）

	昭和十年	昭和十一年
總額	三一五、五六六、九四七	三四五、二六六、七五一
輸出	一九〇、二一一、六四六	二四六、一七四、六二四
輸入	一二五、三五五、三〇一	九九、〇九二、一二七
超過額	六四、八五六、三四五	一四七、〇八二、四九七

會社數

	關東州 本店	關東州 支店	關東州 出張所	附屬地 本店	附屬地 支店	附屬地 出張所
昭和十年	一、〇二六	八三	五一	五三八	一五七	八九
同九年	九八三	九〇	五三	四八六	一五七	七一
同八年	九三三	九二	五三	四三六	一二〇	四六
同七年	八九六	八二	五一	四〇四	九八	三八
同六年	八二七	七五	五三	四一五	八一	四三

入港船舶隻數（昭和十年）

	港灣數	汽船	帆船	計
旅順	一〇	二九七	三、三二九	三、六二六
大連	三	五、一〇九	七、九七六	一三、〇八五
金州	七	一、〇九四	三、八六九	四、九六三
普蘭店	二	四三四	一、〇四七	一、四八一
貔子窩	一三	五三四	四、九八五	五、五三三
總計	四四	七、四六八	二一、二一〇	二八、六七八

鐵道（各年末）

—南滿洲鐵道—

	昭和八	昭和九	昭和十
線路	一、一二九粁	一、一三九粁	一、一三九粁
車輛數		九、四一四	九、九二四
乘客數	一二、六三四千人	一三、七八六千人	一五、一一三千人
貨物	一八、八五一千噸	二二、六七一千噸	二〇、九八〇千噸
收入合計	一一九、六七七千圓	一三六、五三五千圓	一三四、六八六千圓

—金福鐵道—

線路	一〇二粁	一〇二粁	一〇二粁
車輛	二五	二四	二二
乘客數	一三三、三四六人	一九九、一九二人	二四三、〇九九人
貨物	九六、四五九噸	一八八、三五一噸	一三九、六一六噸
收入合計	三〇六、八四八圓	四〇三、六七四圓	三八五、七四七圓

—電氣鐵道—

		昭和九	昭和十
大連都市交通	軌道延長	六八、〇七七米	六四、三一四米
	車輛	二一九	二三四
	乘車人員	三六、三四二千人	三九、六六九千人
	乘車賃	一、五三七千圓	一、六五三千圓
奉天電車	軌道延長	一、八〇〇	一、八〇〇
	車輛	五五	五五
	乘車人員	一、六〇三千人	二、〇八二千人
	乘車賃	七一千圓	九四千圓

撫順電氣鐵道	軌道延長	米	一三九、二〇三	一四三、九一六	米
	車輛		二八四	二九九	千人
	乘車人員		四、五四三千圓	五、一一二千圓	
	乘車賃		一八一	一九四	

教育（昭和十年）

	校數	教員數	學生生徒數		
私立幼稚園	三三	八四	二、一三四九		
小學校	六五	一、二九八	四六、五〇四		
青年學校	二六	三三六	七、一五一		
中學校	九	二五九	六、〇五九		
工業學校	一	三〇	一三〇		
高等女學校	二	二五三	六、四五五		
工科大學	一	八六	三九八		
醫科大學	一	一一一	六七〇		
工業專門學校	一	三七	二七四		
高等公學堂	一	四一	五四六		
商業學校	四	九三	二、二四七		
協和實業學校	一	八	一七八		
實業學校	一	三一	七〇五		
盲啞學校	一	一一	六三		
中學堂	一	二四	四〇七		
商業學堂	一	八	一九七		
農業學堂	一	一五	一三九		
公學堂	一三	二九六	一三、四〇四		
普通學堂	一三一	六七五	三二、八五三		
實業補習學校	五	二八	八八三		
家政女學校	一	七三	六九二		
各種學校	三	三三五	八、二三二		
公學校	一七	一六六	七、二六八		
書房	一八九	二〇五	五、一四七		
計	五六二	四、四八四	一四三、五七一		

宗教（昭和十年）

	教會堂數	布教者	信徒	
神道	八六	二七八	八八三	
佛教	二〇二	三三四	九二、五四四	
基督教	六五	二七	七、八一七	
同々會	七	一一	一、九七二	
道教	三七	三七九	八〇、〇七七	
其の他		九八一	二五、二六四	
計			三三七、四〇五	

馬

	被害件數	被害人員	逮捕人員	
昭和十年	二七	八	二三〇	
同九年	二八	六	二七七	
同八年	六〇	二八〇		
同七年	一三〇	五三三		
同六年	二五	八四		
同五年	一三	一五		
	九	八一		

賊

南洋

五三四

位置

方位	地名	經緯度	
極東	マーシヤル群島ミレ島東端	東經 一七二・〇七	
極西	西カロリン群島トコベイ島西端	同 一三一・一一	
極南	東カロリン群島グリニチ島南瑞	北緯 一・〇四	
極北	コリアナ群島ウラカス島北端	同 二〇・三三	

主要島面積

	平方粁
サイパン島（マリアナ群島）	一八五
テニアン島（同）	九八
ロタ島（同）	一二五
ヤツプ島（西カロリン群島）	二一六
バベルダオプ島（同）	三七〇
アンガウル島（同）	八
春島（東カロリン群島）	二三
夏島（同）	九
秋島（同）	一四

水曜島（同）	三三	支廳管轄區域	面積資料		
金曜島（同）	二二	サイパン	マリアナ群島一圓	六三八・九九	
ポナペ島（同）	三七五	パラオ	東經百三十七度以西の西カロリン群島一圓	四七八・一三	
クサイ島（同）	一一六	ヤップ	東經百三十七度以東の西カロリン群島一圓	三五五・八〇	
ヤルート島（マーシヤル群島）	八	トラック	東經百五十四度以西の東カロリン群島一圓	一三一・八七	

支廳及管轄區域

支廳	管轄區域	面積	
ポナペ	東經百五十四度以東の東カロリン群島一圓及東經百六十四度以西のマーシヤル群島一部	五〇三・五八	
ボルーペ	東經百六十四度以東のマーシヤル群島	一七〇・四三	
面積總計		二、一四八・八〇	

地勢

南洋群島は舊獨逸領のマリアナ、カロリン、マーシヤル三群島の總稱にして其の包容する海面は東西二千七百浬、南北一千三百浬に亘り全群島嶼の數約千四百餘の多きに及ぶも其の總面積は僅かに約二千百四十九方粁に出でず東京府の面積と伯仲の間にあり。而も島嶼の多くは狹小にしてその大なるものも漸く三百七十五方粁に過ぎざるを以て特に各地の地勢として謂ふべきものなく、強いて概觀すれば一般に急峻なる川亦溪流にして鹽分を含み舟楫の便なし。もも山嶽の高さ七百六十米を限りとす。河唯所在の島嶼多く相群がり居るが故に其の間の水運の便は極めて自由である。

群島の地質は主として珊瑚礁及火山岩で形成され、一般に海鳥の棲息多く、諸所に燐鑛を産し、農作物及林木の成長良好なり。

氣候風土

南洋群島はその位置赤道に接し、全管内悉く熱帶圏内に在るを以て、其の温帶地の如く四季の別がない。卽ち一年を通じて温帶の夏期の季候で、所謂「常夏の國」である。而してスコール多く、純然たる海洋性氣候に屬し、その晝夜の差による氣候變化も亦極めて少ない。なほ全群島一般に殆ど氣温相等しく、又一年を通じて變化極めて少ない。一年中の最高温度は概ね攝氏三十度位で一日中の温度の差は僅に四乃至六度に過ぎない。なほ南洋群島は内地若くは臺灣を襲ふ颱風の發生地であるけれども、管内に於ける氣象變化は僅少で、偶々颱風を發生すべき變化を起すことはあるが、その低氣壓幼年期に關するものが多いため、暴風に達することは稀である。

人種風俗

土人の種族は普通チヤモロ、カナカの二種族に分けられる。チヤモロ族は、その容姿衣食住などすべてカナカ族より比較的進歩して居り、性質温順で勤勉の風があり、資産あるものは西洋風の清楚な住宅を構へピアノなどの樂器を備へ日常洋裝して稍々文化的生活をして居るものもある。カナカ族もまた性質温順で快活ではあるが、前者よりも一般に遊惰放逸で、文化の程度も極めて低い。言語は土語、日本語の外に西班牙語、英語、獨逸語を解する者も少からずある。而してチヤモロ族の本據はサイパン島にして次でヤツプ、パラオとに在る。

人口（昭和十年）

	戸數	人口 男	女	
總數	三、五五八	一〇二、五二七	四二、一〇四	
本地人	九、二九八	五〇、五七三	二四、四六六	
内地人	一三、〇四七	五一、三〇九	三〇、七七九	

歷代長官

	氏名	就任年月日
臨時南洋防備隊民政部長	手塚敏郎	大正七・七・一
南洋廳長官	手塚敏郎	同一一・四・一
同	横田郷助	大正一三・四・四
同	堀口滿貞	昭和六・一〇・一二
同	田原和男	同六・一一・二一
同	松田正之	同七・二・五
同	林壽夫	同八・八・四
同	北島謙次郎	

南洋廳文官人員（昭和十年末）

		人	計
勅任	一奏任	四〇	四一
判任	四二九 判任待遇	二三	四五二
囑託、雇員	五六三	計	一、一四五

歳入歳出（單位圓）

昭和十年度

	決算	豫算
歳入（經常部	六、五五五、七五五	六、六四七、八二三
歳入（臨時部	二、七二〇、三六〇	七四〇、二三五
總計	九、二七六、一二五	七、三八八、〇五八
歳出（經常部	三、〇八二、七四七	三、五三二、五九五
歳出（臨時部	二、七四二、九〇一	三、八六五、四六三
總計	五、八二五、六四九	七、三八八、〇五八

貿易（昭和十年）

外國貿易

		圓
總額		四、二三三、八〇一
輸出		三、六三二、四三四
輸入		六〇一、三六七
超過額		二、〇三一、〇六七

內國貿易

		圓
總額		三八、三六一、八〇五
移出		二三、七四一、七八一
移入		一四、六二〇、〇四四
超過額		九、一二一、七七七

農業（昭和十年）

農業戸數は本島人八、八七〇、計一一、二六六で、農業人口は本島人二三、七一六人、內地人八、〇〇〇人計三一、九四三人である。耕地面積は田一、四〇〇・一、畑一九、四〇三、計二〇、八〇三・一ヘクタール卽ち農家一戸について田は〇・一一、畑一・五八計一・七〇の割合である。農産物收穫高は一五、九三六、九五六貫、價額四、〇六五、〇八九圓。

水產業（昭和十年）

水產業戸數一、〇九三、同人口二、三五六人、漁獲數量三、五一八、三六五貫、價額一、六四一、三五七圓である。

		圓
鰹	一、三一七、九一九	
鰮	五三、三九四	
高瀨貝	八〇、三七九	
鮪	一五、〇三四	
鱶	八、三八八	
其の他	四、七〇〇圓の業績ありしも八年度なく、九年度には一〇、七七六個、三二、三二八圓、十年度一、〇〇〇個、三、〇〇〇圓の收穫ありたり。尙水產物製造の工場數は昭和十一年四月現在でパラオ十三、トラック十九、サイパン十四、ポナペ六、ヤルート二六、計五十四である。昭和十年に於ける鰹節、鮪節の生產高は二百十九萬二千餘瓩、二百二十二萬六千餘圓、なまこ製造高は約二萬七千餘瓩、八千餘圓である。	一〇五、五〇一
鰹		一五、〇三四

醫療機關

昭和十年の統計によれば病院總數一〇（このうち官立八、私立二）にして醫師は四一人（このうち開業醫一七人）限地開業醫七人、齒科醫師一五人、藥劑師一〇人、產婆四六人、看護婦三四人、藥種商一二人である。

傳染病（昭和十年）

	患者	死亡	死亡率
總數	八二	九	一一・〇
赤痢	二	—	—
腸チブス	一三	二	一五・四
パラチフス	三一	三	九・七
ヂフテリア	三	一	三三・三
アメーバ赤痢	三二	三	九・七

學校（昭和十年）

種別	校數	教員	生徒
小學校（內地人）	一七	八三	四、九〇五
小學校（島民）	二四	八二	二、九五四
宗教學校（共學）	一四	三六	一五、〇七
實業學校（內地人）	一	八	三九
木工徒弟養成所（島民）	一	二	二六

道路及鐵道（昭和十年末）

從來各島共道路は不完全で、主要島中本支廳所在地附近の外は僅に島民の進行を目的とする道路があるに過ぎず、南洋廳開設後銳意之が施設改善を圖つて居るが未だ充分なりとするを得ない。

△道路延長（單位粁）

	四米未滿	四五
	七米以上	三
	計	七

△鐵道

南洋群島には鐵道無く、軌島も亦一般用としては數設されたものはない。僅に官有としてはアンガウル島に於ける營繕運搬用のもの十二哩と、私設としてサイパン島テニアン島に於ける南洋興發株式會社の事業用のもの約九十三哩があるのみである。

海運（昭和十年）

△離島間連絡航路

名稱	航海年回數	船數	總噸數
マリアナ群島線	一七	一	一九五
ヤップ、パラオ離島線	四	一	一九九
ポナペ、トラック離島線	三	一	四六八
マーシヤル群島線	七	一	七六一
備考 トラック線は濠洲委任統治地ケビアン、ラバウルに至り、マーシヤル線は英領ギルバート島に至る。			

△環礁內航路

名稱	船數	總噸數
パラオ諸島巡航線	一	三八
コロール、アイライ線	一	六四八
コロール、ガスミスカン線	一	三〇〇
コロール、ガルドツク線	一	一八二
ポナペ巡航線	一	一三三
トラツク諸島巡航線	一	一九八

△內地、群島間連絡航路

(1)東廻線	サイパン、トラツク、ポナペ、クサイ、ヤルート	六	二
(2)西廻線	サイパン、テニカン、ヤツプ、パラオ、關領メナード、米屬ダバオ（後船）	二〇	四
(3)東西連絡線	パラオ、トラツクポナペ、クサイ、ヤルート	一〇	三
(4)サイパン線	八丈島、二見サイパン、テニアン、ロタ	二四	七

執れも神戸を起點とし門司、横濱を經て連絡。神戸よりの往復航程、日數は(1)が七一六八浬、五〇日。(2)が六、九八三浬、四四日。(3)が九、一九四浬、五三日。(4)が三、七四八浬、二七日である。日本郵船、南洋貿易會社、パラオ運送組合が經營者で就航船は三四千噸級の汽船。

△出入船舶

	船數	總噸數
汽船	九四〇隻	三、八六、五〇八噸
帆船	三五三隻	八五、三一〇噸

海外發展

移民概觀

我國の海外發展は遠く足利時代に始まり慶長の頃既に海外渡航を企てたものがあつた。しかし國際間の交渉によつて正式に移民を出したのは明治元年で、布哇へ百五十三名を最初の移民として送り、爾來中絶したるも、明治十八年再び九百五十一名を布哇へ渡航せしめてから同地への移民は逐年增加し明治二十七年迄には約三萬人が渡航した。同年政府は移民取扱事務を移民會社に委れ、同二十九年には移民保護法の制定を見、布哇のみならず、カナダ、濠洲、北米へも多數の渡航者を出し、三十一年には南米最初の移住者としてペルーへ七百九十人を送つてゐる。從來布哇移民は殆んど契約移民だつたが、布哇が三十一年北米合衆國に併合せられるに及んで、當時米國に於て勵行した契約移民禁止が布哇にも適用され、移民のみならず移民會社も大打撃を蒙り續々解散の已むなきに至つた。この結果必然的に自由渡航者の增加となり、三十七年頃からは布哇在留邦人は米本國へ續々轉航し、內地からも米大陸への自由渡航をなすもの多く、四十年日米間に所謂紳士條約成立して移民の制限となり、南米への進出が著しくなつて來たのであつた。爾來官民の協力によつて南米を中心として移民事業は益々旺盛となり、昭和十年十月一日現在に於ける在外本邦人の人口總數は一百七十八萬五千七百三十の多數を示し、これを前年同期に比較すると十七萬一千六百八十九人の增加を見てゐる。更に民籍別にすると內地人は九十三萬七千九百七十人で六萬五千百五十六人の增、朝鮮人は八三二、〇一三人で十萬四千八百二十八人の增、臺灣人は一萬五千七百四十七人で一千七百五人の增となつてゐる。邦人海外發展の盛觀を思ひ見るべきであらう。

（此項は主として昭和九年拓務統計海外各地在留邦人人口表によつた。本項は南洋群島乃至關東州を除外）

海外在留本邦人數

（昭和十年十月一日現在外務省調査）

	總數	內地人	朝鮮人	臺灣人
總數	一、九九八、〇八七	一、一四六、四六二	八三五、八七八	一五、七四七
關東州	一六一、二八九	一五七、八三五	三、四五四	一
南洋委任統治地域	五一、〇六八	五〇、六五七	四一	一
海外各地	一、七八五、七三〇	九三七、九七〇	八三二、〇一三	一五、七四七
亞細亞	一、二六〇、四五九	四一九、九七八	八二四、七二七	一五、七四四
極東露領	三、七〇五	二、三八三	一、三二一	一
滿洲國	一、一三八、八九四	三三一、三九四	八六、一六〇	三四〇
中華民國	七七、四三九	五六、一〇六	七、〇八一	一四、一三二
英領香港葡領澳門	一、五四九	一、四〇三	二四	一三三
暹羅國	五〇一	四一二		八九
佛領印度支那	三三〇	二三九	五四	一七
英領馬來	六、六四三	六、四八七	一八	一三八
英領北ボルネオ英保護サラワク	九〇五	八七〇	三五	
イラン國	三四	三四		
英領印度ビルマ及錫蘭	一、五九〇	一、五〇七	一五	
蘭領東印度	七、二四八	六、五九八	三三	
比律賓群島	二一、五四三	二一、四六八	四三	
アフガニスタン	一五	一五		
レバノン國	三	三		
グアム島	六〇	六〇		
濠洲新西蘭	三、〇七二	三、〇七二		
大洋洲諸島	二九〇、六八六	二八三、八八六	六、八〇〇	
北亞米利加	二七〇、四九九	二六三、七〇三	六、七九六	
北米合衆國	二一三、七二七	二一三、四一八	三〇九	
本土	一五七、七七三	一五一、二八五	六、四八七	
布哇	二〇、一八七	二〇、一八三	四	
英領カナダ	二三八、三六六	二三七、九四〇	二四四	二
中南亞米利加	五、五三一	五、四七〇	五三	
メキシコ	一、一四一	七七一	三七〇	
キューバ	八	八		
サルヴアドール				
パナマ	三八	三八		
コロンビア	一三	一三		
ヴエネズエラ	一七四	一七四		
ペルー	二一、五五〇	二一、五五〇		
ボリヴイア	三六九	三六九		
チリー	六五八	六五八		
ブラジル	一九二、八二三	一九二、八二三		
亞爾然丁	五、六九五	五、六九一	二	
パラグアイ	二〇	二〇		
ウルグアイ	六五	六五		
歐洲諸國	二、九三四	二、八八三	五一	
英吉利	一、四〇五	一、三八一	二二	
佛蘭西	五一〇	五〇七	三	
獨逸	二七	二四	一三	
白耳義	六九	六九		
和蘭	一八	一八		
蘇聯邦	三五	三一	六	
波蘭	一九	一七	二	
瑞西	二二	二〇	二	
伊太利	七七	七四	三	
墺地利	一九	一九		
西班牙	二九	二九		
葡萄牙	一四	一四		
土耳古	二七	二七		
瑞典	八	八		
芬蘭	一九	一九		
エストニア	一	一		
ラトヴイア	一九	一九		
希臘	八	八		
ルーマニア	七	七		
チエツコスロヴアキア	九	九		
亞弗利加	二一三	二一三		
埃及	八〇	八〇		

南阿聯邦	四四	四四	—	—
英領東阿弗利加	七三	七三	—	—
佛領アルジェリ	四	四	—	—
佛領モロッコ	三	三	—	—

（備考）海外在住邦人の昭和五年國勢調査の結果は土地・人口の項中にある。參照を乞ふ。

關東州居住本邦人數（昭和十年十二月末日現在）

	總數	男	女
總數	一六三、〇〇〇	八五、六六四	七七、三三六
內地人	一五九、七四九	八三、九九三	七五、七五六
朝鮮人	三、二五一	一、六七一	一、五八〇
職業別（內地人）			
農業	一、七九三	九六六	八二七
水產業	一、六八九	八八一	八〇八
鑛業	一、三九九	七六〇	六三九
工業	三五、八八〇	一九、五二九	一六、三五一
商業	三二、一五三	一五、九三四	一六、二一九
交通業	三一、七〇一	一六、五〇五	一五、一九六
公務自由業	三七、二三三	一八、五〇七	一八、七二六
其他の有業者	八、一〇八	六、〇一七	二、〇九一
家事使用人	二、八一七	九七〇	一、八四七
無業	六、九七七	三、九二四	三、〇五三
合計	一五九、七四九	八三、九九三	七五、七五六

南洋委任統治地域居住本邦人數（外務省調査）（昭和十年十月一日現在）

	總數	男	女
總數	五一、〇六八	三〇、五四四	二〇、五二四
內地人	五〇、六五七	三〇、二六九	二〇、三八八
朝鮮人	四一一	二七五	一三六
臺灣人	—	—	—
職業別（內地人）			
農業	一三、四三九	八、六二三	三、八一六
水產業	二、二五五	二、一六六	八九
鑛業	一九六	一九二	四
工業	三、九五九	三、二九六	六六三
商業	三、三六九	一、九六五	一、四〇四
交通業	八八三	八七一	一二
公務自由業	一、〇八三	九五四	一二九
家事使用人	六三五	二四六	三八九
其他の有業者	三、三六〇	二、八七六	四八四
無業	二二、四八一	九、〇八三	一三、三九八

職業別在外本邦內地人數（外務省調査）

	昭和十年	昭和九年	昭和八年
總數	一、一四六、四六二	一、〇五八、三三八	九一八、一一七
農業	一〇〇、八五三	九八、三五四	九四、一九六
水產業	一一、一七六	一〇、九六八	一〇、〇四四
鑛業	六、七六三	五、八二六	三、三三六
工業	七八、三一七	六三、七一九	六〇、二二六
商業	一三〇、五三一	一一六、一八二	一〇三、六九二
交通業	六〇、二三八	四七、九七四	四三、九六二
公務自由業	七三、〇二三	六七、二八〇	六〇、四一〇
家事使用人	一八、五三八	一六、一五六	一七、一〇六
其の他	三〇、四六八	三二、四八四	二一、二四八
無業	六三六、四九六	五九九、三八五	五〇六、〇七七

洲別在留內地人累年表（外務省調査）

年度	總數	亞細亞	北米	南米	大洋	歐羅巴	阿弗利加
明治四二年	二七八、六〇六	一一四、五〇〇	一五一、三三三	七、八〇二	三、九六〇	一、〇九一	—
大正三年	三五八、七一一	一四三、七一一	一八三、五四〇	二四、五六八	六、六六一	一、二三一	—
九年	五四一、七八四	二三六、一一九	二五二、〇八二	四五、三三四	七、八五一	一、三五一	四七
一五年	六四〇、〇九九	二六七、五〇八	二八一、四四一	七六、二四四	一一、四七〇	三、三六〇	七六
昭和二年	六七六、二六二	二七九、三〇一	二九一、二四〇	九〇、一七七	一二、二八九	三、一一七	八五
三年	七〇九、八三八	二九二、三〇六	二九四、九九七	一〇三、五五〇	一五、九〇七	二、九九二	八六
四年	七五九、四三九	三〇六、二三五	二九七、六五一	一三二、五七八	一九、五四五	三、三一四	一一六
五年	七四〇、七七四	三二二、九四四	二四一、二九五	一四九、二五〇	二三、七八三	三、四三三	一六九
六年	七七七、九四六	三二五、七九五	二六八、四四七	一四八、六七八	二六、二二六	三、六九六	一〇四
七年	八二三、一〇〇	三五三、〇三三	二六九、二八三	一六七、二九五	三一、五五七	三、七七八	一五二
八年	九一八、一一七	四一四、二二四	二七三、三六五	一九一、九四五	三四、五八二	三、八八六	一五五
九年	一、〇五八、三三八	四八五、六二七	三一八、六〇二	二〇八、二〇〇	四二、七三七	二、九六一	二〇一
十年	一、一四六、四六二	五七七、八一三	二八三、三八六	二三七、九四〇	五八、七二九	二、八八二	二一二

海外渡航者（拓務統計）

年次	總數	非移民	移民
昭和元年	二八、六一八	一二、四三四	一六、一八四
同二年	三一、二一七	一三、一七六	一八、〇四一
同三年	二四、〇〇八	一四、一五六	一九、八五〇
同四年	三七、九九〇	一二、二八六	二五、七〇四
同五年	三八、三七九	一六、五五〇	二一、八二九
同六年	二七、一一四	一六、七六〇	一〇、三八四
同七年	三〇、七五七	一一、七二九	一九、〇二八
同八年	四二、四五一	一五、一三四	二七、三一七
同九年	四一、六四四	一三、五五七	二八、〇八七
同十年	—	—	一〇、八一三

渡航地別（昭和十年）

	男	女	計
蘇聯邦	三一五	七	三二二
英領香港	一一〇	八二	一九二
英領馬來	四三二	一五一	五八三
比律賓群島	一、二〇五	五九七	一、八〇二
蘭領東印度	三〇〇	八九	三八九
英領北ボルネオ	一六三	六七	二三〇
コロンビア	五八	四七	一〇五
秘露	八一四	四二八	三八六
ブラジル	五、七四五	三、一九六	二、五四九
總數	六、六五四	四、一五九	一〇、八一三

（備考）本表は百人以上渡航したる地方のみを摘出したもので、非移民、移民を含むものである。

目的別（昭和十年）（拓務統計）

	男	女	計
農業	四、二五四	三、〇四一	七、二九五
漁業	七六六	五六	八二二
鑛業	三一三	八	三二一
製造工業	五九	三五	九四
土木建築業	六六	四〇	一〇六
運輸交通業	五	二	七
商業	七九五	一六五	九六〇
理髪店	三二	一一	四三
洗濯業	五二	七	五九
家內勞働	九	九一	一〇〇
雜	三〇三	七〇三	一、〇〇六
總數	一〇、八一三	六、六五四	四、一五九

渡航許可官廳別移民渡航者

官廳	昭和七	昭和八	昭和九	昭和十
外務省及警視廳	五四四	六一〇	一、一七三	三三三
北海道	三、四七八	二、九六二	一、九七九	三一九
京都	五六	七八	四二四	六七
大阪	四四八	六〇三	一、二七七	二五八
神奈川	三六二	四九九	五一六	四二四
兵庫	一四三	二八九	三八五	二三〇
長崎	三三六	五六三	四五二	三〇二
新潟	二五九	四六三	五九七	七八